

刀奈求める楯無き者

乱麻@PINK

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は飛ぶ。

黒い翼を携えて、あの日の少女が笑える世界へ。

とか何とか言っているけれど、この物語は更識姉妹の事になるとむつつりになる少年がIS学園で生活するお話です。

目次

1.	楯無き者	1
2.	再会と同室	9
3.	彼の琴線	18
4.	甘えられたり甘えたりで準備中	26
5.	ISという翼	34
6.	彼の経歴	43
7.	彼女の登場	51
8.	彼らのその後	59
9.	彼が飛ぶ理由	68
10.	親友の恋路	78
11.	対襲撃者	87
12.	親友の決着	99
13.	お前が男は無理がある	107
14.	はじめてのじっせんくんれん	115
15.	昼休み+屋上 修羅場	123
16.	シャルロットと帯	132
17.	押し付け厄介案件	141
18.	今はない言葉	151
19.	五割増しで	160
20.	翼を広げる為に	171
21.	楯を愛する者	180
22.	シスタークライシス	188
23.	眠り姫の気持ち	195
24.	誰を選ぶの？	203

25.	黒の影響	211
26.	パートナーの行方	219
27.	デートと言ったな、あれは嘘だ	228
28.	女子力	237
29.	何時かの約束	246
30.	学年別トーナメント	254
31.	Bブロック決勝戦	261
32.	決勝戦前夜	275
33.	決勝戦	283
34.	黒い翼	297
35.	翼の秘密	307
36.	密かな告白	315
37.	臨海学校に向けて	323
38.	臨海学校後の約束	334
39.	旅館へ	343

1. 楯無き者

「もう……行っちゃうんだね」

—— 兎の声が聞こえる。

全ての軍事兵器の常識を覆してしまったり、女尊男卑の世界を作り出してしまったりしたが、俺にとっては返しても返しきれない恩がある兎の声が。

「行っちゃったら、もう興味無くなっちゃうよ?」

その言葉は、俺の足を止めるには至らなかった。

後悔なんてしない。ここで振り返ってしまったら、俺の数年間は無駄になってしまう。

首に付けた黒いチョーカーをそつと撫でる。俺の翼はここにある。苦楽を共にし続けてきた、空を自由に駆ける事が出来る翼。

(マスター、本当にいいのですか?)

(いいんだ。早く行こう)

もう戻れない。—— いや、戻らない。

あの時、少女の涙を見た日から。俺の歩む道は決めている。

頭の中に直接聞こえる相棒の声に心の声で答えながら、俺は行動を開始する。

彼女が本当の名前で笑える世界へ—— 飛ぶ為に。



IS学園一年一組。女生徒しか居ない筈のこの教室には、二つの異物が存在していた。

世界に二人しか存在しない男のIS操縦者。その内の一人が俺、雪月楯無である。

特にやる事もなく、窓際の席だったのをこれ幸いと頬杖をついて外を眺めていれば、嫌でも女生徒のひそひそとした話が聞こえてくる。

どれもこれもミーハー全開の内容で、動物園の見世物になった気分だ。

(人気者ですね、マスター)

(こんなのモンドグロツソで散々経験しただろ。まあ、男として注目されたのは今回が初めてだけだな)

慣れたように無視して初めてのホームルームを待つ。『黒雷』はホームルーム開始までの時間を脳内にアナウンスしてくれた。

そのアナウンスされた時刻まで、もう一人の男性操縦者——小学五年生からの幼馴染である織斑一夏は耐えられるだろうか。

——しかし、まあ。あの人に出会ってから随分と長い月日が経ったもんだ。

五歳の頃に事故で両親が死に、更識が支援している施設に妹共々預けられ。とある少女の姉の運命を知り、小学校四年生の時に相棒に出会い、兔の言い成りになる道を選んだ。

言葉にすればこれだけだが、ISとの適合を高める為に左目にナノマシンを移植され、元の赤目から白目になってオッドアイにされたり、初めての任務として一夏を監視し続ける事になったりした。

それもこれもこの間全て終わってしまった事だが、あの方は元気でやっているだろうか。

天災でありながら、女の子が空を飛ぶ事を夢見続けていた不思議の国のアリスは——。

「つき——雪月君？」

そう思い出に浸っていると、誰かから名前を呼ばれた。

意識をそちらに向ければ、緑色の髪の副担任——山田真耶先生が俺の名前を呼んでいた。

どうやら俺の自己紹介の番のようだ。『あ』から始まって『ゆ』までだったから、相当な時間があったらしい。

つまりクラスメイトの自己紹介を殆ど聞いていなかったわけだが、さつきがたがたとクラスメイト達が倒れてたのは一夏が何かしたのだろうか。

とにかくさつきと自己紹介を済ませてしまおう。俺が気付いていなかったただけだが、何時の間にか山田先生の後ろに居た世界最強の視線が怖い。

「雪月楯無です。織斑君とは小学生からの付き合いですが、それでも

世界で二人の男性 I S 操縦者という事で不安です。仲良くしてください」

自己紹介を済ますと、奥の方から世界最強——千冬さんの視線が突き刺さった。

あの人とは昔からこんな感じで警戒されまくってるので気にしない。とりあえず手でも振ってみようか。

(マスター。それは煽る事と同義では。出席簿を投擲される可能性が非常に高いです)

(まじで?)

(はい。既に織斑一夏が犠牲になっています)

やっぱり何かやらかしていたか。昔から変わらないよな、一夏。

その後は恙無く自己紹介は終わり、I S の軽い歴史やら I S 学園の説明やらが始まった。

I S。インフィニット・ストラトス。二つの例外を除いて女性にしか扱えない、日本で開発されたマルチフォームスーツだ。

I S 学園はその操縦者の育成を目的に設立された学園だ。故に日本人だけではなく外国からの生徒も多数在籍している。

ついでに言えば、この I S 学園はあらゆる国家からの干渉を受けない。だから、ここは目的を果たすのにうってつけなんだ。

まあ、それも終われば休み時間だ。……そしてまあ、当然の事だが見世物度合いは増していく。

他のクラスどころか上級生まで教室の入り口に蔓延って俺と一夏の様子を見ている。どうでもいいんだが、I S 学園って男子トイレあるよね？

その視線がかなり応えるらしく、一夏がこちらをちらちらと見ているが、無視だ無視。

(知り合いという事は皆さんに知られているのですから、堂々と話せばよいのでは?)

(あと五分で休み時間が終わる。本当にしんどいなら次の時間に向こうから来るさ)

相棒と話していれば、一夏の方には一人の女子が寄っていた。

長い黒髪をポニーテールに纏めた女子。……あれが、束姉の妹の。
(ええ、篠ノ之箒です。剣道の腕前は、去年の全国大会を優勝する程だったかと)

(新聞に載ってたな。写真の表情が優勝した人間とは思えない程思い詰めてたのを憶えてる)

その後二人は教室を出て行った。一夏との古い友人らしいから、何か話す事でもあるんだろう。

頬杖をつきながら授業開始を待っていれば、山田先生と千冬さんが教室に入ってきた。授業の開始だ。

(初歩の初歩ですね)

(ああ、ものすっごい初歩だ)

はつきり言って授業の内容は退屈だった。数学知ってる人間に算数をさせてるようなものだ。

俺はいきなり実践から入ったから順序が逆だけど、それでも後から勉強したおかげで知っている事ばかりだ。

しかし、一夏は全然ついていけないようだった。教科書を読む背中が震えている。

一区切りした時点で心配した山田先生が一夏へ質問はないか、と問うていた。

無論一夏は全て分からない、と回答。山田先生も吃驚だ。しかもその後千冬さんに、入学前の参考書を古い電話帳と間違えて捨てた、とまで言い放ったのだから更に驚きだ。大物になるぜ一夏。

これなら窓の外を見ていればその内授業も終わるだろう、と踏んで教室から見える水平線でも眺めていようと思ったのだが、親切な山田先生はこちらにまで気を遣ってきた。

「雪月君も、分からない場所は遠慮せず訊いてくださいね?」

「大丈夫です。今の所は問題ありません」

ぶっちゃけ、この一年ぐらいは寝てても問題ありません。

そうして水平線を眺めていようと目線だけを窓の外へ向けたのだが、世界最強は許してくれなかった。

「授業に集中しろ馬鹿者」

何か空を割いて直進する音が一瞬だけ聞こえた。

次の瞬間には俺の額に黒い手裏剣がヒット。その後くるくると宙を舞った。

痛みを堪えながら、目の前に落下してくる手裏剣をキャッチする。よく見れば出席簿だった。

「いくら何でも出席簿を投げるのはどうかと思うのですが……千冬先生」

「授業に集中せんからだ。それと織斑先生と呼べ」

差し出した出席簿を受け取りに千冬さんが席の近くまで来た。

そしてそのまま出席簿を受け取ろうとした瞬間――。

「――随分とヘディングが上手いようだな、次は直接返してもらおうか」

「……そもそも投げないでください」

小さな声で交わした会話。それを明確に聞き取れた者は恐らく居ないだろう。

今度から直撃して受け止めた方がいいだろうか。痛いから却下。

……しかしまあ、世界最強が担任とはついてない。弟である一夏が居るから仕方ないのだろうし、男性操縦者を一つのクラスに纏めておいた方が面倒がないのは理解出来るけど。

山田先生が「テキストの十二ページを開いてください」と言っていたので大人しく従い、そのまま授業を受けた。

授業が終われば休み時間――なのだが。

「頼む、ISの勉強教えてくれ！」

何故かマツハで席にやってきた一夏に頼み込まれていた。

俺の休み時間、どこですかね。

「後で千冬さんが参考書再発行してくれるんだろ？一週間死ぬ気で憶えれば何とかなるだろ、多分」

実は俺も読んでないから知らないけど。

まあ授業に関係する事なら問題ないだろう。

「そんな事やってたら本当に死んじゃうよ！」

「安心しろ、憶えなかつたら千冬さんに殺されるだけだ。憶えて死ぬ

か、憶えず死ぬか、好きな方を選ぶ」

そう言うと、一夏はがっくりと項垂れた。本当に千冬さんが怖いらしい。

いや、怖いと言うか恐れているのだろう。千冬さんの事ではなく、千冬さんの期待を裏切ってしまう事を。

小さな頃から一夏は家を空けがちだった千冬さんの代わりに、家事の一切を担っていたりもした。それが一夏の出来る事だったから。

「まあ、完璧に憶えなくてもどうにかなるよ。必要な時に必要な知識が間に合えば——」

「ちよつとよろしくて?」

「んあ?」

俺の言葉を遮って、この会話に割り込む存在が居た。

長い金髪と青いヘアバンドが特徴的で、どこか高貴さを携えた佇まい。

IS学園には有名な資産家や企業の御令嬢も大勢在籍している。きつとその内の一人だろう——と言うか、どっかで見たな。

この御令嬢は一夏の間の抜けた返事が気に入らなかつたらしく、どこか哀れな者を見るように驚いた。

「まあ、何ですのそのお返事? 私に話し掛けられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度があるのではないかしら?」

俺はそもそも返事さえしてなかつたのは見逃してくれたみたいだ。ありがたい。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「知らない!? このセシリア＝オルコットを!」

「ああ、どこかで見た事があると思えば、イギリスの代表候補生か」

何かの雑誌でインタビューとか受けていた気がする。或いはファッション雑誌のモデルだったか。

言われなれないと思いつけない時点で、真面に読んでないのは明白だが。コンビニの立ち読みの時にでも読んだのかな。

しかしそれでも御令嬢——オルコットはご満悦だった。憶えてくれたのが余程嬉しかったらしい。

「そう！ イギリス代表候補生、セシリア・オルコット！ 付け加えれば、入試主席の学年トップのエリートでもありますわ！」

（検索が完了しました。彼女はイギリスの名家、オルコット家の当主。つまり貴族です）

「へえ、そりや凄い。入試主席は素直に感心するぜ」

IS 抜きの問題でも相当難しい筈だぞ、ここ。相棒の言う通り、貴族に恥じない頭脳も持つてそうだ。

褒められたおかげで更に気を良くしたのか、オルコットは俺の方を向いてうんうんと頷いている。

大変整った顔立ちで何をやっても絵になるが、用件は何だよ。

そんな俺達を尻目に、ここそそと一夏は俺に耳打ちをしてくる。近いよ一夏君。そんなんだから中学の頃から男色家とか言われるんだよ。

「なあ、楯無」

「何だ？」

「代表候補生って、何だ？」

呆れた。そう視線で訴えると、一夏は「な、何だよ」とたじろぐ。

「千冬さんと同じようなもんだよ。国家代表のイギリス版。ああ、候補生だから国家代表の卵か」

「ああ、そつか！ って事は、オルコットさんは凄いなだ！」

俺はお前が物事の大半を千冬さんに例えると理解してしまうのが凄いなと思うよ。

シスコン過ぎるだろこいつ。

「些か織斑さんの方の知能に問題があるのは気になりますが……。そちらの……雪月さん、でしたっけ？ あなたは常識が身に付いているようですわね」

「まさか。常識ある奴が授業中に外見でたりしないだろ」

（マスター。自分で言う事ではありません）

相棒の言葉が耳に痛い、オルコットは納得していた。

「成程。野蛮性では雪月さんの方が上ですか。まったく、これでは男性の操縦者には期待出来ませんわね。入試で唯一、教官を倒した工

リート中のエリートのセシリアⅡオルコットがISに関する事を教えて差し上げようと思いましたが」

唯一試験官を倒した？ それは変な話だ。何故なら俺も倒している。

しかし突っ込むのも野暮な話だ。そう思って黙っていたようにしたが、一夏は持ち前の素直さで言葉にしてしまった。

「俺も教官倒したぞ。楯無もそうだよな？」

「な!？」

「要らん事言うなよ。オルコット代表候補生がショック受けてるだろ」

間違いを指摘するのは必ずしも優しさではない。黙っていてあげるのもまた優しさである。

わなわなとオルコットは震えている。アイデンティティを揺さぶられて可哀そうに。

「まあ、落ち着いてくれオルコット。一夏は壁に突っ込んできたのを躲しただけだって言うし、俺は初撃だけ与えて向こうのエネルギーが切れるまで逃げ回ってただけだから」

「こ、これが落ち着いていられ——」

オルコットのことを遮るように、授業開始の予鈴がなった。

悔しそうに「お話の続きは、また後で」と告げてオルコットは自らの席へ帰っていく。

一夏も席へ戻った後、俺は相棒へ語り掛けた。

(なあ、俺の休み時間は?)

(残念ながら、たった今終わりました)

2. 再会と同室

放課後になった。初日はレクリエーションやら何やらで真面目な授業がなかったら退屈だったな。

欠伸をしながら家に帰ろうとすると、世界最強が俺の席までやってきた。

俺の放課後の平穩が五秒で破壊される。こういう時はさっさと逃げるに限るのだが、当然世界最強からは逃げられない。

「待て、雪月」

「どうしたんですか、千冬先生——あだっ」

「織斑先生だ。何度も言わせるな」

注意より先に出席簿を飛ばすな。しかもこの距離で。

前回の注文通りヘディングで直接返してやると、ブーメランの様に出席簿が千冬さんの手元へ戻っていく。

それをノールックでキャッチした千冬さんは、心底呆れたように言ってきた。

「相変わらず無駄な事だけ器用だな、お前は」

「酷いなあ、今度は返せて言ったの千冬さんでしょ」

再び投擲された出席簿を今度はキャッチして、千冬さんに返す。

「お前には教師に対する敬意とかは存在しないのか……」

「じゃあ教師と生徒の会話をしましょうよ。昔話だと個人の会話にしかならないでしょう」

「それもそうだな」と小さく頷いて、千冬さんは出席簿の代わりに小さな鍵を俺に突き付ける。

それを受け取ってみると、鍵に付いていたタグには番号が書いてあった。

「お前の寮の部屋の鍵だ」

「俺は暫く自宅から通うんじゃないやありませんでしたっけ？」

「そうだったのだが、警護やらの問題が面倒でな。無理矢理にねじ込ませてもらった」

「……という事は」

「そうだ。察しがいいな」

「どうやら一夏と同部屋ではないらしい。表情がそれを物語っていた。」

「それなら一人部屋とかにしてくればいいのに、どうやらこれは裏がありそうだな。」

「ひっそりと首の黒いチョーカーに触れる。厄介な事にならなければいいが。」

「と言うか、俺の荷物は？ 今から取って帰るんだったら、普通に家に泊まりたいんですけど」

「安心しろ。何故か匿名で一式送られてきている。……まったく、過保護なものだ」

「過保護に関しては千冬さんが言えた事ではまったくないが、相手は誰だ？ 束姉？」

「いや……まさかな」

「もう俺とあの人の間に繋がりなんて存在しない。」

「俺はあの日に兎から掛けられた魔法の庇護を失ってしまった。」

「そうしないと果たせない目的を果たす為に、俺は一つの選択をしたのだから。」

「まあ、分かりましたよ。相手が誰かは分かりませんが、お礼を言っておいてください」

「いいだろう、鍵を無くすなよ」

「千冬さんは踵を返して去っていった。」

「俺の同居人の問題やら、荷物を送ってきた相手の正体やら、不確定な要素がなくもないが、IS学園に居る内はそう警戒するような事もないだろう。」

「下手に警戒し続けていたら、普通の学生とは見られなくなってしまふ。それはそれで都合が悪い。」

「千冬さんと出席簿へディングやら何やらしてたせいで視線を感じていた教室から出て、寮へ向かう。」

「(相棒、とりあえず部屋に着いたら盗聴器とカメラのチェックを頼む)(了解しました)」

最低限の警戒だけ相棒に頼んで、寮への道を進む。

後ろからぞろぞろと女子生徒達が着いてくるが、彼女達も同じ寮へ帰るのだ。当たり前だろう。

恐らく山田先生から同様の説明を受けていたのであろう一夏も、ぞろぞろとストーカーされながら帰っていた。その表情はもう既に疲れきっている。

しかしながら、女子生徒達の興味は殆ど一夏に向けられているようだ。やはり世界最強——ブリュンヒルデの弟という肩書は伊達ではないのだろう。

そうしている内に自分の部屋の前に辿り着いた。

「……さて、鬼が出るか蛇が出るか」

(内部のスキャンを完了。マスターが危惧していた可能性は皆無です。内部にある生体反応は一。既に帰宅しているようですね)

相棒の言葉を信じて、軽い気持ちで鍵を開ける。

そのままドアノブを捻ってあげ、俺は部屋の中へ入っていた。

「……あれ？」

部屋の電気は点いていなかった。相棒の話では既に帰ってきている筈なのだが。

——いや、部屋の奥から光が漏れている。

もう少しだけ踏み込んでみれば、光源と思われる投影モニターが見えた。

部屋にある二つのベッド。その内、部屋の奥に配置されている方に人影があった。

どうやら俺の存在に気が付いてもいないらしい。一切の淀みなく、高速でタイピングを続けている。素晴らしい集中力だ。その背中には執念の様なものさえ感じられた。

ともあれ、気付いてもらえなければ挨拶も出来ない。俺は部屋の電気を点けて、彼女の作業環境を無理矢理変える。

そうして作業を中断された少女はこちらへ振り向いた。

「初めまして。暗い所でそんな事してたら目を悪く——え？」

暗くてよく分からなかったが、少女の髪の色は青空の様な水色だっ

た。頭部にはISのヘッドギアらしき物を付けていた。

そして何より、その弱気そうな表情には見覚えがある。ああ、眼鏡を掛けているのは初めて見るが——忘れるもんか。

「かん、ぎしっ?」

「たて……なし?」

お互いが相手の名前を口にする。

更識簪。俺が小学生から、転校する小学生四年生の終わりまでずっと一緒に居た幼馴染。

そして何より、両親を失った俺達兄妹が預けられた施設の支援者の娘。

再会するのはもう少し後だと思っていた。別れる前の彼女の涙が、ずっと気になっていた。

「久しぶりだな。元気だったか?」

「楯無……こそ」

思わず口角が上がってしまう。ああ、嬉しいき。素直に嬉しいよ。向こうも同じようで、可愛らしく小さくはにかみながらこちらを見てくれている。

俺は制服の上着の前を開けながら自分のベッドの方まで移動して、力を抜いてベッドに腰掛ける。よく見れば俺の家にあったポストンバッグがベッドの近くに置かれていた。

「六年ぶりか。おっきくなったな」

「それこそ、楯無こそ。おっきくなって、やっぱり男の子なんだね」

それからは思い出話の連続だった。お互いに離れていた距離を埋めるように、俺達は語り合う。

出会いから別れまで一頻り話して、話題はやつと再会まできた。

「そういえば、眼鏡掛けてるんだな。目が悪いのか?」

そう問えば、簪は小さく横に首を振る。

「これは眼鏡型の携帯ディスプレイ。完全投射型のディスプレイは高いから」

「成程な。部屋に入ったときに叩いてたモニターとキーボードのディスプレイって事」

「目と言えば、私の事もそうだけど……。楯無も、変わったね」

俺の左目の事を言っているのだろう。ナノマシンを移植されたのは引越してからだから、彼女の記憶では俺の両目は赤い色のままだ。

「ちよつと事情があつてさ。ISとの適合を高める為にナノマシンを移植したのさ。左目だけ色が白になってて驚いたろ」

「うん……。大変だったんだね」

恐らくつい最近の事だと勘違いしているのだろうが、その辺は大した問題じゃないので黙っておく。

簪の興味は俺の目の事で終わらず、「それに……」と俺の首のチョーカーを指してくる。

「それ、ISの待機形態？」

「……」

さて、どうしたものか。俺としては、隠しておきたくはある。

簪の事は信用していないわけではない。しかし、彼女は更識だ。彼女にその意思が無くとも、情報が渡ってしまう可能性は否定しきれない。

千冬さんもそういった意味で簪と相部屋にしたのだろう。

確実性で言うなら黙っているに限る。そう理解はしているが。

「……言いたくないなら、大丈夫。そのチョーカーの事も、黙ってる」
分かつてる。俺は簪とあの人には、嘘を吐けないって。

(相棒。いいな)

(了解。マスターの心に従います)

「簪。これから言う事は、俺と簪だけの秘密だ。守れるか」

「うん……。分かった」

彼女は頷いてくれた。六年越しの再会でこんな事を言ってくる俺を信じてくれる事を、本当にありがたいと思う。

俺のISの待機形態である黒いチョーカーから、モニターが投影される。

『初めまして、更識簪さん。私はマスターのIS、『黒雷』のコアです。マスターからお話は聞いています』

『SOUND ONLY』の画面から発せられるその声に、簪は目を丸くしていた。

まあ、そうだろうな。世界中探したって喋るコアなんてこいつぐら이다。

『マスターとはマスターが小学四年生の時に出会いました。簪さんとお別れする直前です』

「は、はい……」

面食らったまま、簪は相棒の言っている事を聞いていた。

『私はマスターの意思で、マスターの専用機として学園に登録されていません。マスターには何の後ろ盾もありませんから、専用機を持っているというだけで出自を怪しまれます』

その後ろ盾を持ったままここに入学した方が、大混乱を招いたのは間違いない。

しかし、後ろ盾がなければ堂々と専用機を持つ事も出来なかった。完全にジレンマだ。

『それに、マスターは私のデータを取られるのを嫌がっています。ですから簪さんには、私の事は黙っていてほしいのです。お願いできませんか?』

「分かった……絶対に、内緒にする」

『ありがとうございます。それでは、またマスターとの会話をお楽しみください』

そう告げてモニターは閉じられた。

簪は未だに信じられなさそうな表情でこちらを見ていた。

「驚いたよな。急にこんな事話して悪い」

「……ううん。話してくれて、本当に嬉しかった」

にこりと笑ってくれた簪の笑顔が眩しい。

六年経って、簪は俺の記憶よりもずっと魅力的な女性になっていた。

俺の事を話して、気になった事があった。簪の頭部に付けてあるヘッドギアの事だ。

「俺の事もそうだけど、それ、ISのヘッドギアだよな?」

問えば、簪は頷いてくれた。

「打鉄の後継機である、私の専用機『打鉄式』のヘッドギア。私、日本の代表候補生だから」

「へえ、そうなのか。って事は、その内簪が自由に空を飛ぶ姿が見れるんだな」

それは本当に楽しみだ。きっと本当に綺麗な軌道を描いて空を駆けるに違いない。

そんな俺の期待を感じ取ったのだろうけど、何故か簪は俯いてしまった。

「……ごめんなさい。楯無の期待には応えられないかもしれない」

そうして簪は告げてくれた。

自分の専用機が未完成であるという事。

倉持技研の開発スタッフは世界で二人の男性操縦者である織斑一夏の専用機の開発と解析、データ収集に全て持っていていかれた事。

……そして何より、織斑一夏の専用機が新たに追加された為に新たなコアが使われ、その補填の為にISコアさえ回ってこない事。

それでも何時かISコアが回ってきた時の為に、自分だけで機体を開発し続けている事。

全てを聞き終わって、俺は彼女の今を理解した。

「……簪の事情は分かった。だけど、一人で機体を組み上げようとしているのは何故なんだ？俺ならそんな研究所見限って、自分の事をちゃんと見てくれる所に移籍する」

「……駄目なの。この『打鉄式』は、私だけで組み上げないと。……お姉ちゃんが、そうしてきたから」

「刀奈が……」

確か彼女は、今はロシアの国家代表だ。

専用機である『霧纏の淑女』は自分の手で組み上げたのか。

彼女は国家代表だからある程度のプロフィールは簡単に入手できるんだが、そこまでは知らなかった。

だが、俺は思う。簪は簪だし、刀奈は刀奈だ。いくら姉妹でも、そんな所を気にしているのはおかしいと。

そう口を開きかけて、あの時の涙を思い出した。

最後に彼女が言った言葉。『私が何も出来ないから、お姉ちゃんは楯無になってしまったの』。

俺が引越してしまう直前の会話だったから、詳しい事は訊けなかった。

それでも、今までの簪から言つて、何も出来ない事に拘るのはおかしかった。

あの時の事が、自分だけで機体を組み上げる事に何か関係があるのかもしれない。

だったら、俺に出来る事は――。

「手伝うよ、簪の機体を組み上げるの」

「え……？」

「別に直接手伝うわけじゃないさ。唯、機体のデータとかを提供したりは出来るだろ？ 簪には俺の事情を黙ってもらってる。だから俺は自分の持っている情報を簪に渡す。……これは立派な取引だ。簪は必要な情報を俺から買っただけだよ」

本音を言えば簪相手にこんな事したくはない。こうしなければ彼女が納得してくれなさそうだったからだ。

刀奈だって、一から設計して作ったわけではないだろう。

稼働データや武装の基礎データは、間違いなく嘗てのロシア製ISから流用している部分がある。

だったら条件は対等だ。いや、寧ろ国家のバックアップ無しで組み上げようとしている簪の方が条件は悪い。

簪は再び俯いて何かを考えているようだったが、暫くすると顔を上げて、

「……お願いします」

右手を差し出してきた。

「ああ、任された」

躊躇う事なくその右手を取って、俺達は握手を交わした。

久しぶりに握る彼女の手は温かくて、どうしようもない安心感があつた。

「……ヒーローみたいだね」

「うん？」

簪は昔から気弱だったから、どんどんと前に進んでいく刀奈に振り回されてよく泣いていた。

俺には妹が居るから、ああいう時には決まって手を繋いで宥めてやってたっけ。

そんな昔の事を思い出していたからなんだろう。俺も簪も、今と昔ではまるで状況は違ってしまっているのに。

「困った時に現れて、助けてくれる。……ずっと昔から、楯無は私のヒーローみたい」

昔と同じように——照れたように笑う彼女の望みを、俺は叶えてやりたいと思ったんだ。

3. 彼の琴線

「よし、遅刻者は零だな。グラウンド十週する馬鹿者を今日は見なくて済む」

IS学園一年一組。その担任である世界最強こと千冬さんの言葉によって、俺達のクラスは学園生活を開始した。全員物の見事に千冬さんを見た瞬間に席に座った。

流石に二日目から遅刻する馬鹿は居ないだろう。それより千冬さん、人が朝飯を食べている時に出席簿投げてくるの止めてくれませんか。簪が吃驚してたんですけど。

語るに値しない朝の出来事を訴える俺の視線を受け取ってか、千冬さんは「ふん」と息だけで返事をした。どういう意味ですか。

そうしてホームルームが始まったのだが、教壇に立ったのは山田先生ではなく千冬さんだった。

(どうしたんだ。一夏を近くで見たくなっただのか、この世界最強のブラコンは)

(その線は薄いかと。恐らく大事な連絡事項があるのでしよう) 相棒の予想通り、どうやら連絡事項があるらしい。

珍しく出席簿を正しい使い方で使った後、千冬さんは切り出した。「授業を始める前に、クラス対抗戦に出る代表者を決める」

クラス対抗戦。多分文字通りの意味だろう。それに出場する代表者って事は、クラスの威信を懸けて戦う事になるのか。

……まあ、それ以前に。本当にその場限りの代表者で済むのかどうか問題だが。

「クラス代表者は生徒会の開く会議や、委員会への出席も役割の内となる。早い話がクラス委員だ。一度決まれば、一年間変更はない。一度決めたらこれぐらいやり通せ」

随分と男前な事を言ってくれるが、それはご免被る。単刀直入に言ってしまうば本当に面倒くさい。

千冬さんの説明が終わり、教室はざわついていた。文字通りクラスの代表を決めるのだから無理もない。

「自薦他薦は問わない。誰か居ないか？」

「はい！ 織斑君を推薦します！」

「なら私は雪月君！」

まあそうなるよな。クラスの顔なんだから、物珍しい男性操縦者が推されるのは予想出来ていた。

それに加えて一夏はブリュンヒルデの弟。それを考えれば一夏になるだろう。俺の生まれが一般で助かった。

まあ生まれは普通でも経歴はちつとも普通じゃないんだが。

クラスがわいわいとしている中、俺は窓の外から水平線を眺める作業に入った。

「織斑と雪月以外に候補者は居ないのか？ ならこの二人の決選投票になるが」

（マスター、決選投票だそうですが。敗算はあるのですか？）

（この場合勝ち負けがどっちか分からないけど、きつと一夏になるだろう）

相棒からの声に水平線を見るのを止め、視界を教室に戻した。

片や織斑千冬の家族愛を受ける男、片や織斑千冬の出席簿を受ける男。

比べるまでもないだろう。大人しく一夏にしてくれ。

そうして素直に終わってくればよかったのだが、それはとある女子によって叶わぬ夢となった。

「納得がいきませんわ！」

そう言つて机を叩いて立ち上がったのは、あのイギリス代表候補生セシリアールコツトだった。

言葉の通り大変怒っていらつしやる。何故納得がいかないのかはこれから語ってくれるだろう。

（雲行きが怪しくなってきましたね）

（言うな、相棒）

水平線を見るのも止め、溜息の一つでも吐きたいのを抑えてオルコツトの主張を待つ。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表なんて

いい恥晒しですわ！ この私、セシリアⅡオルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか!？」

「どうやら俺達はクラスの恥らしい。一夏は呆然とそれを聞いていたが、どうやらやっつと意味が分かったようだ。少しずつ苛立ちを感じている顔つきになった。」

「クラス代表には最も実力がある存在がなるのが必然。それはつまり、イギリス代表候補生であるセシリアⅡオルコットという事になります。それを唯珍しいからという理由で極東の猿二人組に委ねられては困ります。私がこんな島国に来ているのはISの修練の為。サーカスの訓練なら他所を当たっていただけませんか？」

（もしかして、サーカスの部分は俺と千冬さんの出席簿芸の事か？

今度はどんな風に返すのか考えないとな）

（恐らく違うかと。しかし、次の返し方は私も考えておきます）

（真面目で助かるよ）

そもそも次がないのを祈る。

一夏もそろそろ怒り心頭のようだ。言い返してもいいと思う。

そして俺をこの問題から遠ざけてくれ。

こうしている内にもオルコットのボルテージは上昇中。言いたい放題だった。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければならぬ事自体が私にとっては耐えがたい苦痛で——」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。大体同じ島国で、飯だったら日本の方が圧倒的に美味いぜ。世界一不味い料理で殿堂入りしてる国の国民の舌じゃ、判らないかもしれないけどな」

おお、言うじゃないか一夏。別に日本という国に愛着はこれっぽっちもないが、今のはすかつとした。

この返しはオルコットにクリティカルヒットしたらしい。顔を真っ赤にして言い返してきた。

「あなた、いい度胸ですわね！ イギリスにだって美味しい食べ物はたくさんありますのに、私の祖国を馬鹿にしますの!？」

「先に馬鹿にしてきたのはそっちだろ！」

そうしてお互い睨み合って動かない二人。完全に蚊帳の外になれて俺は嬉しい。

……と思っていたのだが、世界最強の目は誤魔化せなかった。

「雪月。さつきからずっと黙っているが、お前は何か言う事がないのか？」

視線だけで『余計な事を』と伝えると、千冬さんは「ふっ」と笑った。

この人、完全に俺の腹積もりを見破ってやがったな。だからさつき外眺めてても何もしてこなかったのか。

千冬さんに言われてしまえば、当然矛先は俺の方に向く。

……いや、特になんだけど。

そもそもISを開発したのは日本人の篠ノ之東であるとか、日本が開発したからUI周りが完全に日本語なんだとか、色々教えてやりたい事はあるが、別に言ってやりたい事はない。

「いやー、別に……」

「何ですのその態度は！ まったく、男性操縦者だから多少は見所のある人と思っていました、唯の軟弱者のようですよわね！」

「そうだけ楯無！ 少しぐらい言い返せ！」

「じゃあ言うけど、お前はどっちの味方だ一夏」

「俺にじゃねえ！ オルコットさんにだ！」

「じゃあ特にないです」

「やっぱり軟弱者じゃないのですの！ どこまでも冷めていて、感情ありませんの!?!」

ボルテージ上がりっぱなしの二人を見れば逆に冷静にもなるだろ。もうそろそろ二人の世界に戻ってほしい。

至極面倒そうに聞き流していれば、オルコットは益々調子付いてきた。

「やはり男がISなど乗るべきではありませんわね！ そもそも、この国の量産型である『打鉄』も、私の国のティアーズ型に比べれば鉄屑同然——」

「——今、何だった？」

立ち上がった俺の声に、教室が静まり返った。

オルコットもさつきまでのボルテージ具合はどこへやら、一気に黙ってしまった。

……ああ、俺は怒ってるな。これは久しぶりに怒っている。

「別に俺の事を軟弱者だとか言うのは構わねえよ。日本の事も別にいい、好きにしてくれ。けどな、『打鉄』は関係ないだろ」

相棒の妹達を馬鹿にされて黙っていられる程、俺は軟弱者じゃない。

その後継機を自らの専用機にしようと、たった一人で頑張っている女の子だっている。

『打鉄』はそんな想いを受けたISだ。きつとどんなISにも込められた想いがある。その想いを貶す事は、誰であつても許さない。「今直ぐ発言を取り消せ。その後はお前がクラス代表でも何でもやればいい。俺達は大人しく、サーカスの芸でも磨いてるさ」

言うだけ言つて座る。後はオルコットの発言撤回を待っただけだ。

そう思つて横目で見ていれば、どうやらそう大人しく従つてはくれないらしい。

「……け、決闘ですわー!」

「お……おう、いいぜ。四の五の言うより分かり易い」

勢いを削がれながらも言つてきたオルコットの決闘を、一夏も同様に勢いを削がれながらも受けた。

俺も受けなければならぬ流れなんだろう。まあ、そうでなくとも受けてやるが。

オルコットにはまだ発言を撤回してもらっていない。だったら教えてやろうじゃないか。俺の相棒の妹達の性能を。

「ああ、俺もいいよ。主義じゃないけどやろう、ISで決闘」

「言つておきますけど、わざと負けたりしたら私の奴隷にでもなつてもらいますわ」

「分かった。じゃあお前が負けたら『打鉄』の広告塔な。どっかの企業がコアを新しく用意してくれるぐらい、しっかりと宣伝してもらおう」

「万が一にも私が負けるといふ事はありえませんが。いいでしょう。オ
ルコットの名に誓い、その約束を受けましたわ」

「さて、話は纏まったな」

やり取りが終わったのを見届けると、千冬さんは手を叩いて場を取
り仕切る。

「勝負は一週間後。放課後の第三アリーナで行う。それぞれ準備を怠
るなよ」



放課後になれば、話題は再び決闘の話だった。

一夏の専用機は学園で用意してくれるらしいが、少し時間が掛かる
のは昼休みに話された事だ。

俺の方は俺の方で、学園が訓練機を貸してくれる事になった。

一夏の方に専用機を優先して配備するのは、一夏の方が特殊な存在
だからだろう。

まあ、そもそも俺に専用機を用意されても困る。俺の相棒は十歳の
頃から一緒に居る。

「さて、お前に貸し出す訓練機だが」

教壇の近くで千冬さんと話をする。二日連続で放課後に真っ先に
話すのが千冬さんなのは何の因果か。

「『打鉄』と『ラファール』リヴァイブ」、どちらかを貸し出す予定
だったが……ホームルームの一件からお前が選ぶのは『打鉄』以外
にはありえないだろうな」

「はい……それと、出来れば俺が入学試験に乗った『打鉄』を借りた
いんですけど」

そう言うと、千冬さんは意外そうな顔をした。

「それは構わんが……」

「分かっていますよ。訓練機のコアは経験を積んだりする事はない。初
期のままだ。それでも俺はあいつがいいです。男のつまらない意地
ですよ」

「意地、か。それこそ意外だ。お前にそんな拘りがあるとは。いいだろう、着いてこい」

歩き出した千冬さんの後を着いていく。訓練機を保管してる場所に案内してくれるのだろう。

伝説のブリュンヒルデに連行されているからか、それとも俺が男性操縦者だからか、或いは両方かは知らないが、廊下でも注目を集める。生徒の声を聞くに、どうやら半々といったところか。千冬さんも気にしていなそうだし、俺も別に気にならないが。

歩きながらになるが、千冬さんに質問する。

「俺に貸し出される訓練機って、改造は許可されてるんですよね？」

「戻せる範囲であるならな。だが、いくら訓練機であるとはいえ、素人が改造に走るのは止めた方がいい。碌な事にならない」

「大丈夫です。装甲をちよつと外して、スラスタ増やして、反応速度を上げて、武装をちよつと追加するだけなんで」

「そのどこが大丈夫なのか言ってみろ」

それでもやるのは自由らしい。千冬さんは止めはしなかった。

訓練機が保管されている部屋に辿り着き、ロックを解除して中に入ると、そこには「打鉄」と「ラファールⅡリヴァイヴ」が並んでいた。

数はそこまで多くない。そもそも世界中のコアの数がコアの数だからな。これだけ訓練機として使えてるだけで十分凄い。

「待っている、お前が試験に使った「打鉄」を調べる」

そうして使用履歴が保管されているであろうコンソールを弄り始めた千冬さんを横目に、俺は相棒へ語り掛けた。

（コアのネットワークから、あの日の「打鉄」を探してくれ）

（了解しました）

そうして待つ事十数秒。相棒の検索が終了し、とある「打鉄」を教えてください。

そいつの前に立つのと同時に、千冬さんも履歴を調べ終わったみたいだ。

「お前の受験番号から言って、お前が試験で使った「打鉄」はそれ

だ。……何だ、分かっていたみたいだな」

「偶々、勘が当たっただけですよ。……さて」

俺は目の前に鎮座している『打鉄』に向き直る。

そしてゆっくりと装甲に手を触れ、『打鉄』の存在と向き合った。

「お前達の名誉を守る為に、俺に翼を貸してくれ——これから頼む、『打鉄』」

（ネットワークを通じて、『打鉄』のコアから了承の返答がありました）

『打鉄』は輝きと共に粒子になっていき、俺の右手の中指に指輪として姿を変える。

オルコットとの決闘まで一週間。『打鉄』達の為に、やれる事はやっておこう。

4. 甘えられたり甘えたりで準備中

「そんなわけで、オルコットと決闘する事になった。あとついでにデータ取り目的で一夏とも」

学生寮の自分の部屋に帰って、相変わらず暗い部屋の中、自らのベッドの上で足を崩して「打鉄式式」のプログラミングをしていた簪に事の顛末を説明する。

部屋の電気は点けてある。このままだと本当に簪の目が悪くなつてしまいかねない。

「……そう、なんだ」

話を聞いた簪の顔はちよつと赤らんでいた。

俺がオルコットに怒った理由を話した辺りから顔が赤くなり始めたから、多分「打鉄式式」——自分の事を考えていてくれたのが嬉しかったのだろう。

（乙女とは些細な事で一喜一憂してしまうものです。乙女心は複雑である事は今までの経験から十分に理解している筈ですが）

鈴音の事を言っているに違いない。俺とほぼ同時期に転入してきた女の子だ。

一夏の事が大好きな女の子で、俺は彼女の恋を応援していた。

おかげで俺と鈴音は親友と呼べるような間柄になっていた。彼女は中学二年生の終わりに中国へ帰ってしまったが、元気になっているだろうか。

「『黒雷』では戦えないのは分かるけど……どうやって『打鉄』で勝つのか？」

簪がそう心配してくるのも無理はない。

向こうは専用機を持っている。確か、名前は『ブルーIIティアーズ』。

それ以外はこれから調べる。名前さえ分かれば幾らでも調べようがあるからな。

現に今、相棒が情報を集めてくれている。流石にISのコア間でのネットワークを使うのは卑怯だから、一般的な方法に限っているが。

「確かに、『打鉄』と『ブルーIIティアーズ』の間には、少なくともスベックの差がある。詳しい事はまだ分からないけど、それは間違いないだろうな」

だからこそ、俺だって何も対策をしていないわけではなかった。俺の右手の中指に光る指輪は、既に通常の『打鉄』とは違っている。

「貰ったその日に改造したの?」

「軽い改造だけだったからな。千冬さんが呼んでくれた三年の整備科の先輩も手伝ってくれたし、直ぐだったよ」

一人でも出来たのだが、それはそれで経歴を疑われるので大人しく甘えておいた。

まあ、千冬さんの表情を見るに相当疑われてはいるけど。三年の先輩も俺の改造の要求を見て、『え? こいつマジで?』みたいな顔をしていたし。

「カタログスベック上は昨日見せてもらった『打鉄式』のグレードダウンした形にしておいたから、反映させやすい有効なデータも取れると思う。期待してくれ」

「そこまで……あ、ありがとう」

そう言うてはにかんでくれる簪の顔を見れば、こっちもそうした甲斐があった。

元が第二世代型なので、そこから逸した性能を得る事は不可能だったが、力になれてよかった。

『マスター。一般権限で得られるブルーIIティアーズの情報の収集が完了しました。今からデータを展開します』

『SOUND ONLY』の画面を空中に投影しながら、相棒が会話に参加してきた。

新たに投影された画面に、次々と画像と映像が映し出されていく。映っているのは青い機体を纏ったセシリアIIオルコット。

合同演習や、デモンストレーションの映像を集めてきたのだろう。オルコットがターゲットカーソルを撃ち抜く様子が映っていた。

「やっぱり目を引くのはスナイパーライフルだな。実弾じゃなくて

レーザー型か」

「うん……それに」

『射撃の間隔も短く、狙いも正確です。ターゲットカーソルがランダム回避で動いていようがお構いなしの腕前を見せています』

代表候補生の簪と、ISそのものの相棒が感心しているのだから相
当な腕前だろう。事実、俺もこの狙撃は見事だと思う。学年トップは
伊達ではないらしい。

映像に映っているどや顔も、実力に裏打ちされているどや顔だっ
た。

『残念ながら機体スペックの詳細は得られませんでした。武器もライ
フルと近接用武器を確認したのみです』

「第三世代兵器は分からないか。当然だな」

『しかし、検討は付いています。背部に展開されているサイドバイ
ンダー。恐らくこれが第三世代兵器です』

「ああ。そして機体コンセプトとイギリスの開発傾向から言って、射
撃武器なのも間違いない」

相棒と意見交換をしていれば、簪の視線を感じた。

「どうした？」

そう問えば、簪は慌てたように「ううん」と首を横に振った。

「私もそこが怪しいと思ってたから……。楯無と「黒雷」も同じ事
思っていて、驚いただけ」

『マスターと私の間には積み上げられてきた時間と経験が存在しま
す。それに簪さんの意見が重なったなれば、これは確定事項としてよ
いでしょう』

「簪もそこが気になったのなら、尚の事間違いないな。本番はそれに
注意していこうぜ、相棒」

一先ず相手の分析としてはこれでいいだろう。高速かつ正確な狙
撃がオルコットの持ち味。そしてそれとは別に、射撃兵器として存在
しているであろう第三世代兵器。

この組み合わせにどう立ち向かうかは、これから詰めていけばい
い。

ふと時計を見ればもうそろそろ夕食の時間だった。まだ数回しか食べてないが、IS学園の食堂の飯は美味しい。これは毎日の楽しみになるぜ。

「ま、そういうわけだからさ。飯でも食いに行こうぜ。腹減ったよ」「そうだね。行こう」

そうしてお互いにベッドから立ち上がろうとするが――。

「あ――」

簪の体勢が崩れ、俺のベッドに倒れそうになる。

「おっと」

このままでは俺のベッドの角に顔面ダイブしてしまう。そっと簪の身体を支えてやる。

簪の身体は軽く、一体どこに肉が付いてるのか不思議なぐらいだった。

おかげで全然力を入れなくても支えてやれた。

だがしかし、どうした事だろう。さっきより簪の顔が赤くなってしまっている。熱でもあるのか。

「どうした、具合でも悪いのか？」

「う、ううん。足が痺れただけ……」

「成程。長い間座ってたもんね。痺れが取れるまで足を伸ばして座ってるか」

そう提案すれば、簪は俺の服をぎゅっと掴む。

本当にどうしたのだろう。当たり前前の提案しているつもりだが、どこか薄情な事を言ってしまったのだろうか。

（相棒。俺やらかしたかな）

（マスター。やらかしたのは今ではありません。遙か昔です）

（言っている意味が分からないんだが。……これはあれなのか？ 支え続けた方がいいのか？）

相棒の返答はない。これ以上は俺が考えろという事か。

さて、相棒をこれ以上頼れないとするならば、自分で考えるしかない。

俺は座っているかと提案した。すると簪は俺の制服を掴んだ。

……うん、とりあえず行き当たりばったりで。

「それとも、もう暫く支えていた方がいいか？」

「……………うん」

一発で当たりを引いたらしい。大分長い沈黙の後、そう答えが返ってきた。

ああ、そうだったんだ。そういう事ね。俺は何となく理解した。

肩肘張って生活してたら疲れるもんな。偶には誰かに甘えたくもなる。

小学校以降の簪の事はよく知らないが、きつと苦勞をしてきたのだろう。

最後に交わしたあの言葉と、再会した時の簪が置かれていた状況。そこから考えれば想像に難くない。

「俺はいいよ。簪は軽いから、全然苦じやない。何なら背負って食堂に連れてってやろうか」

「そ、それは大丈夫……………！ 恥ずかし過ぎる……………！」

また顔が赤くなった。となれば、さっきのは恥ずかしかったのか。

簪の恥ずかしさは今の所これぐらいが限界のようだ。

簪が真っ赤になった顔のまま、俺の服を掴み続ける。

「と、とにかく。もうちよつとだけ、このままで」

「分かった。痺れが取れたら飯を食いに行こうぜ」

「うん」

「また気疲れしちまったら、甘えてくれ。胸ぐらいなら何時でも貸すから」

簪は大きく目を開けて驚いた後、また赤くなって縮こまりながらも小さく頷いた。



食堂で夕食をとり、寮の部屋でシャワーを浴びる。

簪は寮の大浴場に入浴に行っていた。やはり女子というものは風呂が好きなのだろう。某国民的青狸のヒロインもそんな感じだった。

間違いない。

シャワーを浴び終わって身体を拭いて寝間着に着替えると、あとはもう自由時間だ。

ベッドに座ってぼーっとしていれば、相棒からの語り掛けがあった。

(マスター。少し、よろしいでしょうか)

「構わないぜ。何だ、相棒」

ここには俺と相棒しか居ない。態々心の声で答える必要もない。

相棒だつて普通に声を出して構わないのだが、心の声で語り掛ける。

「そういう話か。続けてくれ」

(はい。簪さんの事です。マスターはお気づきでしょうが、恐らく彼女は――)

「俺の監視と護衛の為、だろうか？ 更識の人間が俺と同室なんて出来過ぎているからな」

(そうです。ですが簪さんは監視の面では問題があるとは思えません。マスターの秘密は黙っていてくれると約束してくれました)

「だったら、問題は護衛の方か？」

どうやら、それが本命らしい。相棒は肯定もせず話を続けた。

(彼女の専用機は完成していません。戦力としては不十分です。武道は嗜んでいるようですが、ISを相手どるには不足しているでしょう)

それは当たり前の事だ。IS相手に生身で相手どれるのは世界で二人ぐらいしかいないだろう。

そんな規格外達と簪を比べるのは酷というものだ。

(ですが、マスターの危機となれば彼女はマスターの身を守ろうとするでしょう。そこにISの有無は関係ありません)

「そんな事する必要ないだろ。俺にはお前が……って、そうだよな。俺だつてそうする」

簪が危機に陥っていたのなら、俺はきつと迷わず守りに行く。相棒の言う通り、ISを持っていようがいなかろうが関係ない。

(ですから、マスター自身が危機に陥る事を避けるか、危機に陥っている事を簪さんに知らせない事が重要になってきます)

「確かに、俺は束姉の庇護下にはもう居ない。これからIS学園に居る間、何かがあるか分からないからな。気を付ける」

(唯でさえ、マスターのやろうとしている事は少なくとも混乱を齎します。他人を巻き込まない為に自らの危機管理に敏感になって、損をする事はありません)

了解、と短く答える。相棒がこんな早い段階から警告をしてきたという事は、きつと本当に気を付けた方が良い事だ。

となれば、訓練機でもISを堂々と展開させられるのは都合のいい事だったのだろう。

「——ただいま……」

タイミング良く相棒との話が終わった時に、部屋のドアが開いて簪が帰ってきた。

「お帰り。俺も偶には浴場でゆっくり浸かりたいぜ」

「……でも、あの広さに一人だと逆に寂しそう。あ、でも織斑さんが居た」

あいつと一緒に入るのはちよつと遠慮したいです。距離近いし。

他愛もない話をして、簪も自らのベッドに座った。今日はもう「打鉄式」の開発をする気はないようだ。

じーっと俺の方を見つめて、簪は何か言いたげだ。

「どうした？」

「昨日から気になってたけど……髪、乾かさないの？」

そう言われて自らの髪を触れば、まだ湿っていた。

男にしては長い肩程まである黒髪だから、乾くのには時間が掛かる。

「放っておけば乾くだろう」

そう言えば、簪は不満そうに「駄目」と答える。

「髪、痛む……男の人って、そういう事には無頓着なの？」

簪は立ち上がると、ベッドの下の収納スペースからドライヤーを取り出した。簪が持ち込んだ物だろう。

ベッドの枕元付近にあるコンセントに挿すと、そのまま俺のベッドまでやってきた。

「か……乾かしてあげる」

「いいのか?」

「うん……じつとしてて」

ドライヤーから温風が出て、簪が俺の髪を手で梳きながら乾かしてくれる。

細い簪の指が髪の間を通って心地いい。

「どう……熱くない?」

「ああ、心地良くて眠くなるよ」

思えば、こんな事してもらったのは何時ぶりだろうか。

束姉にしてもらった事は何度かあったけれど、中学生になって一度もなかったな。

俺と妹には両親がいなかったから、幼い頃のそういった思い出もない。

だからだろう。ふとしたこんな提案に、乗ってしまったのは。

「……ふふっ。これから毎日してあげようか?」

「ああ、簪がいいのなら頼む」

「え!?! ……分かった、楽しみにしててね」

取り消そうとも思っただけけれど、好意を無碍にするのも悪いと思い、甘える事にした。

簪も簪で嬉しそうだ。こうした小さな事が彼女の息抜きになってくれればいい。

こうして俺のIS学園二日目の夜は更けていく。明日もこうあればいいと、小さく願いながら目を閉じた。

5. ISという翼

セシリアⅡオルコットと織斑一夏、そして雪月楯無の三人の決闘の当日。

織斑一夏と雪月楯無の二人は決闘場である第三アリーナのピットに居た。

二人の恰好はISスーツと呼ばれる特殊なスーツに包まれている。ISに乗る時には必需品と言ってもいい、表現を変えれば決闘に挑む騎士の甲冑の様なものだ。

「これがお前のIS、『白式』か」

二人の視線は、眼前に鎮座している一つのISに集中していた。

一夏は「ああ」と頷いて、『白式』へと向き直った。

そうしてゆっくりと手を触れる。自らとISが一つに溶けていくような感覚に委ね、静かに瞼を閉じていた。

「何となくさ、分かるんだ。俺がこのISをどう扱えばいいのか、どうすれば前に進めるのか」

「そうか。……それがお前の翼なんだな」

「翼？」

一夏の問いに、楯無は遠い目を思い出すように告げる。

自らの無力を呪い、篠ノ之東に出会い、自らの翼と出会ったあの日。

「ああ。ISは俺を遠くへ飛ばしてくれる翼だ。お前にとってISが同じ意味かは分からないけれど、俺にとってはそうなんだ」

全ては少年が願った事から始まった。

彼女が本当の名前で笑える空へ飛んでいける翼。

兎と偶然出会った事により叶い、与えられたそれは、今も楯無と共に居た。

そんな楯無の事情を一夏は知らない。一夏は自分が最初のIS操縦者だと思っていた。

だから彼のISへの想いも知らず、自らのISの想いを口にした。

「悪い。俺にとってはISは力だ」

「……そうか」

「ああ。俺はこの力で、皆を守ってみせる。もう守られるだけは、卒業したいんだ」

一夏の言葉に、楯無はどこか平坦な声で「頑張れよ」と返す。

踵を返して“白式”の前から去ると、決闘の時間帯が放課後という事で応援に来ていた更識簪の許へ向かった。

「簪。来てくれたんだな」

「うん……あれが、“白式”なんだね」

簪は複雑な表情で“白式”を見つめている。

自らの専用機“打鉄式”の開発を投げ出してまで倉持技術研究所が開発した、男性操縦者である織斑一夏の為のIS。

待機形態である指輪を嵌めた右手の中指をそつと撫でる。

機体は未完成で、未だにコアすら無いような状態だが、必ず完成させると誓った。

そうでなければ、あの背中には追い付けない。——あの日の気持ちを乗り越える事も出来ない。

「大丈夫か？ 胸貸す？」

「い、いい。それに、そういうのは二人きりの時だけで」

思い詰めた顔をしていたのだろう。急な幼馴染の言葉に顔を赤くして、簪は俯いた。

自分の事を信用してくれるのは嬉しい。助けてくれるのも本当に嬉しい。まるでヒーローの様に前を向いて自分を引っ張っていつてくれるような存在だとも思う。

でもやつぱり、もう少し空気を読むというか、その辺を気にしてほしかった。

「——揃っているな」

その場に新たに現れた織斑千冬によって、場は仕切り直される。

後ろから着いてきた山田真耶も、教師然とした面持ちで場を取り仕切った。

「オルコットさんは既に準備を完了し、アリーナでISを展開して待機しています」

「織斑の“白式”はまだ初期化と最適化処理が済んでいない。悪い

が、試合の順番は雪月からで構わんな」

「いいよ。寧ろ——やらせてくれ」

千冬の提案に楯無は小さく口角を上げて答える。

その目付きは真剣そのものだ。赤と白のオッドアイも細められ、普段の掴み所のないふざけた様子は一片たりとも感じさせない。

……筈なのだが、三秒後には元通りだった。

「あれ、今のタメ口への出席簿は無しですか？」

「無しだ。たったの三秒だがいいものが見れたからな。久しぶりに滾らせてくれた、お前というIS乗りの表情は」

千冬の好戦的な笑みを嫌そうに流し、楯無は右手を前に掲げた。

「頼む、打鉄」

短く願い、右手の中指に付けられた指輪が光り輝く。

光の粒子が楯無の全身を包む。それは一瞬で装甲へと形を変え、自らを飛ばす翼を広げた。

訓練機である「打鉄」とは大分姿形が変わっていた。

両肩部に浮遊している装甲は無くなっており、その代わりにスラスターが二基増設されていた。他にも腰部側面の装甲が削られていたり、機動性に特化した機体だと分かる。

「カタパルトの射出シークエンスは既に譲渡してあります。ISの指示に従って発進してください」

「分かりました」

カタパルトに向かって歩き出す前に、楯無は一度だけ簪の方を見た。

「じゃあ、行ってくる。オルコットに「打鉄」の可能性を見せつけてくるから」

「うん……信じてる」

簪の言葉に頷いて、楯無はカタパルトへ歩いてISを固定した。

アリーナへ続く入り口の向こうにISの反応がある。飛び出せばそこは戦場だ。

そこに飛ぶのに躊躇いはない。寧ろその場所は低すぎるくらいだ。

（マスター。「打鉄」のハイパーセンサーと左目のナノマシンとのり

ンクはありません。普段とは違う視界で戦闘になる事に注意してください)

(心配するな、そもそも“打鉄”には左目は必要ない)

アリーナの入り口が開ききると、カタパルトから発進する。

戦場へ飛び出せば、そこには青いISを纏ったセシリアⅡオルコツトが待ち構えていた。

「逃げずに来ましたのね。褒めて差し上げますわ」

「当然だ。お前に“打鉄”の広告塔してもらわないと困るからな」

セシリアは楯無のISを見て、挑発するように髪を掻き上げた。

「あら、元の“打鉄”より随分と様変わりしてますのね。装甲の削減とスラストターの増設……清々しい程の機動性特化ですわね」

「バランス悪いのは分かってるぜ。第二世代で第三世代の機動性を出来る限り再現したらこうなったただけだ」

「そもそも改造してきた事自体が驚きですが……初心者にありがちなバランスを無視した改造。しかもそれを自覚しての搭乗……呆れて物も言えませんわ」

セシリアは“ブルーⅡティアーズ”の主兵装であるライフル――

“スターライトmkⅢ”を構える。

楯無も右手にアサルトライフルを呼び出して、だらりと腕をぶら下げた。

お互いのハイパーセンサーには試合開始までのカウントが表示された。

「最後のチャンスをおあげますわ。代表候補生であり、専用機乗りの私が勝つのは自明の理。あなたの大切な“打鉄”がボロボロにされる前に、降参をして謝るのですしたら、許して差し上げなくもないですわ」
「態々飛んで謝りにくる奴が居るか」

「―――そうですか!」

カウントが零になった。セシリアは構えられたライフルの引き金を躊躇いなく引いた。

銃口から放たれるレーザーを感知し、アラートが鳴る。

直撃コース。体勢は崩れ、崩れ落ちる。そこを再び狙い撃つ。

それがセシリアが組み立てた勝利の道筋だ。

初心者ごときが代表候補生に敵う筈もない。ましてや相手は改造されていようとも量産機。全てにおいて自分の方が上である。

——そう、思っていた。

「な——」

セシリアは目の前の光景を受け入れられずにいた。

楯無はセシリアの初撃を必要最低限のスラスターの動きだけで避けた。

続く二射目も涼しい顔で避けられる。フェイントを交えた三射目も同様。

「そのISの反応速度……改造したのは外見だけではないようですね！」

「反応速度だけは弄らないと、窮屈でしょうがなかったからな」

しかし、セシリアもイギリスの名を背負う代表候補生だ。

楯無がスラスターを吹かして前進しようとした瞬間、セシリアは全力で後退する。

如何に改造を重ねようとも、『打鉄』では『ブルー』ティアーズの機動性には及ばない。

十分に距離を取ると、セシリアはサイドバインダーを切り離す。

——そしてそれは四つのビットとなり、各々の角度から楯無へと襲い掛かった。

「さあ、踊りなさい——私、セシリア。オルコットと『ブルー』

ティアーズ」が奏でる円舞曲で！」

(マスター、来ます)

(分かっているよ。遠隔誘導兵器——これがイギリスの第三世代兵器か)

四方から放たれるビームを楯無は捌く。

スラスターによる直線的な移動、PICによる立体的な軌道。

その二つを組み合わせ、本当に踊るように楯無は動く。

「ちい……！ その動きがどこまで続くのか見物ですわね！」

「お前が負けた時に終わるよ。それに安心しろ——もう見えた」

そう告げた楯無と、セシリアの視線がはつきりと交差した。

赤と白のオッドアイ。それにどこまでも自らを見透かされている錯覚を覚え、セシリアは背筋に走った電流のままに攻撃を続ける。

対する楯無は両腕にシールドを装着する。

「少ない装甲をそれで補ったつもりですか!? 見くびられたものですわね！」

「もう見えたって言っただろ。少し黙ってろ」

楯無が「ブルーIIティアーズ」の猛攻を捌きながらアサルトライフルを放つ。

無論、頭部を狙った直撃コース。ISの装甲がない、絶対防御が発動する部位だ。

回避運動を取ったセシリア。その隙を見逃す事はなく、楯無は歩を進めた。

「まずは一步」

「くっ——！」

お返しとばかりに撃ち返したライフルを、楯無はシールドで防ぐ。そうして再び歩を進め、セシリアとの距離を縮めていく。

「『ブルーIIティアーズ』！」

再び動き始めたビットが楯無を包围し、ビームの雨が降り注ぐ。

しかし楯無は動じない。シールドで防ぎながら少しずつ距離を縮めていった。

「撃つか操るか、好きな方を選べ」

「この私が——っ！」

不意に放たれたアサルトライフルを回避する為にセシリアは後退した。

その間、四つのビットは動きを止める。それを楯無は見逃さなかった。

「先ず一つ」

『打鉄』のスラスタが唸りを上げ、ビットの内一つへ最高速度へ直進する。

そしてそのままビットを掴み、力づくでコントロールを奪った。

「まさか、そんな野蛮な！」

「俺は紳士だぜ、ISにはな！」

動揺した隙を突き、楯無は二つ目を捕まえた。

セシリアはライフルによりそれ以上を許さないが、その全てはシールドによって防がれた。

「そのシールドで、何時までも防げるわけがありませんわ！」

「防いでなんかいない。どこ見てるんだよ、お前」

アサルトライフルを撃って牽制しながら、楯無は前に進む。

狙いは一直線。三つ目のビットだ。

セシリアは回避をしなければならず、ビットは楯無から逃げられない。

「雪月君、やりますね。改造された『打鉄』をあそこまで使いこなして、専用機と渡り合うなんて」

アリーナの管制室から試合の様子を見ていた山田真耶は、惚れ惚れするように口にした。

セシリアの精密射撃を避け、シールドで防ぎながら最後のビットを捕まえた楯無は、セシリアへ向き直った。

「ですが、どうしてあのシールドはあそこまで持っているんでしょう。ライフルとビットを何度も受けて、訓練機のシールドが持つ筈が――」

「受けていないのさ。あれは」

織斑千冬は淡々と告げる。

「あいつはシールドで攻撃を受ける時に角度を付け、着弾の瞬間に機体を捻る事で攻撃を受け流している」

「え、でもライフルはともかく、ビットは多角的な攻撃をしてきていたんですよ？ そんな事出来るんですか？」

「出来るからシールドが持っている。そしてビットを全て捕まえられた今、オルコットの射撃は雪月の足を止める要因にはならない」

ふ、と小さく笑って、千冬はセシリアへ直進する楯無を見る。

「まあ、あいつは『打鉄』を馬鹿にされたから戦っているだけだ。悪いようにはならんさ……あいつがああ時の奴ならな」

セシリアの射撃をいとも簡単に避けながら、遂に楯無はセシリアに最接近した。

その事実には歯噛みしながら、セシリアの隠し玉が発動した。

「くっ……これをを使う事になるとは思いませんでしたわ！」

セシリアの「ブルーIIティアーズ」の最後の二機が本体からミサイルを放つ。

殆ど零距离からの、自爆覚悟の一撃を取らざるを得なかった屈辱。

たかだか「打鉄」如きにそんな戦法を取らなくてはいけなかった事への屈辱。

その全てを乗せた攻撃を、楯無はセシリアを中心に爆発的な速度で半月を描くように回避した。

「そんな、今のは瞬時加速並みの速度——がつ」

背後を取られたセシリアはそのままアリーナの壁まで連れていかれた。

壁に激突させられたまま楯無に押さえ付けられ、身動きが取れなくなる。

「これが俺の翼だ。お前の円舞曲を踊れなくて悪いな」

「今のは、どうやって……!?」

「左側と右側のスラストの出力を非対称に瞬時加速をした。ボートのオールと一緒に。左右の推進力が違えば、必ず真っ直ぐには進まない」

「しかし、何故あなたが瞬時加速を……!」

「俺はこのままお前の頭部を蹴り続ける。ISのシールドエネルギーが無くなるまでな。……降参してくれ。お前のISを傷付けたくない」

勝利一歩手前の男の台詞ではない楯無の言葉に、セシリアは目を見開いた。

ハイパーセンサーは三百六十度全てを見渡せる。それが映し出す楯無の穏やかな表情からは、セシリアに「打鉄」を馬鹿にされた怒りなど微塵も感じられなかった。

「あなた……」

「もう十分、お前に『打鉄』の可能性を見せられた。頼む」

「……私の、負けですわ」

その表情に押され、セシリアは降参を宣言する。

『オルコットさんの降参により、雪月君の勝利です！』

アナウンスを聞いて拘束を解いた楯無は、そつとセシリアへ手を差し伸べる。

「射撃、見事だったぜ。俺も見習いたいよ」

「……何時か、必ずあなたを撃ち抜きますわ」

差し伸べた手を取りながら告げるセシリアの言葉に、楯無は「楽しみにしてる」と小さく笑った。

6. 彼の経歴

オルコットとの試合に勝利を収めてピットへと戻ろうとする。

一夏のISの準備も流石に終わっている頃だろう。

次に戦うのが俺であれオルコットであれ、多少の消耗があるシールドエネルギーと弾薬を補給しなければいけない。

『次の試合は織斑君とオルコットさんです。オルコットさんと雪月君は一度ピットに戻ってきてください。続いて織斑君は発進準備を。オルコットさんの補給の間、ISの動作確認を行います』

会場のアナウンスを聞いて、俺とオルコットは顔を見合わせる。

「だ、そうだけ。全敗とか止めてくれよ代表候補生」

「問題ありませんわ。織斑さんには私の完璧な円舞曲を躍らせてみますので」

初心者相手にそれは止めてやれ。

初陣で蜂の巣にされて完封とかIS乗りたくなくなるわ。

「それじゃ、健闘を祈る」

「そちらこそ」

言い合って別れ、お互い発進したピットのゲートへ向かう。

俺が居たピットには一夏が居たが、どうやらもう発進したようだ。

灰色の装甲はその名前の通り白に染まっていた。あれが一夏に合わせて最適化された「白式」の姿か。

俺の反応に気付いた一夏がこちらを見る。その目は新しい玩具を買ってもらった子供の様にきらきらと輝いている。

「見てくれよ、これが俺のISだ！」

「よかったな。大切に乘れよ」

短く答えて、その場から去ろうとすると「あ、そうだ」と一夏の呑気な声。

「ピットに戻ったら補給の為にISを山田先生に預けて、管制室まで来いって千冬姉が言ってたぜ」

「……分かった」

一夏と別れてピットへ戻るのを再開する。

(あ、お前も唯一の姉さんに挨拶してきたかったか?)

(いいえ。姉は言うなれば世界中の妹達への偏見を固めてしまった張本人。恨み言を言いはすれど、挨拶をする気など毛頭ありません)

(……本当、俺とお前って相性いいよ)

何がとは言わないけれど。操縦者が操縦者ならISもISか。

そうこうしている内にピットへ着いた。ISを解除して地面に着地すると、一夏の言葉通りに待ってくれていた山田先生へ「打鉄」の待機形態である指輪を渡した。

「打鉄」をお願いします」

「はい、分かりました。あ……ISでも、男の人から指輪を渡されるなんて緊張しますね……!」

何興奮してんのこの人。彼氏さえ居ないんじゃないか?!

俺達とそう歳は変わらない筈だから、結婚に目を向けるのはまだ早いのではないだろうか。

トリップしている山田先生を放っておいて、俺は先程から視線をくれている簪の方へ向かった。

「打鉄」の可能性、少しは伝わったか?」

「うん……凄かった。何時か私も、あんな風に飛びたいって思った」

簪の眩しい笑顔が俺にとって何よりの祝福だった。

「やっぱり簪は笑ってる方がいいよ」

「……だから、その。そういうのは、二人きりの時で」

(二人きりなら幾ら言ってもいいのか)

(乙女心は複雑であり繊細です。これ以上刺激すれば、簪さんがパンクするでしょう)

簪の事なら幾らでも褒める事が出来るんだが、TPOを弁えなければならぬのは難しい所だ。

あ、TPOで思い出した。千冬さんに管制室まで呼ばれているんだ。

……でも、まだ簪と話す事も沢山ある。俺が「打鉄」で飛ぶのは、簪の「打鉄式式」の開発に役立ってる為でもあるんだから。

千冬さん、一夏の試合が終わってからじゃ駄目なんだろうか。

「俺、千冬さんに管制室に呼ばれてるんだ。それが終わってからまた話そう。……そうだ、こいつを預けとく」

「……これ」

俺が渡したのは「黒雷」の待機形態である黒のチョーカーだ。

「俺と相棒は左目のナノマシンで繋がってる。見聞きした事も共有してるから、これからの千冬さんとの会話も聞けるぜ」

これからの千冬さんとの会話は、もしかしたら面倒な話になるかもしれない。

簪は俺の護衛と監視を兼ねてルームメイトになった。色々と秘密を黙っておいてもらっている関係上、話を聞いておいてもらった方がいいだろう。

「いいの？」

「簪に聞かれて困る事はないから。寧ろ全部知っておいてくれ」

「う、うん……」

顔を赤くして俯いてしまった簪。それでも小さく告げてくれた「行ってらっしゃい」に、「行ってきます」と答える。

簪と別れて千冬さんが管制室に向かっていると、相棒から頭の中に直接語り掛けられる。

（マスター。私が傍に居なくて大丈夫ですか？ 今は「打鉄」も居ませんので、もし襲われでもしたら対処できません）

（傍に世界最強が居るから大丈夫だよ）
（もし織斑千冬に襲われたら？）

（そうだったら「打鉄」を貰う前にとくに襲われてるだろ。それよ、簪にちゃんと話が聞こえるようになってるか？）

（問題ありません。彼女の端末とリンクして、電話の様に耳元に当ててもらっています）

相棒と話している内に、管制室に辿り着いた。

中には当然千冬さんが待っていた。深緑の長髪の後ろ姿は見間違えようがない。

俺が声を掛ける前に、千冬さんは振り向いた。

「一夏の試合を見なくていいんですか？」

「その前にやらなければならぬ事があるからな」

その瞳は俺を見ていた。——いや、その奥にある、俺の何時かを見ていたのだろう。

「私はな、楯無。お前が初めて見た時から不審に思っていた」

「小学五年生を不審に思うって……俺、千冬さんにちゃんと挨拶もして素性もちゃんと明かしたんだけどな」

名前で呼ばれて、これは千冬さんが教師としてではなく千冬さん個人として話しているのを察した。

千冬さんと初めて出会ったのは、俺が一夏が通っている小学校へ転校した小学五年生の頃。

一夏の家に遊びに行った時、千冬さんが偶々帰宅していたのがきっかけだ。

「お前の素性。施設で妹と暮らしていたが、自分は『包村（つつむら）兔』という女性に引き取られた。そうだったな」

「ああ。兔さんは俺の保護者だ。IS学園に提出した書類にも書いてあったよな」

「その名前は知っている。束が行方を晦ました後、よく使っていた偽名だからな」

成程な。つまり、俺は束姉との繋がりを疑われているわけか。

当然だろう。ISの開発者である束姉の行方は全世界が追っている。

「偶々だ。ちゃんと兔さんの戸籍も存在してる。篠ノ之束博士とは無関係だ」

「ここには音声ログが残るような機材は設置されていない。私相手に誤魔化しきれると思うなよ」

千冬さんの眼光は俺を捉え続け、目と話を逸らす事を許さない。正直に話せという事か。

……まあ、俺が隠さなくても束姉に聞かれたら包み隠さず話されてしまうだろう。

「……ああ、そうだよ。俺は束姉に拾われた。一夏に接近したのは束姉の命令だ。一夏の監視をする事で何をしたかったのかは知らない

けどな」

「成程。不審であつても邪気を感じなかつたのはそのせいか」

邪気とか言われても困る。邪も何も、俺は恩人の命令に従つていただけだ。

「言つとくけど、俺はもう束姉とは無関係だ。IS学園に入る前には、もう書類上だけの繋がりになつてしまつた。今どこに居るのかも知らないし、俺からの連絡に答えてくれるとも思えない」

と言うか、千冬さんからの連絡なら無条件で通じる筈だ。

束姉の唯一の友人なのだから。逃亡時代も何度か連絡があつたのを憶えている。

俺の正体についてはもう終わりらしい。千冬さんは腕を組んで教師として話を仕切り直した。

「雪月。先程の試合、見事だつたな」

「ありがとうございます。千冬さんに褒められるなんて、一夏に聞かれたら何て言われるか」

『千冬さん』呼びに反応して投げられた出席簿をキャッチする。

一夏のシスコンっぷりは中々の物だ。

あいつの家に遊びに行つた時、第二回モンドグロッソ準決勝の試合映像を何度見せられた事か。

「性能で劣る『打鉄』での『ブルーIIティアーズ』の打倒。攻撃を防ぐのではなく受け流す目的でのシールドの使用。初見のオールレンジ誘導兵器を捌く対応力。——そして何より、最後に見せた直線軌道を描かない瞬時加速。その全てが、ISを貰つて二週間も経たない初心者が行える事ではない」

「俺の経歴を知れば、昔からISを触つてたのは想像出来ると思うんですけど」

遠回しに何が言いたいのか、と嫌そうに睨めば、「悪かつたな」と千冬さんはからかうように笑う。

「初心者でなくとも描ける軌道ではない。才能を持った者が努力をして辿り着ける領域——国家代表レベルでないとおかしいのさ」

「ブリュンヒルデにそう言われるなんて、光栄な限りですけど。俺が

国家代表レベルだと何かあるんですか？」

国家代表レベルでなくとも、一年生で代表候補生ならば何人か居る。

俺はこれ以上何かをするつもりはないし、さっきの試合だってセシリアの猛攻を凌いだ故の勝利だ。

入学したばかりの素人達には試合の内容を正確に測る事は出来ないだろうし、別にそう目立つような事でもないだろうに。

「私にはな、もう一度だけ戦い相手が居る」

「あのブリュンヒルデが戦いたがる相手なんて。アリーシャージュセスタッフですか？」

一夏が誘拐されてしまった事により、千冬さんは第二回モンドグロツソの決勝を棄権して優勝を逃している。

その対戦相手はイタリア代表のアリーシャージュセスタッフ。あの高軌道とは俺も一度併走してみたい。

てつきりそうだと思っていたのだが、千冬さんはそれを否定する。「優勝を逃した事は残念だが、たった一人の弟の命に値する程ではない。……その前だ」

「その前？」

「——準決勝の相手」

そう言われて、俺は思わず息を呑んだ。

千冬さんはあの日の興奮を思い出すように告げる。

「国籍不明。篠ノ之束の推薦によりIS委員会から強引に捻じ込まれた一人の選手。使用ISは第一世代型ISの『黒鉄』。その圧倒的な高機動戦により世界から注目され、包村帯（つつむら おび）という名前と、身体の随所に巻かれた包帯から付けられた異名は『包帯の乙女』。私が知っている情報はこれ位だ」

「俺もそれぐらいしか知らないですね。会えるものなら会ってみたい」

「お前なら鏡を見れば会えるだろう——私も今、再会している事だしな」

話の流れからしてそう言ってくるのはもう分かっていた。

いくら「打鉄」の可能性を見せる為でも、オルコット戦は少し張り切り過ぎてたらしい。

「……別に、隠すつもりもなかったからいいんですけどね」

「最後に見せた瞬間加速。あれが決め手になった。何しろ私も、あれで一度背後を取られている」

「そう言えばそうだった。ブリュンヒルデの目は誤魔化せないか」

「奴は左右のカメラアイがお前の瞳と同じ配色のISのバイザーをしていた。今思い返せば、包帯も出始めた喉仏を隠す為。身長や体型は男としては華奢なお前なら、束のISスーツで幾らでも誤魔化せる。声以外の説明は難しくないだろう」

ここまで読まれるなんて、世界最強は伊達ではなかった。……いや、東姉の友人やつてるのも大きいのだろう。

もうここまで来たら別に隠しておく必要もない。声の説明もしてやろう。

「相棒、頼む」

俺の声に応えるように、管制室のモニターの一つが突然起動した。相棒がハッキングしたのだ。

いつもは空中に投影されている『SOUND ONLY』の文字が表示され、管制室に声が響く。

『正式に挨拶をするのは初めてになります。織斑千冬』

「この声は……」

『私はマスターがあなたと戦った当時の乗機、『黒鉄』のコアです。もつとも、今は『黒雷』のコアですが』

「ISのコア、だと……!?!」

信じられなくても無理はない。俺も喋るコアなんて相棒以外知らないからな。

だが、考えてみればおかしい話ではない。ISのコアにはそれぞれ意思がある。話そうと思えば話せるコアだって居てもおかしくないだろう。

『第二回モンドグロツソの時、私はマスターの代わりに包村帯として喋っていました。これでご理解いただけただけでしょうか』

千冬さんは流石に驚いていたようだが、どこか納得したように頷いていた。

用件はこれで終わりだ、と言わんばかりに相棒はさっさと通信を切断してしまった。

「どうやら『白騎士』が嫌いなだけあって、千冬さんも嫌いらしい。そういえば、初めて出会った時も俺と東姉以外とは話そうともしなかったな。」

「話はこれで終わりですか？ 別に俺は何か悪さをしようとしてこの学園に在籍してるわけじゃない。出来れば普通に学生をしたいんですけど」

「……ああ。だが、最後に一つだけ聞かせろ」

「どうぞ、ご自由に」

「何故、あの準決勝を途中で降参して打ち切った？ 私の背後を取ったあの瞬間、紛れもなく直撃を与えられるチャンスだった筈だ」

何だ、そんな事か。別に大した理由じゃない。

俺はあの時を思い出す。自分の実力を確かめる為にモンドグロツソに出場して、準決勝まで勝ち上がって、気付いた事。

俺は出席簿を千冬さんへ投げながら告げる。

「俺と織斑千冬が求めていた空が違った。唯それだけの理由だよ」

俺は強くありたかったわけじゃない。だから降参して、東姉の名誉の為に三位決定戦を勝って世界三位の肩書だけ貰っておいた。

踵を返して管制室から出ていく。簪は驚いているかもしれない。別にばれて困るような事じゃなかったからいいけど。

そうしてアリーナのピットに戻っている途中。廊下に一つの人影が見えた。

7. 彼女の登場

ピットに戻る廊下の途中で待っていた女性。

その水色の髪には見覚えがある。

更識簪。俺が「黒雷」を預けて、千冬さんとの会話をピットで聞いていた幼馴染だ。

何故彼女がピットではなく廊下で待っていたのだろうか。

「簪？ ピットで待ってるんじゃない？」

「楯無君」

——その声に、呼吸が止まった。簪じゃない。

いや、だって。そもそもこんな心の準備もしてない内に出会うような人じゃない。

俺が救いたかった人。何時か必ず本当の名前で笑える空に連れていくと誓った相手。

……そう、彼女は。

「かた——わっぷ」

「ちよちよちよ、ストップストープ！」

名前を呼ぼうとしたら物凄い勢いで距離を詰められて壁に押し付けられ、口を手で塞がれた。

「そうね、お姉さんが悪かったわ。いきなり登場して驚いちゃったわよね。でもその名前じゃ呼んじゃ駄目なの」

口を押さえられたまま、水色の髪の女性——更識刀奈は慌てたように早口でそう言った。

妹の簪とは逆に天真爛漫なのは相変わらずなようだ。急にやってくるのも変わらないらしい。

「むっむっ」

「あ、ごめんなさい。苦しかったわよね」

確かに嬉しいが苦しかった。

手をどかしてもらって、漸く話せるようになる。

「それで、かた——」

「だからストップ！」

再び発言を妨げられてしまった。名前を呼ぶ事のどこがいけないのか。

不満げに綺麗な赤い瞳を見つめていると、「しーっ」と人差し指を俺の口に当ててきた。

「お姉さんの名前は言っちゃ駄目。呼ぶなら『楯無』って呼んでね?」
「絶対やだ。楯無なんて名前俺だけで十分だし、俺が呼びたいのはそんな名前じゃない」

「素直に言う事聞いてくれないと、お姉さん困っちゃうなー?」

それは俺も望む所ではない。刀奈が困る姿はとても可愛いのだろうが、わざとするような事でもないだろう。嫌われたくないし。

ぐりぐりと口に押し付けられてくる刀奈の人差し指を手に取りながら、俺は暫し考える。

「……じゃあ、『更識先輩』で。とにかく『楯無』は絶対に呼ばない」
これが精一杯の妥協案だ。

とにかく『楯無』呼びだけは絶対にしない。

それをするぐらいなら速攻で目的を果たした方がましだ。

「そう。……いじっぱり」

いじっぱりはそっちの方だ。家の決まりだか何だか知らないが、自分の名前を捨てるなんて。

俺と過ごしていた少女は更識刀奈であって、更識楯無なんて人は知らない。

——そして、刀奈もそうなのだろう。

「……別れてから、随分と壮絶な人生を送ってきたみたいね」

更識刀奈と過ごしていた雪月楯無は唯の少年であって、篠ノ之束に拾われた世界第三位の男性操縦者などではなかった。

お互いに至近距離で見つめ合って、お互いの今を確認する。

「聞いてたんだ。千冬さんとの会話」

「偶々よ。あなたの試合を見てて、ピットで話そうとしたら管制室に向かうあなたを見つけたから跡を付けてたの」

「面白そうだから?」

「勿論!」

人懐っこい笑みでそう告げられれば、思わず見惚れてしまう。

昔からそうだ。彼女の笑みは理屈とか抜きで、俺の事を魅了する。

「……大きくなったね」

「楯無君こそ。やっぱり男の子って凄いわ」

簪と同じような事を言っている。やっぱり姉妹なんだな。

さて、男の子とは言ってくれるが。刀奈も女の子なわけです。

これだけの至近距離で壁を背に迫られていると、色々と柔らかくてです。

刀奈の女性的な感触にどきまぎしているのを覚られぬように、俺は冷静に語り掛ける。

「で、話って？ ピットに来ようとしてたって事は何か話があったんじゃないの？」

「あ、そうだった。お願いがあるんだけど……お姉さんのISの練習相手になってくれない？」

「いよ」

即答すれば、刀奈は「即答!？」と驚いていた。

刀奈からの提案を俺が拒否するわけがない。寧ろ内容も聞かずに了承したっていい。

「更識先輩のレベルだともう練習相手が居ないんでしょ？ 俺で良ければ幾らでも」

「どうやら凶星だったらしく、「ありがとう」と彼女は笑った。

大変だな、国家代表も。強くある事を強いられ続け、その為の努力も強いられる。

きつと俺にはそういう事は向いてない。そもそもISをそういう目で見ていない。

「あと、もう一つお願いがあるんだけど……あなた、簪ちゃんと同室でしよ？」

「そうだけど」

肯定すると、刀奈にしては珍しく煮えきらない態度だった。

暫くして決心が付いたのか、両手を胸の前に合わせて勢いのままに言ってくる。

「お願い！ 簪ちゃんの事を報告してほしいの！」

「別にいいけど。……わざわざ俺から聞かなくても、自分で聞けばいいじゃん」

姉妹なんだから直接聞けばいい。

そう思ったのだが、簪が刀奈の事を話した時と、今の刀奈の困惑した表情が現実を教えてくれた。

「簪ちゃんから聞いてないの？」

「何にも。何かあったのは察してるけど、詳しい事は何も知らない」

「そう。……なら、教えてあげる。私と簪ちゃんの間は何があったか」
そうして話してくれた、更識に翻弄された姉妹の事情。

常に比較されて続けてきた、優秀な姉と無能な妹。それによって簪は刀奈へ苦手意識を持つてしまった事。

そして重なった刀奈の十七代目『楯無』への就任。

周囲の期待は刀奈へ募り続け、姉妹の関係は今では会話も出来ない程冷え込んでしまっている。

だからか。簪が『打鉄式』を一人で完成させる事に固執していたのは。

「とりあえず、簪を無能とか言った奴等を片っ端から吊し上げたいんだけど。簪の凄い所なんて幾らでもあるし」

俺の憤慨に、刀奈は両腕を組んで頷いた。

「そうそう。専用機を一人で組み上げようとするなんて、並大抵の覚悟じゃできないわ。私だって既に設計してあるデータを基に、色んな人の力を借りたのよ。それぐらい私の大切な簪ちゃんは凄いなだから。ずっと簪ちゃんを気に掛けてた私が言うんだから間違いないわ」
興奮気味に妹の事を話す刀奈の様子は、別れる前と変わらない。

そうして俺と刀奈の簪トークに熱が入り、簪のいい所を上げる大会が始まった。

暫くそうして話していたが、アリーナ全域に響き渡るアナウンスの声に現実に戻される。

『雪月君、試合開始の時間です。至急ピットに戻ってください』

「あ、そろそろ行かないと」

本当はあと五時間は刀奈と話していたかったのだが、時間が来てしまつてはしょうがない。

アリーナの使用時間は限られていると千冬さんが言っていた。戻らないとまた出席簿を投げられる。

「あら、じゃあ私は今日でこれで。訓練の連絡はまた入れるから」「うん。行つてきます」

急いでピットに戻る為に走り出す。走り出した直後に、相棒から連絡があつた。

(マスター。ピットに戻つても私は居ません)

(何でだ、相棒)

走りながら聞く俺に、淡々と相棒は続ける。

(簪さんが部屋に戻つてしまったからです)

(それこそ何でだ……つて、あ)

平坦な相棒の声が肯定する。

(織斑千冬との会話から、刀奈さんとの会話まで、全て簪さんに筒抜けです)



「ただいまー」

一夏との試合も終わり、シャワーを浴びた俺は全速力で寮の自室へ戻つた。

オルコットが何か話したそうにしてたけど、そんな事は完全に後回しで問題ない。

自室の扉を開け放てば、部屋は相変わらず暗かった。今日に至つては投影モニターの光もない。

唯、簪のベッドが膨らんでいた。布団を被つて引き籠っているのが丸分かりある。

『お帰りなさいませ、マスター』

簪の布団から投影されたモニターから相棒の声が聞こえた。

“黒雷”は未だに簪が持っているらしい。

「……お帰り、なさい」

布団を被っている簪も言ってくれた。

しかし布団から出てきてくれない。

「か、簪さん？ 俺と顔を見て話をしないか？」

「……嫌」

「ほ……ほら、今日は『打鉄』のデータも取れたんだから、チェックしてくれよ」

一夏との試合で第二回モンドグロツソ準決勝ごっこをしてたら千冬さんに怒られたが。

一夏がやりたそうな顔をしてたのがいけない。俺は悪くない。

「あのー……簪さん？」

「お姉ちゃんが、私の事あんな風に思ってたなんて……知らなかった」
ぼそりと聞こえたその言葉で、今簪がどんな顔をしているのか理解した。

「……簪。手を出してくれ」

返事は無く、唯右手だけが布団から出てくる。

細い、華奢な女の子の手。それを守りたいと思う姉が居た事を、妹は知った。

「そっちのベッドに座るからな」

告げて、簪のベッドに座る。そして彼女の右手に俺に右手を重ねると、控えめに握られた。

彼女の体温はとても高かった。

「……色々な事が一気に来たな」

「本当に……もう。お姉ちゃんも……楯無も、人の事好き勝手言い過ぎ」

「事実だし。簪は凄い。それに、二人きりなら言っていいいんだよな？」

控えめに握られた右手が強く握られた。抗議代わりだろうか。

「『打鉄式』の開発は続けるんだろ？」

「……うん。お姉ちゃんが私の事どう思っていたのかと、それは別問題だから」

刀奈が優秀なのは変わらない。それは揺るぎない事実だ。

だからこそ、簪が刀奈に追いつきたいと思っっているのも変わらな
い。

それはそれでいいと思う。その先にある何かが、きつと簪にとって
いい財産になるから。

「俺も頑張らないとな。『打鉄』の稼働データ取りだったり、細かい
データの精査だったり、出来る事は幾らでもある」

「楯無はもう……十分に頑張ってると思う……。モンドグロツソに出
場なんて……この学園の誰よりも凄い」

「別に、あれは俺の実力じゃない。束姉のコネだよ」

俺の実力が国家代表レベルなのかどうかは置いておいて、俺自体は
そもそもモンドグロツソに出場する資格は持っていなかった。

国家代表になる事は、唯の実力を示す事だけじゃない。政府からの
信頼とか、そういった事を含めての国家代表なんだ。

だから変わらず、この学園で一番凄いのは刀奈なんだと思う。

「……追いつこうぜ、簪が追い掛ける背中に」

「うん……私はお姉ちゃんに追いついて、その先にある道を進みたい
から」

そんな事を聞けば、俺の方が我慢出来なくなる。

「……まあ、だからさ。泣いてるんだったら胸貸すよ」

左手で布団を捲ると、予想通り目を赤く泣き腫らした簪が居た。

左手でしっかりと『黒雷』を握っていてくれて安心した。

俺と直接目が合って、気が緩んでしまったのだろうか。泣き腫らし
た瞳には再び涙が溜まり、布団から飛び出して俺に抱き着いてきた。

「知らなかった……知らなかったの……。お姉ちゃんが私の事大切
にしてくれていたなんて、知らなかったなら……！ 私はずっと、一
人で抱え込んで、心を閉ざして……知ろうともしないで……馬鹿みた
い……」

「ああ。でも、そうやって一人で頑張ってた時間も無駄じゃない。簪
は強いんだ。皆が皆、一人で頑張れるわけじゃないよ」

きつと、その強さは簪の支えになる。

そう伝わればいいと、背中を優しく叩いて宥める。

簪の優しい匂いを感じた。俺から抱きしめてやれないのが惜しい。
「私は……飛びたい。楯無みたいにお姉ちゃんみたいに。自由に、高く遠くへ」

「必ず完成させよう。『打鉄式式』を。簪の空を、簪が自由に飛べるように」

『微力ながら私もお手伝いします。簪さんの翼、最高の物にしましょう』

簪は涙を拭って、ゆっくりと頷いた。

繋がっている右手は力強く握られている。

きつと彼女はもう迷わない。弱い自分との別れを告げ、誰かの想いを糧に頑張っていく。

そんな簪が誰よりも誇らしく、彼女との約束を守りたい。

「そうだ……お姉ちゃんは、私がお姉ちゃんが言ってた事を聞いてたの、知らないんだよね？」

「きつとな」

「なら……お姉ちゃんには内緒にしてて。『打鉄式式』が完成したら、私から話す」

「分かった。簪は『打鉄式式』の開発を頑張ってる事だけ、刀奈には伝えておくよ」

こうして簪は姉の想いを知り、姉への劣等感からではなく、自らの翼を求めて『打鉄式式』の開発を再出発した。

——そして後日。

「私よー！」

「いいや、俺だね」

俺と刀奈はどっちが簪を誇らしく思ってるかで三日三晩争った。

8. 彼らのその後

時刻は朝六時半。

「———ここですわ！」

上方にある「ブルーIIティアーズ」から放たれたレーザーが、アリーナの地面を抉る。

瞬時加速で遙か上空に居るオルコットへ向けて上昇し、迎撃で放たれたミサイルをアサルトライフルで迎撃。

その爆風を煙幕代わりにオルコットの後方へ回り込み、ハイパーセンサーによって状況を理解したオルコットに最接近し、背中にタツチして一言。

「捕まえた。今日の朝練はこれで終了」

「……参りましたわ」

お互いピットに戻ってISを解除する。

ブルーのISスーツ姿になったオルコットは髪を掻き上げながら溜息を吐きながら言ってくる。

「結局一度も直撃させる事は出来ませんでしたわ……」

「そりゃそうだろう。お前の攻略法は昨日から変わってないんだから」

ライフルは避ける。「ブルーIIティアーズ」は使用中オルコット本人が動けないから牽制攻撃で解除させる。

これを繰り返しながら距離を詰めていけば終了。正確過ぎる射撃の腕も考え物だ。

何故俺がオルコットと朝練をする事になったのかと言えば、それは今日の朝五時にまで遡る。

突然オルコットが部屋を訪ねてきて、朝練に誘われた。簪の為に「打鉄」の稼働データが欲しい俺は了承。終わり。

お互い更衣室へ向かいながら歩き始める。

「……しかしまあ。朝から叩き起こされて、朝練の相手をする事になるとは思わなかったぜ」

「ですから、面倒でしたらお断りしていいと何度も申しているではあ

りませんか」

「ぼやくオルコットを尻目に欠伸をする。朝練の内容は実戦形式。オルコットが俺から直撃を取るか、俺がオルコットに触れるかで訓練終了。要するに鬼ごっこだ。」

「これを五回程繰り返し返した辺りで今の時間になった。そろそろ簪が起きている頃なので、一度部屋に戻って簪と朝食を食べに食堂へ向かう。」

「て言うか、一夏の奴は誘わなかったのか？ あいつこそ朝練が必要だろ」

「勿論誘いはしましたけれど……その、篠ノ之さんが物凄い形相でこちらを睨んできましたので」

「ああ、成程」

「とりあえず、昨日までで一夏と篠ノ之の関係性は分かった。」

「一夏はISが来るまでずっと剣道の稽古をしていたそうだし、つまり篠ノ之は一夏の事が好きなのだろう。」

「一夏のISは完全近距離型だ。近付かないと話にならないし、そもそも本気で攻撃するにもシールドエネルギーを著しく消費する。」

「『零落白夜』。モンドグロツソで世界最強と相對した時、一度だけ見た。」

「問答無用で相手を倒す為のあれを見てしまったから、俺は棄権したんだけど。」

「更衣室まで辿り着いた。」

「んじゃ、学校で」

「あら、よろしければ朝食を一緒にしません事？」

「昼飯なら考えてもいい。朝食は簪と食べる」

「残念ですわ」

「本当にそう思っているのか分からないオルコットは微笑んで、女子更衣室へと消えていった。」

「俺もシャワー浴びてさっさと着替えよう。遅刻すると出席簿が飛んでくる。」

「そういや、刀奈との練習はどうなるんだろ。まああの人なら個人間」

秘匿通信で連絡取れるし大丈夫か。

シャワーを浴びてさっさと着替えて、寮の自室へと戻る。

ドアを開けると、簪が制服に着替えている姿が見え――。

「悪いー!」

とりあえず土下座した。なのでほんの一瞬ぐらいしか見ていない。

水色のパジャマをベッドの上に脱ぎ散らかし、ストッキングを上げている簪とか一瞬しか見ていない。

ストッキングの下に見えた布とか絶対見てない。色とか分かりませんでした。信じてください。

(……相棒、IS学園で首を吊るのに最適な場所を検索してくれ)

(マスター。それは構いませんが、少しは簪さんと話したらどうでしょう)

「……楯無。朝練終わったの?」

簪の気配を近くに感じる。着替え終わって俺を殺そうとでもしてるんだろうか。

「ああ、構わない。どうぞ殺してください。簪に殺されるなら悪くはない」

「……馬鹿な事、言っていないで」

土下座したまんまの俺の頭に何かが乗る。……この熱を持った感触は、よく知っている。

簪が俺の頭を撫でていた。いや、でも何で?

「髪、濡れてる……。朝練の後、シャワー浴びて直ぐ来たの?」

「あ、ああ。簪との朝飯に遅れたら悪いと思って」

そのおかげで俺は処刑されるのだが、簪は何故かおかしそうに小さく笑う。

「別に、置いて行ったりしないから。まだ時間はあるから、まずは髪を乾かそう?」

簪は俺の脇に手を入れ俺を立ち上がらせ、ベッドに座らせた。

続いて自分のベッドの下の収納スペースからドライヤーを出してコンセントへ繋げた。

ドライヤーを吐き出し始めた温風で俺の髪を乾かしながら、簪は鼻

歌まで歌っていた。

「……機嫌良さそうだな」

「楯無の髪を乾かすのは、私の日課だから。朝から出来て、嬉しい」
（俺の髪を乾かす事が嬉しいって、乙女心って傍から見てる以上に複雑なんだな）

（そうでしょうか？ もしマスターが簪さんの髪の毛を乾かす事になったら、と考えてください）

相棒にそう言われ、俺は一瞬考える。

俺が簪の髪を……髪を……。

（やっべえ超嬉しい！ 刀奈に自慢しまくるわ！）

乙女心簡単だった。相棒の例え話分かり易過ぎる。

そして乙女心と言え、俺が先程しでかしてしまった事がある。

「……怒ってないのか？」

「……いい流れだったのに、そうやって蒸し返す」

どうやら気付いていなかった、というわけではないらしい。

だが、だったら何故。そう思った疑問は、簪から答えがあった。

「もう……殆ど着替え終わっていたから。下着まで見られたのは、恥ずかしいけど」

「だよな。本当にすまん」

簪に髪を乾かしてもらいながら謝罪する。

丁度髪を乾かし終わった簪は、手櫛で俺の髪を梳かしながら言ってきた。

「いい。楯無になら……見られても嫌じゃ、ないから。それに……」

「それに？」

「私も、楯無の着替え……偶に、見てる。だから、おあいこ」

俺の場合は別に簪に見られても困る事はないから仕切りもなしに着替えているだけなのだが、それでも全然おあいこな気はしない。

（マスター。これも逆のパターンをお考えください）

（成程——いや駄目だろ相棒。逆は駄目だから今こうなってるんだろ）

乙女心は複雑で繊細だ。変わらず機嫌良さそうな簪に手櫛をして

もらいながら、改めて認識する。

……まあ、それよりも。あの夜から一夜明けた今、簪が強かに自分の事を話してくれるようになって俺は嬉しかった。

——あの決闘から一夜明けて、俺の周りには少しばかりの変化が訪れていた。



『織斑君！ クラス代表就任おめでとう！』

その言葉を皮切りに、一斉にクラツカーが乱射された。

空中を舞い踊る紙テープ。片付け面倒くさそうだなと思う。

当の主役である一夏は、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれた横断幕を見ながら納得してなさそうに口を尖らせる。

「本当に俺でいいのかよ」

一組のクラス代表は一夏に決まった。それは朝のホームルームで告げられた事だ。

それを祝う為に、夕食後の食堂を貸しきってパーティを開いていた。

『主役』とでかでかと書かれた襷をしてお誕生日席に座らされていた一夏は、変わらず口を尖らせていた。

俺とオルコットはそれを少し離れた所から見ている。あ、篠ノ之は一夏の左隣をキープしていた。固定ポジションと言うべき態度で座っていて、クラスの皆は恐ろしくて右隣りには誰も座っていない。

「そもそも、俺は全敗したんだぞ。そんな奴代表にしていいのかよ」

「あれ、俺に勝ったじゃん」

「それお前が降参しただけじゃん！ シールドエネルギーの総量じゃ全然勝ってたし、あのまま続けていたら楯無が勝ってた！」

だってモンドグロッソ準決勝ごっこはそうしないと終わらない。

織斑千冬役を選んだ時点で一夏の勝利は確定していたのだ。

「ちなみに私には袋叩きにされましたわね」

「そんな事言われなくても自分が一番分かってるよ！ あと一歩だっ

たのにい！」

「どうやら俺が千冬さんや刀奈と話している間に、一夏はとんでもない虐待を受けていたらしい。」

「まあ、あんな初心者殺しの武装を相手に、あと一步まで追い詰める底力があれば大丈夫だろ。」

「それでも事実上全敗を喫した一夏は自分が代表になるのは納得がいかないようだ。」

「セシリアか楯無がやればいいだろ」

「俺は千冬さんから代表就任禁止令が出ている。『棄権するような奴に任せられるか』らしい」

「私は一夏さんが更なる経験を積める機会が少しでも増えればと、辞退させていただきましたわ」

俺とオルコットが二人して断ると、一夏はがっくりと項垂れる。

「別にやりたくないわけではないだろうが、自分の実力に自信がないのだろう。」

「安心しろ一夏。明日から私がお前のISSのコーチをしてやろう」

ふん、と胸を張って篠ノ之がしれつと約束を取り付けていた。

それはそれは。訓練機が借りられるといいな。

ジュースを飲みながらその様子を観察していると、同じようにジュースを持ったオルコットがひそひそとこちらへ話し掛けてきた。

「朝の私への態度といい、篠ノ之さんはもしかして一夏さんの事が……？」

「だろうな。どうしたオルコット。お前も一夏狙いか。頑張れよ」

「相変わらずの競争率の一夏だが、残念ながら当人が気付いた事は一回もない。」

「そんなレースにオルコットが参戦したのかと思ったが、どうやら違いうらしい。じと目で俺を見ながら言ってくる。」

「確かに一夏さんの向上心には共感いたしますが、私の標的は楯無さん、あなたでしてよ？」

「何？俺の事好きなの？」

「そうではなく！私が何時か射貫くと決めたのはあなたという事で

して！ いや分かりませんが、未来は分かりませんが！」

ああ、そういう事ね。流石にその意味を伝えるには言葉足りな過ぎやしませんかね。

それである朝練だったわけか。確かに標的を直接相手にした方が、得られる経験値は多いだろう。

一夏の向上心とオルコットは言ったが、オルコットの向上心も中々の物だろう。流石代表候補生と言った所か。

ま、あの朝練には一夏を巻き込むのが最適だろう。一夏の今後の為にも、回避能力と接近能力を鍛えるのが一番手っ取り早い。

「それはそうと……」

「何？ まだ何かあんの？」

「あなたＩＳが絡まないと本当に適当ですわね！ 楯無さんもいい加減、私を名前で呼びなさいって事ですわ！」

「名前え……？」

何を言い出すのかと思えば、そんな事か。

別にオルコット呼びのままでも構わないんだが、多少オルコットの向上心には好感を抱いてもいる。

オルコットの性格上、呼ぶまで永遠に噛み付いてくる事だろう。たとえ簪や刀奈と一緒に居ようと、居ようと……。

「何か無性に腹立ってきたな。潰すか」

「何をですの!？」

まあ、冗談はこれぐらいにしておこう。

別に名前を呼ぶくらい何でもない。俺は手を差し出しながら告げる。

「今まで色々あったけど——これから『打鉄』の宣伝よろしくな、セシリア広告宣伝隊長」

「忘れてましたわ……」

クラスメイトとして握手を交わしたオルコット——セシリアは、一夏と同じようにがっくりと項垂れていたのだった。

セシリアががっくりと項垂れたおかげで拓けた視界に、クラスメイトとは違う眼鏡を掛けた生徒の姿が見えた。

「新聞部でーす！」とか言ってる辺り面倒な事になりそうだ。

「悪いセシリア。俺、部屋に戻るわ。猛烈に具合悪い」

「それタイミング的に私と握手したせいですわよね——あ、ちよ、ちよっと！」

きゃんきゃん騒いでいるセシリアを無視して、しれっと食堂から抜け出して全力で部屋に戻る。

部屋に戻れば珍しく部屋の明かりが点いていた。

「ただいま」

「うん……お帰り」

部屋のベッドの上から声が聞こえてくる。簪はまだ起きているみたいだ。

部屋の中に入って簪の方を見れば、自分の端末で何か映像を見ているようだった。もう風呂にも入っているらしく、水色のパジャマに身を包んでいる。

簪は俺の方に向き直ると、部屋の時計を見て首を傾げていた。

「まだ、パーティの時間じゃないの？」

そうだった。帰ってくる時間は前以って伝えておいたんだ。

それより早く帰ってきたら不思議がっても仕方ない。

「何か面倒な事になりそうだったから抜け出してきた。どうやら正解だったみたいだな」

さつきから「打鉄」に個人秘匿通信が一夏とセシリアから入りまくっている。

余程面倒な事になってるんだな。本当に逃げて正解だった。

「それで、何見てるんだ？」

恐らく地獄の中に居るであろうクラスメイト達は思考から消して、俺はさつきから気になっていた事を訊いた。

簪は照れ臭そうに俯いた後で、はつきりとした声で告げてきた。

「アニメ。ヒーロー物の」

アニメか。小学校ぐらいまでは見ていたな。簪は女の子なのに、ヒーロー物が好きだなんて意外……でもないか。

俺の事をヒーローと呼ぶぐらいだから、きつと憧れてもいるのだから

う。

好きなものは誰かと分かち合うに限るし、簪が好きなものは俺だつて知っておきたい。

「へえ、面白そうだな。シャワー浴びたら俺も見ていいか？」

「う、うん！」

そんな花みtainな笑顔で嬉しそうに頷かれたら、俺も本当に楽しみになってきた。

「でも、その前に髪乾かしてあげる……！」

日課を忘れる事無く、簪は告げてくれる。

それも楽しみみだと心の底から思いながら、俺は脱衣所へと向かった。

9. 彼が飛ぶ理由

朝、簪と朝食を取った後クラス前で別れて一組に入る。

簪は四組。おまけにクラス代表。俺は一組。おまけにクラス代表禁止令。

別れ際に手を振ってくれた簪の姿を網膜に焼き付けておいた。これで昼まで乗りきろう。

(相棒。簪の笑顔をナノマシンを通じて左目に永続投影してくれ)

(マスター。昔から簪さんと刀奈さんの事になると途端に頭が悪くなるのは何故ですか？ 病気なのでしょうか、検索しておきます)

冷たい相棒に傷付けられながら、のそのそと自分の席に向かう。

「雪月君、おはよー」

「おは」

クラスメイトの相川さんからの挨拶を返す。

最近俺の目が休み時間とI Sの授業時間以外死んでいるとの噂があるが、そんな事はない。俺は唯、簪と刀奈に関わる事以外をちゃんとしなだけだ。

それに、死んでいるという表現なら俺より自分の席で突っ伏している一夏の方が合っている。

その死体を取り巻いている篠ノ之とセシリアが居るので聞いてみる。

「これ、お前らが殺したの？」

会話をした事は殆どない篠ノ之が、腕を組んだまま否定した。

「失敬な。私ではない。飛ぶ度に撃ち落としていたのはセシリアだ」

篠ノ之の言葉に視線をセシリアへ移すと、セシリアは悪びれもなく答える。

「楯無さんが朝練に出てくださらなかったの、一夏さんを集中的に鍛えていたのですわ。ルールは楯無さんとしていた時と一緒。まあ、クレー射撃の方が私としては有意義でしたかしら」

「一体何回撃ち落としたんだ？」

「二十より先は数えてませんわ」

「……二十六回だよ」

ぶるぶる震えながら上半身を起こす一夏に向けて合掌する。大丈夫、お前ならあと一週間同じ事を続けてたら三回に一回は勝てるようになる。

そろそろ出席簿を投げる人がやってくる時間だ。俺は殆どバツターボックスと化している自分の席に向かおうとするが、クラスメイト達の会話が聞こえてきた。

「知ってる？ 二組のクラス代表が変わったの」

「知ってる知ってるー。それに転入生も来るって噂だよ」

転入生？ 四月も終わろうとするこの時期に珍しい事だ。

クラス対抗戦もあと二週間程で始まるのに、クラス代表を変えるとは相手はそれ程までの強さなんだろうか。

「でも専用機を持つてるのは一組と四組だけだから余裕だよー」

正確には一組だけだ。四組の簪の“打鉄式式”は完成していないし、簪もクラス対抗戦に出場する気もないようだ。

それにたとえ専用機でもうちのクラスの代表は死体だ。挙句今の一夏は素人の中の素人。おまけに“白式”は弱点だらけ。正直素人が乗るなら訓練機の方がましだ。

あんなピーキーという言葉さえ生温いIS、乗りこなせるのは世界最強ぐらいのものだろう。

「——その情報、古いよー！」

懐かしい声が教室の入り口から聞こえて、思わず振り返った。

入り口にはツインテールの少女が扉に寄り掛かりながら立っていた。

「二組も専用機持ちが代表になったの。そう簡単には優勝出来ないから！」

「り、鈴かつ!？」

突然の乱入者の名前を、死体だった一夏が呼ぶ。

篠ノ之がぎろりと扉前の少女を睨むのを意に介さず、不敵な笑みを浮かべたまま八重歯を煌めかせた。

知っている。凰鈴音。小学五年生から中学二年生まで同じ学校に

通っていた親友だ。

「そうよ！ 中国代表候補生、凰鈴音！ やつと転入手続きが終わったから、今日は宣戦布告に来たってわけ」

「気取った言い回しは緊張でもしているのだろうか。」

「まるつと一年ぶりに再会した一夏の前だからしょうがないだろうが。」

そんな鈴音の様子を見て、一夏はおかしそうに笑いだす。

「何格好付けてるんだ？ すげえ似合わないぞ！」

「なっ——何て事言うのよ、あんたはあ！」

鈴音がいつもの喋り方に戻って、いつも通りのやり取りが始まった。

それにしても、代表候補生か。天才つてやつだろうな。

鈴音が中国へ帰国したのは中学二年生の終わり。それからIS学園に転入するまでには一年しか時間がない。

ISにも触った事がないその状況で代表候補生にまで成り上がるなんて、よつぽどの才能と努力がなければ出来ない事だ。

普通に教室内に入ってぎやあぎやあと絡み続ける鈴音と一夏。そしてどんだん目のハイライトが無くなっていく篠ノ之。それを察して逃げ出したセシリア。

順調に地獄が出来上がっていた。

俺もさっさとバッテリーボックスに逃げて座っていたのだが、鈴音が何故かこちらへやってきた。

「楯無も相変わらず元気そうねー。安心したわ」

「何だよ。一夏ともっと話さなくていいのか、鈴音」

「散々話したし、昼休みにも襲撃するつもり。だったらちよつとは親友と話してもいいじゃない？」

「それはありがたい事だ。」

「だったらとりあえず、一言言ってやらないとな。」

「お帰り、鈴音」

「ただいま、楯無！」

お互いにハイタッチして挨拶を交わす。クラスメイトが「雪月君の

目が死んでない……!?」と騒いでいたが気にしない。

親友と一年ぶりに出会って嬉しくない筈がない。

……まあ唯、残念なのが。

「積もる話もあるけど、そろそろ千冬さんが来るぞ。俺は今日こそ出席簿をホームランする。その為の秘策も考えてきた」

「相変わらず千冬さんに喧嘩売って生きてるのね……。はあ、その度胸は本当に尊敬するわ。ま、あんたも後でね」

どかどかと大股で二組へ戻っていった鈴音。

それを見送った後、教科書を丸めてバットを作っていると、セシリアが溜息を吐きながらやってきた。優雅さどうしたイギリス令嬢。

「鳳さん……でしたかしら？ 彼女はあなたや一夏さんとどういった関係で？」

「小五から中二まで一緒に居た友人だよ。俺にとつちや、多分唯一の何の柵もない親友。お前もさっさと席に戻らないと、出席簿野球に巻き込まれるぞ」

「あなた、本当に高校生なのですか？」

セシリアの呆れた声を無視して、俺はバッティングポーズを取る。掛かってこい、世界最強。今日という今日は捉えさせてもらうぜ――



「はあ――！」

「しっ――」

お互いの呼吸と共に斬撃が放課後のアリーナに舞う。

刀奈の専用機、*「霧纏の淑女」*の武装 *「蒼流旋」*の一撃を近接ブレードで相対する。

ナノマシンで制御された水が螺旋の様に回転している槍の一撃は重い。こりや受け止めるより流した方が負担が少ないな。

両腕の甲にシールドを展開したまま、距離を詰めて右手に握った近接ブレードを振るう。

刀奈の反応は早い。素早く後退しながら「蒼流旋」のガトリングを掃射する。

それを回避する為には距離を置かねばならない。その思惑通りに俺はスラストを吹かして距離を取り、距離は詰め直しとなった。

刀と槍では槍の方がリーチが長い。詰めれば小回りの利かない大型の槍よりは近接ブレードの方が有利だが、刀奈の技量を掻い潜りながらそこまで距離を詰めるのは骨が折れる。

お互い装甲が薄いISSを纏っているが、向こうのISSにはナノマシンで制御された水が液状フィールドとして展開されている。さながらそれはドレスの様だ。

もう一度距離を詰めようとスラストにエネルギーを送った所で、アリーナの貸し出し時間リミットのブザーが鳴った。

お互いにISSを解除して訓練を終える。

「あら、お終いな。ざーんねん、お姉さん丁度燃えてきたのに」

「本当に残念だ。もっと刀——更識先輩と一緒に居たかったよ」

「……嬉しい事言ってくれるわね。じゃあ生徒会に入る?」

「いいよ。日本暗部集団の中に入っていくのは遠慮する」

調べた所、刀奈はこのISS学園の生徒会長だった。

そして生徒会のメンバーは「打鉄」の改造を手伝ってくれた三年生の整備科の先輩——布仏虚先輩と、まさかのクラスメイトの布仏本音。

通っていた小学校では簪と一緒に居る場面を何度か見た事がある。向こうは俺の事をそう知らなさそうだったから、ISS学園で同じクラスになっても話し掛ける事もしなかったけど。

更識家は日本の暗部用暗部。それと一緒に居続ける布仏姉妹も、きつとそういった類の家柄なのだろう。

「それも残念ね。でも、こうして訓練に付き合ってくれて嬉しいわ」「約束したからね。『打鉄』のハイレベルな近接データが得られるしこっちも助かってる」

セシリアとの鬼ごっことかでは近接データは取れないし、一夏とやるのは篠ノ之の目が怖い。

そういった意味では大型のランスを主武装とする I S に乗り、ロシア代表の実力を持つ刀奈との訓練は最高の機会だ。

それに——こちらの本当の手の内を知られずに、向こうの手の内を知れるのも都合がいい。

「打鉄」ねえ。言うのも悪いと思うけど、よく日本の量産機をちよつと改造しただけで私と渡り合えるわね。……と言うか、性能に任せて強引に距離を取らないと間合いコントロールされっぱなしなのがちよつとシヨックだったわ。流石は世界三位って所かしら？」

「あんまり大声で言わないでよ。セシリア辺りに聞かれたら面倒くさい。あと、それ以上言ったら本当の名前で呼ぶ」

「酷いわ、それ」

拗ねたように口を尖らせた刀奈。それを見て口が綻んでしまうのは無理もないだろう。

お互い更衣室へ向かいます。そろそろ夕食の時間だ。食堂で簪と待ち合わせをしている。

「いいなー。簪ちゃんにご飯。私も食べさせ合いつこしたーい」

「んな事してないけど……」

したいかしたくないかと言われたら勿論したいが、俺と簪はそんな関係じゃない。

それに、何時かは簪にもそういう相手が出来るとのさ。

「簪ちゃんは可愛いし、優良物件だと思うけれど？」

「俺みたいな経歴とお先が真っ黒な相手より、もっといい奴が現れるよ」

俺に普通の人と同じぐらいの平和なんて訪れない。そんな事はずっと昔に諦めている。

人の人生を丸々ひっくり返そうとしているんだ。せめて俺の人生を懸けないと釣り合わない。



「……はい、これ」

「ありがとな」

刀奈と別れ、食堂で簪と合流すると渡しておいた「黒雷」を返される。

唯その表情はどこか怒っているように見える。一体何があつたのか。

相棒に聞いてみるが、相棒も教えてくれない。何故なのか。……それに。

「今日は食堂で食べるんじゃないのか？」

彼女の手には購買部の袋がぶら下がっていた。中にはおにぎりやサンドイッチが入っている。

お気に入りのかき揚げうどんを食べるんだと楽しみにしていたのに、何故簪は食料を持っているのか。

怒りからか顔を赤くしている簪は、俺にそのビニール袋を渡しながら言ってきた。

「今日は部屋で食べる……だから、買ってきた」

「あ、ああ。何となく予想は付いてたけど……じゃあ、部屋戻る？」

「戻る……」

ビニール袋を受け取ると、そのまま簪に手を引かれた。

今日の簪は強引だ。余程の事があつたのだろう。俺は大人しく手を引かれ続ける事にした。

食堂から出てしまえば、寮の廊下には人は殆ど居ない。今は食堂に殆どの生徒が集中しているのだろう。

そうして廊下を歩いていると、先に口を開いたのは簪だった。

「……さつき、お姉ちゃんと話していた事」

どれだろう。色々話したから分からない。

俺の無言を迷いと理解してくれたらしく、部屋に戻った直後に簪は続けた。

「経歴とお先が真っ黒って、楯無よりいい人が現れるって所！」

「お、おお。そういえば言ってたな。当たり前前の事過ぎて忘れてた」

「当たり前じゃない！」

いきなり壁に押し付けられ真っ直ぐと目を見てそう言われる。

思わずビニール袋を落としてしまったが、そんな事気にしてられない。

その瞳は潤んでいて、今にも彼女は泣きだしそうだったから。でも、これは彼女が弱いからではない。俺に怒っているからだ。

「確かに楯無は人とは違うかもしれない。篠ノ之東博士に拾われたし、正体を隠してモンドグロツソにも出た。それに世界で二人の男性操縦者だし、唯でさえ色んな国や機関から狙われたりもすると思う」「そんなの構わない。俺が選んだ事だ。そうしてでも救いたい人が居る」

簪は俺の瞳から目を逸らさない。

目としての機能を失い、唯ISとの適合を高める為の機関になった左目。

その左目を右手で覆い、何時かの俺を見て簪はゆっくりと口を開いた。

「お姉ちゃん……でしよ」

「……ああ」

刀奈が悲しげに笑った日。『私、もう直ぐ刀奈じゃなくて楯無になるの』。その言葉を聞いた時から、彼女を救うと決めた。

簪が泣いていた日。『私が何も出来ないから、お姉ちゃんは楯無になつてしまったの』。その言葉を聞いた時から、それを絶対に否定すると決めた。

あの時から俺の道は変わっていない。その先に何があるうと。更識刀奈を、更識簪を、絶対に二人の心からの笑顔を取り戻す。

「更識刀奈。今ではもう名乗る事は許されないその名前。俺はそれを必ず取り戻す」

「それは……更識家を敵に回すという事。日本を敵に回す事と同じ……」

簪も俺がやろうとしている事の未来を理解してくれたみたいだ。

俺を大切に思ってくれるのは嬉しい。でも、それと同じように俺も簪が大切なんだ。

だから俺の自己満足に、これ以上簪を巻き込めない。

「な、過去も未来も真っ黒だろ、俺。そんなんで簪に迷惑を掛けられない……俺よりいい人が現れる。俺は一人でもいい。何も間違つてない」
「ううん。間違つてる」

優しい声で、彼女は子供の頃から続いている俺の間違いを正した。

「楯無は、ヒーローだから。一人で孤独に戦つても大丈夫なのかもしれない。でもそれが、誰にも迷惑を掛けないで生きる理由にはならない。……それに私は、『打鉄式式』の事で楯無に迷惑をいっぱい掛けている。今更……私に遠慮しないで」

『そもそもマスターは一人ではありません。私が居ます』

「そうだね」

彼女の笑顔が、直視できなかった。

簪に一番してほしい表情なのに——ずっと見ていたのに。

「私にとって、いい人は楯無だけ。あなたがお姉ちゃんを救うヒーローなら、私を守ってくれるヒーローでもある。楯無とお姉ちゃんが私を大切にしてくれるなら、私は楯無とお姉ちゃんを大切にします」
そう言われて、俺はもう我慢出来なくなった。

相棒とだけ、俺は一緒に居るんだと思つた。全てを捧げて救う。それ以外は何も望まなかったから。

刀奈が俺の選択を肯定してくれるとも思っていない。彼女は楯無である事を受け入れている。俺のやる事は唯の余計なお世話なんだから分かつてる。

でも、それを応援してくれて、それでも傍に居てくれる人が居るんだって。そう言ってくれるだけで、こんなにも嬉しいなんて。

「……なあ、抱きしめていいかな」

震える声で問うた俺の言葉を、簪は笑顔で受け入れた。

「どうぞ。好きなだけ」

言葉のままに、躊躇わずに簪を抱きしめる。

腕の中の存在は温かくて、背中に手を回してくれた。

——背中に伝わる彼女の熱が、俺の翼の始まりなんだと教えられた。

「楯無が翼の代わりに失くしちゃうものを、私は拾い上げる」

「……俺も、簪が自分の翼で飛ぶのを手伝うよ」

更識簪という少女を感じながら、俺は誓う。

こんなにも俺を大切にしてくれる少女の想いに、応える為に。

10. 親友の恋路

「あれ、楯無じゃない。何してんのよこんなところで」
「飯食いに来たんだけど」

鈴音が転校してきた次の日。

簪と一緒に昼飯を食べようと思つて屋上へ向かったのだが、そこには弁当箱を広げようとしてた先客が居た。

凰鈴音。中国の代表候補生にして、俺の親友である。

簪と一緒に適当なベンチに座ると、鈴音の方をじろりと見た。

「お前こそ学食じゃなくていいのか。あそこのラーメンは中々だぞ。王道の醤油が最高だ」

「本当!? 今度食へに行きましようよ」

「いいぞ。炒飯と餃子も美味いからそれぞれ頼んでシェアしようぜ」

「おっけー。やっぱ持つべきものは親友だわー」

お互い遠慮のない会話をすると、弁当を広げる。

何と今日は簪が弁当を作ってくれた。他人の手料理なんてここ数年束姉の料理以外食べてなかったから楽しみでしようがない。

しかし簪は緊張で黙りこくっていた。いや別に、不味くても全部食べるよ？

「ところで、隣のアんたの連れは誰よ。クラスに居なかつたでしょ」

鈴音は簪の方を見ながら言ってくる。簪は未だに固まっているので俺が紹介する事にした。

「更識簪。四組のクラス代表で日本の代表候補生。立場的にはお前と一緒にだ」

「よ、よろしく……」

挨拶だけは頑張つて自分でした簪へ、鈴音は笑顔で答える。

「あたしは昨日転校してきた二組の凰鈴音。よろしくね、簪」

お互い挨拶している間に、俺は待ちきれずに勝手にいただきますをして簪の弁当を食べていた。

俺の分の弁当箱はご飯とおかずの二段になっていた。

ウィンナーと卵焼き、ほうれん草のお浸し。シンプルなものを取り

揃えられたおらずに、何より目を引くのはご飯の段だ。

この間一緒に見たアニメのヒーローのキャラクターが、海苔やらハムやらで描かれている。力作のキャラクター弁当だった。食べるのが勿体ない。

「美味しいよ簪。一体何の心配してたんだ」

「わ、私だって味見はした……でも、楯無の口に合わなかったらって思うと」

「簪が作ってくれたのなら何だって食べるよ」

ばくばくと弁当を食べ続けると、鈴音の呆れた目線が突き刺さる。

「見せつけてくれちゃってさ。付き合ってるの？」

「っ、付き合ってる……!?!」

「違うけど、それ以上と同じぐらいの関係ではあるんじゃないか」

そう告げれば、簪は完全にショートしてしまった。

顔を真っ赤にしながら弁当を食べるマシーンと化している。

これはこれで刀奈にビデオを取って送り付けてやりたいレベルだ。

「ああそう。どういう関係かはともかく、仲いいのは分かったわ」

「そういうお前はどうかだよ、再会した一夏とは進展したのか？」

昨日は態々昼休みに気を遣って食堂に行かないでやったのに、流石に進展無しはないだろう。

そう思っただけ聞いてみたのだが、どうやら俺は地雷を踏んでしまったらしい。

鈴音のそのしよんぼりした顔は、大体が一夏絡みじゃないと見せない顔だ。

(……難儀なもんだな、相棒)

(マスター、今は鈴音さんの話を聞くのが先決かと)

確かに相棒の言う通りだ。

弁当を食べるのを一度完全に中断して、鈴音の話を聞く体勢に入る。

小学生の頃から幾度となく繰り返してきた事だ。慣れたものである。

「どうした、話してみろよ」

「……約束。あいつ、全然違う意味で憶えてた」

その言葉に、俺は箸を落としそうになった。

「約束って、まさか……」

「そう。毎日酢豚を作ってあげる約束。一夏の奴、『毎日ただ飯食わせてくれる』程度に思ってたんですって。……あはは。笑っちゃうわ。私の勇気を出して告げた言葉、そんな風に受け取っちゃう程、私の事なんて意識してなかったんだなあって」

そうぼやく鈴音は静かに泣いていた。

経験則から言つて、これはちよつとやつちまつてる奴だ。今度からあいつの事織斑君って呼ぼうかな。

女の子の一世一代の告白を、ただ飯宣言と思ってしまうのは流石に頭がバグってるんじゃないだろうか。

これは親友として放つてはおけないだろう。

「もつとはつきり言つてやれよ。プロポーズと同じ意味でしたって」
「……いいわよ。今度はどんな勘違いされるか考えるだけで怖いから」

鈴音は沈んだ様子でそう呟いて黙ってしまった。

俺もどうしたものかと相棒と脳内会議をして、解決案を練っていたのだが。

「そう……かな」

意外にも声を出したのは簪だった。

ショートから復帰したようで、弁当も既に食べ終わっている。

「だって、凰さんは織斑さんの事が好きなんでしょ？ 言わないと伝わらない事だって、あると思う」

「……言つたって伝わらない事だってあるわよ」

「だったら、伝わるまで言う。……すれ違つたまま、諦めたままお終いなんて、私は嫌だから」

そう告げる簪の目は強かった。きっと刀奈の本当の気持ちを知らずには出来なかった目だ。

その目の力強さに鈴音は気圧される。やがて現実を受け入れるようにゆっくりと目を閉じてから息を吐いて、再び現を捉えた。

「そうね。そんな風に終わるのだけはごめんだわ。ふられるならふられるではつきり言ってもらわないと、こっちだつて納得出来ないし」
ふん！ と振り切るように鼻を鳴らす鈴音は、元来の強気をすっかり取り戻していた。

そうしてくれた方が俺も安心出来る。せつかく再会したのに、じめじめされたまんまの鈴音じゃ味気ない。

「先ずはクラス対抗戦で一夏をぼこるわ！ それで鬱憤晴らしてからやり直し！」

「そりゃいい。お前らしいぜ」

「ふふん、そうでしょ！ いやあ、何か喋り過ぎて喉乾いたわ。楯無、飲み物ない？」

鈴音の言葉に、俺は飲みかけのペットボトルのお茶を投げ渡す。

それをキャッチした鈴音はキャップを回してぐびぐびと飲む。飲み過ぎじゃないですかね。

ぷはーっ！ と気持ちよさそうに一気飲みしやがった鈴音。それを見て震える簪。

「ちよ、ちよつと……！ それ飲みかけ……！」

「何よ。それがどうしたの？」

簪の言葉に鈴音はきよとんしている。俺も簪が言いたいのかわからない。

「か、間接……キス……」

『……ああ』

俺達の間抜けな声が重なった。

鈴音とは中学時代に散々回し飲みとかしてたせいで、お互いそういう抵抗がすっかりなかった。

呑気に状況を理解している俺達とは違って、簪は未だにわなわなと震えていた。

「負けない……」と呪詛の様に何度か呟いている姿は、少し前の簪を思い出させた。

そうして俺の食いかけの弁当を見つけると、自らの箸で卵焼きを摘まむ。

「……は、はい。あーん」

そして顔を真っ赤にしてこちらに卵焼きを差し出してくる。……はい？

「い、いいから。恥ずかしくて死にそうだから……あーん」

「あ、はい」

恥ずかしくて死にそうな割には有無を言わさない迫力だったので、大人しく口を開いて待つ。

ゆつくりと口の中に卵焼きが運ばれてきて、もぐもぐと咀嚼した。

「お、美味しい？」

「……味が全然分らない」

さつきまで同じ物を食べていた筈なのに、今度は全く味を感じなくなってしまった。

でも何だろう。味が全然分らないのに、さつきより美味しく感じる。

これはあれか。そう――。

「幸せの味、か……」

（マスターが失った五感の左目の視覚だけの筈です）

――相棒、そういう事じゃない。



クラス対抗戦の当日がやってきた。アリーナには一年生達の熱気が充満していた。

俺はアリーナの観客席に座って試合の開始を待っている。

（相棒、〃白式〃のデータを取っておけよ。後で束姉に送る）

（承知しています。姉さんのデータを取るのは個人的には吐き気がしますが、お母様とマスターの為ならば背に腹は代えられません）

相変わらず唯一の姉が大嫌いなコアの次女だが、データはちゃんと取ってくれるようだ。

あとは試合が開始されれば、一夏の試合内容がどうあれ〃白式〃の稼働データは取れる。

そう、あとは試合を待つだけ……なのだが。

「遂に、一夏さんの戦いが始まりますわね」

「織斑さんは、『白式』をどこまで扱えるようになってるのか……」

俺の左隣には簪、そして右隣にはセシリアが座っていた。

いや何だこれ。簪はいいんだけど何でセシリアが居るんだ。お前一夏を鍛えてただろ。

「セシリア。お前はピットに居なくていいのか。篠ノ之は居るんだろ？」

「ええ。簪さんは一夏さんにエールを送ると言つて、一夏さんと共にピットへ向かいました。今頃は一夏さんへ言葉を掛けていている事でしょう」

「お前は声を掛けてやらなくていいのか。一夏の師匠みたいなもんだろ」

俺は事実を言ったつもりだったが、セシリアは不満だったようだ。

客観的に見て可愛らしく頬を膨らませ、恨めしそうに告げる。

「楯無さんが朝練に出てくれなくなったので、クラスのために一夏さんを鍛えていただけですわ。私の標的は楯無さん、あなただけですわ。何度も申させないでくださる？」

「ああ、悪かった悪かった。お願いだから簪の前で思わせぶりな事言わないでくれ」

隣の簪がこの間の鈴音との間接キスの一件の様な状態になっている。

本当に要らない事で彼女を揺さぶらないでほしい。簪の強かさが変な所で暴走する。

俺が簪の名前を呼んだ事で、セシリアは簪の存在に気付いたようだ。

「簪……確か、日本の代表候補生の」

「そう……私が、更識簪」

俺を跨いで簪がセシリアへ自己紹介をする。

鈴音の時の様に、俺が説明した方がいいだろうか。

「俺のルームメイトで、幼馴染——」

「楯無とはルームメイト。それに幼馴染。だからいつもシャワー浴びた後髪を乾かしてあげてるし、この間はあーんもした。着替えも見られちゃったりした」

セシリアの俺を見る目がどんどん死んでいく。こっちもですか。そう言いたげなのは嫌でも伝わってきた。

そんな事もお構いなしに、簪は俺との生活で起きた事を延々と話していた。

いい加減聞き飽きた。そろそろそう言おうとしたセシリアだったが。

「そして何より……大切な人」

「あら……あらあら」

簪が最後に言ったその言葉に、セシリアは口元を押さえた。

……いやどう見てもにやついてやがる。こっち見るな。簪を見るふりをしてこっちを見るな。

「これでは、あなたを撃ち落とすのは無理そうですね」

お前が俺を撃ち落とす約束したのはISの話だろ。

「……で、一夏の成長度合いは」

何だか妙に恥ずかしくなったので、強引に話を切り替える。

セシリアは先程までのにやつきを捨て、真剣な表情で語る。

「——成長はしていますわ。それも恐ろしい速度で。かなりの長丁場の末ですが、鬼ごっこで私を捕まえる回数も増えました。始めた時は一度も成功しなかったのが、今は一日の訓練の三割と言った所でしょうか」

予想通りの成長率だ。流石は世界最強の弟。

「……風さんの情報は、楯無は知らないの?」

「鈴音の性格上、近接型パワー型のISに乗ってるのは間違いないだろう。そして中国では第三世代型として『甲龍』がある。代表候補生に預けるパワー型としては、これ以上ない適正機体だろうな」

「第三世代型って事は……第三世代兵器が」

搭載されている筈だ。そう頷いて、俺はピットから飛び立ってきた

二人を見る。

一夏と鈴音は向かい合って何か話をしていた。まあ大方酔豚関連の話だろう。

とりあえず鬱憤を晴らしてから。そう言ったのは鈴音自身だ。

「まあ、言葉で伝わらないなら拳で語るのも一つの手か」

「でしたら、私も撃ち落として——」

「煩い。お前もそこそこ馬鹿だな」

試合が始まった。一夏は速攻を掛ける為、スラスタ―全開で鈴音へ直進した。

一夏らしい真っ直ぐな軌道。それに相對する鈴音の口元は——
——笑っていた。

次の瞬間、一夏の体勢が大きく崩れた。

「——！ 何ですの、あれは!?!」

「何かしらの攻撃を食らったんだろ」

「そんな事は分かっています！ ですから、何の攻撃を——」

セシリアが騒ぐのも無理はない。恐らくあれが中国の第三世代兵器。

両肩の非固定浮遊部位から放たれる見えない砲弾。恐らくあれは衝撃砲だろう。

確かに不可視の弾丸だろうが、ISの武器である以上共通する事はある。

それは——エネルギーを使っているという事だ。

(相棒、ナノマシンに“黒雷”のエネルギー感知機能を同期)

(了解——同期、完了。成程、これならマスターの視界にも砲弾は映りますね)

俺の左目のナノマシンを通じて、“黒雷”のエネルギーを感知する情報を視覚化する。

本来の用途とは違うが、相棒の言う通り砲弾へのエネルギー収束や放出が視えるようになった。

こうして見てしまえば大した事はないが、やられている方はかなりの注意を割かれる事だろう。恐らく射角は無限。死角など存在せず、

ハイパーセンサーの三百六十度の視界と合わされると、更に攻め込むのは難しい。

暫く一夏の回避が続いた。——一夏は、絶えず学習している。たとえそれが実践中だろうと関係ない。このままだと衝撃砲の攻略は時間の問題。そして待っているのは「零落白夜」。あの全てを一撃の下に切り伏せる魔剣に、鈴音はどう立ち向かう。

鈴音の仕留めきれない攻撃は続き、そうして時間はやってきた。

一夏の唯一の武装「雪片式型」が割れ、中から光の刀身が出現する。ここからが一夏にとっては本当の勝負だろう。

「さて、どうする鈴音——ん？」

視界に妙なエネルギーの波が見えた。

思わず出所——上空を見る。そうして無意識の内に告げていた。

「二人共、屈んでおけ」

『えっ————きやあ!?!』

反射的に二人を抱き寄せて身を伏せる。二人は顔を赤くしていたが、そんな事を気にしている余裕はないようだった。

当然だ。——アリーナの遮断シールドを貫通するビームが上空から放たれれば、気にしている場合じゃないだろう。

11. 対襲撃者

アリーナの遮断シールドを貫通したビームは、そのままアリーナの地面に着弾した。一夏と鈴音も無事に避けたのを確認していると、空いた遮断シールドの穴から落下してくる巨体が一つ。

アリーナ全体を揺らす衝撃と共に舞い上がる土煙。そしてその中に浮かぶ、一つのシルエツト。

——砂煙が止めば、それは姿を現す。

灰色つばい黒の全身装甲。足はひよろいくせに、腕だけは丸太よりもずっと太く長い。

怪しく光る赤はカメラアイだろう。しかも三つ以上の複眼。忙しくなく動き続け、周囲を探り続けていた。その様子はまるで考え事をしているようにさえ見えた。

「楯無……」

簪が現状に怯えながら、俺の腕に縋り付く。

いきなりこんな状況になってしまったら無理もない。パニックにならないだけ冷静で助かる。

周囲の生徒達は少しずつ状況を理解してぎわつき始める。もう少しで大混乱の始まりだ。

「あれは何ですの……ISS?」

訝しげに襲撃者を見つめるセシリアの声に頷く。俺と相棒はアリーナの襲撃者を知っていた。

データだけだが見た事はある。あれは束姉が開発していたISS。名前は確か——。

（『ゴーレム』。お母様が試作した無人ISSです）

（無人機……ISSもそこまで来たか）

各国技術陣が聞いたら仰天ものだろう。ISSは人が居なければ動かない。そういうものだと思っている人間の集まりだからな。

まあ、束姉が作ったものなら安全だ。どうせ一夏を成長させる目的で送り込んできたんだらうから、アリーナ内部に居る二人は大変だらうが殺されはしないだろう。

「とりあえず巻き添え食わないように屈んどけ。教員の避難指示に従うのが無難だろ」

既にパニック状態に陥っているアリーナの観客席。アリーナの入りに向かって人が殺到していた。

最前列で見ていた俺達は身動きする事なくその場に留まっている。

「援護に向かいませんの!？」

「……それは止めておけ」

確か「ゴーレム」はISに反応して攻撃を仕掛けてくる仕様だった筈だ。

ここでセシリアに「ブルーティアーズ」を展開されると、こちらにアリーナの遮断シールドを貫通する威力のビームがこちらに飛んでくる。

直撃すればたとえISだろうと無事では済まない。生身の人間が喰らったらなんて考えたくもなかった。ISに人殺しはさせられない。

一夏と鈴音は「ゴーレム」との戦闘を開始している。アリーナの客席の方へ被害が行かないようにする為だろう。

ビームの雨霰が一夏達を襲う。代表候補生の鈴音は当然として、一夏もセシリアとの特訓の成果かぎりぎりの所で凌いでいた。

「本当に……大丈夫なんですの?」

セシリアが異変に気付いた。

「ゴーレム」から放たれるビームの出力が下がっていた。あれでは絶対防御は貫通しない。

恐らくは遮断シールド越しの標的を攻撃する時だけあの出力で発射するようにプログラミングされているのだろう。

遮断シールドを貫通した後の出力では、たとえ直撃してもISの絶対防御は貫通しない。

「ああ。怪我したくなきや大人しくしとけ。この手の騒動だとパニックに巻き込まれての怪我が一番多いらしいから」

観客席の出入り口はロックされているらしく、殺到している人達はちつとも減らない。束姉、大分周到だな。

変わらず俺の腕にしがみついたままの簪の手を解き、手を繋ぎ直す。

「大丈夫だ。一夏と鈴音が粘ってる間に、教員達がハッキングを解除するさ。落ち着いて、パニックになる事だけは避けるよ」

「……うん。楯無が手を繋いでくれるから、大丈夫……」

簪は落ち着いてくれている。セシリアも無理に何か行動を起こすわけではなさそうだ。

その事に安堵していると、『打鉄』の方に通信が入った。

『雪月。聞いているか』

通信は管制室の千冬さんからだった。

いや、個人に連絡してる場合じゃないだろ。

「聞こえてますよ。アリーナの扉のロック解除はまだですか。怪我人が出ても知りませんよ」

『それはクラッキング班が対応している。それより、お前は出れるか？』

「生憎と出れませんね。観客席に被害が一切ない所を見ると、あれはISに反応して攻撃をしている。一応ISを展開出来そうな場所はあるけど、今俺とセシリアがISを纏えば死人が出る可能性がありますね」

『そうか……』

「クラッキングに成功しても、絶対にISを持った教員をアリーナの出入り口付近に回さないでくださいよ。そうすれば少なくとも死人は零で済む」

まあ、一夏ならその内『ゴーレム』が無人機だと気付く筈だ。

一夏と鈴音が攻勢に移らない限り、『ゴーレム』も攻撃の手を緩めている。

あれ程分かり易いヒントもそうそうない。

一夏と鈴音は空中で合流して何かを話している。鈴音の驚いた様子から察するに、『ゴーレム』が無人な事に気付いたな。

「一夏達が攻勢に出るみたいだぞ」

一夏が高速で『ゴーレム』へ向かう。敵対行動に対して『ゴーレ

ムがビームを乱射して牽制するが、一夏は回避を続けながら「ゴーレム」との距離を詰めていく。

それを鈴音が衝撃砲で援護をし、「ゴーレム」の体勢を崩している。

「一夏、今よー！」

「うおおおおお!!」

一夏が雄叫びと共に直進する。その加速は通常のスラスタ―速度を遥かに凌駕していた。

あれは――。

「瞬時加速?! 一夏さん、何時の間に……」

どうやらセシリアが教えたわけではないようだ。……と言うか、セシリアは多分瞬時加速は出来ない。

すれ違いざまに一夏が「ゴーレム」の右腕を肩から斬り落とした。無人機相手には「零落白夜」の力が存分に発揮出来る。成程、束姉が「ゴーレム」を送り込んできた理由が見えてきた。

そのまま近接戦で斬り刻もうと、「ゴーレム」の懐に留まった一夏。だが、「ゴーレム」の左腕が鞭の様に払われ一夏が吹き飛ばされる。

空中で体勢を整え、追撃のビームを切り払う一夏。

距離の詰め直しだ。だが、一度潜り込めたという事はもう一度潜り込めるといふ事。鈴音の援護を受けながら地道な作業の再開だ。

何の問題もない―― 筈だった。

「何だ……?」

奇妙な違和感が襲った。「ゴーレム」が数瞬動きを止めた。

一夏達の動きを見る為のものではない、まるで操縦者が交代する為に機体が止まったような―― 完全な停止。

今のは一体。その疑問は、直ぐに答えとして現状に反映される。

「なっ―― きゃあー！」

鈴音の悲鳴が上がった。恐るべき推進力で近付いた「ゴーレム」が左腕で鈴音を捕らえる。すかさずフォローに入った一夏に対して鈴音を投擲して牽制。

受け止めて体勢が崩れた一夏に向かつて左拳を掲げ殴ろうとする。二人は弾けるように二手に分かれて回避して距離を取った。

(マスター。今の「ゴーレム」の攻撃は異常です)

相棒の言葉に同意する。今の数回の動作。その全ては「ゴーレム」が能動的に行ったものだ。

何より距離を詰めるのは今まで一度も見せなかった動きだ。無人機を制御しているAIが切り替わったのか。

だとしたら何だ。右腕を切断されたからか？ それとも他に何かスイッチがあつたか、束姉がAIを切り替えたのか。

「ゴーレム」が深呼吸をするように身体を広げる。口元にある発射口に光が集まっていた。

「不味い！」

一夏が咄嗟に上空へ退避してゴーレムの発射角をずらす。口元から発射されたビームを何とか躲し、直進するビームは再びアリーナの遮断シールドを貫通して空の彼方へと消えていった。

今の出力は「ゴーレム」が現れる際に放たれた出力と同じだ。

——違う。これは束姉の仕業じゃない。あの人はISにこんな事はさせない。

「……楯無？」

簪が心配そうに俺の顔を覗き込む。繋いでいる手に力を入れ過ぎてしまったようだ。

どうにかして安心させてやるべきなんだろうが、今嘘を告げてしまいうわけにはいかない。正しい情報を与えておかなければ命取りになる位置に簪は居る。

「明らかに敵の様子がおかしい。……多分、このままだと人が死ぬ」

「そんな……!?! じゃあ、織斑さんと凰さんが！」

「安心しろ。……空いてる場所はあそこか」

簪を宥めながら、俺は周囲を見渡して見つけた。今はアリーナの出入り口に人が集中している。となれば、必然的に空いている場所がある筈だ。

——そう、ISを展開しても問題がないような、開けた場所が。

簪と繋いでいた手を放し、戦場へ向かえない事へ歯噛みしていたセシリアへ声を掛ける。

「セシリア、簪を頼む。絶対に怪我をさせるなよ！」

「あなたはどこへ行くのです、私も参りますわ！」

「アリーナの観客の安全が確保出来たら好きにしろ、今はお前じゃないと簪を任せられないんだよ」

セシリアへ簪を押し付ける。簪を受け止めたセシリアは納得してなさそうにこちらを見たが、今は従ってくれるようだ。

「ゴーレム」の猛攻は徐々に二人を押しつつある。このままだとビームが直撃するのも時間の問題だ。

「——楯無——」

簪に名前を呼ばれる。

振り返ると見える心配そうな表情に、俺は微笑みながら告げる。

「大丈夫。俺の前で、ISに人殺しなんて絶対にさせない」

篠ノ之束が作った翼はそんな事をするものではない。

あの人はISにそんな願いを込めたわけではない。

俺がずつと感じてきた事で、だから俺は相棒と共に居る。

ISを展開する為の場所へ向かいながら、「打鉄」で管制室へ通信を入れる。

「千冬先生、ISの展開許可をください。出れる状況になったので、二人の援護に向かいます」

『織斑先生と呼べ……先程から変わったあの動きに何か関係があるのか』

流星は世界最強。無人機の動きの変化にはもう気付いているようだ。

詳しく説明するのは時間がないので、適当に話を合わせておこう。

「そうです。今はISを展開していなければ狙われない保証はありません。だったら速攻で潰して安全を確保します」

『分かった、展開を許可する。しかし、オルコットはどうした？』

「……いや、碌に連携訓練もしてないのに、オールレンジ兵器使いかねないのはちよつと……」

実はセシリアを下げたのはそういう理由でもある。

直線兵器であるライフルだけ使ってくれればいいのだが、その内ビットを使い始めそうで怖い。

唯でさえ三対一でごちゃごちゃになりそうな戦闘だ。これ以上増えるのは流石に厳しいものがある。

『……それも分かった。オルコットにはその場で待機を改めて命じておく』

珍しくげんなりとした千冬さんの声を聞きながら通信を切って、今度は一夏と鈴音へ繋ぐ。

開けた場所へ着いたと同時に左目のナノマシンと『黒雷』のリンクを解除して『打鉄』を展開。待機をしながら二人へ通信を入れた。

「二人共、聞こえるか」

「聞こえてるぜ！ だけど——」

「正直呑気に話してる余裕ないわ！ こいつ、さつきから動きが鋭いのよ！」

二人は『ゴーレム』の追撃を躲すのに手一杯だ。あの巨体からは想像出来ない程の機動力、そして長い腕のリーチに苦戦している。

「あいつの開けた遮断シールドからそっちに向かって、援護に入る」

スラストを吹かしてアリーナの遮断シールドの穴へ向かい、アリーナの中へ入る。

——そして、目が合った。

アリーナの中央に居座る黒いIS。その赤く光る複眼が、確かに俺を見ていた。

何時かの自分を思い出した。相棒がまだ『黒鉄』で、赤と白のカメラアイのバイザーをしていた頃の自分を。

それ思い出したのは何故なのか。それは分からない。唯はつきりしてるのは、今こいつはこのアリーナの中で誰よりも、俺に集中していた。

「大人しく前の状態に戻ってくれ。それなら俺は止めない」

微かな願いを込めた俺の言葉に『ゴーレム』の反応はない。

唯俺をじつと見つめるのを止め、挨拶をするような気軽さで左腕を

上げた。

「楯無、来るわよー！」

「分かってるよ」

左腕から放たれたビームを軸に螺旋を描くように「ゴーレム」へ接近する。

左腕にアサルトライフル、右腕に近接ブレードを展開。胴体の銃口から弾幕として放たれるビームを躲しながら、こちらもお返しにあサルトライフルを撃つ。

——違和感を感じた。

「こいつ……」

「援護するわー！」

鈴音の衝撃砲による援護を受けながら、近接ブレードの圏内にまで入った。

首を狙って斬撃を振るう。しかしその太刀筋は異常な速度で動かされた太い左腕に阻まれ、有効打には至らなかった。

「ゴーレム」の銃口が光った。それに反応して後退し、一度鈴音達と合流する。

「ちよつと、あんたよく見たら「打鉄」じゃない！　それで行けるの！？」

「見た通り装甲の上から有効打を与えるのは無理みたいだな。狙うなら関節か。……もつとも、あの反応速度にそこまで出来るかは分からないが」

「なら、俺の出番だろ」

一夏の声に頷く。そりやそうだ。きっと束姉はそういう目的で「ゴーレム」を設計した。

ありとあらゆるエネルギーを消し去る「零落白夜」なら、あの装甲を直接の攻撃力で突破出来る。

二人と散開しながら通信で作戦会議する。

「敵と向かい合う奴を基準として、俺と鈴音が射撃武器で前方と右側後方から牽制する。止めは左後方から一夏。それでいいな」

「了解！」

俺達は声に出さずとも一夏の方を見た。一夏も頷く事すらせずに、真っ直ぐ「ゴーレム」へ向かう。

そのまま瞬時加速で距離を詰め、左肩から胴体を斜めに斬る——
「咎だった。」

「一夏！」

アリーナに声が響いた。

——嘘だろ。

「男なら、男ならその位の敵に勝てなくて何とする！」

声のする方向を向けば、俺の背後——アリーナ全体を見渡せる場所に篠ノ之箒が立っていた。

突然の声に一夏の足が止まる。当たり前だ。一夏は戦闘のプロではない。極限まで集中していた時に意識外から呼ばれてしまえば動きは鈍る。

完全にチャンス潰された。「ゴーレム」は篠ノ之を捕捉し、迅速に左腕を上げた。

「不味い——逃げろ、箒！」

一夏の声も聞かず、篠ノ之は「ゴーレム」を睨んで対峙し続けた。た。

「ゴーレム」の左腕にエネルギーが集中していく。もう間に合わない。

——アリーナの遮断シールドをもともしないビームが篠ノ之に向かって放たれた。

「この馬鹿がつ！」

篠ノ之のいる場所に向かって瞬時加速で向かう。振り向きながら握っていたブレードとライフルを解除、両腕にシールドを展開し、更にスモークグレネードを握っておく。

ビームを見据え、シールドを装備した両腕をクロスさせて篠ノ之の前に立ちはだかる。

……悪い、「打鉄」。

ビームが直撃する。重ねたシールドは容易く割れ、シールドエネルギーが瞬く間に減っていき、装甲が砕け、絶対防御が発動する。

機動性を優先して装甲を削ったのが仇となった。攻撃を防ぐのはこの「打鉄」に最も向いていない。

「……何とか、耐えきったか」

(マスター。篠ノ之箒は無傷です)

目的は達成したが、「打鉄」の状態はボロボロだ。元々少ない上半身の装甲は殆ど残っておらず、下半身の装甲もひび割れている。

シールドエネルギーはとうに尽き、具現維持限界にまで状態が悪化している。

スラスターの推力は損傷とエネルギー低下から落ちていき、俺は比喩でも何でもなく落下した。

地面に墜落し、バウンドしてアリーナの壁に激突した。その衝撃で握っていたスモークグレネードを取りこぼし、「打鉄」は解除される。

ISの補助がなくなり、アリーナの壁に凭れ掛かりながら座り込む。

装甲が薄い上半身を中心に俺の肉体にまで損傷が至っていた。

(クロスさせた時に前に出した左手は火傷。右手も装甲の破片で裂傷……ちっ、浅いけど脇腹にも裂傷がある。堂々とした戦線復帰は無理か)

「うおおおおお！」

「よっくもおおおお！」

俺の撃墜で意識に火が付いた一夏が、当時の作戦通りに左肩から斜めに胴体を斬り裂いた。追撃する鈴音の衝撃砲も直撃して装甲を爆散させる。

——巨体が、二つに割れて落ちる。

既に複眼に赤い光は灯っていない。確実なシステムダウン。それを確認した。

「ゴーレム」は最後まで俺を見ていた。最後の一撃は避けられるタイミングだったにも関わらず届いたのは、きっとそのせいだろう。

「ゴーレム」が沈黙した事により、システムハッキングは解除されたようだ。アリーナの扉は解放され、今更の避難が始まった。

つまり、突入班もアリーナにやってくる。事後処理をするのは構わないが、今それをされるのは困る。

地面に転がっていたスモークグレネードが急に起動し、煙を吐き出し始めた。もくもくと吐き出され続けるスモークはやがてアリーナを覆い尽くした。

「どうなってるんだ、楯無！」

「あんた無事でしようね!？」

「……問題ない。二人共、そこから動くなよ。煙は直に晴れるから」

俺は首元に付けている黒いチョーカーに意識を向ける。

(相棒、展開と同時に「黒息吹」を発動。やれるな)

(問題ありません。機体展開、開始)

煙の中、光の粒子が俺を包む。粒子は黒い装甲へ変わっていき、俺の相棒の姿——「黒雷」を形作った。

ISの補助が復活し、立ち上がって「ゴーレム」の残骸へ向かう。

「黒雷」の「黒息吹」は一言で言えば完全ステルスだ。姿は透明になり、レーダーにも感知されない。

……まあ、武装にエネルギーを回せないのがネックだが。

残骸に近付くと、身体部分の中心の装甲を剥がす。その中に見える、手の平サイズの球体。

——ISCコア。世界に四百六十七しかない筈の、ISの中心となる文字通りの核。

(マスター。このコアはネットワークに登録はありません)

(だろうな……)

やはり、この為に新造されたコアか。ISCコアを回収し、俺が元居た場所へ戻る。

「黒雷」を解除すると、丁度アリーナの扉が開かれて突入部隊がやってきた。

12. 親友の決着

教員達に保護されて、俺達三人はピットまで送られる。

ピットには千冬さんと山田先生が待っていた。

火傷はともかく、裂傷によつて制服に赤い染みが出来ている俺を見て山田先生は顔を青白くしている。

慌てて俺に駆け寄り寄る山田先生だが、冷静な千冬さんに止められる。

「医務室には私が送ろう。山田先生は現場の指示を」

「はっ、はい！」

急に役割を振られて冷静に戻った山田先生。

それを横目に、俺は千冬さんに連れられて医務室へ向かわされる。

……担架とかで運んだりしてくれないんですかね。そう思ったが、言ったら言つたで担がれそうだったので言うのは止めておいた。

廊下に出た所で、千冬さんに話し掛ける。

「医務室より、行きたい場所があるんですけど」

「……どこだ」

「整備室。『打鉄』の修理をしてやらないと」

告げれば、心底呆れた顔をされた。

「阿保か。ISの修理なら直ぐに他の者に任せる。お前はさつさと医務室で治療を受けろ」

「……へいへい。じゃあ、頼みましたよ。千冬先生」

「——いいえ。その役割、このセシリア＝オルコットが承りますわ」

何故か廊下でセシリアが待っていた。どうやらアリーナから脱出した後真っ直ぐこちらに来たらしい。

しかしクールに不敵に微笑んでいるのは結構だが、お前には俺の身の安全より遥かに大切な事を頼んだ筈だ。

「簪は無事か」

問えば、セシリアも呆れた顔をする。

「無事ですわ。今頃寮の自室で待機をしている筈です。しかし、あなたの思考回路はどうしてこう極端なんですの……？ ISと簪さん

以外に興味はないのかしら」

失礼な。刀奈にだって興味はある。彼女の名前を言うのは禁じられているので黙っておくが。

「ともかくー」と力強く続けるセシリア。

「打鉄」は「打鉄」 広告宣伝隊長であるこのセシリアⅡオルコットに任せなさいな。しっかりと修理の依頼を整備科の皆さんに依頼しておきますわ。……あなたは少し、自分の身を案じなさい。今のあなたを簪さんが見たら卒倒しますわよ」

どうやら、俺はまた自分を蔑ろにしていたらしい。この間簪に言われたばかりなのに、反省しないとな。

とりあえず今は治療を受ける事が最優先だそうなので、大人しく従うか。

「じゃあ、頼んだ」

「ええ。任せられますよ」

待機形態である指輪をセシリアに渡す。

本当は俺が直してやりたいんだが、千冬さんを振り切って整備室に駆け込むのは今の状態だと無理だし、自分を蔑ろにはいけない。

簪は無事だったし、ISに人殺しをさせずに済んだ。

とりあえず今は治療を受ける事と、ISコアを持っている事がばれない事に専念しよう。

——そう思って、俺の気が緩んだのか。

ブラックアウトする視界が、自分のものだとは思えなかった。



夢を、見た。

背中まである水色の髪の女の子が、背を向けて水面の上に立っていた。

纏っているのは黒いワンピース。少女の身長はそこまで大きくはなく、きつと百五十程度しかないだろう。

彼女は空を見上げている。彼女の髪の色と同じ、雲一つない青空。

「――」
どうやら、俺はこの夢に存在しているようだ。
少女は俺に気付いたのか後ろへ振り向く。

その口元には優しい気な笑みが浮かんでいた。

彼女はそつと手を伸ばす。まるで俺を、大空へと誘うように。

どうしてだろう。俺は見た事がない筈なのに、その少女を信頼した。

彼女の手を重ねるように、俺は手を伸ばし――。

「あ、起きた」

目が覚めれば、そこは見知らぬ天井だった。

状況を理解する為に周りを見渡せば、どうやらここは学園の医務室のようだ。

もう日が傾いている。俺が寝かされていたベッドの隣では、鈴音が椅子の上に胡坐を掻いて座っていた。

「鈴音……怪我はないか」

「あんたにだけは聞かれたくないわよ。全身傷だらけのくせにかっこつけちゃってさ」

上体を起こそうとするが、両腕に力が入らない。

上半身の制服は脱がされ、特に左手の火傷が酷いらしく、支えにするのは無理そうだ。

鈴音は俺の身体を支え、上体を起こすのを手伝ってくれた。

「あんたも無茶するわよねー。いくら絶対防御があるって言っても、あのぺらっぺらの装甲の『打鉄』であのビームを正面から受け止めたりしないわよ普通」

「死人出すわけにはいかないだろ……まあ、『打鉄』には悪い事をした」

ポケットの中を探ると、ISのコアはまだ持っていた。どうやら誰にも気付かれてはいないようだ。

首元の『黒雷』も無事だ。まあ、これを待機形態だと知っている人間は簪ぐらいだから取ろうとも思わないのだろう。

「ありがとな。あと胡坐は止めとけ。パンツ見えるぞ」

「なつ——はあ、これだからスカートは嫌なのよ」

顔を赤くしながら胡坐を崩す鈴音。これを指摘したのが一夏だったらもれなく殴られていただろう。

「それにしても、よく見舞いになんか来てくれたな。一夏と一緒に居なくていいのかよ」

鈴音には一夏に伝えなくてはならない事がある筈だ。

酔豚の約束。鈴音の一夏への気持ち。

せつかく再会出来たのだから、勘違いされたまんまじや終われないだろう。

「ああ……その事んだけど、さ」

鈴音のくしゃつとした表情。また何かあいつやったのか。

そう思ったが、それとはまた少し事情が違ったようだ。

絞り出すように、ぽつりと始まった彼女の言葉。

「伝えたわ……伝えたの」

「……そうか」

それ以上は何も聞かなかった。鈴音が話してくれるのを待つ。

暫くの間、無言が流れる。唯お互いの間にあるのは呼吸の音と、鈴

音の瞳から流れる涙。

悔しいが、傷だらけの手ではそれを拭ってやる事は出来ない。……

いや、たとえ傷が無くても、俺にその資格はないのだろう。

鏡映しではない相手に、そう易々と触れるべきではないのだから。

「一夏……私の事は友達としてしか見れないんだって」

その言葉が全てだった。涙を流したまま言葉が続く。

「分かったのよ。あいつがいくら朴念仁でも、酔豚の約束をただ飯だと勘違いなんてしないって。きつと間違ってたのよ、最初から。あいつにとつて私は女の子じゃなかった。こんな性格だもの。無理もないわ」

あはは、と泣きながら空笑いする鈴音。

諦めてしまったのか、という言葉は声にならない。

……知ってる。人の想いはそう簡単に割り切れるものじゃないって事は。

「……もつと女の子らしかったら、違ってたのかな」

鈴音は制服のスカートの裾を強く握る。

彼女の私服はズボンが多かった。それは凰鈴音という存在にとっても似合っていたし、活発な彼女の笑顔を引き立てる。

それが、一夏の好みと違っていた。そうとしか言いようがない。

でも、そう言ってしまうのは簡単でも。そう納得するのは簡単じゃない。

「ああ、違ってたかもな」

ここからの言葉はきつと掛けるべきじゃない。

その涙を拭う資格さえない俺。織斑一夏ではない雪月楯無が、凰鈴音へ掛けるべきではない言葉。

鈴音は俺の親友であって、恋人ではない。それは一夏にとつても同じ事で、あいつにとつて鈴音は幼馴染でしかない。

「でもさ、そういう男勝りな所が鈴音なんだろう」

俺の言葉は鈴音にとつて慰めにもならない。これは俺の意思だ。

俺が鈴音と親友になれたのは、きつと俺にとつて鈴音が眩しかったからだ。

唯誰かを好きになって、当たり前のように恋をしている鈴音が眩しかった。

分かってたよ。告げるべきだったのは、鈴音ではなく俺自身だ。

「好きな相手の為に自分を変えてしまうようなら、それはもう恋じゃなくて呪いだよ」

……そう言つて、意味を理解して、俺は自嘲気味に笑う。

何を言えた事か。自分を変えるなんて事じゃ飽き足らず、己の未来さえ捨てようとしたのはどこの誰だ。

だけでもう、俺は俺を大切にしてくれる人の為に、自分を蔑ろにはしない。

「お前もお前のままで、誰かを好きになってくれ。親友として言わせてもらえば、凰鈴音っていう女の子はとても魅力的だからさ」

「……何よ、それ」

「本心だよ。親友の言葉ぐらい信じてくれ」

鈴音はおかしそうに小さく笑って、立ち上がった。

「楯無って昔から偶に変な事言うわよね。どっか遠く見ちゃってさ。ま、だから気になったんだけどね」

そうだったのか。だったら、俺達はお互いがお互いに無いものを見ていたのかもな。

俺と鈴音が親友になるのはある意味運命だったのかもしれない。

「今その癖を直してるんだ。要らない心配させて泣かせるのはもうごめんだからな」

「難儀な性格してるわね、あんたも。いいわ。話して少しはすつきりしたし、あんたのその癖直すの手伝ってあげる」

「そりゃ心強い。やっぱり持つべきものは親友だな」

伸びをした鈴の表情は先程より幾分かましに見えた。

慰めにもならない筈の言葉でも、気休め程度にはなったのだろうか。

「任せなさいってのー！」

「じゃねー」と手を振って鈴音は医務室から去っていった。

あれなら鈴音自身が踏ん切りを付けて、新しい恋でも、一夏を振り向かせる道でも、自分の意思で選べるだろう。

さて、俺もさっさと部屋に戻るか。ISのコアも隠したいし、簪とも会いたい。

右手が使えるなら何とかかなる。血だらけの制服を羽織りながら立ち上がり――。

「勝手に抜け出そうとするな馬鹿者」

世界最強に止められた。何てタイミングで医務室に入ってくるんだこの人。

千冬さんは呆れながら、眼圧だけで俺をベッドに座らせる。これ以上逆らったら出席簿が飛んでくる。今の身体でそれは避けたかった。

「鎮痛効果もある医療用ナノマシンが身体に入っている。無茶をしなければ三日程で治るそうさ。今は大人しくしておけ」

「……で、何の用ですか。織斑先生」

この人が唯の心配で俺の様子を見に来るとは到底思えない。その

手に持っているビニール袋は何か関係があるのか。

生憎と今は腹の探り合いをする気分じゃない。用があるならさっさと行ってほしかった。

千冬さんもそんな気分だったらしく、いきなり本題に入ってくれた。

「楯無。あれは束の仕業だと思うか」

俺を名前で呼ぶという事は、教師として聞いているわけではないよ
うだ。

「ここって盗聴器とかないよね？」

「あるならこんな話はしない。お前の意見を聞かせろ」

はあ、と溜息を一つ吐く。出来ればもう少し考える時間が欲しかった。

あの時の違和感を思い出しながら、少しずつ俺は話し出す。

「あのISは束姉が作って送り込んできた。それだけは間違いない」

「……あのISは無人機だった。それも踏まえ、長年束の元に居たお前が言うのならそれは間違いないのだろうな」

束姉以外に無人のISが作れる人間は居ない。

俺と千冬さんの見解は一致する。

だから、今回の本当の問題点はここからだろう。

「ならば、途中で変わったあの動きはどう見る」

やはり、気になった所は同じらしい。

対人攻撃には決して最大出力での攻撃はせず、戦闘もカウンターを中心とした受け身の型。

それが突如一変し、相手を追い掛け回しながら最大出力で消し炭にする能動的な殺人兵器と化した。

「——私見になるぞ」

「構わん。話してみろ」

「あれは束姉の仕業じゃないと思ってる。あの人はISに人殺しはさせない。……それに、動きが変わった後のISは、俺と目が合っ
てからずっと俺を見ていた。俺に対しての攻撃も甘かったし、ビームの出力も低い。俺を特別視していたのは間違いない」

ふむ、と千冬さんは腕を組んで考える。

「何か心当たりは？ お前はあの三人の中なら一番の実力者だ。手心を加える理由がありそうな相手だ」

「さあな。俺の正体を知る人間はそう居ない。包村帯にだったら関わりがあるテロリストには心当たりがあるけど、殺しに来る理由ならともかく、手加減する理由は一つもない」

「テロリストにまで知り合いが居るとは……お前の経歴は真つ黒だな」

自分で言う分には構わないが、他人に言われると何か傷付く。

「せめて未来は黒くないように頑張るさ。……さてと、もういいですか？ お腹減ったんですけど、食堂に行っても大丈夫ですかね」

「……構わんが、本当に大人しくしているよ。お前は私の生徒だからな」

千冬さんは手に持っていたビニール袋を投げ渡してくる。

キャッチすると、中身は新しい制服だった。

「その血塗れの制服で食堂に行くつもりか？ 着替えてから行ってもまだ開いているさ」

何だ、これを渡しにも来てくれたのか。

……確かに、こんな血塗れを晒して簪に卒倒されるわけにもいかな
いからな。

今日は色々と大変な一日だった。だからせめて、終わりはいつも通りでありたい。

千冬さんに礼を言って、俺は着替えて食堂に向かった。

13. お前が男は無理がある

「うおおおおお!!」

「はあああああ!!」

一夏と鈴音の咆哮が、朝のアリーナに響く。

“雪片式型”と“双天牙月”がぶつかり合って火花を散らす。何度も打ち合う事で、まるで二人で連弾を奏でているようだった。

「あら一夏さん、周囲がお留守でしてよ!」

上空で待機していたセシリアが滅茶苦茶な事を言いながら“ブルーティアーズ”を操り、四つの銃口から一度だけビームを一斉射する。

標的である一夏はハイパーセンサーで周囲を確認。鈴音の斬撃を防ぎながら、ほんの数センチだけ飛んだ。

そのまま身体を振じり、ビームの二発を躲す。身体を振じった回転による“雪片式型”の斬撃で残ったビームを切り払い、尚且つ鈴音への牽制とした。

「……今の、凄い」

アリーナの観客席で朝練と一緒に見ていた簪が感想を漏らす。
……何となく元気が無さそうなのは、気のせいじゃないだろう。

まあ、確かに今のは見事だった。訓練ではなく実戦で行えたら言う事なしだ。

—— “ゴーレム”の襲撃から四日が経ち、暦も六月に入った。

無人機の解析はあまり進んではいないらしい。まあ俺がISコアを抜いたせいなんだけど。

一夏は一夏でこうして特訓馬鹿になっている。自分が“ゴーレム”を倒すチャンスを見逃してしまったせいで、周囲を危険に巻き込んだ事をよっぽど気にしているようだった。

鈴音とセシリアはこうして一夏の特訓に付き合っている。朝と放課後、一夏の体力が続く限り、模擬戦だったり攻撃を捌きながら相手に張り付く特訓をしていた。鈴音と一夏の関係はどうなったのかは分からないが、今の所は険悪な様子はない。

俺と言えば、『ゴーレム』戦での傷はナノマシンのおかげでほぼ完治した。千冬さんの言った通りだ。『打鉄』の修理も、元々訓練機という事で代えのパーツが豊富だった事もあり終わっており、朝練前に受け取った。

「織斑さん……努力してるんだね」

簪が感心したように呟く。

そういえば、簪は一夏の訓練風景を見るのは初めてだったな。

「元々負けず嫌いだしな。……あいつが挫折した所は見た事がない」

まだまだ粗削りではあるが、その分勢いがある。

このまま折れなければ、何時かは世界最強の太刀筋に辿り着く事だろう。

……そんな事に微塵も興味はないが。

「さて、あいつらには悪いけどそろそろ行こうぜ。引越しもあるし、いつも遅刻ギリギリはごめんだ」

「……うん」

ISも使えないのに朝練に駆り出された俺だが、「何か気になった事があったら言ってくれ！」と一夏が誘ってきたので見てただけだ。気になった事はないです。

おかげで俺の怪我の調子を心配した簪が同伴してしまった。いつも『打鉄式』の開発で疲れているんだから寝かしておいてやりたいのだが、本人がどうしてもと言って聞かなかった。……最近、簪の押しに異常に弱くなっている気がする。

アリーナの廊下を歩きながら食堂へ向かっていると、簪がちらちらとこちらを見ている。

「心配しなくても、もう怪我は大丈夫だよ」

過保護な簪に、苦笑いしながら答える。

襲撃があったあの日、寮の部屋に戻ってから簪はずっと俺にべつたりだった。

朝と夜は当然として、昼には一組まで迎えに来る始末。簪に引張られるのではなく引き摺られたのは初めての経験だった。

——ああ、悪くなかったぜ。寧ろ最高だった。

「……本当？」

「本当」

「本当の本当……？」

「本当の本当。ありがとな、心配してくれて」

実際、両腕をあまり使うなどというのは日常生活じゃ無茶がある。簪が色々手伝ってくれて本当に助かった。

怪我の治りが早かったのも簪のおかげだろう。

ずっとべったりだったおかげで、周りからは『通い妻』だの『新婚夫婦』だの言われたが、正直嬉しいので大丈夫です。簪は顔真っ赤だったけど。

「心配するのは……当然。だって、楯無は直ぐに無茶をするから……」
『マスターの事は私も注意しておきます。簪さんも引き続き、見ていてあげてください』

「うん、『黒雷』」

「分かった分かった、気を付けるよ」

相棒と簪が仲がいい事で大変喜ばしいが、あんまり簪に迷惑が掛からないようにしないと。

……まあ、こうしてずっと一緒に居られるのも今日までか。

二日前。寮の部屋割りの変更される事になった。俺は一人部屋になるようだ。すっかり慣れてしまったが、今の俺の寮の部屋は男女混合部屋というイレギュラーだ。やはり道徳上良くないので、変えられるものなら変えてしまいたいのだろう。

そしてそれと同時に、簪という『更識』の護衛と監視が解かれる事を意味していた。

これが何を意味するのかは分からない。俺の経歴を知った千冬さんの中で、俺の認識が多少変わったのだろうか。……もうちょっと不審がらせた方が良かったかな。

そんな連絡が山田先生からあったのだが、当時の俺は両腕を使えない怪我の真っ最中。せめて怪我が治るまでと山田先生に盛大に駄々をこねた簪により、引越しは数日先延ばしになった。

——そして、俺の怪我が治った今日がその引越しの日。

朝飯を食べ終わったら、簪の荷物を新しい部屋に運ばなければなら
ない。

「……これ、渡しとくよ」

ポケットからある物を取り出して、簪へ渡す。

「これ……」

簪も、それが何だか分かってるようだ。

当然だろう。それは今日自分が手放すものだったのだから。

「俺の部屋の鍵。どうせ簪の分は余るんだし、渡しても問題ないだろ」

「……いいの？」

自らの手の平の上にある鍵と俺を何度か見て、訊いてくる簪。

「良くなかったら渡してない。髪……毎日乾かしてくれるんだろ？」

「う……うん！ そうだよね、約束したもんね」

先程までの元気の無さは幾分かましになったようだ。

やっぱり簪は笑顔でいてくれた方がいい。簪の笑顔を世界中に配
信すれば、この世界から戦争が無くなるに違いない。

(なあ相棒。やっぱりナノマシンで簪の笑顔を投影とかしてくれない
かな)

(マスター。やはりマスターは簪さんと刀奈さんに関わると別人格に
なるのでは?)



「皆さん、今日は何と転校生を紹介します！ しかも二名です！」

朝食を食べ、簪の引越しを手伝った後。

いつも通り登校してホームルームを聞いていれば、何やら転校生が
来るようだった。しかも二人。

何故二人共一組に転入してくるのかは謎だったが、その疑問は直ぐ
に解消された。

教室がざわつく中、山田先生が呼ぶと、教室に二人の生徒が入って
くる。

そして何故か、二人が入ると同時にそのざわつきが止んだ。

「シャルルルデユノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、皆さんよろしくお願ひします」

転校生は金さんと銀さんだった。完全に髪の色印象だ。首の後ろで結われた金髪と、そのまま下ろされた銀髪が対になっていた。

どうしてだか両方ともズボンを履いている。珍しい事もあるものだ。

……珍しいで済めばよかったのだが、どうも現実はそう甘くはないらしい。

「お、男……?」

クラスメイトの誰かが呟いた。

それに頷く形で、金さん——デユノアは爽やかな笑顔で自己紹介を続ける。

「はい。僕と同じ境遇の方が二人居ると聞いて、本国より転入を——」

デユノアがそこから先を告げる事は叶わなかった。

クラスメイト達は突然三人目の男子生徒が現れて大混乱と大歓喜である。

「三人目！ しかもうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「凄い、死んでない！」

二つ目までは分かる。だが最後のはどういう意味だ。いつも特訓で精魂尽き果てる一夏と、常日頃目が死んでる俺への批判か。

残念ながらこれからはもつと目が死んでる可能性が高くなるぞ。帰っても簪が必ず部屋に居るとは限らなくなってしまうからな。

……まあ、それより。男性操縦者の先輩として声を大にして男性操縦者のデユノアへ言いたい事が一つ。

（無理があるだろ）

（無理が過ぎます）

俺と相棒の意見は完全に一致した。何がとは言わないが、無理がある。男性操縦者ってどこにでも居るんだな。

だが、別に好きにしてくれればいい。どうせ俺が一夏のデータが欲

しいからだろうし、邪魔にならないのなら別に干渉はしない。

まあ……本当に厄介そうなのはもう一人の方か。完全にクラスに馴染む気がない。ナイフの様に鋭い眼光は、千冬さんを思わせる。

「ラウラ、挨拶をしろ」

ラウラと呼ばれた銀さんは、佇まいを直し千冬さんを『教官』と呼んで敬礼をした。

その挨拶からして、間違いなく軍隊の出身だろう。それも千冬さんが指導していたらしいドイツ軍の。千冬さんを思わせるどころか関係者だった。

「ラウラ！ボーデヴィツヒだ」

銀さん——ボーデヴィツヒを見ると、何故か左目が疼く。

目としての機能は完全に失われている筈の左目が疼いた事なんて一度もない。

思わず左目を手で覆うって俯いてしまう。あいつ……一体何者だ？

それはそうとして、ひゅん、と音が聞こえたのは気のせいじゃないですよ。

「あつぶねー」

案の定投擲されていた出席簿をぎりぎりの所でキャッチする。

千冬さんの方に視線を向けると、目で「話を聞け」と言ってくる。

……いや、話も何も銀さんは名前以外何も告げてないんですが。

「貴様が織斑一夏か」

「ほら、お前の教え子何か一夏とやってるぞ」と千冬さんを目で煽ってみる。……こつわ。密かに額に青筋浮かべてる世界最強こつわ。

一夏は自らの名前を呼ばれ、銀さんに向けて手を差し伸べている。弟を見習ったらどうですかお姉さん。

だが、銀さんは握手をする気などないようだった。

「貴様が……！」

銀さんは右手を振り上げ、一夏目掛けて振り下ろす。

しかし、一夏も咄嗟に左腕でガードした。不意打ちにも対応する中々の反応だ。

(ちゃんと話を聞いてなかったから名前は分からないが……野蛮だな
銀さん。金さん教壇で呆然としてるぞ)

(マスター。彼女はラウラーボーデヴィツヒ。ドイツの代表候補生で
す)

相棒曰くボーデヴィツヒは舌打ちをして手を下ろす。

「認めない……貴様のような軟弱者があの人弟など、認めるものか
……！」

あの人弟……何となく分かった。ボーデヴィツヒは千冬さんが
大好きなんだろう。

多分、千冬さんがドイツ軍の教官をしていた頃に世話になったとか
そんな感じだ。

本当に居るんだな、ああいうの。俺が真面目に『包帯の乙女』続け
てたらそういうファンも出来たのだろうか。一夏もまた面倒な事に
巻き込まれたな、ご愁傷様。

そろそろホームルーム終わらないかな、とぼけーつとしてみると、
ボーデヴィツヒはこちらにも振り向いた。

……絶対面倒くさい事になるな、これ。

「となれば、貴様が雪月楯無か」

恐らく、俺は今とてつもなく嫌そうな顔をしているのだろう。

「そいつは二組に居る。実は俺が織斑一夏だ」

「そんなわけがあるか！」

ボーデヴィツヒが教官よろしく何かを投擲した。冗談の通じない
奴だ。ならばこちらも教官の出席簿でガードしてやろう。

そう思つて出席簿でガードすると、そのまま出席簿に何か刺さつ
た。

出席簿を貫通したギザギザの刃。……軍人だからって学校でナイ
フを常備させるのはどうかと思う。

「……これは流石にやり過ぎじゃないか。せめて俺もビンタとかにし
てくれよ」

下手に弾いてたら、他のクラスメイトに危害が及ぶだろう。

出席簿に刺さったナイフを抜きながら、千冬さんの方に視線を向け

る。元教え子の教育どうなってるんだ、教官。

あと出席簿が駄目になったのは俺のせいじゃないからね？

「私は貴様も認めない。見ていて不愉快な程、あの女に似ている」

「あの女？　　ってか、俺に関しては完全に言い掛かりか。ドイツの軍人つてのは随分と自由なんだな」

似ている相手を認めないんじゃないやなくて、まずは本人に喧嘩を売ってほしい。

本当にどういう教育したんだ、と千冬さんを睨む。

千冬さんはごほん、と咳払いを一つして、

「トラブルはあったが、ホームルームを終わる。各人は着替えて第二グラウンドに集合しろ」

おいちよつと待て世界最強。あんた元教官としても担任としてもその問題児をどうにかしろ。何しれつとホームルーム終わらせて授業しようとしてんだ。

いくら何でも、一生徒としてこのクラス崩壊になりかねない要因を放っておくのは許さないぞ。

「今日は四組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

簪に会えるので許した。

14. はじめてのじっせんくんれん

更衣室で着替えて一人第二グラウンドに向かうと、そこにはクラスメイトや四組の生徒達が既に待機していた。

この授業の担当は千冬さんだ。遅刻をしたら何があるか分からないから、当然皆遅刻はしない。

流石に整列はせずばらけているが、それは千冬さんが来れば軍隊の様に整列する事だろう。

「楯無」

名前を呼ばれ、振り向くと簪が居た。

ISの授業なので、当然ISスーツに着替えている。

さて——当然だが、女性のISスーツは露出度が高い。

肩は丸出し、太股は丸見え。ボディラインがくつきりと浮かび上がるこのスーツは、露出度的には正直スクール水着と大差ない。

……他の女生徒ならまるで反応しないが、簪相手だとそうはいかない。

(マスター。心拍数が上昇しています。先程の疾走の影響がまだあるのですか?)

相棒が心配してくれているが、もうそれに反応している余裕もない。

直視し続けるには刺激が強い。思わず簪から目を逸らしてしまう。

「……楯無?」

目を逸らした所に、簪が不思議そうに覗き込んで目線を合わせてくる。

いつもは気にしない簪の匂いを強く意識した。俺の幼馴染も立派な女の子なんだと思うと、どうしようもなくどぎまぎする。

「もしかして……具合が悪いの?」

簪の視線は心配に変わり、そつと俺の両腕に触れた。

白魚の様に細く白い指が、微かに残る裂傷と火傷の跡を撫でる。

「いや、具合は悪くない……」

「本当?」

簪の言葉に頷く。どつちかって言うと、寧ろ元気です。

じゃあ何故なのか、と視線で問われる。

「……その。嫌いにならないでほしいんだが」

「うん。ならないから……教えて」

普通の声量で言うのは流石に無理だ。

俺はちよいちよいと手招きをして、簪を近くに寄せる。

素直に近付いてくれた簪に、そつと耳打ちをする。

「簪のISスーツ姿が……刺激が、強くて……」

「つ……そ、そうなんだ」

簪の顔が真っ赤に染まる。相棒も納得した様子で『マスターの男性としての正常な反応は記憶しました。次回からの参考にします』とか言っていた。そういうのはいいから、相棒。

簪は照れた様子でこちらを見つめてくる。

「……お姉ちゃんの事も、そういう風に見てるの?」

刀奈の時は……向こうからスキンシップで距離を詰めてくるから、ISスーツとか関係ない。

「揶揄われているのは分かってるから、あんまり反応しないようにしてる」

「……でも、私には素直に反応したんだ」

しかも刀奈とは違って密着とかではなく、唯ISスーツ姿を見ただけだからな。

同室だったら頃には着替えを見てしまったり、抱きしめたり、髪を乾かしてもらったりしていたくせに、何故今更ISスーツを見ただけでどきどきしてしまうのか。

女の子として見てるんだよ、言わせないでくれ恥ずかしい。

「楯無の……えっち。でも、いいよ。楯無に見られるのは、嫌じゃないから」

そういう事を言われると、我慢が利かなくなる。

「授業前に何の会話をしていますの……?」

理性を総動員して必死に堪えていると、後ろから呆れ顔でセシリアが話し掛けてきた。

当然セシリアもISスーツを着ている。確かに出る部分は出て、締まる部分は締まった磨き抜かれた肉体だったが……。

「何ですの、その目は」

「……はあ」

「質問を溜息で答えないでくださる!? そもそもあなたに需要がないだけで、私の磨き抜かれた身体は——」

何か自らの身体の美しさを語り出したセシリア。

おかげで凄まじい勢いで冷静になっていった。ありがとうセシリア。

明らかに俺が話を聞いていない事に気付いたのか、ゼーゼーと息を切らしながら話題を変える。

「一夏さん達は……ぜえ、まだですの……?」

お前イギリス代表候補生がしちやいけな顔してるぞ。

「さつき、一夏がデユノアを連れて教室を出た時に生徒達に追われてたからな。もうそろそろ来るんじゃないか?」

「何故あなたは追われていないのでしょうか。一緒に出て行っていませんか?」

「そりゃ、俺だけ逆方向に走り出して廊下の窓から飛び降りたからな。流石に追ってこないだろ」

「薄々気付いていましたか……あなた馬鹿ですわね?」

ふざけるな、ちゃんと木があるのを見て飛び降りたぞ。

普通の人間があの高さから飛び降りたら骨折するわ。

「……楯無、手の甲に傷がある」

簪が俺の手を取りながら言ってくる。

そう言われて見てみると、言う通り手の甲には擦りむいたような傷があった。

「あ、本当だ。大方木に飛び込んだ時にやつちまったんだらうな」

「もう……後で医務室に行こう? これ以上楯無の身体に傷が残るのは……嫌」

「気を付けるよ。ありがとうな、簪」

はにかんで頷く簪。天使か何かだろうか。

「また始まりましたわ……」とげっそりしているセシリアを無視していると、漸く遅れていた二人がグラウンドに現れた。

その内の一人、一夏はこちらを発見すると「裏切者お！」と近寄ってくる。裏切るも何も、俺はお前と同盟を組んだ覚えはない。

簪はまだ一夏の専用機の一件が踏ん切りが付いてないのか、そそくさと四組のクラスメイトの許へ戻っていった。

戻ったらやたら揶揄われて、顔を赤くしてるのは何故だろうか。

「って、また更識さんの事見てるのか？ お前って本当に更識さんの事好きだよな」

「ああ。幼馴染だし、大切だからな」

「食堂でも更識さんとはっかかり食べてるじゃんか。そうだ、今日の昼は皆で食べようぜ！」

肩を組みながらそんな事を言ってくる一夏。

「多分簪は来ないぞ。元々人見知りだし」

「ええ、お前が来るなら来そうだけどなあ。シャルルの事も紹介したいしや」

「シャルル？ ……ああ、デュノアの名前か」

と言うか、デュノアってフランスのIS企業の名前じゃなかったか。

偶々か、それとも本当に御曹司なのか。別に興味もないが。

そういえば真面に挨拶してなかったデュノアが、一夏の背中からひよっこりと顔を出した。

「えつと……雪月君、だよな。改めて自己紹介するね。僕はシャルルⅡデュノア。シャルルって呼んでくれると嬉しいな」

「ああ……そう。俺は雪月楯無。一応、二番目の男性操縦者。よろしく」

「う、うん……よろしくね。楯無、君？」

何か急に名前と呼ばれたが、気にするような事でもないだろう。

お近付きになる事もきつとない。この怪しさ満点の転入生の素性がはつきりするまでは、警戒しておいて損はないだろう。はつきりしたらはつきりしたでもう関わる必要もないだろうし。

「気にする事はありませんわよ、デユノアさん。この人は簪さんかISが絡まないと誰にでもこうですので」

明らかに俺の適当な態度に困惑しているシャルルへ、被害の先輩であるセシリアがフォローを入れる。

いや、刀奈とも鈴音ともちゃんと真面に話せるから。

それに中学生の頃はちゃんと人と関わってたぞ。一夏の監視をする為にはそうしないとやってられなかったし。

「——全員揃っているか。これからは整列もしておくように、分かったな」

授業開始直前に、千冬さんがジャージ姿でやってきた。中学生の時に一夏の家に行ったら何度か見たな。

クラスメイト達は軍隊の様に整列をする。この二ヶ月で大分調教されてきたな、こいつ等。

整列が終わった所でチャイムが鳴る。ギリギリセーフか。

「あれ、山田先生居ないの?」

「案ずるな。直、到着する」

俺の独り言に千冬さんが反応した。授業の準備でもしているのだろうか。

「本日から格闘及び、射撃を含む実戦訓練を開始する。何度も言っているが、ISは使い方次第では人を容易く殺す事も出来る。これはそれを感じる為の訓練でもある。諸君には気を引き締めて参加してもらおう」

『はい!』

「返事ばかりにならない事を期待する。……さて、今日は手始めに戦闘を実演してもらおうか」

千冬さんの提案に、クラス一同が『おお』と期待の声を上げた。

「丁度よく今日から全快した奴が居るな。雪月、相手はお前に頼もうか」

「……俺かよ」

どうせならワンオフの専用機持ちの一夏がセシリアの方がいいんじゃないのか。

一夏もセシリアもうずうずしている。この二人は言ってみれば修行馬鹿だ。訓練したくて仕方がないのだろう。

千冬さんは面倒そうにしている俺の方に近付いて、ひっそりと俺に告げてきた。

「更識によい所を見せてやれ。お前は知らないだろうが、オルコットとの決闘の際のお前を見る更識の目。さながらヒーローを見ているようだったな」

「……そりゃどうも。乗せられるのは癪だが、簪の息抜きになるならやってやるよ」

千冬さんは「分かり易くて助かる」と不敵に笑んだ。

まあ、俺も俺で「打鉄」の稼働データを取りたいのは事実だ。

「で、相手は誰ですか。まさか千冬先生じゃないでしょうね」

「それはそれで望む所だが、別の機会に取っておこう。お前の相手は

「お待たせしました！」

遙か上空から声が響いた。皆が声が出た方へ視線を向けると、緑色のISを纏った山田先生が浮いている。

「どうやらISの準備をしていて遅れていたらしい。」

「あれは、〃ラファール〃リヴァイヴ……。フランス製の量産型ISか」

「特長まで言えるか、雪月」

人の事をIS辞典か何かだと思ってるのか、千冬さんは。

「簡易的な操縦性から生まれる安定した性能と、後付武装による多種多様な装備が持ち味だ。操縦者の技量と装備傾向によつて様々な状況に対応出来るいい機体だな」

説明しながら俺は列から抜け、グラウンドの開けた場所に出る。

「頼む、〃打鉄〃」

右手を前に出し、〃打鉄〃に願う。

展開が完了した「打鉄」のスラスターを吹かせ、山田先生と同じ高度まで浮いた。

山田先生は両腕にアサルトライフルを展開して既に準備完了。俺

も左腕にシールド、右腕に近接ブレードを展開して準備完了だ。

「雪月君。入学試験の時は一本取られてしまいました。今日は頑張りますよ。お手柔らかにお願いしますね」

「それはごっちの台詞ですよ。あの時は明確なルールがあったから勝ちを拾えたし、俺の実力が分からなかったから奇策も成功した。今となつてはそれがないのは、痛い限りですね」

山田先生はにっこりと微笑んでいるが、その佇まいには隙が無い。最初に選択した装備を間違えたかもしれないな。

「雪月。山田先生は元代表候補生だ。甘く見ていると痛い目を見るぞ」

「俺がISバトルで手を抜くと思いませんか。それに待機している状態を見ているだけで、山田先生の実力は推し量れますよ」

「そうか。それは悪かったな」

千冬さんが腕を組んだままこちらを見た。

「では——始めろ！」

千冬さんの号令ともに、スラスターを全開にする。

逃げ回られたら厄介だ。速攻で距離を詰める。

「やっぱりそう来ましたね！」

刀を振りかぶる俺に対して、アサルトライフルを構えた山田先生。全力のバックブーストで距離を取りながら弾幕を形成する。

やはり、戦況判断が早い。速攻に対して瞬時に対応された。並大抵の経験値ではないな。入学試験の時は奇策が成功して本当に助かったぜ。

放たれた弾幕を掻い潜りながら、少しずつ山田先生に接近する。

セシリアの時とは違い、推力なら改造してあるごっちの方が上だ。

気の遠い作業になるが、これなら何時かは追い付ける。

「凄いですね……それに、操縦してる時の顔がとっても楽しそう」

「楽しいでしょう、実際に。空を飛ぶ事はとてもね」

俺は弾幕が少しでも薄くなるように右側から回り込む。

正面に位置するより明らかに右手のアサルトライフルの狙いが甘くなった。

身体の角度を修正する速度も流石だが、それによって更に射撃の照準は甘くなっている。

停止状態より動いている時の方が狙いを付けにくいのは当たり前だ。そして動いているのは狙う側と狙われる側、両方であるのが望ましいのも言わずもがな。

「予測射撃を掻い潜る為に緩急を付けているんですね……！ ISの射撃戦における軌道理論の授業をよく聞いているのが分かります！」

「……………はい、勿論ですよ」

「今の間は何ですか!？」

気のせいです。そんな授業あったっけ、とか絶対に思ってますとも。

動揺する山田先生に向かって、俺は近接ブレードをぶん投げる。

「ええ!？」

山田先生は更に動揺したが、それでも冷静に近接ブレードを撃ち落とすとした。

だが、近接ブレードを撃ち落とす分弾幕は薄くなる。それに意識も俺から一瞬離さずにはいられない。

俺はそうする為に近接ブレードをぶん投げたのだ。

その弾幕が甘くなった一瞬を見逃さず、スラスターからエネルギーを放出、直ぐに再びスラスターへと取り込む。

「行きますよ」

山田先生へ向き直り、瞬時加速を発動する。

一瞬で眼前に山田先生の顔が迫る。その瞳は驚愕に見開かれており、大きな瞳に俺の姿が映っていた。

——勝敗は、着いた。

15. 昼休み十屋上Ⅱ修羅場

追撃しようとした所で千冬さんからの「それまで」が入り決着した実演戦闘だが、デモンストレーションシヨンとしては機能したようだ。

「お前達も成熟すれば訓練機でこれくらいの動きが出来るようになる。励めよ」

『はいー』

元気良く返事をする生徒達。俺は一応ISを動かして二ヶ月程度という設定なのだが、俺も返事しておいた方がいいだろうか。

ハイパーセンサーで地面に墜落した山田先生を確認する。うん、怪我もしていないし、絶対防御も働いていない。シールドエネルギーが減っただけだし、ISにも影響はないだろう。

俺は地面に降下し、地面に罅を入れて転がったままの山田先生に近寄る。

「大丈夫ですか、山田先生」

「は、はい……まさか本当にやられるなんて思いませんでした」

それは仕方ない。言っちゃあ何だが、相手が悪い。現役を退いた元代表候補生と、現役の世界第三位だ。流星に負けてしまっただけは立つ瀬がない。

苦笑いしながら手を伸ばす。山田先生は手を取りながら苦笑いを返してきた。

「ISで背負い投げされた事なんて初めての経験でした」

「出来るならISを傷付けたくなかったんで。本来だったらアサルトライフル突き付けて降参してもらうつもりでした」

「あはは……ちよつと自信無くします」

いや、現役を退いてあの動きが出来るなら十分だと思う。

基本に忠実な丁寧な動きと戦闘軌道。冷静な判断力と不意打ちへの対応力。

どれを取っても代表候補どころか代表クラスだった。千冬さんと同世代だったから代表になれなかったただけじゃないだろうか。

「雪月、ご苦労だった。戻ってこい」

「へいへい」

千冬さんの声に従って、皆の所に戻る。

戻ってみれば、一夏、セシリア、シャルル、ボーデヴィツヒ、そして簪——代表候補生と専用機持ちが列から別の所で待機していた。

「今から実際にISの装着と歩行訓練を開始する。先程名前を呼んだ五人をリーダーに、グループに分かれて実習を行う」

「俺も訓練組でいいんですか?」

「そんなわけがあるか馬鹿者が。お前には専用機がない更識とペアで指導に当たってもらおう。さっさと行け」

「行つてきます!」

何だ、今日の千冬さんは大分優しいな。サービスがいいと言うか、まるで別人だ。ホームルームで出席簿を投げてきたのは多分別人だろう。

ISを展開したまま簪の許へ向かう。千冬さんが「扱い易くて助かる」と言っていたのはこの際聞かなかった事にしよう。

「簪。今日はペアなんだってさ、よろしくな」

「うん……よろしく。さっきの実演、かつこよかった。早く、私も打鉄式式”で……”」

飛びたい。そう言葉が続くのは明白だった。

俺もだ。俺も早く、簪が“打鉄式式”で飛ぶ姿が見たい。

「リーダーはちゃんと分かれたな。よし、では班員も分かれろ」

千冬さんの号令で列が一気に崩れた。生徒達はわらわらと目的のリーダーの所へ向かっていく。

……まあ、案の定と言うか何と言うか。

『織斑君、よろしくね!』

『デュノア君、頼んでもいいかな!』

見事に二人の所にしか人は行っていない。俺と簪、セシリア、ボーデヴィツヒの所へは誰一人として来ない。

千冬さんが溜息を吐き、山田先生は「皆さん均等に!」と注意している。

「これはこれで、応えますわね……」

「そうか？ 来ないなら来ないで楽でいいけど」

空いた時間は自主練でもしよう。堂々とISに乗ってデータが取れるなら、取っておきたいデータもある。

「でも……どうして楯無の所にも誰も来ないんだろう。楯無も男性操縦者なのに」

簪が不思議そうに言っている。

確かに、どうして俺の所にも誰も来ないんだろう。

適当に理由を考えてみる。……いや、一つしか思い付かないな。

「俺、クラスで死んだ目扱いされてるからかな。死んでるの左目だけなんだけど」

「そう……？ 楯無の目、私……好きだけど」

それはありがたい。俺も簪の目は好きだ。照れくさくて目を伏せてしまっている時も、恥ずかしくて目を潤ませている時も好きだ。

さつきは目を逸らしてしまっただが、今度はしっかりと簪の目を見る。眼鏡の下の瞳は吸い込まれそうな程透き通っていた。

簪の顔がほんのりと赤く染まり、ふと俯いて目を逸らす。

「……恥ずかしい」

「そうだな……俺も」

こういう事は部屋でやろう。部屋でやったら永劫にやり続ける気もするが。

「……二人だけの世界に入り浸っている所申し訳ないのですが、そちらに数人来てますわよ」

『え？』

二人して見てみれば、確かに女子生徒が三人居た。

相川と谷本と……見た事がない顔だから、残り一人は四組の生徒達か。

「二夏達のグループはあっちだぞ。それかちやんと教えてくれそうなセシリアの方へどうぞ」

一夏とシャルルの方を差してそう言う。順番待ちが耐えきれなくなつて俺の方へ来たのだろうか、初志貫徹する事が大切だと思うぞ。

親切心からそう言ってやったのだが、どうやら三人は列に並ぶのが

嫌になってこっちに來たわけではないようだった。

「雪月君に教えてほしくて！」

「ISの授業中なら目は死んでないしねー」

「私は更識さんの彼氏の顔を見に……」

四組の奴がとんでもない事を言っていたが、それは顔を真っ赤にして「ち、違う……」と抗議している簪に任せておこう。俺が行くと話がややこしくなる。

……で、一組の二人は何故俺に教えてほしいんだ。

「俺はサービス良くないぞ？　普通に教えるだけだからな」

何か向こうではお姫様抱っこかしているが、俺にそんなサービス精神など存在しない。

ISはIS。俺を遠くに飛ばしてくれる翼だが、使い方次第では死人だつて出る。

始まりは何にでも肝心だ。俺が束姉に教えてもらったように、こいつ等にもそう教えてやる事しかない。

だが、二人はそれで構わないようだ。やる気たっぷりのガッツポーズで答えてくる。

「クラスで一番操縦上手い人に教えてもらえるなら、願ったり叶ったりだよ」

「ねー！」

「じゃあ谷本から行くか。じゃあまずは待機状態のISに座る感じで――」

俺の指示に「はい」と軽い返事で従う谷本。この五秒後に千冬さんが状況にキレてグループ分けからやり直しになったのは内緒だ。



「おーい、二人共！　こっちこっち！」

簪と共に屋上へ向かうと、一夏が座ったままこちらに向けて手を振って呼んでいた。

IS学園の屋上は生徒達に開放されている。屋上で昼食を取る生

徒も少なくはなく、一夏もそれに倣って昼食を取ろうとしていたようだ。

食堂で日替わり定食を食おうと教室をぬるりと抜け出した辺りで一夏に捕まり、屋上に集合させられた。

簪も誘ってこいと言われたので、丁度四組から出てきた簪を誘った。

先ずは一緒に飯を食べよう、と告げる。笑顔で頷く簪。

屋上で食べるか、と告げる。きよとんとした顔で思索してから頷く簪。

一夏達も居るんだがいか、と告げる。険しい顔で数十秒唸ってから頷く簪。

……この三種類の簪が見ただけでもうお腹いっぱいです。

(マスターは一度、検査を受けた方がよろしいかと)

(何だろう、隣に簪が居ないと死ぬ病か?)

(ならばマスターの命日は今日となります。マスターと簪さんは別室になってしまったのをお忘れなきよう)

(何時だか訊いた首を吊る絶好の場所は見つけたか? 案内を頼む)

相棒と心でいつも通りのやり取りをしていると、じつと簪が俺の顔を見ていた。

視線は俺の左目に集中している。言葉にせずとも告げている。『黒雷』と話しているの?』とでも聞きたいのだろう。

こちら言葉にせず頷いて答える。簪は小さく「そっか」と呟いた。

「悪いな。一夏がどうしてもって聞かなくてさ。……俺の日替わり定食が」

「それは夕食に取っておこう……? 今日ほちよつとだけ整備室での作業があるから、少し遅れちゃうけど……迎えに行くから」

「じゃあ俺は相棒と『打鉄』のデータの整理でもしてるかな。実力がある相手との実戦データが何個か取れてるし、足りてない分野のデータを割り出しくさ」

二人で放課後の予定を話し合いながら、一夏達の輪に入って芝生の

上に座った。

「おっそい！ 空腹で死ぬかと思っただわよ」

「まあまあ鈴さん、淑女がそう空腹を訴えるものではありませんわ。我慢も美德でしてよ？」

「オルコットさん、日本人みたいな感性してるんだね……」

一夏が誘ったメンバーは、セシリア、鈴音、シャルル。この昼食はシャルルの歓迎会も兼ねてるらしい。だから男の俺は強制参加だそうだ。

これだけ見れば簪以外は一夏の特訓面子なのだが、ここに何故篠ノ之が居ないのかと言えば――。

「しかし、この場に箒さんが居ないのは残念ですわ。折角、こうして皆さんで青空の下、食事を取れる機会ですのに……」

「危険行動で謹慎なんだから、しょうがないじゃない。明日には復帰するんだし、我慢よ我慢。美德なんでしょ？」

セシリアと鈴音の会話の通りである。

篠ノ之は「ゴレム」襲来の際に、避難もせずに一夏に声を掛けた危険行動で数日間の謹慎中だ。

「……酷いよな。箒だって俺を鼓舞しようとしてくれただけなのに」
不満そうに言う一夏。……俺の隣の簪がものすつごく怖い表情になつてるのに気付いてないのはお前だけだ。

セシリアと鈴音は「しまった」とばかりに目を逸らしている。何の事情も知らないシャルルが哀れである。

俺は簪へ視線を向け、抑えるよう視線で訴えかける。簪も自分が何かを言えば空気が悪くなる事も理解しており、また自分自身が何かを言う資格もない事も理解していた。

故に、何かを言う資格があるのは篠ノ之を庇った俺だけだ。無論俺にも言いたい事は一つだけある。

「篠ノ之が勝手な行動をしたせいで『打鉄』が深刻なダメージを負った。負う必要のないダメージだった。喋る事が出来ない『打鉄』に代わって、それだけは言っておく」

別に俺の怪我はいい。もう治ったし。それを口にしたら簪に怒ら

れ、鈴音に呆れられるので言わないでおくが。

二度とあれはごめんだ。ISに人殺しをさせるのも、ISに負う必要のないダメージを負わせるのも。

「……一夏に対しては済んだ所で、飯にしようぜ。腹減ったよ」

「あー、そ、そうだね！ 僕もお腹ぺこぺこだなあ！」

完全に死んだ空気を切り替えようとして、シャルルはそれに乗っってくれた。

転入初日にこんな修羅場に放り込まれたのに、結構いい奴なのかもしれない。

鈴音が、「よ、よおーし！ 私の渾身のお弁当を見なさい！」と勢よく自らの弁当を開けた。

え、弁当持参なのか？ 俺と簪普通に購買で買ってきたんだけど。

鈴音の弁当の中身は、油調した玉ねぎや人参、筍等の野菜類と豚肉に、ケチャップを利かせた甘酢を絡めた料理——酢豚だった。

『……………』

再び、空気が死んだ。厳密に言えば一夏と鈴音、そして俺の。全体のメンバーの半分の空気が重くなればもう地獄になるのは十分だろう。

どうして今日に限って酢豚を作ってきたんだ鈴音。何故お披露目してしまったんだ親友。

一夏と鈴音は既にこの場から逃げ出したそうだった。平時はお互い大丈夫でも、こういういった爆弾が投下されるとやはりまだ時間が足りないらしい。

他の面子も何かを感じ取って黙りこくっている。シャルル可哀そう過ぎだろ。

「おお、それ美味そうだな。鈴音、転校する前も料理頑張ってたもん
な」

ここは親友の俺がどうにかせねばなるまい、となるべく自然な感じで感想を告げる。

それを察した鈴音がこちらを見る。そうだ、言葉は要らない。俺達の長年のコンビネーション、見せてやろうぜ！

「そ、そうよ！ 自分で言うのも何だけどかなり上達したんだから！
よく味見してもらってたし、あんたなら違いが分かるでしょ！」
まあ、俺の場合は本当にただ飯だったのだが。束姉が居ない時とか
は食事を用意しなくて済むので助かった。

よし、これでここから一夏に食わせる流れだ。視線で鈴音に告げると、鈴音は大きく頷いて箸で豚肉を一掴み。

そしてそれを――。

「はい、楯無。あーん」

俺じやねええええええ！ 一夏あああああ！

何昔を懐かしんでいつこいつこになつてんだよ！

間違いに気付かないまま、俺に対してぐいぐいと酢豚を押し付けてくる鈴音。普通に二人で飯を食ってれば速攻食うのだが、ここではそうは行かない。

一夏は何か嫉妬なんだかよく分からない表情してるし、セシリアは小さく「また修羅場ですわ……」と呟いてるし。シャルルは両手で顔を覆って隠しつつ、こっそり指と指の隙間から見てる。

……そして何より。

「……む」

じーつ、と。穴が開く程俺を凝視してくる視線が一つ。言わずもがな簪である。

鈴音との回し飲みで強制あーんだったんだ。最初の段階があーんだった場合、何が待っているのだろうか。

「あ、あーん」

そろそろ口を開かなければ本当に酢豚を押し付けられる。
観念してあーんすると、酢豚が口の中へ運ばれる。

――確かに、美味しい。鈴音の今までの努力の集大成だ。

これを毎日食わしてくれるなら、こつちから結婚してほしいぐらいなのにな。

「楯無」

「ん――むぐ」

名前を呼ばれて簪の方を向けば、口に何かを突っ込まれた。

……この食感は食パンか。つまり、これは――。

「食べ掛けだけど……あーん」

簪がさつきから食べていたサンドイッチか。

もうあーんした後だが、簪は俺が食べた跡から再び口を付けていた。

――簪が今言った事と、簪が今している事の意味を理解して、

俺と相棒の脳内会議が始まるまであと五秒。

16. シヤルロットと帯

「雪月、こっちに来い」

放課後。さつさと一人部屋になってしまった自室に戻って、打鉄のデータ整理をしようと椅子から立ち上がった瞬間に、千冬さんに名前を呼ばれた。

担任に呼ばれてしまったのは仕方がない。俺は教壇に陣取っていた千冬さんの許へ向かう。

「何の用ですか、千冬先生」

「織斑先生だ。六月になっても直らんらしいな」

振り下ろされた出席簿を白羽取りしながら一連のやり取りをする。

俺と千冬さんのやり取りを、同じく教壇の近くに居たシヤルルが苦笑いしながら眺めていた。

その両手には通学するには少しばかり大きな荷物が……シヤルル？

「お前もさつさと寮の自室に行けよ。時間を置いて転入してきたなら、ちゃんと寮の自室は用意されてるだろ。……色々大変だろうけど、まあ頑張れ」

「う、うん。そうなんだけど……」

「お前を呼んだのはその事でだ、雪月」

……何だか、物凄く嫌な予感がする。

そしてこういう時の予感は大体当たるのがお決まりだ。

「デュノアはお前と同室だ。同じ男同士、面倒を見てやれ」
「……は？」

まさかの内容に俺は間の抜けた声を出す。

いやだって、たった今日簪が引越しをしたばかりなのに直ぐに同居人が決まるのか。

「同じ男だってんなら、一夏の方がいいでしょう！ 自慢じゃないですけど、俺はシヤルルと上手くやっていく自信はありませんよ」

「お前と上手くやっていけるのは更識達と鳳ぐらいだろう……。ではなく、織斑の同居人は篠ノ之だ。篠ノ之が謹慎中なのはお前も知って

いるだろう。謹慎中の人間を引越させざるわけにも行かないからな」

それなら一夏を引越させれば、という言葉は呑み込んだ。

千冬さんの視線が告げている。『厄介事だ。お前に任せた』。こいつ、一夏と同室にするより俺と同室にする方がリスクが少ないと踏みやがったな。

俺が何を持つてるのか分かってるのか。企業や国家所属でもないのに専用機と、無人機のコアだぞ。……あ、知らないか。

——と言うか、この為に部屋割りを変更しやがったのか。

「だから今日は少し優しくかったのか……！ 飴と鞭の飴の部分少な過ぎだろ！」

「飴をやっただけでもありがたいと思え。本格的な荷物は明日送り込まれるそうさ。今日の所はデュノアが持ち込んだ荷物で何とかかなるな」

「はい。問題ありません」

「話は以上だ。雪月、お前も少しは普通の学生らしく振舞ってみろ」

いや、俺は何もなきや普通の学生なんですけど。

決闘を申し込んでくる奴が居たり、無人機に襲撃されたりしなきやそこまで変な事した覚えはない。

そして新たな厄介事をぶん投げてきた人に言われたくもないが……まあ、これ以上何か言っても無駄なのは分かってる。

「案内する。行こうぜ、シャルル」

「う、うん。願います、楯無君」

シャルルを連れて教室から出る。一夏は特訓をしにセシリアとアリーナに向かっていった。特訓馬鹿なのはもうクラス中に知れ渡っている。

寮に向かう途中、様々な視線が俺達に注がれた。

俺と一夏にはもう大分慣れてきたこの学園だが、新しい異物であるシャルルにはまだ慣れていない。

「何か……凄いな」

「何が」

「いや……やっぱり男子って、目立つんだなあって」

しみじみと言うシャルル。一夏も最初はこんな感じだったな。

「その内慣れるさ。……着いたぞ」

もうすっかり慣れた帰路が終わり、部屋の前へ辿り着いた。

鍵を開けてシャルルと共に中に入る。

「手前のベッドを使ってくれ」

短く告げて鍵を閉め、部屋の中を進む。

手前のベッドは俺のベッドだ。俺のベッドには何にも置いてないから、そのまま明け渡してしまっても構わないだろう。

俺は奥のベッド——簞が使っていたベッドに座る。……別に、このベッドを他の人に使ってほしくなかったわけではない。

(本当だからな！)

(マスター。私相手にその言い訳は無理があると判断します)

「お、お邪魔しまーす」

自分の部屋に帰ってくるのに『お邪魔します』も変なのだが、そこは放っておこう。

俺は制服の上を脱いでインナー姿になる。堅苦しいんだよ、この制服。

シャルルはちよこんとベッドに座ったまま、周りをきよろきよると見回している。

……さて、もう面倒くさいから始めるか。やる事もあるしな。

「コルセットとか取っていいぞ。苦しいだろ」

そう告げた時、シャルルの動きが止まった。

ぎこちなくこちらを見て、「え？」と間拔けな声を上げている。

「あ、ええと……何の事、かな。僕、コルセットなんて付けてないよ？」

「そっか。じゃあ、質問を変えるか」

この時点では別に『お前が男ではない』と直接告げているわけではない。

故にこの程度で白を切るのだろう。だったらはっきりと告げてやろうか。

「どうして男のふりをしてこの学園に入ったんだ。男性操縦者と接触

するなら女性のままでも問題はなかつただろうに」

「……何を言ってるのかな。僕はれっきとした男だよ?」

シャルルが冷静に努めようとしているのが手に取るように分かる。虐めているみたいであまりいい気分ではないな。

「男はISに乗れないよ。そういう風になっている」

「で、でも。一夏や楯無君は乗れてるじゃない。きっと何か条件があつて——」

「だったら、お前は何を犠牲にした?」

冷たい声が、部屋の中に響く。シャルルが「犠牲……?」と反復して、少しだけ腹が立った。

左目の白い瞳を指して、俺は続けた。

「俺はこの左目の犠牲にして、ISとの適合力を高めるナノマシンを身体の中に取り込んだ。そうでもしなければ、男性はISを使う事すら出来ない」

厳密には、俺との意思疎通が出来る相棒以外のコアは俺に力を貸してはくれない。

“これをしてでも、俺という男性とのコアの相性はよくない。打鉄がここまで力を貸してくれている事に感謝したいぐらいだ。”

だから、俺の入学試験でのIS適性はCランク。適性は目安程度にしかならない事が幸いし、経験によってどうにか相手の上を取っているに過ぎない。

「コルセットで胸を隠し、ハイネックで喉仏が無いのを誤魔化せば、まあ男に見えなくはない。中性的だもんな、お前の顔」

「……っ」

「まあ、お前を?けば嫌でも分かる事だ。お前が男なら、それぐらい問題ないよな」

そのまま、沈黙が流れた。

かれこれ一分ぐらいだっただろうか。シャルルは大きな溜息を一つ吐いた。

溜息を吐きたいのはこつちだ。

「うん……僕は女だよ。名前は、シャルロットIIデユノア」

シャルロットⅡデユノア。それが彼女の本当の名前らしい。

デユノアって苗字も偶然というわけではなく、本当にデユノア社の経営者の一族だそうだ。

まあ、そこまで聞けば大体の目的は推測出来る。

「男性操縦者による会社の宣伝と、俺と一夏のデータ取りってどこか……ああ、そうだ。第三代機も開発しないといけないから、〃白式〃のデータも盗み出してこいとか言われたか？」

だから、別に女性のままでも問題なかっただろうに。

寧ろ身体を使つて落とせる分その方が有利だろう。まあ、その場合でも俺と同室だったら意味がないが。

「どうして、第三代機の事情まで……」

「〃ラファールⅡリヴァイヴ〃以降のフランス製ISの話聞いた事がないからな。未だ正式ロールアウトをしていなくても噂ぐらいは流れる。それもないって事は相当遅れてるんだろ、そっちは」

欠伸をしながら説明すれば、どうやら大体当たりだったらしい。

しかし、一日でばれるようなこの計画を考えたのはどこの誰だ。もうちよつとやりようがあっただろうに。

ともかく、正体を判明させて牽制も済んだし、これ以上はどうでもいい。

「僕は……妻の子なんだ」

シャルル——シャルロットの眩きに興味はない。

どうしよう、整備室にでも行こうか。無人機のコアは持ち歩いた方が安全だろうな。

「引き取られたのが二年前。丁度お母さんが亡くなって、父の部下がやってきたんだ。検査の過程でIS適性が高い事が分かった僕は、非公式のテストパイロットになったんだ」

「食い扶持見つかつて良かったじゃないか」

施設出身の身としては羨ましい限りだ。

破滅的な未来を選ぶ事を止めた俺としては、将来の食い扶持を探すのは重要な事だ。

しかしシャルロットにとってはいい思い出ではないらしい。沈ん

だ様子でぽつりぽつりと続けた。

何時まで聞いてればいいのか。同情を誘ってるなら時間の無駄だ。

「で、お前はどうすんの。強制送還は多分叶わないぜ」

「え？」

IS学園はどの国家にも属さず、干渉もされない。

仮に男装がばれ、フランスの本社に呼び戻される命令があったとしても、IS学園に居る限りはその命令に従う義務はない。

そもそもだ。男性操縦者の情報を盗もうとした危険人物を、IS学園がそうそう本国に返してくれるわけがない。

「俺としては別にお前が何をしようが知った事じゃない。生憎家の事情を受け入れる事もせず、唯流されてるような奴には興味もない」

冷たいようだが、それが俺にとつての事実だ。

シャルロットと刀奈は似ても似つかない。刀奈は『更識』としての役目を受け入れて頑張っている。

だから関わろうとも思わない。やりたい事もやるべき事もないのなら、流されてるままの方が幸せだろう。

「……なら、僕はどうすれば良かったの」

「知らない。自分で決めろよ。俺が服脱げって言ったら従うのかお前は」

シャルロットは顔を赤くして黙り込んだ。こういったセクハラには弱いらしい。

「……お前は何がしたいんだよ。それすらない奴が何かを残せると思うなよ」

「僕……私が……したい事」

『僕』なのか『私』なのか知らないが、シャルロットが呟いて天井を見上げた。

「……ねえ、君って何者なの？ どうして私の男装を見破って、デュノア社の目的も把握してるの？」

「デュノア社の方は完全に予測が当たっただけだ。まあ、男装の方はあれだな。経験則ってところか」

「経験則……？」

不思議そうにシャルロットが聞いてくる。

経験と言われても確かに分からないだろう。……まあ、別にいいか。千冬さんにはもうばれてるし。

俺はシャルロットの秘密を知っている。下手な事も出来ないだろう。

……それにばれたところで、声の説明が付かない時点で世間は信じないだろうし。

「包村帯って聞いた事ないか」

「あるよ。有名だもん。国籍不明で第二回モンドグロツソに登場した『包帯の乙女』。左目と首に包帯を巻いてて、黒い髪と赤い右目が特徴の——」

そこまで言って、シャルロットは気付いたらしい。

言葉で肯定せず、俺は腕を組む。

シャルロットが俺の顔をじっと見つめていた。面影があるのは当然だ。だって本人だもん。

「本当にあの……包村帯なの？」

「本名は雪月楯無だけどな。偽名は包村帯の方」

ベッドに身を放り出し、横になる。

ふと、簪の匂いがした。今日の朝まで簪が使っていたベッドだから当然だが。本人が居ないだけなのに、どうしてこんなにも存在を感じてしまうのだろう。

「楯無君」

簪と入れ替わりで俺との同居人になったデユノア社のスパイが俺の名を呼ぶ。

「何だ」

「私も……やりたい事を見つけていいのかな」

そんな事を言うようになったのは、何かしら心境の変化があったのかも知れない。

それを見つけられるかはシャルロット次第だし、シャルロットと向き合うのは彼女がやりたい事を見つけてからだ。

「好きにしろ。一々許可取るような事でもないだろ」

簪の匂いを感じて目を閉じる。

(唯の変態だな、俺)

(ご安心ください、マスター。マスターは簪さんと刀奈さんの事になるとむつつりの変態です。簪さんとはお互い様ですが)

(悪い、否定出来ない)

相棒との心の会話もそこに、俺は目を開けて「打鉄」からウィンドウを展開する。簪が迎えに来るまで「打鉄」のデータ整理でもしておくか。

暫くデータの整理をする。どうやら軌道データに偏りがあるようだ。回避パターンがすれ過ぎで、少しでも反応が遅れば危険のようだ。これじゃ簪に渡した時のランダム回避パターンに影響がある。もうちよつと安定した回避を心掛けるかな。

「……『帯』」

「あん？」

今後の稼働データの収集傾向を見定めていると、突如偽名の方の名前を呼ばれた。

首だけ起こしてシャルロットの方を見れば、彼女はずっとこっちを見ていた。

だが、先程までの諦めてしまったような目ではない。別にいい目をしているわけでもないが。

『帯』って、呼んでもいいかな」

「……別にいいけど」

理由を聞く事もせず、許可する。俺の呼び方なんてどうでもいい。「僕の事も、『シャル』って呼んでくれるかな。……お母さんがくれた名前を、大切にしたいから」

母親との記憶。五歳の頃に両親を亡くした俺にはもう妹しか家族が居ないし、そもそも母親との記憶なんて憶えてない。

だから彼女の心は分からないし、それがどう彼女の支えになるのかも分からないが。

「ああ、そう。……ま、そういう事なら呼ぶよ。シャル」

「うん。ありがとう、帯」

あれだけ散々貶されても、名前を呼ばれただけで嬉しそうに笑う
シヤルの気持ちは——蔑ろにする事もないだろう。

17. 押し付け厄介案件

「――なし。楯無……」

誰かに身体を揺さぶられた。遠慮がちで、優しい揺らし方だった。だけど、どこか起きる気にはならなかった。何ならこのまま揺さぶられていたい気分だ。

意識のどこかで聞こえる、俺の名前を呼ぶ声が心地いい。

「……もう。寝坊助？」

呆れたようなその声に甘えてしまいたくなる。

――ああ、そうか。俺をこんな気持ちにさせる人はそうは居ないし、俺を呼びに来る人はきつと一人だ。

ゆつくりと目を開けて視界を確保すると、飛び込んできたのは水色。

それを俺は知っている。何しろこの部屋ですつと見続けてきた色だ。

「かん、ぎし……」

覚醒していく意識から、無意識に名前を呼ぶ。

俺の寝顔を覗き込んでいた簪は「うん」と返事をして、優しく俺の前髪を払った。

「ああ……『打鉄』のデータ整理してたら、知らない内に眠ってたのか」

「よく眠っていた……今日は疲れた？」

確かに今日は転入生が来たり、山田先生と戦闘実演をしたり、シャルの正体を暴いたりイベント盛り沢山だった。知らぬ間に疲れていたのかもしれない。

……まあ、一番の要因は簪の匂いに包まれていたせいだろうが。

「あれ、そーいやシャルは？」

『シャルロットさんは織斑一夏が夕食に誘いました。マスターは眠っていたので置いていかれましたが』

一夏なら簪が迎えに来ると知っているだろう。別に置いていかれたわけでは……ないよね？

「何か怪しい動きをしてたか？」

『いいえ。眠ったマスターを見つめ続けていました。彼女の専用機が起動した様子もありません。ですが一度だけ、今の簪さんの様にマスターの顔を覗き込んでいました』

何がしたいんだあいつは。デュノア社のスパイ的な事をしていなかったなら別に何だっていいが。

暫くは眠りが浅くなりそうだ。施設に引き取られた当初を思い出す。あの時は一人か、傍に妹が居ないと碌に眠れなかった。

俺と相棒がシャルの対応を検討していると、簪は不思議そうに尋ねてくる。

「シャルロット……？ 楯無の同室の人？」

そういえば簪は、自分が引越した初日に新しく同居人が決まった事を知らなかったのか。

しかもそれが転入生で、挙句性別を偽っていた女子だったとは考えもしないだろう。

「……話せば長いんだが」

俺は簪に事情を説明した。それはもう一から十まで。

別にシャルには『誰にも言わない』なんて約束はしてない。誰彼構わず言うつもりもないが、必要ある相手には言うのを躊躇う事もない。どうせ後で千冬さんに報告しなくちゃならないし。

——事情を説明し終わると、そこには微妙に機嫌が悪い簪さんが。

……地雷を踏み抜く事上手いなあ、俺。

「シャルに……帯。随分、仲良しそう」

「……そうか？ 俺は呼んでって言われたから言っただけなんだけど。寧ろ友好度は零だな、現時点で」

別に今のシャルと仲良くするつもりもないのだが。一夏相手にスパイをするなら別に好きにすればいいが、俺に対してはさせるつもりはない。

シャルル——デュノア社のスパイと話す事はない。話すとしたら、やりたい事を見つけた少女——シャルロットⅡデュノアとだ。それ

が何時になるのかは知らないが。

俺は簪と刀奈の事で手一杯なんだ、構ってられるか。

「気を付けてね……『黒雷』の事も、狙ってるかも」

「それは気を付ける。あいつのやりたい事がスパイのままだったら、その時は潰すよ」

今はまだ存在すら知らないだろうけど、『黒雷』の事を狙うのだったらそれは俺の敵だ。

俺の翼を狙うのであれば、全力で排除させてもらう。

「……まあ、それはおいおいとして。一番気になってた事、訊く……」
何だろう。他に聞く事でもあったらどうか。

簪は顔を赤くしながら、今までの勢いはどこに行ったのかと問いたくなるレベルでもじもじしていた。

「な、何で……私が使っていたベッドで、寝てるの？」

そういえばそうだった。俺は今、簪が使っているベッドに引越したんだった。

その理由は俺のつまらない拘りだが、それを本人に告げるなんてどんな罰ゲームだ。

しかし簪は俺が答えるまでこの話題から離れてくれはしないようだ。とんだ詰み状態である。

……まあ、ISスーツの一件で色々とはっちゃけてしまった感はある。
(言っても大丈夫かな)

(今更です。私からすれば、マスターと簪さんはむつつり同士でしかありません)

俺はともかく、簪まで酷い言われようだ。いや、確かに知らず知らず着替えを覗かれてたりはしたけど。

とにかく、言わなければならぬらしい。こうなればもうやけくそだ。

「……だって、簪のベッドが誰かに使われるの嫌だったし」

「そ、そう……」

簪は更に赤面して俯いてしまった。恐らく俺の顔も同様だろう。

頬が恐ろしく熱い。

「その、ベッド……私の匂い、付いてない？」

付いてます。めっちゃ付いてます。その匂いに包まれながらさっきまで寝てました。

どう考えてもやばい奴だから流石に黙っていたのだが、俺の表情で伝わってしまったのだろうか。簪は顔を極限まで赤くしながら、俺の事をじとーつ、と睨んできた。

「えっちじゃなくて……変態？」

「相棒曰く、お互い様らしいぜ。流石に簪は俺の匂いを嗅いだりはしないだろうけど」

ははっ、と自嘲めいて告げてみれば、簪の反応が無かった。

顔の赤さを維持したまま、俯いて両手で顔を覆ってしまった。

引かれているわけではないらしい。……という事は、だ。

「……簪？　もしかして……」

「もう、死ぬ……死ぬしかない」

膝から崩れ落ちてベッドに上半身を投げ出した簪。……もう何も言うまい。と言うか人の事を言えない。

いやまさか、本当にお互い様だったとは。道理で偶に俺が起きた時と掛布団の位置が微妙にずれてるな、と思ったんだ。この部屋にカメラや盗聴器の類が無くて良かった。

しかし、これでは不公平だろう。俺は簪の匂いに包まれながら眠るのに、簪はそうではない。

明らかに俺の思考がいかれ始め、理性が全力で仕事を放棄していた。

俺はいそいそと制服を脱ぎ、中に着込んでいたワイシャツまで脱ぐ。流石に寒いのでその後また制服を羽織るが。

脱いだワイシャツを簪に羽織らせると、漸く簪は顔を上げた。

「これ……今、楯無が着てたの？」

「……要る？　パジャマにでもと思ったんだが」

最高に頭の悪い言葉を告げると、簪は再びベッドに突っ伏して顔を隠す。耳まで赤いのは言わずもがな。

そうしてたつぷりと一分ぐらいうーうー唸った後。

「偶に……交換してもいい？」

ぼそぼそと告げるその言葉に、本当にお互い様だなと思った。



簪と夕飯を食べ、お互いの部屋に一度戻った後。簪は大浴場へ入浴しに行った。

髪を乾かしてくれる約束は未だに継続中らしい。シャルが居ようとお構いなしだな。

俺もさつさとシャワーを浴びなければならぬのだが、その前にやる事があった。

「千冬さん、校舎近くのベンチで待つて言つたよな」

『はい。シャルロットさんの正体の報告、そして今回の報酬の要求を手早く済ませましょう』

やる事は相棒との会話の通りだ。こんな面倒はさつさと終わらせてしまおう。

そしてさつさとシャワーを浴びて髪を乾かしてもらおう。

そう思いながら千冬さんとの待ち合わせ場所へ向かえば、道中である少女が居た。

見た事がある……と言うか、今日初めて見た顔だ。

「……何してんだ、ボーデヴィツヒ」

月明りを浴びて輝く銀髪が印象的な少女——ラウラ||ボーデヴィツヒは、俺の声に振り向いた。

だが、明らかに歓迎されてはいない。無表情ながらも鋭く睨むその赤い瞳はナイフの様に感じられた。

「……貴様か。今の私は機嫌が悪い。早急に消えろ」

「機嫌が悪くなくてもナイフぶん投げてくる奴に言われてもなあ。まあ、お前には用はないし早急に失せるけど。じゃあな」

そうして俺はボーデヴィツヒの横を通り過ぎようとする。この先に千冬さんが待っている。

「——待て」

だが、俺の行進は足下に刺さったナイフによって縫い付けられた。ボーデヴィツヒの方を向けば、やはり視線はナイフのままだ。眼光で何回俺を殺せば気が済むのだろう。

「一々ナイフを投げるな。出席簿と違って当たったらやばいんだ。本気で対処しないとイケないだろ」

「知った事か。……貴様、包村帯というIS乗りを知っているか」
意外な奴から意外な名前が出た。有名だな包村帯。

そして知ってるも何も本人だが、今の俺は雪月楯無。あくまで他人である。

「ああ。第二回モンドグロツソに出場した女性だろ？ 確か、準決勝で棄権したって」

「そうだ。私はその女を探している」

ボーデヴィツヒの感情が初めて揺らいだ。氷の様に冷たい彼女が初めて見せた感情。

——それは、怒りだった。

ナイフの様な赤い瞳は、今は紅蓮の様に燃え上がっているように見える。

「……見つけて、どうする気だ？」

訊きたくないが訊くしかないだろう。他人である内に情報収集しておかなければ、いざ発覚した時には手遅れになっている可能性がある。

ボーデヴィツヒは俺の足下に投げたナイフを拭き抜き、塵を振り払いながら告げる。

「無論、倒す。奴の準決勝の相手は教官だった。教官が『零落白夜』を発動し斬り捨てようとした瞬間、奴は棄権したのだ。自らの敗北を受け入れる事が出来ず、教官の前から逃走し、教官の名誉ある戦いに泥を塗った！ ……奴だけは何としても見つけ出し、教官の代わりに私が否定しようのない敗北を与える」

絶対にはれないようにしよう。そう心に誓った。
ボーデヴィツヒ、すっごい面倒くさい奴だった。

とにかく話題を逸らして包村帯の事は忘れてもらおう。

「そういや、その眼帯の下はどうなってるんだ？ ファッションじゃないだろ」

「貴様には関係ない」

「俺もナノマシンで左目潰れてんだけど、お前もそういう類？」

しれっと言ってみれば、ボーデヴィツヒが反応した。どうやら当たりの様だ。

「……貴様も、越界の瞳を？」

確か、ドイツがISへの適合性向上の為に行っていた処置の事だ。

肉眼へのナノマシンの移植なんていかれた事、束姉以外にやろうとする奴が居るんだな。

まあ、俺の左目の場合はナノマシンとの相性が良好過ぎたせいで起きてしまった事故だが。束姉とドイツの科学力の差である。

そういった意味では、俺とボーデヴィツヒの左目は似たようなものなのだろう。

「越界の瞳が何なのかは知らないけど、俺はISとの適合性を高める為だ。似た者同士、よろしくな」

（知ってる事を知らないと告げ、仲良くする気もないのに『よろしく』と言うマスターのあまりの白々しさに、織斑一夏の監視をしていた頃を思い出します）

相手は俺に恨みがあるドイツ軍人だ。そういう軍事機密は知らばつくれるに限る。

握手を求めて手を差し伸べてみるも、ボーデヴィツヒは応えない。そういや俺の事は包村帯に似ているから認めないんだったか。似ているどころか本人だが。

俺は手を引っ込めて、ポケットの中に突っ込む。転校初日から仲良くする社交性があったらナイフは投げてこなかったな。

「じゃ、俺はもう行くわ。お前も外出禁止時間になる前に部屋に戻れよ。寮長はちふ——織斑先生だから、迷惑掛かるぞ」

「忠告は受け取っておこう。貴様も教官に迷惑を掛けるな」

それを言うには遅過ぎた。ぶつちやけ千冬さんに迷惑を掛けて遊

ぶのが趣味と化してしまっている。

寮に向かつて歩き出したボーデヴィツヒを見送っていると、後方から足音が聞こえた。

『マスター。後方に織斑千冬が存在を確認しました』

相棒が「黒雷」から直接声を出して俺に知らせた。千冬さんに対して、自分はここに居ると威嚇しているようだ。

俺を守る事に関しては過保護な相棒を指先で撫でてから振り返れば、相棒の言葉通り千冬さんが歩いてきていた。

「おや、千冬さん自らお迎えですか？」

「遅いからもしやと思いい様子を見にくれば、ラウラに絡まれていたのか」

そう言いながら千冬さんは何かを投げってくる。キャッチすれば、それは微糖の缶コーヒーだった。

「飲め、楯無。私の奢りだ」

「……これで迷惑料とか言わないだろうな。シャルの件、貸し一つだぜ」

「構わんさ。さあ、飲め」

何だ、やたら勧めてくるな。まあ、千冬さんなら毒とか入れてるわけでもないだろう。言われた通りにプルタブを開けて缶コーヒーを飲む。ベンチ座らせてくれよ。

さて、とりあえず千冬さんにはシャルの件を報告した。報告し終われば、千冬さんは顎に手を添えて神妙な面持ちだった。

「成程、大方の読み通りだな。それにしても一日で終わらせるか、お前は」

「面倒だったからな。で、学園としてはどうすんの」

「……今はまだ、特に対応する事はないだろう。デュノアが何か行動を起こさない限り、状況を刺激しない方がいい」

強制的に退学とかはしないらしい。お優しいこった。

「ともかく、ご苦労だった。暫くは監視を続ける」

俺は千冬さんの私兵ではないのだが。ま、千冬さんには俺の事を学園に黙ってもらってるから、やらない事もないが。

但し貸し一つは変わらない。シャルを押し付けてきた事自体は根に持ち続けてやる。

俺がこの貸しを何に使おうと考えていると、千冬さんが何でもないように言ってきた。

「さて。ラウラの事も頼んだぞ、楯無」

「……は？」

「だから、デユノアに続きラウラの事も頼んだと言ったんだ」

「この人は一体何を言ってるんだろう。」

「ボーデヴィッツヒは無理だろ。初めて会った相手にナイフ投げてくるような奴だぞ」

「だが、先程は話が盛り上がっていたようだが？」

「包村帯への恨みを聞かされてただけだ。後は左目のナノマシン談義。それも会話らしい会話じゃなかったけど」

最終的に握手を拒否された。……いや、考えれば考える程無理だろこれ。

しかし千冬さんはそうは思わないようだ。

「ラウラの自己紹介を見ていただろう。あいつは興味のない相手にはああいう態度を取る。恨み口であれ、会話らしくない会話であれ、ラウラから何か行動を起こしたというだけでお前には十分な可能性がある」

「じゃあ一夏でいいだろ。挨拶がビンタだった分、まだ友好的にいけそうだぜ」

「お前に拒否権はない。もう先払いの報酬を受け取っているからなにやりとそんな事を言われても、俺は何にも受け取って——。そこまで考えて、俺は自分が握っているものを思い出した。

やたら飲むのを勧めてきた微糖の缶コーヒ。今はもう空っぽである。

「……嵌めたな」

じろりと睨んでも、千冬さんは涼しい顔で受け流すだけだ。

「そう怒るな。何もクラスに馴染ませろとは言わんさ。唯、ラウラが何かしらを発散できる相手であってくれと頼んでいる」

「何かしらあって……それこそ一夏でいいだろ。ああいう輩は真正面からぶつかってくる相手の方が合ってる」

「だから頼んでいる。あいつは一夏の事にも執着しているが、包村帯にも執着しているIS乗りだからな」

そうして踵を返す千冬さん。

完全に去る体勢になる前に、一度だけ振り向いてこう言った。

「お前はISにだけは真っ直ぐだと、私は知っている」

嘗て、世界最強を決める舞台で刃を交えた相手が言った言葉。

織斑千冬と雪月楯無の空は相容れない。だから、俺にとって千冬さんの言葉は意味のないものだ。

そう思っている筈なのに、その言葉を否定するわけにはいかなくて、やり場のない気持ちを引き缶と共に握り潰した。

18. 今はない言葉

「ふーん、そんな事があったのねえ」

朝。登校時間前の生徒会室。

更識刀奈は『理解』と書かれた扇子を広げながらそう言った。

生徒会会長である刀奈は自らの席である生徒会長の椅子に腰掛けて、壁に寄り掛かりながら欠伸をしている雪月楯無へ視線を向けた。

「……面倒くさい。投げ出したい」

普段の良く言えばクール、悪く言えば冷めた——否、唯目が死んでいる楯無は、普段は言う事のない泣き言を容易く漏らした。

更識簪や凰鈴音には漏らさない泣き言が、年齢の差もあるからか更識刀奈の前ではするりと出ていた。

「あらあら、お姉さんには妹は居ても、弟は居なかったと思うんだけどな？」

昔からの癖なのだろう。五歳の頃から両親が居ない彼女にとって、弱みを見せたり甘えられる相手は身内には存在していなかった。故に同級生であった更識簪の姉である、一つ年上の刀奈は彼女の性格も相まって彼にとってそういう対象になっていた。

その背景を理解している刀奈は昔を懐かしみつつ、椅子から立ち上がって楯無へと歩み寄る。

「いきなり話があるって言うから、てっきり告白されるのかと思ったわ。まさか簪ちゃんとのいちやつきを聞かされるなんてね」

もう、と羨ましそうに言う刀奈だったが、一体どちらの立場が羨ましいのかは怖くて聞けずにした。

「……シャルとボーデヴィツヒの件は無かった事になってるのか」

寧ろその件が本題だったのだが、刀奈にとってはどうでもよい事だったようだ。

「ボーデヴィツヒの件は俺に押し付けられただけとして、シャルの件は本当にいいの？」

「織斑先生が何かあるまで現状維持って判断したんでしょ？ なら生徒会としてもそれに従います。それにね、楯無君ならどうにか出来る

気がするから」

「……過度な期待はしないでね。今の俺は何の後ろ盾もないんだから」

楯無の立場は二番目の男性操縦者でしかない。織斑一夏のように織斑千冬という存在がいるわけでもなければ、倉持技研といった企業や研究所に所属しているわけでもない。

社会的な立場で言えば明らかな弱者であり、そのせいで堂々と専用機を使う事も出来ない。

そんな自分が何が出来るのかは至って謎だが、なるようにしかならないだろう。そもそもがシャルロットの入学を許した学園側の過失であると、楯無は思考を止めた。

それより、今も着々と距離を詰めてきている刀奈に意識を集中するべきだ、と楯無は脳味噌を殺した。

「……近くない?」

「だって近付いているもの。逃げちややーよ?」

逃げようにも既に壁を背負っている。そもそも楯無にとって逃げる理由がない。

更識姉妹なら何をされようとウェルカムだった。

「ふふ、捕まえた」

捕まえるも何も逃げていないのだが、楯無は所謂壁ドンと呼ばれる体勢に追い込まれた。

爽やかな匂いを感じる。甘く柔らかい簪の匂いとは正反対だった。

明らかにじやれてるな、と楯無は煩惱を振り払う。遊ばれてるのだから反応すれば思う壺だ。それも悪くないと思っている辺り、もう色々手遅れなのだが。

「捕まった。それで、かた——」

「だーめ」

「……更識先輩は、一体何をするつもりですか?」

名前を呼ぶ事は相変わらず許されない。その事実には拗ねながら、楯無は刀奈へ問う。

刀奈はにやりと笑った後、更に楯無との距離を詰めた。もう殆ど密

着である。

「簪ちゃんを虜にする匂い、お姉さんにも嗅がせなさい？」

「人それぞれだと思うけど……偶々簪にとって俺の匂いがクリティカルだっただけで」

「大丈夫よ、私は簪ちゃんの匂いもクリティカルだから」

何が大丈夫なんだろう、と楯無は疑問に思ったが、自分も刀奈の匂いがクリティカルだったのを思い出して黙っておいた。

幼馴染の姉妹の匂いを意識してしまうのは些か罪深い性質……もとい性癖な気がするが、片方からは許可が出ているので気にしない事にした。

そんなこんなで密着を通り越して首筋へ顔を埋めた刀奈。傍から見ればどう見ても事案だった。

「どこがいいのかしらね……すーっ……はーっ」

遠慮なしに匂いを嗅ぎ始めた刀奈。息を吸うのはともかく、吐き出される息が生暖かくて非常にくすぐったい。

まあ十秒も続かないだろう、と楯無は我慢していたのだが、十秒どころか一分経過しても刀奈が離れる様子はなかった。

「……大丈夫？」

「んっ……これは思った以上にクリティカルね」

頭が悪い感想を頂きながら、『姉妹って好物が似てるものなんだな』と頭の悪い感想を抱いた楯無。

刀奈によって何かを堪えるように強く握られていた自らの制服。皺になる事など微塵も考えていなかった。

残念ながら、楯無は更識姉妹の事になると思考回路が極限まで衰えてしまう傾向にあった。

「……もうちよつとだけいいかしら」

「別に、これぐらいなら何時でもどうぞ」

「こっそりお姉さんの匂いも嗅いでいいわよ？」

朝から何やってるんだこの二人。

人で遊ぶ傾向にある刀奈とそれを全力で受け止める楯無。救いようのない組み合わせだった。

お互いむつつりで暴走気味である簪との組み合わせも救いようがないのは、普段の生活から分かりきった事だった。

そもそもこの距離で匂いを嗅がないのは不可能だ。先程から楯無は刀奈の匂いを感じ続けていた。

その爽やかな匂いが楯無を安心させる。簪とは正反対でも、その効能は同じだった。

警戒しているシャルロットと同室だったせいで眠りが浅い。簪と同室だった頃の熟睡には程遠い睡眠の質。朝早くから生徒会室にて刀奈と話す為にした早起き。そして、今嗅いでいる安心する匂い。

「……あら？」

不意に掛かった体重により、刀奈は楯無の顔へ目線を向ける。

穏やかな寝息を立てて、子供の様に安らかな表情で眠っていた。

「……お疲れ様。朝食の時間になったら起こしてあげるわ」

優しい笑みで楯無を受け止めて、ゆっくりと地べたに座り込む。

頭を撫でながら、眠ってしまった幼馴染が安心出来るように、そつと抱きしめる。



「お姉ちゃんの匂いがする」

簪は半目でそう言った。

朝の訓練等の理由でお互いの朝が別々だった時、朝食を共に食べる為のいつもの待ち合わせ。

そうして食堂前で待っていた簪と合流したのだが、開幕これである。

「知らない間に眠ってて、起きたら抱きしめられてた」

「………どういう事？」

簪は俺が刀奈に事情を説明する為に生徒会室に行っていたのは知っている。

俺も何をどうしたらこの結末になるのかは分からない。匂い嗅ぐとかそんな提案受けたやつ誰だよ。俺だよ。

簪はさっぱり分からない様子で俺を半目で睨み続けている。何度
も言うが俺もさっぱり分からない。

『簪さんと同じような理由です。第三者からすれば、どっちもどっち
かと』

混雑している食堂では相棒の声も雑踏の一つに過ぎない。一言二
言程度ならば怪しまれる事はないだろう。

相棒の言葉に簪は「まったく、お姉ちゃんたら……！」と呆れてい
た。人の事は言えないぞ、お互い。

もやもやした気分は晴れないのか、簪は不満げにこちらを見てい
る。矛先をどこに向けていいのか分からないのだろう。

「……別に、大丈夫。お姉ちゃんは楯無のシャツを持ってないけど、私
は持つてる。私が一歩リード」

「ゴールドどこなんだ、それ」

あと全然大丈夫じゃない。本当に唯の変態だからな？

もうこの問題を考えるのは止した方がいいだろう。簪が満足して
るならそれでよし、それが世界の真理である。

二人して食堂の朝食セットを頼む。俺は適当に鮭の定食。簪は少
し悩んでトマトレタスサンドにしていた。そういえば簪は鶏肉以外
の肉がそう好きではなかった筈だ。ハムもそんなに好きではないの
だろう。

テーブルに座って朝食を食べ始める。今日も脂の照りがいい鮭が
美味そうだ。

「いつも思うけど……結構食べるよね、楯無」

簪は自分の朝食と俺の朝食を見比べた。俺は別に食べなくても平
気だからこの量なんだが、一夏はもつと食べる。

まあ、それでも簪のサンドイッチだけはちよつと量が少な過ぎる気
がするが。

「男の子……なんだよね」

「元包村帯だけだな。最近は包村帯包村帯煩くて敵わない」

遂に俺の事を『帯』と呼び始める奴まで出てきてしまった。人の呼
び名の由来なんてそうそう訊くものでもないから大丈夫だろうが。

「包村帯だと?」

「今日の鮭は美味いぞ。簪も食べるか?」

「う……うん。でも、箸がない」

「包村帯の話をしていたのかと聞いている」

「食べさせてやるよ、ほら」

「えっ、いいの? ……あーん」

「質問に答えろ」

視界の隅にあつた銀髪を完全に無視して簪に鮭を食べさせる。簪は少し顔を赤くしたが、嬉しそうに食べている。

天使の笑顔を堪能した後で、テーブルを挟んだ向かいに居る不機嫌の方に向き直る。このままだとナイフが飛んでくる。

「朝飯ぐらい静かに食わせてくれないか。……包村帯の話はしてない。名前を出したただけだ」

ボーデヴィツヒは朝食が乗ったトレイを持っていた。当たり前だが食堂に居るのだから朝食を食べに来たのだろう。

残念な事に俺の向かいの席は空いている。誰かスライディングで入ってこないかな。

しかし祈りも虚しくボーデヴィツヒは俺の前の席に陣取った。さらば平和。

「何故包村帯の名前が出る。そうそう出る名前ではないが」

「もう憶えてない。最近物忘れが激しいんだ」

「ふん、その歳でもう惚けたか。ナノマシンのせいかな?」

ナノマシンにそんな効能はない。だが、こんな軽口を叩いてくるのは意外だった。

千冬さんの言葉を思い出した。確かにボーデヴィツヒが他の相手にこんな風に何かを言ってくるかは考えにくかった。

鮭を堪能し終わった簪が、漸くボーデヴィツヒの方を向く。昨日の時点で特徴は教えてあるので、彼女がボーデヴィツヒだと気付いたよ
うだ。

「私……更識簪。四組で、日本の代表候補生」

「ラウラーボーデヴィツヒだ。ドイツの代表候補生」

「おや、千冬さんの命令が無くても自己紹介をしたぞ？」

「何故包村帯の話をしていたか、貴様は憶えているか」

「楯無……何でだっけ？」

簪は惚けてくれた。ちよつと誇らしげなのが可愛い。

ボーデヴィツヒはそれ以上の言及は無意味だと悟ったのか、それ以上包村帯については訊いてこなかった。

無論会話はない。特に共通の話題もないのだから当然の事だ。

しかし、俺には千冬さんから下された『ボーデヴィツヒと関われ』というミッションがある。決して押し付けられた厄介事ではない。

何か会話をしなければならぬのは明白なのだが、その話題をどうしたものか。

（マスター。織斑千冬の話題はどうでしょう）

（どういう事だ？）

（織斑千冬はドイツで彼女の教官を務めていました。その頃の織斑千冬をマスターは知りません。そして織斑千冬に興味があると、ラウラⅡボーデヴィツヒへ好印象を与える事が出来ます）

成程。正直千冬さんには全く興味がないのだが、ミッション達成の為には聞かなければならぬらしい。

腹を括ってボーデヴィツヒの名前を呼ぶ。反応したボーデヴィツヒへ聞いてみた。

「なあ、千冬さんってドイツに居た頃お前の教官だったんだろ？ どんな感じだったんだ」

「それを聞いてどうする」

「どうするも何も、俺と千冬さんはIS学園に入る前からの知り合いなんだよ。知り合いが知らない間に何してたかとか、気になっても不思議じゃないだろ？」

心にもない言葉を吐けば、ボーデヴィツヒは一応納得してくれたようだ。

静かな口調で、ボーデヴィツヒは当時を振り返る。

「教官はドイツ軍にISの教官として赴任され、私を気に掛けてくれた。……当時の私は不要品だったからな」

「そりやまた、不要品の代表候補生なんて聞いた事ないぜ」

「黙って聞いていろ。私は教官のおかげで、今ではドイツ軍のIS部隊を率いる程まで上り詰めた。関係ない話だがな」

成程。こいつが千冬さんを崇拜しているのはそういう事か。……まあ、自分を救ってくれた人を特別に想ってしまうのは無理もない事だ。

俺も経験がある。当然相手は束姉だ。あの人は今何をしているのだろうか。逐一「白式」のデータは送っているが、届いているのかも定かではない。

「教官は訓練の合間に話をしていた。日本に残してきた弟が居ると」「二夏の事か。で、お前にとっては千冬さんが二連覇を逃した汚点だ」と

ボーデヴィツヒは頷く。いやテロリスト相手にIS無しで攫われるなって結構無茶だぞ。

俺も助けようにも包村帯として行動するには限界があったから見ているしか出来なかったが。

「——そして、もう一度だけ戦い、決着を付けたい相手が居るとも言っていた。それが包村帯だ」

「ああ、そういう事なのね」

俺は納得した。別に千冬さんが勝ったんだからいいじゃん、そして降参を許さないとか大人しく斬られるの嫌がつて当たり前だろ、と思っていたのだがこういう理由があったのか。

……全部千冬さんのせいじゃねえか！

「教官と包村帯の試合の映像を何度も見た。奴は教官と互角に渡り合っている、最後には教官の背後まで取ったというのに、奴は降参を選んだ。あのような態度、教官との試合への侮辱に他ならない……！」

成程なあ、と納得した。

そんな事言われても、こちらとしては戦う理由が無くなってしまったのだから戦うわけにもいかない。

俺の空はあそこにはなかった。たとえ世界最強になったとしても、二人の笑顔がないのなら意味がない。

「あれが教官の現役最後の公式戦だった。IS乗りとしての血が滾っていた。それを棄権で済まされたとなれば、悔やんでも悔やみきれんのだらう……」

ボーデヴィツヒの言い分は分かった。こいつは極端だが優しい奴なのだろう。

自分以外の事でここまで怒れる人間はそうは居ない。国籍不明の相手を探し出そうとするなんて相当だ。

「一夏の奴が好きでさ、俺もその映像はよく見てた……まあ、だからどこかの誰かの代わりに言うけどさ」

俺は告げるしかないのだろう。

今はもう居ない彼女。世界第三位の実力を持つ謎の女性、包村帯。その彼女が求めていた空。

「戦うだけならISが無くても出来る。折角飛んでるんだ、大切な人が笑ってる場所に向かっていきたいだろ」

「……くだらん。そんなもの弱者の言い訳に過ぎん」

「かもな。忘れてくれ」

ボーデヴィツヒはトレーを持って立ち上がる。朝食は終わりのようだ。

全力で俺がデイスられていたのだが、何故か隣の簪は笑顔だった。去っていくボーデヴィツヒを見ながら、簪は告げる。

「……きっと飛べる。楯無の大切な人が笑ってる空に」

「……じゃあ。笑っててくれ、簪」

告げた言葉が恥ずかしくて、俺は急いで味噌汁を飲み干した。

19. 五割増しで

唯一つの案件を除き、恙無く放課後になる。

楯無は第二アリーナにて更識刀奈と共に居た。無論刀奈の訓練に付き合う為だ。

厳密には他にも織斑一夏、凰鈴音、セシリアⅡオルコット、そして謹慎から明けた篠ノ之箒が居るが、それと楯無は別のグループである為、彼等の訓練に同行する事はない。

お互いの存在には気付いてはいるが、楯無の方は無理に関わるような事はせず、一夏の方は鈴音とセシリアによる厳しい機動訓練により気に掛けている暇はない。

「一夏って、本格的にISに乗ってまだ二ヶ月なんだよね。それなのにあの動きは凄いなあ」

そして、楯無のグループには想定されていない人物が二名居た。

空中で軌道を描く一夏を眺める想定されていない片方——シャルロットⅡデュノアへ、楯無は怪訝そうな視線を送っている。

「仕事熱心だな、シャル。デュノア社の経営は順調か？」

「なっ……もう、そんな事してないってば！ 意地悪だよ、帯」

顔を真っ赤にして慌てるシャルロットに対し、溜息を吐きながら「半分は冗談だ」と答える楯無。

今日一日、シャルロットに怪しげな動きはなかった。少なくとも楯無の見えるような所では何かをしている様子はなく、「黒雷」による記録媒体の稼働スキャンにも引つ掛からない。

至って普通の学生。それが今日のシャルロットⅡデュノアだった。そうであるからこそ、楯無にとっては警戒を解く事は出来ない。楯無自身のデータを取る事は構わないが、「黒雷」のデータを取られるのだけは何としても防ぐ。

睨みを利かせる楯無とそれを必死で弁明するシャルロット。そしてその様子をアリーナの客席の一番後ろから隠れながらじーっと見ている、想定されていないもう片方。

「あのー……簪ちゃんは何してるの？」

「訓練が見たいって言うから連れてきたんだけど、更識先輩が居るから堂々と見る事も出来ない。そんなジレンマを再現してるんだと思う」

簪には既に「黒雷」を渡してあった。

彼女の通信端末と同期する事により、楯無が見聞きした情報を知る事が出来る。

「お姉ちゃん、妹の行く末が心配になってきたわ……。あと、正確には色々違うと思う」

正確には『楯無がシャルロットと話している時の表情が、自分と話している時とは違う揶揄うような感じで、自分には見せない一面を見せられて何か嫉妬』という複雑な乙女心だった。

遅くなったのかなっていいないのか分からない妹の変化を憂いながら、刀奈はアリーナの客席を見た。

目が合うと完全に隠れてしまう。想いを知っているのは簪だけであり、刀奈は簪が事情を知っている事を知らない。互いの想いが通じ合うのは何時になるのかは、まだ分からなかった。

「元氣そうなら、それでいいわ」

決して届かない妹への言葉を呟いて、刀奈は訓練相手の方へと視線を戻し——半眼となった。恐らく簪と同様の様子で不機嫌を表しているに違いない。

「も、もうっ！ どうして帯はそうやって僕を苛めるの!？」

「おやあ、僕でいいのかなあ？ 確かあの時はわ——」

「わー！ わー！」

何故かスパイされる側とスパイする側がいちやついてればこうもなる。何の映画だ。

しかもスパイ側の顔が真っ赤だったとすれば、もう仕方ない事だった。

必死に楯無の口を塞いでいるシャルロットへ、刀奈は大変私怨染み注意を入れる。

「シャルル君？ お姉さんたちこれから訓練を始めるから、少し離れてくれる？」

刀奈の思ったより怖い声にシャルロットは我に返り、謝りながら楯無との距離を取った。

解放された楯無は呑気に、「じゃあ、やろうか」と嬉しそうな声を出した。ISに対しては真つ直ぐな彼だが、今はその真つ直ぐさが妬ましい。

刀奈は自らの専用機『霧纏の淑女』を展開し、主武装である『蒼流旋』を構える。

「お姉さん今ちよつと機嫌が悪いから、いつもの五割増し激しく行くわよ！」

楯無もその言葉を受けて『打鉄』を展開。普段とは違い近接ブレードを二刀で構える。

「俺も簪が見てるからな、いつもの五割増し本気で行くよ！」

『え、まだギアがあるの？ 山田先生との戦闘実演より五割増しって事？』とシャルロットが引いている。

そして両者が今まさに踏み込もうとした時——大砲の様な爆音がアリーナに響き渡った。

「なっ——ちい！」

狙いは一夏だった。一夏は『白式』から送られてきたロックオンアラートから現状を把握し、『雪片式型』によつて砲弾を斬り捨てる。

太刀筋は鋭い。放たれた砲弾は二つに分かれ、地面へと墜落し爆散した。

「——ちっ」

楯無は瞬時にシャルロットの方へ移動し、爆風から彼女を抱きかかえて退避した。

簪はアリーナの遮断シールドの外に居る為影響はない。刀奈はISを展開している。だとすれば楯無の近くに居て一番危険なのはISを展開していないシャルロットだった。

「わ、わ——」

「喋るな。舌を噛む」

突然の展開についていけず唯顔を赤くしたシャルロットだが、事態

を呑み込むに連れ冷静に頷いた。

「一先ず離れましょう。ここは危ないわ」

刀奈と共にアリーナの壁の近くまで退避した楯無は、そっとシャルロットを降ろす。

「怪我はないな」

「う、うん……ありがとう、帯」

シャルロットは降ろされた後にISを展開して自らの安全を確保する。

「おい、危ないだろ——ボーデヴィツヒ！」

楯無は視線の先——カタパルトの終わりにISを纏い立っていたラウラへ言葉を荒げる。

彼女の専用機、"ジューバルツエア"レーゲン"に搭載されたレールカノンの銃口からは煙が上がっていた。

「ふん、織斑一夏が私とは戦わないと言うのでな。戦う理由をくれてやっただけだ」

開放回線から聞こえるラウラの声。それを聞いて「またそれ絡みか……」と楯無はげんがりした。

大方、ラウラが一夏へ模擬戦を要求し、一夏が拒絶した所へ挑発行動として攻撃をしたのだろう。

この場の全員が得をしない迷惑な行動だった。軽い怪我どころか大怪我をする可能性さえあった。

「どうだ、織斑一夏。今でもやる気にならないか」

「尚更だ。お前みたいな自分勝手な奴とやる模擬戦なんかない。言っただろ、近々学年別トーナメントがある。俺が気に入らないなら、そこで決着を付けよう」

「……ふん、腰抜けめ。なら、貴様はどうだ？」

一夏の言葉に興味を失ったように蔑み、ラウラは楯無を見た。

その視線を受け取った楯無は嫌そうに、

「一夏の次に俺を選んだ理由は何だ」

「朝、貴様の言った言い訳が気に食わん。ISは兵器だ。貴様にそれを教えてやる」

「……忘れてくれって言っただろ」

(不快ですね。まるで白騎士事件直後の世界各国の様です)

「黒雷」の言葉に、楯無は苦笑いで頷いた。

「打鉄」のハイパーセンサーに表示される機体情報。ドイツ第三世代型IS「シユバルツエアールレーゲン」。

対応レンジは全距離。大型のレールカノンから遠距離は対応可能であるのは予想出来るが、その他の装備は外見からだと言想は出来ない。

しかし、今楯無が纏っている「打鉄」の相手としては最悪だった。セシリアの「ブルーリティアーズ」とは違い、「打鉄」が得意としている近距離まで持ち込めば勝ちの目が見えるわけでもない。同様に鈴音の「甲龍」の様に、互いの得意レンジである近距離まで簡単に接近させてくれるわけでもない。

特定の距離に特化していないという事はそれ自体が弱点でもあるが、両者のISには世代差による基本性能の開きがある。そこに付けるのは難しい。

だが——その程度では楯無が勝負を拒む理由にはならない。「仮にも専用機を持つ者が、ISを唯の兵器だと思っただけでな。その内、コアに愛想を尽かされるぜ」

楯無はスラスターを噴かせ上空へ飛び上がる。

ラウラと高度を合わせ向き直れば、返答代わりにレールカノンを構えるラウラの姿があった。

「貴様こそ、教官と包村帯の試合を見ておきながら辿り着いた答えがそれとはな」

「それはこっちの台詞……って何だ何だ」

開放回線が複数開かれ、そこから思い思いの言葉が飛び出す。

「俺のせいでお前に矛先言っただけで悪い！ だけどお前の実力見せてやれよ、楯無！」

「楯無！ あんた負けんじやないわよ！」

「楯無さん。ボーデヴィツヒさんと何があつたかは知りませんが、あの手の手合いに言葉を届けたいのなら実力を示すしかありませんわ」

「帯、気を付けてね。ISが使えないのは篠ノ之さんだから、僕達
が守るから安心して」

複数の回線から同時に喋られて正直何を言っているのか分からな
かったが、最後に入った二つの個人間秘匿通信だけは違った。

「楯無君、お姉さんとの訓練は今日はお預け。そのお転婆転入生に学
園のルールを教えてあげなさい」

「楯無……ボーデヴィツヒさんに、あなたの翼……見せてあげて」

耳に滲みこむような二人の幼馴染の言葉。それらを含めた友人達
の言葉に頷いて、楯無はラウラと相對する。

「必要がないのにISを傷付けるのは趣味じゃない。直撃を一撃入れ
た時点で終わり。それでいいな」

「いいだろう。一撃あれば貴様を手折るには十分だ——！」

放たれたレールカノンが開戦の合図になった。

直進する砲弾を最低限の動きで避け、ラウラに向かって直進する。

中距離からの牽制用のアサルトライフルを展開するような事はし
ない。今日は五割増しだ。

先ずは遠距離、そして中距離。セシリアとの決闘の時の様に、相手
の攻撃を避けつつ距離を詰めていく。

数は多くないが暴力の塊の様な威力の砲撃を捌き、遠距離地帯は突
破した。この距離ではレールカノンのリロードが明確な隙になる為、
ラウラは直ちに別の迎撃準備を整える。

「これを避けられるか、軟弱者が——」

六本のワイヤーブレードが湾曲的な動きで楯無へ襲い掛かる。

傀儡子が如き多彩な機動が行く手を阻む。数だけならばセシリア
の『ブルーティーズ』より上だった。

シールドで防ぐ事は許されない。相手がワイヤーという性質上、下
手に防げば蜘蛛の巣の様に全身を絡めとられる。

楯無の赤い右目が集中するように細められた。

「——防がない。叩き落す」

先ずは言葉にして目標設定。自らの距離である近距離に迫り着く
には、この防御不可能のワイヤーブレードが織りなす中距離の檻が最

も難攻不落なのは明らか。ここで油断する事は出来ない。

ワイヤーブレードの一つが楯無へと襲い掛かる。左腕を絡めとるまで一秒もなく——無残に叩き落された。

『うつそ……』

一夏と鈴音の眩きが空気に溶ける。

楯無の近接ブレードの斬撃が、ワイヤーブレードの先端だけを捉え叩き落す。

無論、叩き落しただけでワイヤーブレード自体を破壊したわけではない。ラウラの操作により、他の五本と共に再び楯無へ襲い掛かる。ならばもう一度。ワイヤーブレードが来る度に斬撃が叩き落す。それをワイヤーブレードが有効ではない範囲まで続けるだけだ。

「相変わらず地道な神業が得意です……あなたらしいですわ」
斬撃の檻によってワイヤーブレードを弾く作業が続く。

何十度目かのそれが終わり、ハイパーセンサーによって補強された楯無の視界がラウラを捉える。

驚きを浮かべるその顔には、僅かな焦りが生まれている。

ワイヤーブレードの範囲を螺旋を描いた直進で抜け、一度だけ瞬時加速を使いラウラとの距離を詰めた。

最も遠い近距離の間合い。楯無はそこまで辿り着いた。

——ここから先は自分の間合いだ。

「得意気になるなよ、素人がっ！」

即座にワイヤーブレードを収納したラウラが、プラズマ手刀を展開する。

リーチは近接ブレードより遥かに短い。文字通りの手刀クラスの超近距離武器。

それをこの間合いで展開する理由は唯一つ。

「見せてやろう——貴様では追う事も出来ん高みをな！」

スラスターで互いに最短距離で激突する。

二刀のブレードと手刀が火花を散らし、互いの決定打を殺し合う。しかしラウラの表情は厳しいまま、どこか焦りを感じさせる。

楯無の表情も冷静とはいかず、僅かな違和感に顔を顰めていた。

知っている——自分はこの斬撃を、知っていた。

楯無にとつては嘗てモンドグロッソで自らの空を競い合う為に交わした刃。ラウラにとつては自らを一から鍛えてくれた恩人の刃。

『織斑千冬……！』

互いに記憶から呼び起こされた斬撃の持ち主の名を呼べば、交差した視線が答えを知らせた。

より厳密に言えば、織斑千冬が使用していた篠ノ之流。その断片を互いの斬撃から読み取っていたのだ。

違和感に納得をして、楯無とラウラの剣戟は一変する。

「こ、の……！」

「踏み込みが足りないぜ、斬撃が泣いてるぞー！」

ラウラの斬撃が遅れ始めた。否、テンポが一つ遅くなる。

剣戟を支配し始めた楯無の瞳は、世界最強と斬り結んだ昔を見ているようだった。

「あれは……」

「単純なリーチの差ね。私もやってるからよく分かるわ」

シャルロットの呟きに、刀奈が答える。

「近距離と言っても、お互いの武器にはリーチの差がある。私の『蒼流旋』と楯無君の近接ブレードなら、有効射程は私の方が長い。さっきの剣戟で実力は推し量れたのでしょね。だから間合いをコントロールする戦い方に変えた」

「つまり、ボーデヴィツヒさんの手刀のレンジ外且つ、ブレードのレンジ内の距離を保ち続けているわけですか……これが、帯の実力」

「残念ね、今日の訓練を邪魔されちゃって」

ラウラの焦りが限界を迎えた。ラウラは右手の手刀を解除し、楯無の斬撃を左手の手刀で受け止め、その衝撃によって距離を取った。

近距離では効果の薄いワイヤーブレードを再び展開し、楯無への牽制とする。無論それ自体は楯無への有効打にはならなかったが、ラウラの狙いはそこにあった。

「まさかこれを使わされるとはな……！」

ラウラは右手を掲げ、楯無を捉えそう言った。

その言葉が招くように、楯無の動きに異変が起こった。

「なっ……!?!」

「あれは……!?!」

楯無と簪の驚きの言葉が重なる。

停止してしまっただかのように動けなくなった楯無へ、「黒雷」からの声が聞こえた。

(マスター。これは「AIC」と推測されます。ドイツ製第三世代型ISに搭載されている第三世代兵器です。別名は「停止結界」)

(第三世代兵器……って事は、必要なのは絶大な集中心力……!?)
「手古摺らせてくれたな……だが、これでもう終わりだ!」

左手に再び展開したプラズマ手刀。第三世代兵器と通常武装を同時に使用する事が出来るラウラの實力は、一年生の中でも群を抜いていた。

止めの一撃を入れようと力み、スラストを全開にして突っ込んでくるラウラへ、楯無は静かに告げる。

「見事だった」

「なっ——!?!」

「打鉄」から発せられる閃光がアリーナを包んだ。

出所は楯無が直接呼んだ閃光グレネード。それを呼び出したと同時に起爆した。目眩ましとしての効果は期待していない。

目的は不意の出来事によるラウラの集中の妨害だ。

ラウラの集中心力によって機能していた「AIC」の効力は失われ、閃光が止むと同時に楯無の身体の自由が戻る。

だが、もうラウラの突撃は止まらない。元よりISのハイパーセンサーには閃光は殆ど効果はない。この距離まで詰められた時点で、ラウラの勝利は揺るがない——答だった。

「な、んだと……?」

ラウラの身体を衝撃が襲う。楯無がラウラの横を通り過ぎ、緩やかにブレードを握った両腕を降ろす。

ハイパーセンサーに表示されているシールドエネルギーが減っていた。今までの状況を鑑みれば、一撃を貰ったのは疑いようがない事

実だった。

振り返りながら、赤の右目がラウラを捉える。

「俺の勝ちだな。じゃ、いい加減強さだけに拘るの止めて、ISの事を一から見つめ直せ」

「……それだけの強さを持ちながら、持て余すとはな。今日の所は退いてやろう」

ラウラはピットへ向かって飛んでいく。言葉通り今日は退くようだ。

それを見送ってゆっくりと下降し、アリーナ中央付近の地面に着陸すると「打鉄」を解除した楯無。

「あー……しんどかった。強いな、あいつ。五割増しで掛かって正解だった」

(お疲れ様です、マスター。見事な戦闘でした)

一息吐くのも面倒そうに、刀奈とシャルロットが待っているアリーナの隅まで歩き出そうとしたその瞬間。

「その剣をどこで習った!!」

今まで楯無に一切干渉しなかった箒の声が、楯無を糾弾した。

明らかに面倒そうな顔をして、楯無は箒の方を見る。

憤慨した様子で楯無へ歩み寄ってくる箒に向かって、興味無さげに楯無は告げる。

「……習ったって、俺は剣道とかやってた覚えはないぞ」

「剣道にあの技はない……最後のすれ違い様の一閃、あれは篠ノ之流の技だ!」

楯無は「何の事だ」と惚けるが、箒の興奮は治まらない。

箒は感情のままに楯無のISスーツの襟首を掴んで引き寄せる。

「お前は篠ノ之道場の門下生には居なかった。……その剣を習ったのであれば、千冬さんか姉さんのどちらかだ……! だが千冬さんから習ったのであれば答えるのを躊躇う必要はない! つまり、お前は……!」

いい推理だ、と楯無は内心感心していた。

確かに、今の動きは楯無が篠ノ之束から教わったものだった。

ISに乗り始めた当時、基礎訓練としてやっていた動きだっただけで、篠ノ之流と知っていたわけではなかったが。

「おい、箒！ 止めろって！」

追ってきた一夏が箒の手を楯無の胸元から引き剥がす。

未だに興奮のボルテージを上げ続けている箒を羽交い絞めにしながら抑える一夏。

「言え！ 姉さんは今どこに居る!? お前と姉さんの関係は何だ!？」

「どこに居るかなんか知らない。何の関係もない」

「雪月……！」

「箒、落ち着け！ 楯無が束さんの行方を知ってるわけないだろ！」

「……後は任せた、一夏」

楯無は再び刀奈とシャルロットが待っている場所へ歩き始めた。

篠ノ之箒とは深く関わる気はなかった楯無だが、少し面倒な事になりそうだと予感した。

20. 翼を広げる為に

「今日は凄かったね……」

簪が鶏の唐揚げを摘まみながらそう言った。

夕食時の食堂。簪の右隣に座っている、一応はラウラとの模擬戦を制した楯無も「本当にな」と相槌を打った。

彼としてはその後の篠ノ之箒とのやり取りの方が、悩みの種としては深刻だったのだが。

楯無の右隣りに座っているシャルロットも苦笑いだった。

「まさか、ボーデヴィツヒさんが包村帯に執着してるなんてね」

「どこに行っても人気者だね、楯無」

「勘弁してくれ。人気があるのは包村帯で、雪月楯無じゃない」

楯無は簪の皿から唐揚げを一つ拝借して口の中に放る。既に楯無自体は注文した日替わり定食を食べ終わっていた。

元より小食の簪には、この唐揚げ定食は多過ぎる。注文前に楯無に少し食べてほしいと頼んで、簪は唐揚げ定食を注文した。

楯無がこの間鈴音とラーメンと炒飯をシェアしていたのを見た事による対抗心かもしれない、と楯無は直感した。

「ボーデヴィツヒが一番執着してんのは一夏だ。何しろ目標が目の前に居るんだから、逃がす手はない。……ま、それは一夏自身がどうにかするだろ」

「そうだね、きつと一夏はああいう人と仲良くするのは得意だと思う」
「文字通り当たって碎けるような奴だからな。あの真っ直ぐさが羨ましい」

一夏に対する皮肉として言ってみた楯無だったが、両隣りの女子は深く頷いていた。

「うん、確かに帯は少し捻くれ過ぎかな。僕の事情に対してだって、やりたい事を見つけて言って放っておくんだもん」

「でも……不器用だけど、凄く大切に思ってくれてる。……そんな不器用な楯無だから、私は……いい人だと、思う」

「……………あ、そ」

簪の言葉に照れた様子で右側にそっぽを向いた楯無。しかしその右側にはシャルロットが陣取っている。

にやにやと楯無の顔を眺めているシャルロットへ、不機嫌そうに楯無は告げた。

「何だ、まだ食べ終わってないのか。お前、まるで女子みたいだな」

「ちよちよちよつと帯!?! 僕は男子だよ!?!」

慌てて一生懸命もぐもぐと夕飯を食べ始めたシャルロットを鼻で笑う。『ざまあみろ』とでも言いたげだった。

そんな彼らの定まったと言つていい関係を見て、簪はつんつんと楯無の脇腹を突く。

「ど、どうした?」

「……明日、整備室で『打鉄式』の機体面の最終調整をする……から。だから、えつと。もし予定が無ければ、楯無も……」

「分かった。行くよ。予定が出来てもさっさと終わらせるから、先に整備室で始めててくれ」

「う、うん!」

頬を染めて笑顔で頷く簪は、小さな口でご飯を咀嚼する。

その様子を見て勝手に成仏しかけていた楯無の前に、新たな影が現れた。

「雪月、ここは空いているか」

「お前、俺の名前憶えてたんだな……空いてるけど、ここでいいのかわよ」

「構わん。貴様と話したい事もある」

新たな影——ラウラはそう言つて楯無の向かいの席に座った。

朝と同じような光景に、楯無はこつそりと溜息を一つ落とす。何だつてまあ、こちらにはかり寄つてくるのだと。

ラウラはそんな事を気にする様子もなく、ジャーマンポテトをフォークで刺した。

「放課後は見事だった。貴様の実力を認めよう」

「何だ、やけに殊勝だな。当たり所が悪かったか?」

「ふ、あの斬撃に当たり所も何もあるまい。まさか、源流が一緒だとは

な」

今その話は止めてほしかった。忘れようとした問題を思い出してしまおう。

どこで習ったかと問われれば、織斑千冬から習った事にしておこうと楯無は決めた。ラウラは楯無の経歴を知らない。昔からの知り合いからだという情報しかなければ、嘘も通し易い。

「差し詰め、私はお前の弟子と言った所か。いや、妹弟子だな」

「そこら辺の日本語は詳しくないから合ってるかは知らない。……まあ、その話は置いてくれ。あれは癖だから意識してるわけじゃない。それを話しに来たのなら、もう話す事はないぞ」

そろそろ左右の二人も食べ終わる。食堂には食事をし終わったら長居する理由もない。

ラウラは首を振って否定した。どうやらこれが本題ではなかったようだ。

「貴様に一撃を入れられ、貴様の實力は分かった。だが、私には分からない事がある。雪月、貴様はISが大切な人が笑ってる場所に向かっていく為のものだと言ったな」

「ああ。俺はその為の翼だと思ってる」

「ならば、何故貴様はあそこまで窮屈そうに戦う。私の目は誤魔化せない。いや、例えば教官の様な実力者ならば言わないだけで、気付いてるのだろうか」

「……、」

楯無は無言を貫いた。出来ればこのまま流してしまいたい。

しかし、ラウラはボーデヴィツヒはこの話題から離れる事はしない。

戦いの最中に感じた違和感。それを解明するまで、この少女は楯無から目を逸らさない。

「その先を知っていると——貴様の操縦はそう語っていた。貴様自身は意識していなかったかもしれない。だが、貴様の操縦からは絶対的な窮屈さが感じられた」

「……お前が勝手に感じたただけだ。そんな錯覚忘れちまえ」

「問おう。その先とは何だ？ その先を知っているから、お前は私に勝ってたのか？」

ラウラには強さへの飽くなき欲求があった。

楯無の強さをラウラは認めた。認めてしまったが故に、強さの理由を知ろうとするのは止められない。

だが、楯無の機嫌は悪そうだった。自覚していなかった何かを指摘されて、微かな苛立ちを感じていた。

「貴様は強い。だが忘れるな……強さとは錆び付くものだ。だからこそ強者は強さを追い求める。錆び付く事のない、絶対的な強さをな」
「翼を最大限広げる事をしなくなった鳥は、何時か本当の飛び方さえ忘れてしまう……。お前はそう言いたいのか、ボーデヴィツヒ」

「そうだ。そして何時かは手折られる。飛ぶ事も叶わなくなるだろう」

「……好き勝手言ってくれる」

楯無はトレーを持って立ち上がる。

「部屋に戻ってる。シャル、先にシャワー使わせてもらおうぜ」

「う、うん」

「楯無……食べ終わったら、髪乾かしに行くね」

楯無は「ありがとな」と微笑んで去っていく。その背中はどこか燻っているように見えた。

残された簪とシャルロットは顔を見合わせ、もう一度楯無の背中を見ている。

シャルロットとデュノアは、彼の言っていた事を思い出す。

『やりたい事も無い奴は何かを残す事も出来ない』。

——だとすれば、雪月楯無は何を残したいのだろう。

そうして気付く。自分は、雪月楯無の事を何も知らないのだと。



『マスター。先程から様子が変わります。何か心配事がありますか？』

部屋に戻って俯いたままシャワーを浴びる。完全な密室になって

いる為、相棒は遠慮なく音声で俺に語り掛けてくる。

温めのお湯が雨の様に降り掛かるが、どこか気分は晴れない。

原因は分かっている。夕食時にボーデヴィツヒに言われた言葉だ。

「……俺は、“打鉄”で飛ぶ事に窮屈を感じていたのか」

『肯定します。マスターの操縦技術は“打鉄”の性能を引き出して余りあります。だからこそ、マスターは一番最初に反応速度を変更したのではないですか』

確かに、俺はセシリアに『反応速度だけは弄らないと、窮屈でしょうがなかった』と言った事がある。

ああ、そうだ。俺はずっと“黒鉄”——“黒雷”と飛んでいた。たとえ第一世代の“黒鉄”であっても、量産型である“打鉄”より遠くへ、速く飛べた。

俺が“打鉄”に乗ってる時の回避データが常にすれすれなのは、“黒雷”に乗ってる時の感覚で回避していたからだ。

ほんの少しでも回避のタイミングがずれてしまえば直撃をする回避パターン。それは達人の域に居るからではなく、動きの不自由から来ているに過ぎなかった。

「……ごめんな、“打鉄”」

右手の中指に嵌めている“打鉄”の待機形態を撫でて、彼女へ謝罪する。お前には無理をさせてしまっていた。

このまま“打鉄”に乗り続けていれば、ボーデヴィツヒの言うように俺の翼は錆び付いていく。

錆びた翼ではあの空へ飛ぶ事は出来ない。“黒雷”とでしか行けない、大切な人が笑っている空へ。

『マスター。“打鉄”からネットワークを介して提案が。マスターが“打鉄”に乗り続ける事が負担になるのなら、降りる事を推奨していません』

「……馬鹿言うな。お前達は道具じゃない。負担になったから乗り換えるなんて出来るわけないだろ」

俺が誰と一緒に居たと思ってるんだ。そんな事をすれば俺はあの人に顔向け出来なくなる。たとえもう会う事さえないとしても、あの

人へ不義理を働く事は出来ない。

だが、相棒の話には続きがあった。

『“打鉄”から感謝を人の言語に変換し、マスターへ伝えます』

『自分達の為に戦ってくれてありがとう。共に飛べて幸せだった』。それが“打鉄”からの言葉だった。

礼を言うのはこちらの方だ。俺みたいな本来ISには乗れない男に翼を貸してくれたんだ。感謝してもし足りない。

“打鉄”からの言葉が俺の背中を押してくれた。俺は俺の空を飛び続ける為に、本当の翼を開放するべきなんだろう。

だが、そうする為には問題が幾つかある。

「専用機を使う為の後ろ盾。俺達のデータを取る相手への対処。細かな問題はまだ幾つかあるけど、主な問題はこの二つだろうな」

雪月楯無という男性操縦者は企業にも国家にも所属していない。

そんな人間が専用機を持っているとなれば当然疑われる。後ろ盾は当然必要だった。

『この方法は癪ですが、後ろ盾に関しては織斑千冬を利用する手があります。マスターはシャルロットさんの件で織斑千冬に貸しがあります』

「成程な。持て余してたし丁度いいか……問題はお前が高性能過ぎる事だけだ」

多分どこの企業にさせていても納得されない。

何しろ“黒雷”自体が完全篠ノ之束製ISだ。しかも現状“黒雷

”以外は“白式”しか搭載されていない機能もある。

だが、もう一つの問題はどうする。俺としてはそっちの方が気掛かりだ。

しかし、俺の気掛かりは相棒にとっては些末事の様だった。

『それは好きにさせてしまえば良いのです。私とマスターなら、たとえデータを取られ対策をされても問題ではありません』

「……言ってくれるな、相棒。その自信を、俺も信じてしまおうだろ」

『今までは対策を恐れたマスターの意見を尊重していましたが、問題はそれだけです。私達の翼を、今の各国は本当の意味で捉えられませ

ん』

確かにデータを取られた所で再現出来る企業はないだろう。あれが再現出来るのなら各国は未だ第三世代で躓いてはいない。

……止まる理由はもうない。燻っているのは心だけで、俺の翼は羽ばたこうとしている。

俺は誓ったんだ——二人の心からの笑顔を取り戻すと。

「飛ぶか、相棒」

俺の言葉を、相棒はあっさり聞き入れた。

『了解しました、マスター。それではいい加減シャワーを浴びるのを止めましょう』

「だな——おぶぶぶぶ」

俯いた顔を上げれば顔面にシャワー全開だった。シャワーを止めてシャワールームから出る。

身体を拭いて部屋着に着替えて脱衣所から出れば、丁度シャルが帰ってきた。

「あ、帯。シャワー上がったんだね」

「ああ。お前も浴びるか？」

「僕——私はもうちよつと後でいいよ。……帯が入った後って考えたら、ちよつとどきどきするから」

後半は聞かなかつた事にしておこう。

思春期の女の子ってこんな感じなんだろうか。シャルとの共同生活はまだ二日目だが、簪と生活していた頃には感じなかった男女の差を感じる。

「……そういえば、簪は？」

「部屋で準備してから来るって。簪、すっごい気合い入れてたよ？」

何、俺整髪でもされるの？

とりあえずタオルを首に掛けて自分が使っているベッドに座る。シャルも嘗て俺が使っていたベッドに座った。

……そういえば、一番身近に俺のデータを取ろうとしてるやつが居た。

じーつ、と俺を見つめてくるシャルは一体どちら側なんだろう。

デュノア社のスパイなのか、やりたい事を見つけた少女なのか。

「……そうだ、帯。聞いてほしい事があるんだけど」

「何だ……真面目な顔して。揶揄うのは駄目みたいだな」

シャルの表情は真剣だった。何らかの決意を感じ取れた。

自らの専用機の待機形態を握りしめて、シャルは真つ直ぐと俺を見た。

「私はデュノア社のスパイを辞める。正式にデュノア社を辞めるわけにはいかないけれど、もうスパイ行為はしないよ。現状維持をしつつ、デュノア社への反撃の糸口を探つてこうと思うんだ」

「……理由は？」

そう問うと、暫くシャルは黙った。

胸の前に右の握り拳を持ってきて、小さく何かを呟いている。

それは決意の言葉だろうか。呟いた言葉が何を意味するのかは、彼女自身にしか分からない。

意を決してシャルは俺を見た。

「私が、帯の事を知りたいから。スパイのままだったら、きっと帯の事は深く知れないと思ったから」

「……俺の事を知ってどうする」

「それはこれから決めようと思う。とりあえず、これが私の今やりたい事。……駄目かな」

穏やかな笑みで俺に問いかけるシャル。

駄目も何も、お前がやりたい事がそれなら止める理由は無い。

寧ろ身近なスパイが消えてくれて助かった。これで「黒雷」と飛ぶ際の脅威が一つ減った。

ベッドに上半身を投げ出しながら、俺は答える。

「好きにしろ。その先に何を残せるのかは、お前次第だろ」

「うん。私が私として胸を張れるようなものを、残していきたいから。……だから、帯」

一拍置いて。

「私に選ばせてくれてありがとう。もし良かったら、私の事も見ていてくれると嬉しいな」

やりたい事を見つけた少女から告げられたその言葉に、自然と言葉が出た。

「見てほしければ俺の視界に居ろよ。言っておくが、俺の視界は狭いぞ」

「知ってるよ。簪と楯無さんが大好きな事も、左目が見えない事もね」
楽しそうに告げるシャルロットがどんな表情をしているかは、寝転がっている俺の視界には映らない。

だが、きつと心から笑っているのだと。何となくそう思った。

2.1. 楯を愛する者

翌日。IS学園地下特別区画。

「専用機で飛ばしたいから後ろ盾をください」

「……楯無、お前は思ったより滅茶苦茶だな」

織斑千冬は雪月楯無からの要求に呆れたように溜息を吐いた。

朝早くから呼び出され、態々誰にも盗聴される恐れのない学園の地下特別区画まで案内して話を聞けばそんな頭の悪い内容だった。これでは溜息の一つも吐きたくなる。

だが、地下特別区画まで連れてきたのは正解だった。

雪月楯無自身が機密事項の塊である。二番目の男性操縦者であり、篠ノ之束と行動を共にし、何の後ろ盾も無しに専用機を所持し、極めつけに嘗て世界を席卷した『包帯の乙女』——包村帯でもある。

正体が露見すれば、直ぐにでも各国からの抱え込みが入るだろう。政略や人質、ハニートラップ。ありとあらゆる手段を使ってでも保持しておきたい存在だ。

当の楯無自身も、自らの置かれている立場を理解はしている。だからこそIS学園に入学し、自らの身の安全を確保した。

そんな彼が自らの存在価値の一つを公表する為に、一つの後ろ盾を雑に欲していた。

「シャルの一件は解決したぞ。あいつはデュノア社のスパイを辞めるってさ。ほら、だから報酬をくれ」

「お前に任せるべきではなかったかもしれない。正体を暴くどころか危険性まで排除してしまうのだから、尚の事性質が悪い」

誰がそこまでやれと言った。別に楯無自身が何をしたわけでもなく、シャルロット自身が思う所があっただけなのだが、結果だけ見れば楯無が事態を解決したように見える。

半分は棚から牡丹餅を使って無理難題を要求してくる楯無へ、自分の不審感の間違っていなかったと千冬は思う。

「……だが、理由はなんだ。お前の専用機として既に学園から打鉄を貸し出しているだろう。昨日のラウラとの模擬戦の話も聞いた。」

オルコットや無人機の一件でも、お前が遅れを取る場面など殆どないように見えたが？」

「それじゃあ、俺の翼が錆び付いていくんだ」

学園の地下から。どこか遠い空を見て、楯無は言った。

「俺は飛びたい。本当の翼で、俺が目指している空に」

楯無の瞳に、千冬は何時かの包村帯を見た。

自らが切り札である『零落白夜』を使用し、直進してきた帯へカウンターで斬り掛かったあの瞬間。

瞬間移動の如き動きで背後を取られ、一撃を覚悟したその直後。

降参を宣言しバイザーを上げた彼女。視線は交わらずとも、ハイパーセンサーが捉えていたあの目。

どこか遠くを見た、儂げな瞳。しかし、嘗ての帯とは違い今の楯無には虚無感などない。

唯真っ直ぐと辿り着く場所を見据え、飛んでいく決意があった。

「……やはり、現役を退くには時期尚早だったか」

「今でも化け物みたいに強いくせに現役とか関係あるのか」

「あるさ。堂々とお前とやれる」

「二度とやらない。斬り捨てたいなら他をあたれ」

腕を組んで、「で？」と答えを急ぐ楯無。

欲しい物をせがむ子供の様な態度に、千冬は小さく笑った。

「いいだろう。丁度今日、倉持技研から技術者が来る事になっている。当然様々な極秘事項の黙秘と口裏合わせが付くだろうが、向こうとしてもお釣りが来るレベルだろう」

「倉持から？　『白式』の調整でもするのか？」

楯無の疑問に、千冬は意外そうに答える。

「何だ、更識から聞いてなかったのか。更識の専用機に回せる人員が確保出来たそうだな。急遽学園に誘致する事になった」

「そういうえば、簪が放課後に『打鉄式式』の機体面の最終調整をするって言ってたな。……大体、『白式』の方はいいのかよ。勝手な奴等だな」

「勝手か。確かにそうだろう。何しろ、誘致された技術者は一人。食

い入るように「白式」を調べていたが、ある日忽然と興味を無くした
そうだ。本人曰く『もういい』らしい」

『もういい』、か……。『白式』——『雪片式型』を見てそう言える
のは妙だな。……と言うか、興味を失っただけで担当を外れていいも
のなのか?」

呆れたような楯無の当然の疑問に、千冬は眉間を押さえた。

まるで「お前が言うな」とでも言いたげである。

「……才能のある人間は自由な傾向にあるのだろう。お前を見ている
と分野が違うだけで、鏡映しの様に見える」

千冬の言葉に、「何だそりゃ」と楯無は怪訝そうだった。

とにかく、後ろ盾の話は放課後までに倉持技研に通されるようだっ
た。

自分の用事はこれで終わりだと、楯無は朝食のメニューを何にしよ
うか考え始めた。



放課後になり、楯無は整備室へ向かっていた。

昨日の夕食時に約束した通り、「打鉄式式」の機体面での最終調整
がある。

これが上手く行けば、武装はともかく「打鉄式式」単体での稼働は
問題なく行えるようになる。

試験運用等を行える段階まで来たのは大きな進歩だ。この場面に
立ち会わないわけにはいかなかった。

（楽しみですね、マスター。「打鉄」も自らの後継機の開発が大きく
前進する事を喜んでいました）

（そっか。ありがとな、「打鉄」）
機体が完成したとなれば、I S コアを回してもらえる可能性も高く
なる。

セシリアⅡオルコットが大真面目に作成していた『「打鉄」の可能
性について』というレポートの使い所が来たのかな、と考えを巡らせ

た。多分その使い所は永遠にこない。

整備室の前まで辿り着いた。既に簪は中で作業をしているらしく、鍵は開いていた。

「簪、『打鉄式式』の様子はどおとおお!?」

整備室の扉を開けて中に入った瞬間、何者かがタツクルで楯無を襲った。

咄嗟の出来事に対応出来ず押し倒された楯無。タツクルで襲った相手は楯無の胸板に自らの額を擦り付けていた。

恐る恐る目を開いて状況を確認する。そこに居た相手は楯無にとって予想だにしない人物だった。

腰まである艶やかな黒い髪。幼さを残す垂れ目気味の赤い瞳。その華奢な身体を抱いたのは何時だったか。

「た、楯無……大丈夫?」

「ああ、兄さん! 本当の兄さんです! 夢にまで見た、と言うか常に夢に兄さんは出てきてるんですけど、とにかく兄さん……兄さん!!」
ぎゅう、と抱き着いて胸元に頬擦りにランクを上げた変態を、楯無は良く知っている。

むつつりではないだけで、そういった対象にやりたい事自体は楯無と完全に合致していた。

何しろ自分を『兄さん』と呼ぶのは世界で唯一人。

「……久しぶりだな、楯愛(じゅんあい)」

自らの実妹である雪月楯愛の頭を、穏やかな笑みで楯無は撫でた。

そして身体を起こして引き剥がす。幾ら妹であっても、床に寝っ転がりっぱなしにさせられる趣味はなかった。

妹の身体を支えて立ち上がらせる。IS学園の制服の上に白衣を羽織った彼女の表情は、変わらず笑顔全開だった。

「お久しぶりです、兄さん! 兄さんと最後に会ったのはIS学園に入学する前ですから、もう彼是三ヶ月は会ってないです。気が狂いそうでした……」

いつも狂っている気がするの放っておいて、楯無は「もうそんなに経つのか」と相槌を打った。

雪月楯愛は、楯無の唯一の肉親である。更識姉妹とも親交はあり、施設から篠ノ之束に引き取られた際に離れ離れになったのだが、その以降も手紙のやり取りなどの関りは持つており、時折直接会っていてもいい。

「やっぱり兄さんの匂いが落ち着きます……。兄さんのシャツとかパジャマにしちや駄目ですか？」

『……駄目』

思考回路がまんま過ぎて、楯無と簪は目を逸らした。楯愛は遠慮無しに楯無の腕に抱き着いている。

兄と妹だけとなった彼女の世界で、兄は自らの全てであった。文字通り重度のブラコンである。

それで、と楯無は楯愛を見た。

「何でお前がここに居るんだ。態々IS学園の制服まで着て」

「織斑先生のご厚意で貸していただきました。似合ってますか？」

「似合ってる似合ってる……。じゃなくて、答えてほしいのは前者の方」

「それは当然、私が倉持技研の技術者だからです。ね、簪さん？」

「う、うん……。ほら、名刺」

簪が見せてきた名刺を見て、楯無は面食らった。

『倉持技研第二研究所特別技術顧問』。それが彼女の置かれた立場だった。

「……え？ お前まだ中学三年生だろ？」

「重要人物保護プログラム。知ってますよね、兄さん？」

楯愛の言葉に、楯無は理解した。

自らの立場は世界で二人しか居ない男性操縦者の片割れ。織斑一夏の肉親はIS学園の教師である織斑千冬しか居ない為、重要人物保護プログラムは働かない。対して雪月楯無の肉親は一般人である雪月楯愛。嘗ての篠ノ之箒の様に、重要人物保護プログラムが適用された。

「最後に兄さんに会った直後、私は倉持技研に保護されました。各地を転々としなくて済んだのは幸運でしたね」

「……悪い。辛い思いをさせたな」

抱きしめてきた楯無に、楯愛は蕩けた表情を見せる。

楯無を抱きしめ返し、兄という存在を強く感じていた。

「いいんです。私、機械系には強いんですよ？ 特別技術顧問っていう肩書も、実力で取ったものですから」

機械系には強い程度では対応出来ないような科学技術の塊を相手取っているのだが、楯愛は理解していないようだった。

千冬の言葉を思い出す。分野が違えど鏡映しというのはこういう意味だったようだ。

兄は中学生の身でモンドグロツソにて世界第三位の実力を示した I S 乗りで、妹は中学生の身で I S の研究所の特別技術顧問にまで上り詰めた技術者。

——とんだ天才兄妹だった。

大層名残惜しそうに兄の身体から離れた妹は、簪へと——より正確には、彼女の奥にある待機している “打鉄式式” へ視線を向けた。

「さて。仕事を早く終わらせて、兄さんや簪さんとのお話の時間を確保しましょうか」

“打鉄式式” の情報が映し出されているモニターへ歩いていき、情報を一つ一つ確認していく。

その速度は尋常ではない。楯無はその後姿を見て、嘗て世話になっていた恩人を想起した。

「……やっとなんか I S を見てももらえるんだな」

「うん。これで機体の完成度が認められたら、コアが回ってくるかもしれない……。武装面は近接武装以外が殆ど手付かずだけど、先ずは機体が動かないと話にならないから。……それにしても、凄いね」

隣で見ていた簪の眩きが、彼女の能力を裏付ける。

二分程情報を流し見した楯愛が振り返った。

「凄いはこちらの台詞ですよ、簪さん。倉持が開発を中断した時のデータとは完成度が段違いです。調整なんか要らないくらい。中に入ってる稼働データも、理論値とのずれが殆どないです。これを一人

で開発し続けていたんですか?」

「……ううん。稼働データは、楯無が取ってくれたの」

「兄さんが? このすれすれの回避データは兄さんが取ったんですか……結構簪さんに無理させますよ?」

その問題は未だに解決していなかった。『黒雷』と『打鉄』の性能の差から来る回避タイミングの差は如何ともし難い。

回避データは後々簪自身に修正してもらおうと思っていたが、簪はそんなつもりはないようだった。

「大丈夫……楯無が取ってくれたデータを、私は再現してみせるから。日本代表候補生の实力を見せてあげる」

「……分かった。簪なら出来るって、信じてる」

見つめ合い互いを信じ合う二人を見て、ブラコンはデータを入力しながら半眼だった。

「……あら。兄さんと簪さんは、唯ならぬ関係なんですか。避妊はしっかりしてくださいね?」

「ひに……っ。ち、違う。私と楯無はまだ——」

「まだって事は、何時かはあるんですね。IS学園には一年生から臨海学校があるようですし、その時でしょうか? 初めてとは思いますが、深い方がいいですもんね」

楯無は『そもそもそういう関係じゃない』と言う気力もなく、容赦ないセクハラに顔を赤くして沈黙してしまった簪を慰める。女子同士の会話がえぐいのはIS学園に入って慣れてしまっていたが、身近な人間同士がやっているのを見るのは結構きつい。

我が妹もそういつた年頃になったのか、と悲しい形で妹の成長を見た楯無へ、何でもないように楯無は話を振る。

「そういえば兄さん。兄さんの専用機の件、倉持技研は了承したみたいですよ。無論ある程度の機体情報提供はしてもらいますけど、『白式』に手間取ってる今の倉持技研じゃ宝の持ち腐れです」

「そりや助かった。まあ、相棒の整備は俺がやるから安心しろよ。楯無の手は煩わせな——」

「何時でも頼ってくださいいね! 『打鉄式』や兄さんの専用機の

データ取りの為に暫く学園に出向する事にもなりましたし、私がISの勉強をしたのは十割兄さんの為ですから！」

ブラコン全開の台詞に苦笑いする楯無だったが、心強い言葉でもある。

思い掛けない再会と共に、彼と彼女の翼の準備は整いつつあった。

2.2. シスタークライシス

「兄さん、兄さんのお友達にご挨拶をしたいのですけど」

「ごめんな、楯愛。兄さんには友達が居ないんだ。友人にカウント出来るのは鈴音しか居なくて、友達じゃなくて親友なんだ」

「楯無……」

“打鉄式”の機体調整を終わらせた楯愛が兄である楯無にそう願うと、楯無は死んだ目でそう言った。

簪は幼馴染の迷いない言葉に半眼で名前を呼ぶ。登校すれば千冬に喧嘩を売りつつISに乗り、自室に戻れば簪と話しているような男にどうして友人が出来ようか。

関わりがある一組の人間も友人かどうかと言われれば微妙だった。織斑一夏は元観察対象で純粹な目で見る事は難しく、セシリアオールコットは決闘の末に“打鉄”の宣伝隊長に就任させたよく分からない間柄。シャルロット・デュノアはつい先日知り合ったばかりな拳句元スパイで、ラウラーボーデヴィツヒには経歴がばれるわけには行かず、篠ノ之箒に至ってはそこまで話した事が無いにも関わらず因縁を付けられていた。

このあまりにもどうしようもない人間関係でよく学園生活を送れているものだった。

「鈴音さんはお話聞いた事があります。是非ともお会いしたいです」

「そうだなあ。今頃皆第一アリーナで特訓してるだろ。行くか？」

「行く行く、行きます。愛してます兄さん！」

文脈がおかしい兄への感謝を告げながら抱き着いてくる楯愛。

それを慣れたように無視して妹を引きずりながら歩き出す楯無。

その二人を見て、『この二人こんな感じだったっけ？』と簪は自らの幼少期の記憶を疑い始めていた。

「でも……部外者を勝手に連れ回して、いいの？」

「その辺は大丈夫だろ。倉持技研なら“白式”のデータを堂々と取っても問題ないし、そういう事にしておこうぜ」

雪月楯愛がIS学園に居る間の責任は織斑千冬が持つ事になっている。千冬相手ならば楯無は遠慮など一切しなかった。

楯愛は「打鉄式式」の調整に来たのであって、終わってしまえば帰らざるを得なくなる。

妹の寂しい気持ちを少しでも解消出来るのなら、兄はその後の事など知った事ではなかった。そもそも下がるような評価など持ち合わせていない。

頬擦りする白衣を着た女生徒を引き摺る、学園で二人しか居ない男子生徒。どうしようもない組み合わせが整備室から脱獄してしまっ

た。

「……寮の部屋で、待ってるね」
生存本能にこれに付いていくのは危険だと告げられた簪は、「打鉄式式」を量子変換してISコアのデータ領域代わりの記録媒体が装着されている指輪に収納し、後片付けを始めた。



「よう、やってるか？」

放課後には殆ど死体遺棄場と化している、織斑一夏一行が特訓しているアリーナ。

「白式」を維持する事すら叶わず、アリーナの中心で死体と化している一夏。

「あ、帯だ。珍しいね、訓練の途中からアリーナに来るなんて」

「簪さんと喧嘩でもしましたか？ 丁度良くクレーを撃ち落とす終わりましたので、よろしければ久しぶりに鬼ごっこでもしませんこと？」

死体を囲みながら復活の儀式をしていた篠ノ之箒、セシリアⅡオルコット、凰鈴音、シャルロットⅡデュノアの内、セシリアとシャルロットが楯無の声にいち早く反応した。

箒は気まずそうに視線を一夏に戻したが、鈴音は振り向いて楯無に気付くと笑顔で手を振った。

「何、今更来たの楯無！ 訓練見に来たのかしら、それとも晩御飯のシェアの相談……って、その子は？」

楯無の腰に巻き付いている巾着——楯無の存在に気付いた鈴音は視線をそちらに向けた。

視線を受けた楯無はさつと兄の背中に隠れた。その理由を知っている楯無は優しい気な笑みで楯無の頭を撫でる。

「ほら、楯無。連れてきてやったんだから、ちゃんと皆に挨拶だ」

「……で、でも」

「手を握ってるから、頑張れ」

『……、』

この場に訓練をしていた全員が半眼だった。死体と化していた一夏も、目を合わせようとしなかった筈でさえも同様だった。信じられない者がそこに存在している。

『誰だお前』。全員がそう言いたげであった。

「え、誰あれ。楯無の形をしたクローン？」

「ねえ、帯って簪以外にもああいう顔するの？」

「私が知っている限りはしませんわね。寧ろ、後ろに隠れてる方が簪さんの変装とかいう落ちではないでしょうか」

好き勝手言い始めた彼女達に「お前ら……」と楯無は嘆く。普段の行いからすれば当然であった。それを理解している楯無は何か言い返す事もしない。

意を決して楯無の背中から飛び出て楯無の手を握った楯無。何度か深呼吸をした後、皆へ向かい合い——。

「雪月楯無の妹の、雪月楯無です！ 好きなものは兄さんで、苦手なもの兄さん以外全般です!!」

『ああ……』

全員が納得したような声を出して楯無と見比べた。確かに好きなものを『ISと更識姉妹』に変えればまんま楯無である。

この極端過ぎて社会生活が出来ないのではないかと疑われる辺り、血縁関係があるのはこの場の誰もが確信していた。

そして楯無の株はさくつと下がった。あの優しい気な笑みで妹の頭

を撫でる姿から、更識姉妹コン、ISコンでありながら、シスコンでもある事が露見したからである。しかし残念な事に、この男はシスコン程度では痛くも痒くもない。

こういった自己紹介では社交性の塊である一夏が強かった。死体から卒業して人間に戻り、むくりと起き上がって楯愛へ近付いた。

「俺は織斑一夏。楯無のクラスメイトで、君の兄さんと同じ男性操縦者だ。よろしくな」

爽やかスマイルの一夏を見ると、愛想笑いで楯無の背中へ戻る楯愛。

「驚かしたかな？」と視線で問う一夏へ、楯無は妹の頭を撫でながら答える。

「元々人見知りなんだけどさ、男性は特に苦手なんだ。悪い」

「兄さんは別です！」

「後ろから喋ると腹話術みたいね」

愉快気に笑う鈴音が、楯無の後ろに回る。

楯愛と目を合わせ、笑顔で自己紹介を始めた。

「初めまして、私は凰鈴音。中国の代表候補生よ。楯無とは中学二年の終わりまで同じクラスだったの」

「その、お話はよく聞いてました。親友なんですよね？」

「基本お互い遠慮しないから、何となく馬が合っちゃってね」

兄の背中に隠れながらも返答出来る辺り、鈴音とは兄妹揃って気が合いそうだ。

「私はイギリス代表候補生、セシリアオールコットですわ。あなたのお兄様から頼まれ、〃打鉄〃の宣伝広告隊長をしておりますの」

もう自己紹介に組み込まれる程の肩書にまでなってるんだな、と楯無は胸に手を当てて堂々と自己紹介をしているセシリアから目を逸らした。

その内〃ブルーティーズ〃から〃打鉄〃に乗り換えたりしないか心配である。

ひよんな事からぼこぼこにして就任させたのだが、当人の真面目さ故にのめり込んでしまった。

樽では“蒼鉄”という“打鉄”型とティアーズ型のハイブリットを考案し、イギリス政府に提案までしたそうなの。

冗談みたいな自己紹介を楯愛は真に受け、内ポケットから名刺を取り出す。

「あ、あの。私こういった者です」

渡された名刺を受け取ったセシリアは、書かれているその内容に面食らった。

「……嘘でしょう?」

「それが嘘じゃないんだな。俺の妹は保護された研究所先で技術顧問になる滅茶苦茶な奴だ」

「楯愛さんも、あなたただけには言われたくないと思ってますわ」

「私、兄さんになら何を言われても大丈夫です!」

「ああ、そうですの……」

『もういやこの兄妹』。セシリアの表情がそう物語っていた。

だがいい加減慣れてしまったのか、しれっと名刺を保管し倉持技研とのパイプを手に入れていた。“打鉄”に新たな装備の提案がされるのも時間の問題である。

セシリアのターンが終わり、順番的にシャルロットか、と楯無が彼女の方へ向いた時――。

「か、可愛いよお……」

やばい顔をしている元デユノア社スパイが居たので帰ろうと思った。完全に変質者である。

『篠ノ之には悪いがまたの機会にしよう』。そう思い妹を連れ帰ろうとするが、変質者は許してはくれなかった。

「あああああああ! すっごい可愛いよ、楯愛ちゃん! 帯に似てるけど、歴とした女の子だし……持ち帰ってもいいかな!」

俊敏な動きで楯愛に接近し、人形を愛でるように干渉し始める。

シャルロットは今、シャルルIIデユノアとして活動している事を完全に忘れていた。

傍から見れば他人の妹を持ち帰りがっている変態でしかない。よく考えてみれば性別の問題でもない。

楯愛は明らかに引いていた。人見知りと知っている相手にする態度ではないのも明らかだった。

「髪艶々だね。いつも頑張ってお手入れしてるんだ？」

「あ、えと、何時兄さんに会ってもいいように……来ないでください」
三番目の男性操縦者によるセクハラが続く。楯無を中心にしてくるぐると二人の鬼ごっこが開始された。何だこれ。

とりあえず妹に害をなす痴漢を引き剥がし、妹を抱きかかえて保護した。

「これ以上は止めろ、シャル。今のお前唯の変態だから」

「僕それでもいいと思う！ 可愛いは正義だよね！」

「可愛い奴には何をしてもいいって意味じゃないからな？ 誰だこいつに日本語教えた奴あ！」

「……そろそろいいか」

カオス過ぎる惨状に一石を投じたのは篠ノ之箒だった。

彼女の豊満な胸を支えるように腕を組み、輪の中へ入ってくる。

「篠ノ之箒だ。よろしく頼む」

短く挨拶をする箒へ、楯愛は兄に抱きかかえられながら挨拶をする。

「よろしくお願ひします。……あの、篠ノ之つて、その」

この学園で何度問い掛けられたか分からないその質問。

いい加減うんざりだ。箒はそう言いたげに無表情を形作る。

だが、その質問の返答を待たずして、楯愛は続けた。

「成程。そういう事でしたか……大変だったんですね」

「……あなたも、そうなのか」

「はい。重要人物保護プログラムによって、倉持技研に保護されました。兄さんは世にも珍しい男性操縦者ですから」

箒の脳裏に蘇る、姉がISを発表してからの日々。一家は離散し、織斑一夏とは離れ離れになった。

監視を付けられたままの少女時代を過ごし、今でもIS学園には政府から半ば無理矢理に入学させられているような状況だ。

「……恨んで、いないのか。今の自分をそうさせている人間を」

「箒……」

ぽつりと呟いた箒へ、一夏は切なげに名前を呼んだ。

楯愛を抱きかかえる楯無の手に力が籠る。それに気付いた楯愛は兄の方を見て一度優しく笑った後、箒へ向き直った。

人見知りでも兄に関する事ならば、近寄りがたい雰囲気醸し出す箒を相手にしても物怖じなど一切しなかった。

「恨んでなんかいません。私の家族はもう兄さんしか居ないんです。たった一人の家族を恨むなんて、悲し過ぎるじゃないですか」

はつきりと告げた楯愛の表情に嘘偽りなどない。

兄に抱き着き、自らの全てを感じ、自らの全てを捧げる。

「それに、短期間で自由にISの開発が出来ると言うような立場になれなかったから。兄さんの力になれるって思うと、誇らしくさえ思えます」

「……雪月。いい妹だな、大切にしろ」

「分かってる。……と、楯愛。もう時間だ」

IS学園から倉持技研に戻るにはそろそろ出なければならぬ時間になった。

抱きかかえられたまま兄を見つめる妹へ、「また直ぐ会えるだろう」と宥め、二人はアリーナを後にする。

『そのまま帰るのか……』とアリーナに残された一同は同じ感想を抱いたが、兄妹には届かない。

———そんな中。

(……最後に姉さんと話したのは、何時だったか)

自らと同じ境遇に置かれながら、原因となった人物を一切恨む事のない妹を目の当たりにして、篠ノ之箒の心は揺らいでいた。

23. 眠り姫の気持ち

楯愛をIS学園の敷地ぎりぎりまで送って、モノレールが動き出すまで見届けた後、自室に戻った。

一夏達はまだアリーナに居るだろう。あのやり取りで一夏が復活したので、夕食ぎりぎりまで訓練をしているに違いない。

さっさと着替えて簪を迎えに行こう。部屋で待つてると言っていた。

自室のドアを開けて中に入る。上着を脱ぎながらベッドに進み、脱いだ上着をベッドに投げ捨てようとした時。

「……………すう」

俺のベッドにすやすやと眠る元ベッド主を発見した。

眼鏡を掛けたまま眠ってしまったている辺り、ちゃんと寝ようとしたわけではないのだろう。

俺を待つていて眠ってしまったのだろうか。

(……………待つて、俺の部屋で待つて意味だったんだな)

(元々は簪さんの部屋でしたから、問題はありません。鍵を渡したのはマスターの筈です)

(そりやそうだけどな?)

ベッドにぶん投げるわけにもいかなかったので、椅子の背もたれに上着を掛けて前のめりになるように座る。

“打鉄式”の開発で疲れているのは知っている。機体面が一段落して、次は武装面の開発が始まる。眠らせてあげられるのなら、眠らせてあげるべきだろう。

食堂が閉まってしまいう時間にはまだまだ余裕がある。何ならシャルが帰ってきてからでも間に合うだろう。

俺は俺で、“黒雷”のデータの確認でもしよう。“黒雷”でちゃんと飛ぶのはIS学園に来てから初めてだから、確認しておいて無駄はない。

「相棒、機体データを表示してくれ」

『了解しました。データを表示します』

待機形態である黒いチョーカーからモニターが空中に投影される。そこに表示される機体データを一つ一つ確認していく。やはり、打鉄”とは機動性を中心に性能が段違いだ。

“打鉄”には今までもう十分頑張ってもらった。これからは学園に返還するまで一緒に空を感じてもらいたい。

『ところで、マスター』

『どうした、相棒』

『データを確認しながら三秒に一度簪さんを見るのは如何なものかと』

相棒が何を言ってるのかさっぱり分からなかった。そんな事はしていない。

唯勝手に目が簪の方を見てしまうだけだ。俺の意思は全く関係ない。

『簪さんもマスターの睡眠中にじっと見ている事があったので止めはしません、盗み見るのは感心しません』

『堂々と見るのはいいのか……』

『簪さんが眺めていた以上、マスターが眺めていても問題ないかと』
どうやら相棒の中ではやった事はやられてもいい理論が成立しているらしい。

そんなわけで投影されているモニターを閉じて、簪の方を見た。規則正しい寝息と共に上下する胸。どうやら俺とは違って、眠りが浅くなったりはしていないようだ。

俺もシャルがスパイではなくなった事から、しっかりとした睡眠が取れるようになればいいのだが。

「……そういや、眼鏡掛けたままだな」

さつき簪の様子を確認した時、眼鏡を掛けたままなのを思い出した。

彼女の眼鏡は厳密には眼鏡ではなく、携帯用ディスプレイだ。

つまり精密機械なので、使わない場合は安置が基本である。寝返りでもうったりしたらばきりと逝くのもあり得る。

……仕方ないよな。

椅子から立ち上がった、俺は簪に近寄る。屈んで顔を寄せれば、彼女の存在を強く感じた。

まじまじと見る簪の顔。睫毛は長く、目鼻も整っている。水色の髪はさらさらとしているし、揺れる度に仄かに香る簪の匂いが心臓に悪い。

「ん……」

彼女の口から小さく息が漏れた。嫌でもその柔らかそうな唇に意識が持つてかれる。

何かに流されそうになるのを堪え、そっと彼女の眼鏡を取る。

それを丁寧に畳んで、目覚まし時計が置いてあるベッド脇の小さな物置に置けば終了。

後はさっさと簪の傍から離れるだけだったのだが……。

「……あ……」

何故かシャツを掴まれていた。寝惚けているのだろうか。それどころか寝苦しそうな表情になっていた。

折角気持ち良く寝ていたのに、無理に剥がしては可哀そうだ。

力を抜くと、ぐい、と引き寄せられた。当然ベッドに引き摺り込まれ、俺も横にならざるを得なくなった。

「……………すう」

再び簪は落ち着いた様子で熟睡していた。

だが、こっちはそうもいかない。何しろ目の前に無防備な簪が眠っているのだ。

大変試されている。この試練に、俺はどう立ち向かえばいい。

(やはり脱出すべきか！)

(駄目です、マスター。もう簪さんがマスターの胸元に抱き着きました。逃げ場はありません)

相棒の冷静な状況解説が更なる絶望の淵に立たされている事を知らせた。

もう背中にまで手を回されているので、脱出するには簪を起こさねばならない。

詰んでいた。これは簪が目を覚ましたらジエンドである。

(……相棒、簪が目を覚ましたら状況説明を頼む)

もう寝よう。寝てしまおう。急に眠気が襲ってきた。

そういえば、千冬さんに話があったから今日も早起きしたんだっ
た。そりゃ眠くなつて当然か。

加えて、傍には簪が居る。彼女の匂いは俺の鼓動を高鳴らせると同
時に落ち着かせる。

——とりあえず、謝るのは簪が起きてからでいいだろう。地獄
へのタイムリミットがあるのなら、今は天国を享受したい。

そう思つた俺は、この環境から誘われる睡魔に抗う事もせず眠り
へ落ちていった。



更識簪はゆっくりと目を覚ます。そして声にならない声を上げよ
うとし、済んでの所で止めた。

眼前には雪月楯無の寝顔が広がっていた。心の底から落ち着いて
いる様子で、安らかに寝息を立てていた。

冷静になつて状況を確認すれば、自らの恰好に気が付いた。

楯無の背中に手を回し、彼の胸元に抱き着くように眠っていたらし
い。そういえば、夢が途中で心地の良いものに切り替わつていったよ
うな。

鼻孔を刺激する楯無の匂いに溺れそうな自分に気付いて、慌てて離
れようとする簪だが、それを止める声があった。

『待つてください、簪さん』

「『黒雷』……?」

楯無の首に付けられている黒いチョーカーから声が出た。言うま
でもなく、楯無の専用機である「黒雷」のI S コアである。

普段から楯無と簪の会話を聞いたりやり取りを見ていたりしなが
ら、二人は唯のむつりだと認識している「黒雷」だが、どうやら今
回は様子が違っていた。

『よろしければ、そのままマスターを眠らせてあげていただけない

でしょうか』

『どういう……事……?』

『黒雷』の声は平坦で、当然表情もない。しかし、そうでありながら『黒雷』の言葉は簪へ普段とは違う印象を与える。

『ここ数日——厳密にはシャルロットさんが転入してきたからのマスターの睡眠の質は最低です。このままでは健康状態に支障をきたします』

そういえば、と簪は気付く。

昨日も刀奈と話している時に寝てしまったと言っていた。

シャルロット・デュノアのスパイ容疑。ラウラーボーデヴィツヒの包帯帯への執着。

普段は何気なさそうに自分と話す幼馴染は、知らず知らずの内に疲労を溜めていたのかもしれない。

『今のマスターの眠りは深く、簪さんと同室だった時の様に安定しています。恐らく簪さんの存在が強く影響しているかと。分かり易く言えば、安心しているのでしょうか』

『安心……そうだね。私も……楯無と一緒に安心する』

簪は静かに楯無の背中に回していた手を解き、そっと楯無の頭を抱きかかえた。

小さく息を漏らし、またすやすやと眠り続ける楯無へ微笑み、そっと髪を撫でた。

『……楯無は私のヒーローだけど。ヒーローも……疲れるし、休みたいう時だってあるよね』

——だから、お休み。私があなただの安らぎになれるのなら、こんなに嬉しい事はないから。

思えばこのIS学園に入ってからずっと傍で助けてくれていた幼馴染へ、更識簪は心の中で告げる。

言うからには聞いてほしい。だから、声に出すのはもう少し後で。
『でも……楯無、また眠りが浅くなっちゃったんだ』

『また、とは?』

『黒雷』からの言葉に、簪は意外そうな声を出した。

「あれ、楯無から聞いてないの?」

簪の言葉を、*「黒雷」*は肯定する。

『マスターの幼少期の話を聞いてもよろしいでしょうか。マスターからは簪さんと刀奈さんの事しか聞いてきませんでしたので』

楯無は決して自分の事は*「黒雷」*には話さなかった。

否、話せなかったのだ。楯無にとつての幼少期は、更識刀奈の事でいっぱいいっぱい、自分の事など殆ど憶えていなかったのだから。

「……楯無、起きないかな」

『問題ありません。マスターが覚醒状態に近付けば、私が知らせます』

簪は「そっか」と相槌を打って、過去を想う。

出会いはあまり良くないものだった。傷だらけで、今にも消えてなくなりそうな少年がそこに居た。

「楯無とは……小学校が一緒だったの。でも、初めは唯のクラスメイトでさえなかった。誰と居ても笑わない男の子。それが楯無だったから」

『気を張り詰めているのは、私と出会った時も同じでした。マスターは純粹に人を頼る事を知らない人ですから。基本的に、マスターは取引でしか相手に何かを求めません』

「ある日、私とお姉ちゃんは更識家が支援してるとある施設に呼ばれたの。歳が近い子供達が居るから、仲良くしてあげてほしいって」

それが姉妹の『更識』としての初めての仕事であった。

そうして彼女達は出会う。兄一人へ世界を閉ざして己を守った妹と、その妹を壊さないように己をすり減らしていた兄に。

「子供達って言っても……きつとあの二人の為だけに呼ばれたんだと思う。施設に居た他の子供達は、皆仲良しだったから。……周りに馴染めなかったのは、雪月兄妹だけだった」

今ではこうして抱きしめられて眠っているが、当時は熟睡する事すら出来ていないような精神状態だった。

一人か妹が傍に居ないと碌に眠る事が出来ず、眠れても数時間ごとに目が覚める。

楯愛はともかく、楯無は順調に壊れていった。

「私もお姉ちゃんも、最初は受け入れてくれなかった。……でも、大人の方が付き添わなくなつたある日ね。訪問中に私が熱を出したの」

簪自身も人付き合いが得意ではない。好意的ではない雪月兄妹との関わり合いでのストレスから体調を崩すのは無理もない話だった。

「熱っぽい私に気付いたのは、お姉ちゃんじゃなくて楯無だったの」
『簪さんの様子観察において、刀奈さんを上回ったのですか?』

「黒雷」が平坦ながらも驚愕の色を出す。

簪は「黒雷」の声に、「うん」と嬉しそうに微笑んだ。

簪の看病には楯無と楯愛も参加した。更識家の遣いが来る時間帯まで、二人は刀奈と共に眠る簪の傍に居た。

「お姉ちゃんも驚いてた。後から聞いてみたら、『反応が鈍かった。何で他の奴等は気付いてないんだ』って怒ってたけど」

『それがきっかけで仲良くなったのですか?』

「うん。そんなに急に仲良くなったわけじゃないけど……それでも、私とお姉ちゃんには心を開いてくれたんだと思う。私も……楯無の優しさを知れて………何でもない」

顔を赤くして楯無を強く抱きしめる簪。

だが、どれだけ強く抱きしめられても楯無は起きる素振りさえ見せない。

「施設の人に聞いたんだけど……それから、楯無は眠れるようになったって。相変わらず他の子供達とだとあまり眠れないみたいだったけど、一人か楯愛ちゃんとならよく眠れてたって」

『確かに、私が出会ってからのマスターは睡眠面での不安定さはありませんでした。殆ど一人暮らしでしたので、条件としては整っています』

「学校でも、楯無は話してくれるようになったよ。楯愛ちゃんも入学してきて、お別れするまでずっと一緒だった」

そうして雪月兄妹と更識姉妹は仲を深めていき、雪月楯無は更識刀奈の運命を変える為に去っていった。

簪と刀奈も更識家の宿命に踊らされ、楯愛もIS関連のニュースや書籍を執念深く負うようになった。

『マスターは、あの日のマスター達を取り戻そうとしています。だから、信じてあげてください』

「……うん。私は、何時でも楯無を信じてるから」

再会して変わってしまった彼が、一体何を失くしていくのかは分からない。

だが、簪は楯無に誓ったのだ。失っていくものは全て、拾い上げると。

『聞くまでもありませんが。簪さんは、マスターの事をどう思っていますか？』

「え？　え……えっと、その。きつと……そういう意味だよな？」

今更「黒雷」が普遍的な意味での楯無への気持ちを問うとは思えない。

ならば、きつと。問うた意味はもつと深い意味での事。

戸惑いは無い。すつと、息を吐いて。落ち着いた表情で事実を確認するように、雪月楯無の相棒へ簪は告げた。

「……好きだよ。熱を出したあの日、私を見ていてくれてたんだって気付いた日から、きつと私は楯無の事が好き」

少年の微かな優しさに触れて。少年との日々を過ごしていく内に、少女は彼に惹かれていった。

再会して、どうしようもない自分に対して手を差し伸べて。そのヒーローの様な姿が、幼い感情を明確に色付けた。

『そうですか。でしたら、私は簪さんに協力しましょう。昔のマスターを教えていただいたお礼です』

「あ、ありがとうございます……。で、でも、楯無には内緒だからね？」

『無論、マスターには内緒にします。ご安心ください』

「黒雷」の言葉に頼もしさを感じながら、簪は楯無の髪を撫でる。

もうそろそろ食堂に向かわなければ閉まってしまう時間だ。直に彼を起さなければならぬ。

だから、もう少しだけ。いつも気を張っている少年を癒すように、簪は彼を想い続けた。

24. 誰を選ぶの？

更識簪が雪月楯無への想いを口にした翌日。

「帯、今日は土曜日で半日授業だけど、放課後は何しよつか？」

「んー……『打鉄式式』の武装の参考資料集めかな」

「相変わらず簪の手伝いなんだね……僕も手伝っていいかな？」

「好きにしろよ。何回も言わせんな」

「ふふ、はい」

『……………何あれ』

朝食を共にした更識簪と別れた雪月楯無とシャルロットⅡデユノアの教室でのやり取りを見て、クラスメイトの数人が声を上げた。

クラスメイトと言っても、織斑一夏、セシリアⅡオルコット、凰鈴音のいつもの特訓面子である。二組が一名居るのは気にしてはいけなかった。ちなみに篠ノ之箒は別の案件で『どうしてこうなった』と頭を抱えながら机に突っ伏している。

自分の席に座って頬杖を突き、海を眺めている楯無。そして、にこにこ嬉しそうな笑みを浮かべながら、傍らで語り掛けるシャルロット。

傍から見れば放課後の予定を相談しているカップルの様だった。

「どっちがタチでどっちがネコだと思えますか？」

「セシリア、お前どこでそんな日本語を習った」

真剣な表情で思案し始めたセシリアへ、一夏がこれまた真面目な表情で問うた。

「ルームメイトの方が教えてくれましたわ」と誇らしげに語るセシリアへ、一夏はそのルームメイトと縁を切る事を勧めた。

鈴音は鈴音でお互い遠慮なさげに語り合う楯無とシャルロットを面白く無さげに見ていた。楯無の親友梓が取られそうで危機感を感じ、何故か一夏の肩を叩きながら不安を解消していた。

「でも、何か今日は教室が騒がしいよな」

一夏は今日の教室の異変を感じ取る。

楯無とシャルロットだけでなく、一夏の方も見ながらクラスメイ

ト達がひそひそと何かを話していた。

何故か訊こうとしてもはぐらかされてしまう。箒が頭を抱えている事と何か関係があるのだろうか。

楯無の方でもそれは感じ取っていた。正直ざわざわしていて落ちて着かないので、近くのクラスメイト——相川清香へ声を掛けた。

「何かあんの？ また転入生とか？」

「違うよー。あーでも、雪月君に言ってもいいのかな？ ……まあ、雪月君なら大丈夫か、目が死んでるし」

スナック感覚でデイスられた楯無へ、清香は一夏へ聞こえないように告げる。

「年度の学年別トーナメントで優勝すると、好きな男子と付き合えるんだって」

「……まじで？」

信じられない現実を眺めるような目で楯無が確認すると、清香は頷いた。

よくもまあ情報源が布仏本音であるというのに、そこまで堂々と頷けるものである。

「当然対象は織斑君、雪月君、デユノア君。因みに比率は——」

「いや、そこはいいや。俺が最下位なのは予想が付く」

「えー、残念。……私が誰希望かも気になつたりしない？」

「どうせ一夏だろ」と一蹴して楯無は興味を無くした。

がつくしと肩を落とした清香をシャルロットが苦笑いで慰めていた。

さて、と楯無は内心一息吐く。

（——優勝しなければ、不味い）

目の前のフラグを放っておいて、この馬鹿はそんな事を考えていた。

（付き合える、という事は俺達の意味は無関係である可能性がある。大体は一夏とシャル狙いだろうが、もし万が一俺に来られたらどうしようもない……！）

友達も居ない奴が何を言っているのか。そんな人身売買染みた事

が公式に認められている筈もないのだが、友達が居なければこういった事も真に受けてしまうのか。

他の女生徒達も、大体がこれを機に男性操縦者達とお近付きになりたい、程度の感覚で盛り上がっているだけだった。本気にしている者など半数も存在していない。

(シャルの場合も面倒な事になるな。同室の俺にも被害が及ぶ。……やはり、俺が一夏かシャルの誰かが優勝する以外の道が無い)

状況を打破する算段は決まった。

そんな決め方でいいのかと問われそうだが、決まってしまった。

「……勝つぞ、シャル」

「え？」

「俺は優勝する。……絶対負けるか」

この発言によって楯無の相手が一夏かシャルロットかの物議がクラスメイトの間で醸されたが、それはまた別の話である。



「『打鉄式式』の未完成の武装は、荷電粒子砲とミサイルポッド。荷電粒子砲は当てがあつたから資料持ってきたけど、ミサイルポッドのマルチロックオンシステムはちよつとなあ……簪？」

「……あ、え、と。な、何？」

放課後。俺とシャルは簪の『打鉄式式』の武装開発を手伝おうと整備室に居るのだが、肝心の簪の様子が少しおかしかった。

何と言うか、ぼーつとしている。朝会つた時から何故かぼんやりしてはいたのだが、放課後になつても何故か俺をじーつと見つめていて、目の前に投影されているモニターにも集中出来ていなかった。

思わず名前を呼べば、はつとこちらを見る。その顔は紅潮していて、とてもじゃないがいつも通りとは言えない。

「……風邪じゃないよな。一体どうしたんだ？」

「う、ううん……何でもないの」

「まあ、詮索はしないけど。してほしい事があつたら遠慮しないで

言ってくれよな」

簪は更に赤くなつて俯いてしまった。一体何をしてほしかったの
だろう。

とりあえず『打鉄式』の荷電粒子砲の資料をばらばらと捲つて
いると、シャルが驚きの表情で言つてきた。

「帯、簪が風邪引いてるかどうか分かるんだ……」

「いや、見れば分かるだろ」

何言つてんだこいつ。そう言いたげにシャルの方を見る。

しかしシャルには理解出来ないようだ。「いやいやいや」と切り返
されてしまった。

「じゃあ、僕が風邪引いたら分かってくれる？」

「いや全然。首から『風邪です』ってプレートぶら提げてもらわないと
分からん」

「だよね……いいもん、期待してたわけじゃなかったから」

何か知らないけどシャルが拗ねた。ちよつと意味が分からない。

付き合いが長い簪と一週間足らずのシャルとじゃ、様子の理解度の
違いがあつて当然なんだが。

こういう時は優しい言葉を掛けておけばいい。とりあえず先程と
真逆の態度を取つて様子を窺うのは鉄板だ。

「……具合悪かつたら言えよ。察してもらえないのは分かつただろ」
「う、うん！ 直ぐに言うね？」

ほんの数秒で機嫌が良くなったシャル。どうやら当たりらしい。

学園に居る以上最初に言うのは担任の千冬さんと保険医なのだが、
その辺を言うのは野暮だろう。態々機嫌を悪くする事もあるまい。

俺は参考資料として持ち込んだ『白騎士』の資料の内、一つのペー
ジを簪に見せた。

「簪。荷電粒子砲ならこいつを参考にした方がいい。篠ノ之博士が考
案した荷電粒子砲の基礎データが纏められてる」

資料を簪に渡すと、そのページを読み始める。

一分もしない内に読み終えたのか、簪は興奮気味にこちらを見た。

「凄い……今の荷電粒子砲のシステム面に応用させれば、かなりの工

ネルギー収束率と変換効率の改善が出来るかも。よく知ってたね……「白騎士」の武装」

「こいつがな」

小さく自らの首元を指差した。その下には当然「黒雷」の待機形態が居る。

相棒がそれを教えてくれたのだが、まさかISの中でも「白騎士」について教えてくれるとは思ってなかった。

「白騎士」のコアと武装の情報は企業等に技術提供として公開されている。倉持技研にもあると思っただが、そもそも学園の資料室にあっただけで助かった。

まあ、俺に出来るのはここまでするかもしれないなかった。

既に完成している薙刀型近接武装「夢現」はともかく、ミサイルポッド「山嵐」の方は俺にはどうにも出来ない。

「山嵐」の最大の特徴は、マルチロックオンシステムによる四十八発のミサイルがそれぞれ独立した動きで目標目掛けて発射される事だ。

このマルチロックオンシステムが「打鉄式」の最大の特徴だが、開発においては最大の曲者でもあった。

何しろ何一つ完成していない。通常の単一ロックオンシステムを搭載すればこの武装自体は使えなくもないが、それだと強みが消失してしまう。

流石にマルチロックオンシステムともなると俺の知識じゃどうにもならない。簪自身も厳しいだろうし、ここは技術方面に特化した研究者に任せるしかないだろう。つまり楯愛頼みである。

「さて、今日はやる事がなくなったかな……」

データの応用自体は簪がやるだろうし、俺の手は必要ないだろう。

資料集めが主な目的だった今日の放課後はもう暇である。

「あ、それなら僕と模擬戦やろうよ。今日はオルコットさんと凰さんがアリーナで模擬戦やってるみたいだし、僕も訓練したいな」

「ああ、そっぴやそんな事言っていたな。あいつ等は学年別トーナメントの優勝賞品目的とかじゃなくて、純粋に優勝が目的みたいだった

けど」

放課後になった途端、セシリアが鈴音を攫いに速攻で二組に突撃して「さあ行きますわよ鈴さん、第三アリーナが私達を呼んでますわ!」と鈴音を引き摺っていた。

鈴音は鈴音で「はいはい、楯無の為に今日こそあれを完成させましょうねー」と引き摺られながら返していた。鈴音は本当に良い母親になるんだろうな。

「……優勝賞品? そういえば、クラスの皆がざわついてたような」
簪には気になったワードがあつたようだ。

どうやら四組にもその話は通じていたようだ。どうして簪がその話を知らなかったのかは……簪にはあんまり友達が居ないからである。まあほぼ零の俺よりましだろう。

「うん、今度の学年別トーナメントで優勝したら、好きな男子と付き合えるんだって」

「……っ! そ、そうなんだ」

シャルの何気ない言葉に、簪は興味無さげに相槌を打った。

しかしシャルには色々とお見通しだったらしく、にこにこ笑みを浮かべながら公開処刑を始めた。

「ちなみに、簪は優勝したら誰と付き合うの?」

お前爆弾投下するの好きだな。

簪がやっと落ち着いたのにまた顔が真っ赤になってしまっただろうが。

「……え、えと。……シャルロ——」

「僕は無しだよね? だって女の子なんだから」

わたわたと無難な答えをしようとした簪をシャルが笑顔で潰しに掛かった。

事実上俺と一夏の決選投票だった。これ、本来俺が居ない所でのガールズトークの話題だよな?

簪が助けを求めるように俺を見ているが、これを俺はどう助ければいいんですかね。

「まあ、あれだ。優勝したら必ず誰かを選ばなきゃいけないわけじゃ

ないだろ」

「……そう、かな」

頑張つて助け舟を出してみれば、簪は不満気だった。

(あれ、俺駄目だった?)

(駄目かどうかと問われれば、最大限に駄目です。もつと自信を持つべきです)

何故なのか。無回答のチャンスを出したのがそんなにいけないかったのか。

乙女心は複雑である。同じ女子である相棒に簪の気持ちが分かるのも無理からぬ事だ。

シャルも「意気地無し」と横目で言ってきたが、どうして俺はこんな袋叩きにされているのでしょうか。

……ああ、分かったよ。意気地を見せればいいんだろう。覚悟を決めて腕を組み、息を一つ吐く。

「……俺だな。一夏はありえない。誰が何と言おうが簪が選ぶのは俺だ」

何だこの公開処刑は。顔が熱くなるのが手に取るように分かる。

簪とシャルもこちらを見て赤面していた。おいシャル、そもそもこれお前のせいだからな。

「帯つてさ……簪とか楯無さん以外には割と普通にこういう事言うんだよね。……でも、他の人に言ってるの見るのもいいなあ」

「……私、優勝したら楯無を選ぶね」

相変わらずシャルが言っている事はスルーしておく。……だが、簪の言った事はスルーは出来ないだろう。

「……まあ、選ばれたら断れないよな」

「うん……断らないでね」

お互い照れながら見つめ合う。どうしてシャルはこの空間に居て平気なんだろうか。

寧ろにここにこしているのが不思議でしようがないが、シャルに問う前に異変があった。

「あれ、一夏から通信だ」

シャルの専用機から通信ウィンドウが開かれる。

映し出されたのは先程シャルが言った通り一夏だ。大分焦った様子である。

『シャルル、大変なんだ！』

「一夏、どうしたの？」

『ボーデヴィツヒが鈴とセシリアに模擬戦を挑んだらしいんだ。でも、穏やかな様子じゃないらしい』

だろうな。ボーデヴィツヒが双方の合意を経て模擬戦しているのは想像出来ない。

でも、穏やかじゃなくても模擬戦は模擬戦なんだから大した事態にはならないだろう。

——いや、ボーデヴィツヒなら大した事態にしかねない。喧嘩を吹っ掛ける為にレールカノンをぶっ放す奴だった。

『何が起きるか分からない。俺は止めようとアリーナに向かってるんだけど、シャルルも来てくれないか？』

「う、うん。分かった」

『あと、楯無にも連絡してくれ。通信が通じないんだ』

「あ……めっちゃ通信来てた」

“打鉄”の方の回線に一夏の方からの個人間秘匿通信が大量に送られてきていた。すまん、一夏。

「分かった。直ぐ行くね」

通信を切って、シャルは真面目な表情でこちらを見た。

流石にここで行かないとは言わない。鈴音とセシリアが怪我をする可能性もある。

簷もウィンドウを閉じた。どうやら一緒に来るようだ。

「じゃ、行くか。目的地は第三アリーナだ」

二人は頷き、揃って整備室から出ていく。

25. 黒の影響

「一夏ー！」

アリーナへ辿り着いた三人は観客席にて様子を窺っていた一夏と合流した。

「シャルル！ 呼び出して悪い……って、楯無、お前何してたんだよ！」

「野暮用だよ、出れなくて悪いな」

簪と微妙な雰囲気になってましたとは言える筈もなく、楯無は涼し気に流す。

アリーナの方を見れば、セシリアⅡオルコットと凰鈴音がラウラⅡボーデヴィツヒと相対していた。

「まだ何か起きてるわけじゃないか。状況はどうなってる」

「鈴とセシリアがタッグでボーデヴィツヒと戦ってるけど、徐々に押され始めてる。……やっぱり、ボーデヴィツヒは半端じゃないな」

そうだね、とシャルロットは頷いた。

ラウラは代表候補生と言うよりも軍人としての側面が強い。

当然一対多の戦い方も熟知しており、それによって数で勝る上に第三世代機に乗っている代表候補生二人をもってしても押しきれない。

寧ろ両者の癖を知り始めたラウラが、全距離対応型の利点を活かしながら反撃を始めていた。

「こんのおおおおおー！」

「甘いな、中国ー！」

鈴音の「双天牙月」とラウラのプラズマ手刀が火花を散らす。だが、連撃はラウラの方が速い。

リーチを活かして距離を取ろうとする鈴音にラウラは追い続ける。楯無の時の様にプラズマ手刀の範囲外へ逃がす気はない。自らの距離に置いたまま速度で圧殺する。

じりじりと削り取られていくシールドエネルギーに鈴音は焦る。このままでは嬲り殺しだ。

「ああもう、鬱陶しいのよー！」

「この状況でウエイトのある空間圧兵器を使うか、未熟者め」
状況を打開する為に頼った衝撃砲のタイミングに、「A I C」を重ねられる。

動きが止まってしまった鈴音をプラズマ手刀が切り刻んだ。

直撃によってみるみる削られていくシールドエネルギー。このままでは十秒持たず、「甲龍」のシールドエネルギーは尽きてしまう。

「ブルーティアーズ！」

そうはさせまいと空中に居たセシリアがビットを切り離し、ラウラへと向かわせた。

ビットから放たれたレーザーがラウラと鈴音の間に割り込む。即座に対応したラウラは距離を取り、レールカノンの照準を鈴音に合わせた。

「A I C」が解除された直後の鈴音にはそれに反応する余裕はない。火を噴いたレールカノンは無残にも鈴音へ直撃した。

「きやあああああー！」

「鈴ー！」

吹き飛ばされた鈴音はアリーナの壁まで転がっていく。

「甲龍」の装甲は損傷しているが、ISの絶対防御が発動した為、鈴音自身には怪我はない。だが、これ以上の戦闘が不可能なのは誰にも明らかだった。

「鈴さん！」

「次は貴様だ、イギリスー！」

「——っ！」

レールカノンの照準を合わせたラウラのその言葉に、ビットを回収していたセシリアはスナイパーライフルを手早く構える。

砲口と銃口。その二つが同時に互いを射止める為に火を噴いた。

実弾とレーザーが衝突し、空中で爆風を起こす。

「何という精密さだ……！」

観客席から聞こえた声に、楯無は振り返った。

一夏と同様に騒ぎを聞きつけたのか、篠ノ之箒が観客席にやってきていた。

元々篠ノ之流の一件から微妙な関係性となってしまうていたが、昨日楯愛を紹介した時から更にぎこちなくなってしまうていた。

(束姉の妹なだけあってよく分からん……)

そう思つて楯無はアリーナへ視線を戻す。

一瞬だけこちらを見ている簪の顔が視界に映つたが、その様子はよく分からない。

妹は妹で難儀なのだろう。ともすれば、女である事より先に。

「そろそろ本気で踊つていただきますわ!」

再び四機のレーザービットを切り離れたセシリア。

四方を囲むように動き始めたビットだが、それも叶わない。ラウラが即座に“A I C”を使用して動きを止めていた。

「下手なりードで踊るのは遠慮する。品性を疑われるのでな」

「あら———そうですか」

即座に追加で二機のミサイルビットを切り離す。

同様に止められてしまうが、それでもセシリアは構わない。

「集中力さえあれば、同時使用さえ可能———なら、これですわね」
照準さえ定まっていけないレーザービットが発砲する。

「はっ、万策尽きたか———なっ!」

無様な光景を嘲笑うラウラの様子が一変する。

それもその筈だ。———放たれたレーザーが曲がり始めれば、無理もないだろう。

標的は当然ラウラ。自らを追尾し始めたレーザーを避ける為に、ラ

ウラは“A I C”を解除して飛び回つた。

「厄介な……!」

「あなたこそ、初めてこれで踊るのはあの相手と決めておりましたのに———罪深いですわね!」

「……すげえ」

四つのレーザーを曲げてラウラを追い回すセシリア。それを見て思わず一夏は呟いた。

あれを自分との訓練で使用した事は無い。恐らくつい最近物にしたか、もしくはまだまだ研鑽中の技術。

そして、それは今回は後者の様だった。更識簪が異変に気付く。

「……セシリアの消耗が激しい。相当無理してるんじゃないかな」

「あれだけ曲げられるんなら、鈴音が墜ちる前に組み合わせてた方が確実だった。切り札にするにしても心許ないぐらい未完成なんだろうな」

簪と楯無の予想通り、攻め立てている筈のセシリアの方が精神的に疲弊していた。

額には玉の様な汗が浮かび、息が乱れ始めている。

やがて精度はほんの少しだけ甘くなる。偶然鈴音の付近に移動していたラウラはその隙を見逃さない。

「丁度いい、弾避けになってもらうぞ」

「なっ——きゃあ!?!」

“シユヴァルツエアIIレーゲン”から放たれたワイヤーブレードが鈴音の四肢に絡み付き、身体を自由を奪う。

そして強引に振り回す事で、迫るレーザーに直接ぶつけ撃墜している。

「きゃあああああ!!」

「鈴さん! あなた、よくも……!」

「強がついていても消耗しているのはお見通しだ! 無理をしてもその程度とはな!」

残ったワイヤーブレードがセシリアに向けて放たれた。本来ならば避ける事は造作もない筈のだが、消耗しているセシリアは反応が一瞬遅れてしまう。

ワイヤーブレードがセシリアの自由を奪い、空中に拘束する。

追撃にレールカノンを構えるラウラが、鈴音の方をちらりと見た。

「もう貴様は用済みだ」

にやりと口角を上げたその言葉に、楯無は静かに声を出した。

「一夏、『零落白夜』でアリーナのシールドを破れ。そろそろ不味い」

「分かった!」

「シャルは簪と……篠ノ之を守ってろ。怪我させるなよ」

「任せて」

ISを展開出来る三人が散ってISを展開するスペースを確保する。

“白式”と“ラファールIIリヴァイヴカスタムII”が展開され、それぞれが役割を果たす構えに入る。

「壁にでも埋まってるー！」

その言葉と共に鈴音をアリーナの壁へ投げつけるのと、一夏が“零落白夜”でアリーナのシールドを破るのは同時だった。

「飛ぶぞ、“黒雷”」

短く告げた言葉が、首元のチョーカーを光らせた。

その輝きは粒子となって楯無の身体を包む。楯無が跳ぶと同時に粒子は黒い装甲となり、彼の翼となった。

背部に装備された二つのウイングスラスタールが特徴的な黒いISが、スラスタールにエネルギーを送る。

刹那。自らが開けた穴からアリーナへ突入した一夏の横を、何かが高速で通り過ぎた。

(何だ——?)

一瞬。ほんの一瞬だけ一夏の視界に映ったのは——黒い帯。

今までの一夏の常識では考えられない速度のそれがISであると気付く頃には、黒いISは壁に叩きつけられる寸前の鈴音を抱きかかえていた。

「よう。大丈夫か」

「楯無……あんた、そのIS」

「それは後だ。一夏、鈴音は任せたぞ」

ぽいつ、と鈴音を空中に放り投げると、遅れてきた一夏が受け止める。

その距離感に互いに顔を赤くしたのを確認した楯無は、『あ、今それやるんだ』と半眼になった。

自分が言えた事ではないと口には出さない辺り、色々と弁えていた。

「つと、やばいやばい」

今にもレールカノンがセシリアに向け発射されそうなのを見て、楯

無はスラストターを噴かす。

その数秒後にはワイヤーブレードのワイヤー部分が切断され、放たれたレールカノンは何かに阻まれセシリアに直撃には至らなかった。セシリアの姿勢が崩れるのを即座に抱きかかえて支え、ゆつくりと空中に漂うその黒い姿。

「何だと……？」

——ラウラⅡボーデヴィツヒは、包帯と錯覚した。

「もう終わりにしようぜ、ボーデヴィツヒ。お前の勝ちだよ」

手に持っていたブレードを量子に戻し、レールカノンを防いだ非固定浮遊部位のシールドは本体の両肩部の後方へ戻っていった。

セシリアの「ブルーⅡティアーズ」の展開は解け、ISスーツ姿となって楯無の腕の中に収まっていく。

ぐつたりと楯無へ身体を預けるセシリアへ、楯無は語り掛ける。

「つと、やっぱりさっきのは相当無理してたのか」

「は、あ、あら……やはり見られていましたか……。残念ですわ……はあ、あなたに見せるのは………対峙している時だと、決めていましたのに」

「息絶え絶えでもそれだけ言えるなら十分だな。………凄いや、セシリア。お前と飛ぶのが楽しみだ」

ふ、と互いに不敵な笑みを浮かべる二人。

「ですが」と楯無の口元へ銃の形へ折った指を当て、セシリアは微笑む。

「この偏向制御射撃はあくまでもあなたを詰める為の手段……。本命は当然、私のライフル一択ですわ」

「撃ち落とせるかな、今の俺を捉えるのはそう楽じゃないぜ」

「上等ですわ………そうでなくては、落とし甲斐がありませんもの」

セシリアとの会話を終え、楯無はラウラの方へ視線を向ける。

ラウラは地面から開放回線で楯無へ通信する。

「そのISはお前の専用機か、雪月楯無」

「そうだ。……これが、俺の本当の翼だ。名前は「黒雷」。同じ黒同士、仲良くしようぜ」

「そのISならば貴様は窮屈を感じられずに飛べるといふ事か。見てみたいものだな」

「今度な」と楯無は苦笑いで流す。模擬戦自体は嫌いではないが、機体が損傷する程の激しい戦闘が望んではない。

「多分、そろそろ千冬さんが来る。怒られる前に引き下がってよ。俺は怒られたくないから怪我人を連れて帰るぞ」

「……喰えん奴だ。——織斑一夏！」

ラウラは鈴音を降ろしている一夏へ眼光と共に宣言した。

「学年別トーナメントだ。そこで貴様と決着を付ける。貴様の全てを否定してな」

「……分かった。だけど勝つのは俺だ。お前を真正面からぶっ飛ばして、性根を叩き直してやる」

真つ直ぐにラウラの眼光を受け止める一夏に、箒と鈴音は頬を染めて見惚れていた。

うんざりした様子で二人の様子を見た楯無だが、直ぐに箒の顔が曇った事に気付く。

同様に懐のセシリアも気付いたようで、二人して顔を見合わせた。深く追求する事はしなかった。

ラウラはピットへ戻っていく。アリーナに残された者達は、アリーナのシールドを破壊する程の事態となって駆けつけた千冬達の指示によって解散する。

だが、それより先に篠ノ之箒の姿は消えていた。

(私にも力が……ISがあれば……一夏と共に並べるのか?)

アリーナの廊下を歩きながら、箒は一人思う。

何故、自分は守られるだけの人間なのか。戦う一夏の隣に居る事も叶わず、彼を見送る事しか出来なかった。

せめて声を届けようと、戦う彼へ発破を掛けた事もある。

それによって自らが危険に晒され、箒を庇い雪月楯無は大怪我をした。

ISが無ければ、自らは一夏に置いていかれる。だが、自らを危機に追いやったISを所持する資格が自分にあるのだろうか。

一歩間違えれば、あの無人機と自分に違いは無くなってしまう。だが、ISという力がなければ、織斑一夏の隣に並ぶ事は出来ない。

(姉さん……)

堂々巡りの行く末に、思ったのはよりによって姉の事だった。

何故、ISを作ったのか。ISを作って、何をしたかったのか。

問い掛けようにも、そこに姉は居ない。姉との繋がりを思わせる少年は、突如黒いISを纏って空を飛んだ。

そこに無人機のような恐怖感はなかった。どこまでも飛んでいきそうな自由さを覚え、それに憧れもして——自分には届かないと思えてしまった。

(私は……何がしたい)

彼が篠ノ之流を使った事を怒っているわけではない。誰に教わったかも、些末な問題でしかない。

唯、見ないようにしていた姉の残影を見て、不安定になっていただけだ。

思えば、無人機の一件の謝罪もしていない。彼は気にしている素振りはないが、ISの授業の際に両腕に残った傷跡を見てしまった。

(力は欲しい。せめて自らを守れるだけの力が。だが、その力が誰かを傷付ける事にもなり得るのを、私は……)

——篠ノ之箒は、迷っていた。

26. パートナーの行方

「あーもうっ、むっかつくー！」

医務室に、ベッドから上体を起こした鈴音の怒号が響き渡った。ボーデヴィツヒとの私闘の後、千冬さんの指示により解散した俺達は、負傷していた二人を医務室に運んでいた。

ISを展開していた俺と一夏、そしてシャルは鈴音とセシリアを医務室に運ぶ役目を負わされ、観客席に居ただけの簪は部屋に返された。篠ノ之は……知らない間に居なくなっていたので知らん。

「でも二人共大した怪我がなくて良かったよ」

「そうでもありませんわ。楯無さんにお見せしようと思っていた隠し玉を、あろう事か未完成の状態で披露する事になったのですから」

鈴音の隣のベッドで同様に横たわっていたセシリアが、シャルの言葉に反応してそう言った。

セシリアは鈴音に比べれば機体や身体の方のダメージは軽かったが、精神的疲弊が酷かったので医務室行きとなっている。

「お前俺の事好きだな。撃ち落としたい欲求どんだけ高いんだよ」

「それはもう、朝から晩まであなたが地面に這い蹲る様をイメージするのも吝かではない程に」

何このイギリス代表候補生怖い。

ふふ、と艶やかに笑うその姿はあらゆる異性を魅了する事だろう。内容が物騒過ぎる事に目を瞑ればだが。美人のクラスメイトにこうまでされてるのに、ちつともときめかないのは俺のせいではないだろう。

「大体何なのよあのドイツ！ “AIC” 反則過ぎでしょ！」

「まあな。あれは初見喰らった時焦った」

武装の展開自体封じられてたら俺だって詰んでいた。

鈴音のクレーム染みた文句も無理からぬ事だろう。

「それはそれとして、夕食どうする」

「私は今日洋食、あんたは和食を攻めなさい」

「あいよ。中華抜きとは珍しいな」

『今その話題する?』という一夏とセシリアとシャルの視線を受け流しつつ、今日の夕食の内容のアポを取った。

俺達学生にとっては重要な話である。貴重な楽しみの一つだ。

「ところで、何で二人はボーデヴィツヒと戦ってたんだ?」

場の空気を変えようとした一夏の言葉に、鈴音とセシリアは息を詰まらせた。

そんなに恥ずかしい理由があったのだろうか。特に鈴音の顔は真つ赤だ。何か恥ずかしい欲求を考えてる簪に似てるな。

やがて鈴音は顔を赤くしたまま、静かに口を開いた。

「一夏の事、馬鹿にされたから……」

「お、俺の事か?」

あ、そういう事ね。

いつもの朴念仁ぶりで理由が分からなそうにする一夏へ、半分やけくそ気味に鈴音は告げる。

「そうよ! しょうがないでしょ、好きな人の事馬鹿にされて黙ってられる程、私は大人じゃないっての!!」

「お、おう……そうか、気付かないですまん」

「い……いいのよ。私の我が儘だし」

そしてお互い赤面しながら黙り込んでしまった。何この空気。俺の夕飯談義の方がよっぽどまじだったろ。

シャルロットは「うわあ……」と微笑ましそうに笑顔を浮かべているし、セシリアは何度かこういった現場に出くわしているのかげんなりしている。セシリアの精神的安息はどこだ。

「ま、鈴音はこれを機に少し落ち着く事だな。こうやって怪我してたら、理由にされた方も心配する」

「……そうね。ごめんね、一夏。次からは、ちよつと冷静になるわ」

「ありがとう、鈴。怒ってくれて嬉しかった」

二人は微笑み合いながら、何かいい雰囲気になっていた。確かにふられてはしまったが、こうしてはつきりと想いを告げられるようになったのは鈴音にとっては良かったのかもしれない。

「セシリアも一夏の事を馬鹿にされて悔しかったの?」

シャルはセシリアにそう尋ねた。完全に脳味噌が恋愛モードに入っている。男装しているのがよっぽどしんどいのだろう。昔は女子同士で恋愛トークとかもしていたのだろうし。

セシリアは鈴音と違い、堂々と胸を張っていた。ちなみにISスーツなのでボディラインが強調されていた。

「私は無論、楯無さんと『打鉄』が侮辱されたからですわ。『打鉄』如きでは奴の実力は発揮しきれない。そしてその状況を良しとしている奴自身も、強さを腐らせるだけの愚か者だ』なんて言われれば、憤りもします」

「流石『打鉄』 広告宣伝隊長。手袋投げる理由にまでなるのか」

「……楯無さん、あなたも大概朴念仁ですわ」

溜息を吐かれてしまった。

隣のシャルも苦笑いしているので、考えないようにしていた事を言ってみる。

「……もしかして、俺の事でも結構怒ってたか？」

「当たり前です！ 生涯を掛けて撃ち落とす目標と定めた相手を馬鹿にされ、どうして穏やかでいられましょうか!？」

重い重い。セシリアの愛？ が重い。

まあ、俺の存在がセシリアのIS乗りとしての実力の向上に役に立っているのならいい事だ。そういう事にしておこう。

「まあ、怪我しない程度にしろよ。俺が馬鹿にされるのはどうでもいいから、自分を大事にしろ」

「……肝に銘じておきます。ですが、次このような事態がありましたら、次こそはその無礼者を撃ち落としますわ」

怪我しないのなら別に構わない。そこはセシリアにも譲れない所もあるのだろう。

さて、これからはどうなるのだろう。多分この場の全員が気付いていながら、気付いていないふりをしていた。

どどどどど、と廊下から物凄い振動が伝わってきている。しかも強くなっている。でこちらに近付いてきているのは間違いない。

——いやあ、これ無視するのは無理じゃないか？

その振動が最高に高まった時、医務室のドアが盛大に開けられた。

『織斑君!!!』

『デュノア君!!』

『雪月君』

ドアが開けられると同時に雪崩の様に入ってきた、数えきれない人数の女子による三人の男性操縦者の名前が聞こえてきた。

殆ど一夏とシャルの名前で、俺の名前は掠れる程度にしか聞こえてこなかったのは仕様である。

転入して一週間経っていないシャルの人気に負ける俺の人気だが、そもそも名前を呼ばれているのが驚きだった。

だが、たとえば誰の名前を呼んでいようと、続く言葉は一つだった。

『私とペアになって!!!』

ちよつと言ってる意味が分からなかったのだが、先頭に立っている女子から一枚の紙を渡された。

「えーと……何々——何……だど？」

そこに書かれていた恐るべき内容。

「今月末に開催される学年別トーナメントが、タッグ戦になったただど？」

「そうなの。だから織斑君、私とタッグを組んで！」

「いいや私よ」

「わーたーしー！」

「じゃあ私はデュノア君と」

「そうはさせないわ！」

目が完全に獲物を狩る目になっている女子達に囲まれる一夏とシャル。完全に身動きを封じられていた。俺の周りには数名しか居ないから動き放題だった。

一夏はともかく、シャルは大分困ってそうな顔をしていた。そりやそうだ。ペアを組めばシャルが女性である事がばれる可能性が当然上がる。

仕方がないのでシャルに助け舟を出す事にした。

「一夏、お前はシャルと組むんじゃないのか？」

俺のあからさまな嘘に一夏がはっ、と反応する。

「そ、そうだ！ 悪い、俺はシャルルと組むんだ！ 諦めてくれ！」

「ええっ!？」

「なーんだ、じゃあしようがないわね」

「帰ろ帰ろ」

一夏の一言で女子はぞろぞろと退散していった。あ、男同士が組むのはそれはそれで需要があるのか。

かなりの大人数が退散した後、残ってるのは俺の周りに居た数人。よく見れば相川と谷本が居た。

「雪月君は、パートナー決まってるの?」

「私の優勝までの道のりに付き合っ。そしてその後も付き合っ！」

成程。俺と組めば優勝に近付けると思っっているのか。

確かに、クラスメイトの俺の認識は『クラスで一番ISの操縦が上手い人』らしい。

優勝までの用心棒として俺を選ぶのはある意味理に適っっていた。

しれっと愛の告白をしてきた相川が居たような気がしたが、そうするなら優勝する必要ないだろ。

「悪い。俺は俺で当てがある。優勝する為の当てがな」

そう。たとえルールが変わろうと、優勝しても問題ない奴が優勝しなければならぬ事実は変わらない。

寧ろルールが変わったのなら、よりその重要性は高まったと言える。下手にパートナーを選んで優勝し、権利を使われたら元も子もない。

ならば選ぶのはあいつ一択。實力もありながら、俺の事を微塵もそいう対象に見ていない。

——彼女以外に、パートナー候補はありえなかった。



夕食時の夕暮れ時。ラウラーボーデヴィツヒは一人アリーナの観

客席に佇んでいた。

元よりクラスに馴染む気などなく友人など一人も居ない彼女は常に一人だったが、そういった意味ではなく、存在的に一人になりたかったのだ。

孤独になつて思うのは、憎い相手の事。

織斑一夏。敬愛する織斑千冬の弟にして、彼女のモンドグロツソ二連覇を逃した原因を作った汚点。

何度か接触を試みて挑発もしてみたが、挑発に乗るような事はしない。腰抜けと評するのが相応しい、とラウラは侮蔑する。

包村帯。第二回モンドグロツソにおいて、千冬の準決勝の相手だった女性。千冬の試合を棄権し、結果として千冬の現役最後の試合を不完全燃焼に終わらせた。

モンドグロツソ終了後に各国が行方を追ったのだが、篠ノ之束と同様に影すら見せず行方不明のままだ。

だが、包村帯の方はともかくとして、織斑一夏の方は直に決着が付く。

その事にラウラは高揚しながら、ゆっくりと目を閉じ——人の気配を感じた。

「誰だ」

短く告げれば、アリーナの出入り口から影が一つ現れた。

ラウラは後ろへ振り向き、気配の持ち主を確認した。

肩程まである黒髪は男性にしては長い。両の目の色は同じではなく、左目が白で右目が赤のオッドアイ。

身長や体型が男性にしては華奢である事から、遠目から見れば女性に見えない事も無い。

「いやあ、本当はもうちよつと早く話し掛けようと思ってたんだけど、どうにも孤独に佇むお前に見惚れてさ」

「……雪月か」

「かっこよかったぜ、狼みたいだった」

口笛まで吹いてきそうな賞賛ぶりで、雪月楯無はラウラにボーデーヴィツヒに近付いた。

つい数時間前はアリーナでISを纏い睨み合っていた筈なのだが、今はそんな事などなかったかのように警戒していなかった。

「何か用か」

「そうだ。俺とペアになってくれないか？」

そうして楯無は一枚の紙を差し出した。

受け取ったラウラは暫くそれを見て、視線を楯無に向ける。

「学年別トーナメントの試合形式がタッグ戦になったというわけか。

……何故私がお前と組まなければならぬ」

「優勝する為にお前と組みたいから。強くて俺にも無関心。パートナーとしては最高だな」

「私が貴様と組むメリットは何だ」

「お前の要望に沿うように戦ってやるよ。知らない奴と組むより、その方がお前にとっても都合がいいだろう」

「俺の実力は知っているだろう？」と腕を組んで自らをアピールする楯無を、ラウラは訝しんだ。

付き合いはあまりにも浅いが、自らの実力を理解しているだけで、誇示するような人間ではなかった筈だ。

自分と組もうとするのは他の理由があると、ラウラは睨んだ。

そういえば、とラウラは思う。条件の中に『無関心』という単語が入っていた。興味が無かったので聞き流していたが、クラスメイトが数名固まって『優勝すれば好きな男子と付き合い合える』と噂をしていた。

優勝するとすれば、その権利を奪う事になる。余程女子に優勝させたくはないのだろう。自分が知らないだけで他の賞品もあるのかもしれない。

「……いいだろう。ならば、一つだけ誓え。——織斑一夏は、私の獲物だ」

その言葉を言うのを知っていたように、楯無はあっさりとした承した。

「いいぜ。じゃあ一夏達と戦うまでは普通に連携取っていくか。申請しとく」

話はこれで終わりとばかりに、楯無は踵を返して去っていく。

忙しい男だ。普段は呑気な割には、今回の事には衝撃を受けていたのだろうか。

ラウラもその場から離れようとして、足を止めた。アリーナの入り口に新たな人影が見えた。

「夕食の時間になつてもアリーナに屯する生徒が居ると聞いて来てみれば、お前だったとはな」

「教官……」

突如現れた織斑千冬に、ラウラは佇まいを直して敬礼をした。

その様子を見て、嘗て教導していた時の様に「織斑先生と呼べ」と千冬は注意する。

「ここに来る途中雪月とすれ違った。学年別トーナメントはあいつと出場するらしいな」

「はい。先程奴に交渉され、条件付きで了承しました」

「お前、あいつとの模擬戦でやられたそうじゃないか。強かっただろう？」

意地悪そうな笑みで告げてくる千冬を見て、ラウラは素直に驚愕した。

あの千冬がこんな風に一生徒の事でラウラに語り掛ける事などありえない。

思わず返答が遅れてしまう程、目の前の光景は異常だった。

「ですが、奴は自らの実力を十全に発揮してはいませんでした。生徒として——それも経験の浅い男性操縦者としては不可思議な強さ。……本日新たな専用機を使っていましたか、あれは……まるで——」

「あいつはISに関して嘘は吐かん。たとえ自らをどんな虚構で飾ろうともな。……お前があいつと組むに当たり、必要なのはそれだけだ」

「早く戻れ。食堂が閉まってしまふぞ」と付け足して、千冬は去っていく。

アリーナの空中を見つめ、ラウラはあの時の感覚を思い出す。
黒い装甲。自由を象徴する二つの翼。隙の無い佇まい。

ラウラの知る限り、それ等を合わせ持つのは一人しか居ない。

「包村、帯……雪月、楯無——」

標的である女性の特性を持つ男性の名を唱え、ラウラはその場から立ち去った。

27. デートと言ったな、あれは嘘だ

ラウラとペアの約束をした翌日の日曜日。雪月楯無はIS学園のモノレール駅の前で佇んでいた。

静かに壁に寄り掛かりながら、端末で時間を確認している。

その様子は優雅さを感じさせる程落ち着いており、時折駅前を通る女生徒達が振り返り見惚れてしまう。

それに気付いた楯無が微笑みながら小さく手を振ると、女生徒は黄色い声を上げて去っていく。

かれこれ三十分、こんな事を繰り返していた。

(……何これ?)

クールな表情を崩さず、内心汗だらつだらで楯無は思う。

(あれ? 俺、刀奈を待ってた筈だよな?)

(はい。マスターはこれから刀奈さんと買い物をしに、レゾナンスへ向かいます。現在はその待ち合わせです。……今朝の出来事ですが、マスターの記憶領域には異常がありましたか?)

「憶えてるよ。理解出来てないだけで」

思わず小さく声を出して、楯無は今朝の事を思い返す。

まず翌朝。更識刀奈が楯無の部屋に襲撃してきた。本日は生徒会の仕事が無く、予定が空いている。買い物に付き合っしてほしいと。

勿論二つ返事で楯無は了承した。楯無にとって刀奈の用件は簪と同レベルで優先すべき事であり、誘われた時点で本日の用件は全てキャンセルであった。

簪は“打鉄式式”の武装開発を楯愛と通話で相談する事になっており、シャルロットは訓練に打ち込む予定があった。共に過ごす相手も居ない楯無自身に特に用事もなかったのは言うまでもない。

そしてこれに着替えてほしいと渡された紙袋の中身を確認もせず、喜んで受け取った。刀奈の嬉しそうな笑顔があれば、警戒心など抱く必要もなかった。

同室のシャルロットが完全に状況に置いていかれていたが、もう色々と諦めていた。

そうして指定された時間の一時間前。渡された紙袋の中に入っていた服に楯無は着々と着替え——次々と表情を殺していき、一度脱ぎ、何故か自分の荷物に入っていた物を着込んだ後に再び着た。

偶然帰ってきたシャルロットが唾然とする中、颯爽と部屋から出て行く。そしてIS学園からしれつと抜け出し、モノレールの駅で刀奈を待っていた。ラウラに見つからなかったのは運がいいとしか言いようがなかった。

言葉にすれば何もおかしい事は無い。至って普通の買い物待ち合わせだった。

しかし、何故か。楯無は内心汗だらっただらであったのだ。

「ごめん、お待たせ」

待ち人來たり。更識刀奈がやってきた。

お待たせ、とは言うが、彼女が遅れたわけではない。待ち合わせの時間には十分以上あった。

楯無は刀奈の方へ視線を向け、その姿に驚いた。

ゆったりとした半袖の水色のシャツワンピースのみのシンプルな恰好。彼女の明るく活発な性格によく似合っており、昔の彼女を思い出させるその姿は自然と楯無の表情を柔らかくさせる。

「待ってないよ。……早く来過ぎて晒し者だったけど」

「そ、そうね……ふふふ」

楯無の恰好を見て、刀奈は笑いを堪えるように小さく震えた。

明らかに笑いを堪えているだけのその様子を見て、楯無は呆れた顔をした。

「よく似合ってるよ。でも、人に贈る服と自分が着る服の気合いが逆じゃないかな」

「あら、ありがと。ちゃんと褒めてもらえて嬉しいわ。慣れてるのね」

「楯愛が会う度に褒めてほしそうにしてたからね。でも、似合ってるのは本当だよ」

「楯無君こそ、よく似合ってるわ。ふ、ふふふ……あははっ！」

遂に堪えきれず笑いだした刀奈に、楯無は溜息で返す。

「渡された服をきちんと着てきたのに、どうして笑われなきゃいけない

いのさ」

楯無は自らの恰好を見る。全て刀奈から渡された袋に入っていた衣服だ。

黒のサマーロングカーディガン、首元をしっかり覆う灰色のハイネックカットソー、そして水色のパンツ——全て女性物である。おまけに左目には包帯を巻いていた。

送る方も送る方で、着る方も着る方である。

「ごめんごめん、でも本当によく似合ってるわよ。楯無君……いいえ」
悪戯っぽく舌を出して、刀奈は続ける。

「今日は——帯ちゃんって呼んだ方がいいかしら？」



「……で、何で俺はこんな恰好させられてるの？」

モノレールに乗ってレゾナンスに移動して、刀奈の行きたい店に向かいながら問う。

特に理由も聞かずに女装したのだが、今思えば何で女装させられたんだろう。

刀奈はこちらを見て、さも当然の様に言う。

「楯無君は男性操縦者でしょ？ そりゃあ一夏君程有名じゃないけれど、それでも一応有名なんだから。そうおいそれとIS学園の敷地外で活動は出来ないじゃない」

「そうかな。別に堂々としてれば案外平気だよ」

そもそも、それで包帯帯に変装させてたら意味がないような気がする。こっちはこっちで殆ど国際指名手配みたいなものだ。何しろ篠ノ之東と繋がっているのが全世界にばれているのだから。

まあ、これもこれで堂々としてれば案外ばれないもんだ。左目に包帯巻いた女性なんて案外どこにでも——居ねえよ。

「こーら。学園駅前ならともかく、ここは人通りが多いんだから。迂闊に声を出さないで」

確かにこんな恰好をしている奴が男の声を出していたら世間的に

やばい。

俺は心で相棒に語り掛け、モンドグロツソに出場した際に使ったの方法で意思疎通を図る事にした。

『分かったわ……これでもいい?』

普段の丁寧な言葉ではなく、女性的な口調で話したのは相棒だ。包村帯として活動をしていた時は全てこれで他者との意思疎通を図っていた。

脳内で会話出来る俺達には口裏合わせの必要も無い。女性的な仕事は束縛から仕込まれている。世界最強の目さえ誤魔化していた手法に隙は無かった。

刀奈も驚いたようにこちらを見ている。

「すつごい。今話してるのが専用機のコアって事? 本当に話せるのね」

そういえば千冬さんとの会話を聞いていただけで、こうして実際に話すのは初めてだったか。

俺は相棒に挨拶を促す。それに合わせて俺も口パクする。

『それでは改めて、初めまして。私は“黒雷”のISコアです。基本的には他人と話す事はありませんが、マスターが心を許している刀奈さんと簪さんは別です』

「あら、それなら今後の訓練でも気軽に話し掛けてくれると嬉しいわ。あと、『楯無』って呼んでね?」

『失礼しました。それではマスターに倣い、「更識さん」と呼ばせてもらいます』

俺に似て相棒も頑固だった。刀奈も苦笑いである。

それはそれとして、と刀奈は話題を変えた。

「こうして声まで変えてみると……女装が恐ろしく似合ってるわね、才能ある?」

『そうね。世界を騙しきる程度の才能ならあるかもね』

相棒は気を遣って話さなかったが、あとはナノマシンの影響もあるのだろう。

ISとの同調率を高める為の処置で、俺の身体はほんの少しだが

真つ当な男性とは言い難くなっている。

「それに、こう……大分身体が女性的なような」

『それはそうよ、私は女の子だもの……なんて。中にお母様特製の I S スーツを着込んでいるから、体型が女性的に見えるのね』

何故か入学初日に部屋に送られてきていた荷物の中に入っていた物である。

俺がモンドグロツソに出場した際に使っていた変装用のスーツだった。

確かに自分の家に放置してはいたが、あれを荷物の中に入れるとは、やっぱり俺の荷物を送ってくれたのは束姉だったのだろうか。

『やるならとことんやらないと。おかげで学園を出る時も怪しまれなかつたわ』

相棒に合わせて微笑む。これ多分鏡で見たら自分でも分かんないな。

包村帯の声担当は話題を変える事にしたようだ。

『それで、今日はどこに行くの?』

確かに、俺は刀奈の行きたい場所を知らなかった。

「そろそろ本格的に夏になってくるじゃない? だから夏物が欲しいなーって」

『つまりレディースの衣料品店に向かいたいと。なら、何で私を呼んだの? 友人なら居るでしように』

「居るには居るけど、男の子の意見も聞きたかったのよ。だーかーら、アドバイスよろしくね?」

可愛くウインクをする刀奈に対して、相棒は早速俺の意思とは違う事を話し出した。

『だったら私に頼むのは間違いね。たとえばあなたが新聞紙を纏っているように躊躇いなく似合うと評するような思考回路よ? 私からすれば、今のワンピースなんてウエディングドレスと見紛うぐらいだよ』
言いたい放題だが、言っている通りなので仕方がない。

しかしあれだな。相棒が普段の言葉遣いじゃないと物凄い違和感だ。

モンドグロツソの時は必要最低限しか話していなかったから、こちらとしても新鮮だ。

「そ、そう……やだ、お姉さん恥ずかしいわ」

『攻められると弱いよね。顔赤くしちやって可愛い……それとも、白無垢の方が似合うかしらね』

これも俺の意思ではない。話せないのをいい事にやりたい放題だ。何か俺が口説いてるみたいになってるから止める。

しかし刀奈が可愛いのはだけは間違っていない。ナイスだぜ相棒。

衣料品店に着いた。刀奈は咳払いを一つして仕切り直す。

「それじゃあ、お姉さんが試着していくから感想よろしくね」

『ええ。意味は同じだろうけど、バリエーションは用意しておくわ』

そうして、全て本音の刀奈褒めちぎり大会が開催されたのだった。

◇

(……俺、生きてて良かった)

女性物を取り扱う衣料品店での刀奈の洋服選びに付き合っ、俺は紙袋を持って店外の壁に寄り掛かっていた。

元がモデルの様な刀奈は何を着ても似合うので、感想はやはり殆ど同じようなものだった。

その中でも特に自分が気に入った何着かを刀奈は購入し、衣料品店の買い物は終わった。なら何故俺が外で待っているかという、今度は下着を買いに行ってしまったからである。『最近きつくなくなったのよねえ』とか自分の胸を寄せながら言わないでほしかった。

流石に下着を買いに行くのに付き合うのは無理だった。試着した姿を見る事も当然出来る筈もない。

中に居たら居たで店員が話し掛けてきて面倒なので、店外に避難してきた次第である。

だが、俺のこの変装は通用してるみたいだった。こうして人通りの多い店外に居ても誰一人怪しんでいない様子はない。

寧ろ男性からの視線を感じる事もあるくらいだ。左目に包帯を巻いているような女に声を掛ける勇氣はないみたいだが。

———と思っていたのだが、世の中にはチャレンジャーが一人ぐ

らしいは居るらしい。

「……あれ？」

俺の目の前を通った少年が、振り返ってこちらを見た。

(げ……)

という感情を表情に出さなかったのは、自分で褒めてもいいだろう。

何しろ振り返った少年は————織斑一夏。俺のクラスメイトだった。

気にしていないように振舞っても無駄だった。一夏は完全にこちらに興味を持ってしまっている。

「包村……帯さんですよね？」

俺の変装はばれていないようだが、俺の正体には気付いてしまったようだ。

誤魔化そうにも、一夏はモンドグロツソの試合のビデオをそれこそ擦り切れる程見ている。見間違いなどありえない。

人違いにしたって、左目に包帯巻いてる女性何てそうそう居るわけもない。詰んでいた。

ここは大人しく包村帯として対応し、一夏に去ってもらうしかない。

『騒がないでね。オフなの』

しーっ、と唇に人差し指を立ててジェスチャーすると、一夏は頷いた。

「お利口さんね」と微笑むと、一夏は顔を赤くして逸らしてしまった。篠ノ之辺りに見られたら両者共にグープンである。

『あなたの事は知っているわ。有名人だものね、織斑一夏君』

「有名人なのはお互い様でしょう。世界第三位の実力者が、こんな所に居るなんて」

『買い物をしにきたのよ、ここはそういう場所なのだから。あなたもそうなのでしょう？』

「はい。日用品とか、色々」

言って、一夏は片手に持っていた大きなビニール袋を見せてくる。

寮生活には色々とな必要なものも多い。特に男性である一夏にとつちや、購買で売ってない物も多いからな。

『IS学園に通ってるのよね。もう生活には慣れた?』

「まあ、何とか。毎日ISに乗って、最近はどうにか自分の戦い方も見えてきた感じですよ」

一夏の瞳は活力に満ちていた。

来たるべき学年別トーナメントでのボーデヴィツヒとの対決もある。

それまでに、織斑一夏というIS乗りはどこまで行けるのだろうか。

「俺、千冬姉みたくになりたいんです。どこまでも強い、俺だけの力で

——皆を守りたいから」

『……そう』

相棒は静かに相槌を打つ。

「勿論包村さんにも憧れてます。千冬姉との準決勝……あれは、俺の中で一番の名勝負ですから」

俺と相棒は、ISを『力』と認識している一夏とは相容れない。

確かにIS自体は強力な兵器だ。だけど、その本質はきつと違うと思うから。

だが——相棒が告げる言葉はそれじゃなかった。

『もし織斑千冬の様になりたいのなら——誰かを守りたいのなら、私達に憧れるのは止めておきなさい』

「……え?」

(相棒……?)

『私達は、守るという行為には最も遠い存在だから』

言われた意味を理解していない一夏と俺を気にもせず、『今日所はこれでお別れね。また何時か会いましょう』と告げる相棒。

仕方がないのでそつとその場から離れ、一夏が退散するのを待った。

離れた場所の柱の陰から一夏の様子を見てみると、さつきから黙り続けていた相棒がやつと口を開いた。

(マスター。先程は申し訳ありませんでした)

(……気にするな。そういう事だってあるだろ)

相棒の言葉は、本当は誰に向けて言ったのか。

その問いをする事は、俺には出来なかった。

28. 女子力

「ただいま……」

午後五時頃。

刀奈との買い物を終え、俺は寮の自室に戻ってきた。

女装したまま戻らなくてはならなかったのかもしれないかと思っただが、何しろここは二人の例外を除き女子しか居ないIS学園。寧ろいつもの格好で居るより全然目立たなかった。

部屋に戻る姿を見られず、ボーデヴィツヒにさえ見つからなければいいのだから楽なものである。

「お帰り。……やつぱり凄いね、その恰好」

自分の机で何かデータを見ていたシャルが、こちらを見て一問置いてから言葉を続けた。

やはり、ぱつと見じゃ分からないらしい。出会ってから大体の行動を共にしていた一夏が暫く会話をしていて分からないのだから無理もない。

部屋に入ると俺のベッドに簪が座っていた。何か雑誌の様な本を読んでいるが、相当集中しているらしく俺が帰ってきた事にも気付いてないようだ。

「楯愛との相談は上手く行ったのかな」

「悪くなかったって言ってたよ。倉持技研の方で機体の完成度かなり評価されて、人員が増えるわけじゃないけど倉持の開発施設を使う許可も増えそうだった」

「そうか。……よかったな、簪」

左目の包帯を解きながら、思わず口元が緩んでしまった。これで簪の翼の完成へまた一歩近付いた。

機体データの収集が終わった以上、俺が手伝える事はもう殆ど無いが、これからも出来る事があつたら手伝いたい。

名前を呼ばれて気付いたのか、簪は雑誌から視線を外し、こちらを見た。

「あ……お帰り、楯無」

「ただいま、簪」

微笑む簪にただいまを返す。

同室でなくなつてから大した時間は経っていない筈なのに、何だか懐かしく感じる。

そんな俺達のやり取りを見て展開していたウインドウを消したシャルロットが、驚いたように簪を見た。

「簪、いくら包帯取つても一目で帯つて分かるんだ」

「……分かるよ？ だって、いつも見てるから」

至極当然の様に簪は言う。

その言葉が何だか照れくさくて、思わず目を逸らしてしまった。

簪も簪で自分が言つてる意味が分かつてしまつて、顔を赤くした。だが、俯く事はなく堂々とこちらを見た。

「だ……だつて本当の事……。いつも一緒に居るんだから、おかしな事じゃない」

『そうです、簪さん。マスターは簪さんの言葉なら大抵の事は喜びます。伝えたい事は遠慮なく伝えるべきです』

何故か相棒がそんな事を言う。簪の堂々とした態度は相棒の入れ知恵らしい。

それに対して何か言おうとしたが、視界の隅のシャルの様子がおかしかつた。『今の誰？』とでも言いたげだ。

……あれ、そういやシャルつて相棒の事知らなかつたっけ。

「こいつは俺の専用機のI.S.コア。喋るからよろしく」

「う、うん……つていやいやいや、そんなあつさり紹介していい事じゃないよね!?!」

思わずシャルは立ち上がった。あつさり紹介も何もこれが全てなのだから仕方がない。

「コアには意識みたいなものがあるのは周知の事実だろ。俺の相棒はちよつと自己主張が激しいだけだ」

『そういう事です。基本的にはマスターと簪さん、更識さんぐらいしかコンタクトを取りませんので支障はありません』

「……帯つて滅茶苦茶だよね」

シャルは考える事を放棄して納得した。ISの未知の部分を頭で考えようとしようとしたら疲れるぞ。

そんなわけで俺は脱衣所に向かい部屋着に着替える。生まれ変わった気分だ。

部屋に戻ると、簪は再び雑誌に目を通していた。考えてみれば簪が雑誌を読んでいるのは初めて見る。

やはりその様子は真剣そのものだ。一体何の雑誌なんだろうか。ISのメカニック関連の雑誌か何かだろうか。

「何読んでるんだ？」

俺の声に簪は雑誌の表紙をこちらへ見せる。

『インフィニット・ストライプス』。雑誌にはそう書かれていた。

どうやら十代の女子をターゲットにした雑誌のようだ。表紙には『デート』やら『女子必見』やら、ストレート過ぎる単語が散見していた。

「私も……甘く見てたけど、中々に興味深い……。楯無も、見る……？」

そういう女子女子してるのはシャルに見せてやった方がいいのだが、誘われてる以上は仕方がない。

俺は拳一つ分程度距離を置いて、簪の隣に座る——が。

「……それじゃ、見難いよ？」

そう言っただけで簪が距離を詰めてきた。ぴつたりと、肩と肩がぶつかる。

簪の熱が伝わってきて、思わず意識してしまう。こちらへ照れながら笑っている簪の笑顔が眩しい。

シャルが「いつもの光景だなあ……」と微笑ましそうにこちらを見ていた。大分毒されてるなお前。

「シャルロットも……見る？　女子、必見……」

「いいの!？」

傍観者として微笑んでたのは一瞬で、シャルは一瞬で当事者へと轉身した。

やはり女子トークがしたくて仕方がないようだった。そういった

意味では簪はシャルにとって貴重な存在なのだろう。

俺とシャルで簪を挟むように座り、『インフィニット・ストライプス』の閲覧が始まった。

どうやら今年の夏は指先から攻めるのが流行らしい。絶対に上手く行くマニキュアの塗り方が大きなトピックとして書かれていた。

あとはこの夏お勧めのデートスポット、彼氏を悩殺する水着等、確かにこれは女子必見である。

「マニキュア……確かに、女子のお洒落としては外せない」

真剣な面持ちで簪が呟く。うんうん、とシャルが全力で頷いていた。お前もう男装止めれば？

まあ、確かにこの雑誌が言っている事も分からはなかった。

楯愛が会う度に興奮しながら、『今日はこれを頑張りました』とか『チェックポイントはここです』など頻りにアピールしてくるのだ。それ程までに十代女子にとってのお洒落は重要なのだろう。

簪とシャルは本気も本気で記事を読んでいく。本気と書いてガチだった。マジでもある。

記事を読破した二人はふう、と一息吐く。極限まで集中していたのだろう。偏向制御射撃をしているセシリア以上に集中していたのかもしれない。

『今年は……指先から』

声を揃えてそう言う二人。まあ学生が普段から着飾るとしても妥当な所だとは思う。

そして、そうなれば直ぐに取り掛かるのが女子である。トレンドを取り入れるのは早い方がいい。

「ここに……今月号の付録がある」

簪はポケットから水色の液体が入った小さな瓶を取り出した。マニキュアの瓶である。更にもう一つ瓶があった。ベースコートと呼ばれる下地みたいな奴だと思う。

水色なのは夏という事で涼し気な色が推されているからだろうか。

まあここまで来たら選択肢は一つしかないだろう。塗るんですね、分かります。

「あんまり塗った事ないけど、やってみる……」

簪はお洒落とかあんまりしなさそうだしな。ついこの間まで中学生だったんだし、素で可愛いから必要性をあまり感じないし。

雑誌と睨めっこしながら準備をする簪。そしてそれを見守るシャルロット。

「……塗ってやろうか？」

思わずそう言ってしまった。簪は視線を雑誌から目を離してこちらを見た。

『出来るの？』と視線が問い掛けてくる。

「安心しろ。楯愛にしてやる為に勉強してた」

「シスコンだね……」

兄妹の話題が出ただけでシスコン扱いは止める。唯楯愛に喜んでほしかっただけだ。

簪はそつと右手をこちらに出してきた。どうやらやってほしいという事だろう。

簪の手を取って、指を観察する。甘皮と爪の長さは問題なさそうだ。

ティツシユで爪の余分な油分をふき取り、ベースコート塗っていく。

爪の中央から塗って、その次に左右を塗る。爪の先端の角を塗る事も忘れてはいけない。

簪の指は白魚の様に細くて綺麗だ。着飾る必要なんてないと思うのだが。

マニキュアの瓶を取って、マニキュアが付いたブラシをボトルの縁で量を調整し、爪の先端に塗る。

後はベースコートの際の様に爪の中央を塗ってから左右。ムラにならないように気を付けながら二度塗りまで。

後は乾いたらトップコートを塗ってお終いだ。初心者がやる分にはこれで十分だろう。

「凄い……綺麗……」

「どうだ。俺にだってIS乗る以外に出来る事はある」

「自分で言うんだね……」

感動してくれている簪と呆れているシャルロット。この差はどこで付いたのだろうか。

まあ、喜んでくれたならいい。楯愛の時の様に燥ぎ過ぎて乾く前に触ってしまうのは駄目だが。

簪は左手も差し出してきた。こっちもやってほしいという事だろう。

(練習した方がいいんじゃないか?)

(都度マスターが塗ってさしあげればよいのでは。その方が簪さんも喜ぶかと)

(……ま、簪がいいならそれでいいんだけどさ)

相棒の口車にまんまと乗せられ、簪の左手にマニキュアを塗り始めた。



「ふーん。それで簪はさつきからにこにこしながら指先見てるわけね。乙女だわー」

「乙女加減でお前に勝てる奴居るのかよ」

ふんっ！ と放たれた鈴音のストレートを受け止めながら楯無は言葉を返す。慣れたやり取りだ。

夕食と入浴を終えた楯無と簪は寮の談話室で余暇を過ごしていた。そこへ丁度鈴音が乱入し、昔の様に会話を楽しんでいた。

話題は先程の『インフィニット・ストライプス』の事だった。何しろ今日が発売日だったらしい。

自らの指先を眺めながら口元を緩めている簪を見ながら、呆れたように鈴音は告げる。

「それにしてもあんた、マニキュアなんか塗れたのね。女子力どうなってんのよ」

「俺は男なんだが。……ああ。まあ、乙女チックな男が居るのも否定しないけどな」

その乙女チックな男は、一夏と今後の予定を立てる為に食堂に残っていた。

学年別トーナメント。優勝すれば好きな男子と付き合えると噂の一大イベントで、一年生の間で持ちきりだった。

無論一夏とシャルロットは打倒ラウラの為に作戦会議をしているのだが、ラウラ同様に対戦相手となる楯無本人は呑気なものだった。ちなみにシャルロットは流石にマニキュアを塗ってはいない。男装をしている事を死ぬ程悔やんでいた。

「学年別トーナメント、あんたはドイツと組んだんでしょ？ 何考え
てんのよ」

「優勝する事に決まってるだろ。まあ一夏とシャルでもいいんだけど
さ」

「あたしはセシリアと組んだわ。今度こそあのドイツに一泡吹かせる
んだから」

それは本当に吹かせるんだろうな、と楯無は苦笑いする。

鈴音もセシリアも転んだらただで起き上がるような性分ではない。
雪辱は必ず果たす事だろう。

「A I C」の対策も必ず講じてくる。だが、対応するのはラウラ自
身であり、楯無にとっては知った事ではなかった。

「ま、勝ちに拘るのはいいけどさ。あんま無茶すんなよ、怪我したら大
変だ」

「分かってるわよ、あんたこそ当たったらぼこぼこにされて怪我すん
じやないわよ？」

怖い怖い、とお道化て楯無は視線を感じる。

ふと視線の方を向けば、簪がこちらを見ていた。より正確に言え
ば、楯無の右手の中指に嵌められた指輪を見ていた。

「どうした、簪？」

「今回は……『黒雷』で出るんだよね」

「ああ、そうだけど」

楯無が頷くと、そっと簪は楯無の右手に手を添える。

「あ、あの……ね。私に、『打鉄』を貸してほしいの……」

「…………どうしてだ」

専用機を持たない生徒には試合時に訓練機が貸し出される。

簪は日本代表候補生だ。入学して数か月の他の生徒相手には同機体の二対一でも十分に対応出来る程の実力は持ち合わせている。

そんな簪が楯無の「打鉄」を欲する理由が楯無には分からない。

「楯無の「打鉄」は、「打鉄式」の性能をダウングレードした形だから。それに、自分で使える機体があれば、武装も自分のを積める。性能面、装備面、その両方から自らの今後を考えても、私は楯無の「打鉄」を借りるべき」

早口で捲し立てる簪の言い訳を聞いて、鈴音は辟易する。

元来、鈴音の性格上理屈っぽいのは好まない。自分の感覚が通用するならそれを押し通し、通用しなくとも殴り倒す。

だが、理屈だけで動くのが簪ではない。

「……………ううん。それ以上に……………何よりも。私は、楯無の「打鉄」となら、上手く飛べる気がするの」

澄んだ瞳で「打鉄」を見る簪を見て、楯無は息を呑んだ。

(マスター。「打鉄」のコアから、簪さんと飛びたいという要求がありました)

(……………そうか。「打鉄」自身がそう言ってるなら、俺はその意思を尊重するよ)

楯無は右手の中指から「打鉄」を外し、簪の右手の薬指そつと嵌める。

「「打鉄」も簪と飛びたいってさ。大切にやってくれ」

「うん。約束する……………」

華の様に笑う簪へ、優し気に微笑む楯無。

当たり前の様に右手の薬指に嵌めてる事に全く反応しない二人に、鈴音はもう何か言う気力もなかった。

この親友は自分が織斑一夏にふられた事を忘れていたのではないだろうか。さも当然の様にいちやっついているのを、何故見せつけられなければならないのか。

「どうした鈴音、明日の朝食の悩みか？」

察しが悪い親友に、

「……あたし中華、あんた洋食。あと今度あたしにもマニキュア塗って……」

項垂れながら鈴音は答えた。

29. 何時かの約束

簪へ「打鉄」を貸し出した翌日の放課後。

「雪月君、ボーデヴィツヒさん、今日はありがとうございます」

俺とボーデヴィツヒは山田先生に呼ばれて、授業の資料を職員室に運ぶのを手伝っていた。

IS学園の授業は当然ISに関わる授業の割合がかなり多い、名目的には高校なので一般科目もあるが、それでもISの授業の方が多い。

ISの授業に関しては映像資料で解説しなければならない物もある。それに関しては資料室から映像資料を運ばなければならず、それに付随する資料も同様だった。

職員室に向かう最中のボーデヴィツヒは不服そうだった。

「ふん、何故私が……」

「ボーデヴィツヒ。生徒である以上、先生の手伝いはしようぜ。軍と一緒にだろ」

「あはは、ここは軍ではありませんけどね」

山田先生の苦笑いを、ボーデヴィツヒは鼻を鳴らして一蹴した。

千冬さんの同僚なんだから、無碍にしてもいい事ないぞ。

ここは一つ、ボーデヴィツヒにとって最も分かり易い基準で論ずべきだろうか。

「……お前よりISの操縦上手いぞ。俺は ッラフアールⅡリヴアイヴをあれそこまで使いこなす人を見た事が無い」

「あの実演戦闘の事か。だが、あれは貴様に翻弄され続けていた気がするが」

「ないない。あれは勢いで押しきっただけだ。普通にやったらそうそう近付けないぜ」

山田先生の事を褒めちぎると、先生は顔を赤くして謙遜してしまった。

もつと自信を持っていいと思う。胸を張ると何か色々な所が弾け飛んでしまいそうだから止めた方が良くとも思うが。

「ボーデヴィツヒだつて分かつてるだろ。自分が同じI Sに乗って同じ事出来るか？ 俺は出来ない」

俺には山田先生やセシリア程の射撃センスは無い。全く使えないわけではないが、それでも本職の奴等には及ばないだろう。

ボーデヴィツヒは不機嫌そうにこちらを見て、渋々と頷いた。

「ふん……そうだな、確かに私は『シユヴァルツエアIIレーゲン』に慣れてしまっている。訓練機で同じ動きをしろと言われれば不可能な部分もあるだろう」

ボーデヴィツヒは実力に関して謙虚で素直だ。俺との模擬戦を通して実力を認めてくれたり、実力を認めた相手に対してはある程度言う事を聞く。

そうこうしている内に職員室に着いた。山田先生の机に資料を置く。

置かれた山積みの資料を見て、ここから授業の教材に使える部分を抜き出すのかと思うと教員の大変さが容易に想像出来た。

「ありがとうございます、二人共」

「……それでは、私はこれで失礼する」

「お疲れ、ボーデヴィツヒ」

ボーデヴィツヒに対して挨拶をすると、ボーデヴィツヒは立ち去ろうとする足を止める。

そしてくるりと反転すると、俺を見据えて言った。

「ラウラだ。ペアを組んだ以上、戦場で声を掛ける事もある。短い方が何かと都合がいい」

「……そうだな。ラウラ、また明日な」

ボーデヴィツヒ——ラウラは踵を返して職員室から出て行った。

返事こそなかったが、ラウラとはペアを組むに当たっては不都合ない程度には心の距離が縮まったようだ。

いや、合理的な判断を下したただけかもしれない。と言うかその可能性の方が高かった。

そんな事を知ってか知らずか、山田先生は嬉しそうに微笑んでいる。

「よかった。ボーデヴィツヒさんにもお友達が出来たみたいで」

「友達？ 誰ですか？」

あまり人の事は言えないのだが、ラウラにそういった類の人間が居るとは思えない。

クラスでは発言する事自体が少なく、ラウラに近付くような女子も見つた事がない。

クラス外で友人が出来たのかもしれないが、それはクラス内で作るより高難度だと思うのだが。

山田先生は先程の笑みを崩し、きよとんとした表情でこちらを見た。

「あれ、雪月君とボーデヴィツヒさんは友達じゃないんですか？」

「……もしかして、ラウラの友人って俺の事ですか？」

自分の事を指差して訊くと、当たり前のように頷かれた。

俺、ラウラと友人なのか……。本当に？

「あつはは、ないない。俺、友達一人も居ないんですよ。居るのは親友の鈴音一人。いやもう本当に、悲しい現実だなおい」

何故か公開処刑をされている俺だが、山田先生は再びきよとんとした表情。

「いや、雪月君には織斑君やオルコットさんといった友達が居ると思うんですけど」

……驚きの新事実だ。一夏はともかく、セシリアも友達だったのか。撃ち落とす宣言されるような間柄なのだが、今度訊いてみよう。

その為にも、俺もさつさと帰らせてもらおう。

「それじゃ、俺もこれで」

「あ……待ってください、雪月君。雪月君はISが好きでしたよね？」
退散しようとした時、山田先生からそんな事を問われた。

好きかどうかと言われれば、好きに決まっている。その事を伝えると、山田先生は嬉しそうに両手を合わせる。

「それじゃあ、今運んでもらった映像資料を見ていきませんか？ 雪月君は実技の成績はトップクラスですけど、参考になる動きもあるかもしれませんよ？」

純粹無垢なその表情に、『別にいいです』とは言えなかった。

まあ、俺も別に嫌なわけではない。ISの映像なら、俺と千冬さんのモンドグロツソの試合以外なら興味はある。あの試合は一夏に死ぬ程見せられたのでもう見たくなかった。

「そうですね、じゃあお言葉に甘えて」

「はい！ それじゃあ先生のお薦めを……」

そう言っただけの上に積まれた山積みの資料を漁り始めた山田先生。その無防備な姿勢は相手が一夏だったら確実に何か起きるの無理解出来た。

実際、一夏は俺と出会った頃から女子とのラッキースケベイベントには事欠かなかった。

IS学園に入学してから多少は落ち着いてはいるが、完全に零とは言えない。山田先生もその内被害に遭うんだろうなあ。

山田先生のお薦め映像はどうやら見つかったらしい。一枚のディスクを持って笑顔と共に振り返る。

「じゃーん！ 雪月君は織斑先生と仲がいいみたいなので、こんなのを用意してみました」

差し出されたディスクを受け取り、ディスク表面に書かれている文字を見て——苦笑いだった。

ああ、知ってた。千冬さんの時点で何となくそんな気はしてたから。

『第二回モンドグロツソ準決勝 織斑千冬対包村帯』

「ははっ、凄い試合だなー」

空笑いしながら棒読みで嬉しがる。もう見飽きたなー。

俺の演技が通じてしまったのか、山田先生はにっこにこだ。

「はい！ でしたら特別に、一日だけ貸し出しちやいます！ よく見てくださいね」

「……ありがとうございます」

自分の試合が収められたディスクを持って、俺は職員室から出ていく。

……どうしよう。シャル、見るかな。



「ふーん。それで簪ちゃんと言ハルル君は観賞中、と」

「そういうわけ。流星に逐一歓声を上げられたら恥ずかしいから逃げてきた」

刀奈は愉快そうに笑って、俺の背中を優しく撫でる。

寮に帰った後シャルにディスクの事を話すと、興奮した様子で見たいと告げられた。

丁度部屋にやってきた簪にも見たいと熱望されてしまい、簪に熱望されたらもう見せるしかない。

上映は夕食と入浴を終えてからという事になり、上映が始まった途端二人が歓声を上げたので上着を一枚羽織って逃げてきた。

そして偶々部屋を出た所で刀奈とぼったり出会い、校舎付近のベンチまで話しに来たというわけだ。

ちなみに「黒雷」は解説役として部屋に置いていかされた。結構な確率で離れ離れになる相棒だ。

「まだ試合始まってないんだよ、入場シーンからきやーきやー言われたら堪ったもんじゃない」

「それだけ伝説のIS乗りは人気なんですよ。あーあ、お姉さんも見たかったなあ」

刀奈はベンチに座ったまま足をぶらぶらと振って、空を見上げた。見るも何も実際に訓練に付き合ってるのに、何か不満なんだろうか。

「別に見たければ何時でも見せてあげるよ。そうだ、明日とか朝練しない？」

「楯無君、訓練だと本気出さないですよ？ そうじゃなくて、私は楯無君の本気が見たいなーって」

「いや、いつも本気だって。手加減出来る程更識先輩は弱くないですよ」

「この間五割り増しでやるとか言ってたくせに……。ISバトル好き

じゃないの?」

好きかどうかと言われれば、別に嫌いではない。

ISを競技用として使用する事自体には反対しているわけでもないし、兵器として使われるよりはむしろいい。

唯、お互いがぼろぼろになる程の戦闘ともなると、平時からやりたと思う程乗り気でもなかった。

だから訓練の時には鬼ごっこや近接武器での打ち合いといった、あまり損耗しない事を主としていた。当然それには本気で取り組んでいる。

あの時の五割り増しというのは、気合いを入れて紙一重の選択肢を取るといふか何というか。

「決めた。何時か楯無君と本気の模擬戦をするわ。ロシア代表として、IS学園最強としての矜持を懸けて、世界第三位に挑みます」

「うん……分かったけど。それじゃ俺も、俺の人生を懸けてその勝負を受けようかな」

「人生って、大袈裟ね」と刀奈は笑っているが、別に大袈裟でも何でもない。

俺の人生の使い道はあの時に決まっている。自分を犠牲にするのを止めただけで、目指すべき結果は変わっていないのだから。

まあ、それはそれとして時が来たら取り組もう。今は刀奈との時間を大切にしなければ。

「そうだ。話は変わるけどさ、簪の専用機の件は順調みたいだよ」

「あら、楯愛ちゃんのおかげかしら?」

「やっぱり楯愛とは会ってたんだね」

「当然。あなた達兄妹の保護には更識も携わっていたのよ。楯愛ちゃんも学園に向向した時にも挨拶してくれたしね」

まあ、引越してしまった俺とは違って、楯愛は刀奈と簪とは学校も同じだった。

流星にずっと一緒だったわけにも行かないのだろうか、それでも交流は続いていたのだろう。

「今日は俺が貸した『打鉄』に薙刀を積み込んだみたい。……『夢幻

「だったかな。今回の学年別トーナメントはそれで出るんだって」
「成程。簪ちゃんの右手の薬指の指輪はそういう事だったわけね。危
うく簪ちゃんの身辺調査をする所だったわ」

貸したのは昨日の筈なのに、もう知っている刀奈が怖かった。
身辺調査ならいつもしてるんじゃないだろうか。

俺も俺で妹の事は愛しているが、刀奈のシスコンぶりには及ばない
だろう。

「それにしても楯無君は罪作りねえ。さらっと女の子に指輪を嵌める
なんて、まったくもう」

人誑しと化している刀奈には言われたくない。絶対校内にファン
クラブとかあるだろ。

途端に、風が一つ吹いた。そのせいか刀奈の身体が小さく震えた。
六月と言えども、夜は少し冷える。刀奈は風呂上りという事もあつ
て、半袖と短いパンツというかなり寒そうな恰好だった。

幸い俺は一枚羽織って出てきている。着ていた上着を刀奈に羽織
らせた。

「女の子は身体を冷やしたらいけないんだって。楯愛が言ってた」

あとは相棒にもよく言われた。

どうやら相棒と妹直伝の女の子の扱い方は間違っではないらしい。
い。

刀奈は頬を紅潮させて、小さく縮こまって俯いている。

「あ、ありがとう……楯愛ちゃんには感謝しないとね」

何故楯愛に感謝をするかは分からないが、俺としても刀奈が寒くな
いならそれでいい。

「風邪引いたら大変だろ。更識楯無は、このIS学園の生徒会長なん
だから」

「あら、楯無君にしては珍しく楯無を心配してくれるのね」

刀奈はからかうように笑いながら、俺の頭を撫でる。

その笑顔に寂しさを感じたのは、きつと間違いじゃない。

そして、刀奈の言っている事は間違いだ。そつと刀奈の手を取つ
て、彼女の赤い瞳を見つめる。

「……世間への偶像としての更識楯無という存在は否定しない。でも……俺が心配してるのは、何時だつて一人の女の子だ」

更識刀奈。今はもうその名前を名乗る事は許されない、俺の思い出の中に居る少女。

その少女の笑顔を取り戻す為の翼も、羽ばたく用意は出来ている。

「今度の学年別トーナメント、俺が本当の翼で飛ぶ姿を見ててよ」

「簪ちゃんはいいの？」

「簪は必ず俺の事を見ていてくれるから。二人には、俺の事を見ていてほしい」

「……もう、本当に罪作りね」

照れたようにはにかむその姿は、姉妹なだけあって相変わらず簪によく似ている。

どれだけ罪作りでも構わない。俺は、何時か二人の本当の笑顔を見る。

握った刀奈の手の熱に、俺は改めて誓った。

30. 学年別トーナメント

「おおおおおおお!!」

織斑一夏の一闪が、更識簪を断ち切る。

その一撃の下に簪の“打鉄”は崩れ落ち、手にした薙刀と共に静かに粒子へと還っていく。

残念だが、勝負ありだ。

「あーあ、流石に専用機二機は厳しかったか」

隣に居る鈴音が呟く。

あれから日数は過ぎ、学年別トーナメントが開催された。

IS学園の一学年は百を超え、それが三学年もあるのだ。その人数でトーナメント形式での試合をするととなると、莫大な試合数量となる。

アリーナを全て開放し、尚且つ一日中試合をしても一週間掛かるそうだ。予定表を見ていて時期をずらしてやるのは駄目なんだろうかと思った。

今はトーナメントの四日目。一年生Aブロックの決勝戦の決着が付いた瞬間だった。

対戦カードは一夏とシャル、そして簪と篠ノ之。結果は一夏とシャルペアの勝利だった。

「箒さんが一夏さんをもう少し抑えていれば、簪さんがシャルルさんを削りきれたかもしれませんのに」

「専用機を訓練機であれだけ抑えてたら十分だろ。……まあ、惜しかったのは確かだな」

セシリアの言葉に頷きつつ、アリーナに居るシャルの姿を見た。ほっと胸を撫で下ろして簪へ手を差し伸べる姿を見て、本当にぎりぎりだったのだと分かった。

シャルの近接武器より、簪の近接武器の方がリーチは長い。それを活かしてじわじわとシールドエネルギーを削っていたのだが、篠ノ之を突破した一夏が背後から“零落白夜”で襲い掛かった事に対応出来ず押しきられてしまった。

「一夏さんの突破力と、シャルルさんの対応力。コンビを組まれると中々に厄介ですわね」

「そうねー。一夏のリズムの点火をシャルルがコントロールしてるって感じ。ま、決勝じゃあたしが一夏をぼこぼこにしてあげてるから安心しなさい。あんたはいつも通り後ろから援護。それで勝ちば頂きよ」
「何か当たり前みたいに決勝戦の話してるけど、お前達これから俺とラウラのペアとBブロックの決勝するの忘れてないか？」

これから試合をする相手と呑気に試合を見ている俺も俺だが、二人も二人だった。

この後控えている試合の為に、俺達はISスーツの上から制服の上着を羽織っただけの恰好だ。

鈴音はこちらを流し目で見ながら、余裕を表す笑みを携える。

「私達をこの間と同じと思わないでよね。連携も、技術も、ドイツにやられた時とは比べ物にならないわよ」

「分かっている。これまでの試合みたいには行かないってさ。本気になった代表候補生の恐ろしさに備えておくよ」

俺が開幕速攻で距離を詰めて片方を押さえ、ラウラが“AIC”でもう片方を捕らえる。

そして降参を要求。それが俺達のブロック決勝までの試合内容だった。

あまりにも速攻で片付ける為に千冬さんの視線が痛かったのだが、ここからはちゃんとした試合をするから安心だ。

それに——別に見せたい人も居る。俺はアリーナの客席の出入り口の一つを見た。

そこからアリーナの簪を見つめている水色の髪の女性。学園最強のIS乗り——生徒会長、更識刀奈。

彼女が俺の視線に気付いたのか、こちらを見る。期待した笑みで手を振られたら、こちらも手を振り返すしかない。

「何よ、どこに手を振ってんの？ ……ああ。確か簪のお姉さんだっけ？」

「学園の生徒会長でもありましたわよね、直接お話しした事はありません

んが」

試合をしていた四人はアリーナから退場を始めていた。次の試合——一年生Bブロックまであと二十分程だ。

俺は客席から立ち上がる。今からなら、簪と少し話せるかもしれない。

「じゃあ、俺は先に行く。簪に試合の感想も伝えたいし」

『……はあ』

対戦相手の溜息が重なって、呆れたような視線を俺に浴びせてくる。

「始まった始まった、楯無の簪病」

「こればかりは撃ち落としても治りそうにありませんわね。ご愁傷様ですわ」

「何だよ、別にいいだろ。思えば簪がちゃんとISに乗ってる姿を見るのは今回のトーナメントが初めてだったんだ。感想ぐらい言わせてくれよ」

「ああはいはい、行ってくれば？ どうせ向こうも待ち焦がれてるわよ、この簪馬鹿」

「IS馬鹿でもありますわ。馬鹿が重なると救いようがありませんわね」

呆れ顔の二人を置いてアリーナから退出し、更衣室へ移動する。

廊下を渡って更衣室へ近づくに連れ、誰かの会話が聞こえてきた。

更衣室直前の角でその会話ははっきりと聞こえてきて、思わず足を止めてしまった。

「すまない、簪。私が一夏をもう少し押さえていられば……」

「気にしないで……箒のおかげで、ここまで勝ち上がった。ありがとう」

声と内容から察するに、簪と篠ノ之のようだ。

二人共名前で呼び合う仲になっていた。どうやら二人は抽選でタッグを組んだわけではないらしい。

一応顔見知り程度ではあったんだし、当日急ごしらえのタッグを組まされるよりは良かったのだろうか。

別に俺も隠れ続ける必要はない。試合まで時間がない以上、隠れて
いられないというのもあるが。

ひよっこり顔を出してみると、簪と目が合った。

「楯無……！」

嬉しそうに名前を呼ばれ、即存在がばれた。

ばれてしまった以上仕方がないので完全に身体を出す。二人共着
替え終わって制服姿だった。

篠ノ之も振り返ってこちらを見た。あの気まづい出来事からそれ
なりに日数が経っていたが、篠ノ之の表情は気まづそうなのは変わら
ない。

こういう事で重要なのは俺が気にしない事だ。いつも通りを心掛
ける。

「試合、見てたよ。惜しかったな」

「ごめん……打鉄」まで借りたのに、負けちゃった」

「いいや。専用機持ち二人に対して、訓練機二人であそこまで行けた
んだ。簪の実力を示すには十分だったろ」

「専用機……」

俺の言葉に反応した篠ノ之がぼつりと言葉を零す。その意味は
よく分からない。

訓練機で一夏の「白式」に食い下がっていたのは篠ノ之なんだし、
本格的にISに触り始めて三ヶ月も経ってないのにあの動きが出来
たのは十分才能があると思うが。

専用機を持っていなければ日常的にISに搭乗する機会もない。
一夏との訓練でISに乗る機会があっても、回数的には一夏には遠く
及んでいない。

篠ノ之にはきつとIS乗りとしての才能がある。その片鱗は確か
に感じられていた。

「これできつと、倉持技研の人達も簪が乗る専用機のデータの重要性
を認めてくれる。」打鉄式式」までまた一歩だな」

俺の言葉に、簪は柔らかな笑みで「そうだね」と頷いてくれた。

自分の事を肯定するには十分な程の努力を重ねている。その努力

はきつと報われるだろう。

「それで」と簪は更衣室の方を振り返りながら話を区切る。

「楯無はボーデヴィッツさんを迎えに来たの？」

「ん？ それってどういう事——」

「——何をしている、ピットに入る時間は迫っているぞ」

詳しい事を問う前に、答えが直接俺の背中を叩いた。

振り向けば、ラウラがそこに居た。当然ISスーツ姿である。

「着替えてたのか？」

「いや、精神を集中していた。貴様は……成程。事情は分かった。だがもう話している時間はない、ピットへ向かうぞ」

「お、おう……じゃ、行ってくる」

ラウラに半ば引き摺られてピットに向かう俺を、簪は「行つてらっしゃい」と送り出してくれた。

篠ノ之は最後まで黙りきりだった。俺とラウラに話す事は無いのだろう。折角簪と仲良くなってくれたのに、悪い事をした。



「さて、いよいよブロック決勝か」

アリーナへと続くピットから、自らが飛ぶ空を見つめる。

雪月楯無は羽織っていた制服の上着を脱ぎ捨て、ISスーツの姿になる。

既に更衣室でISスーツに着替えていたラウラは、そんな楯無の姿を真剣な眼差しで眺めていた。

「どうした？」

視線に気付いた楯無が、ラウラへと問い掛ける。

数瞬の間の後に、ラウラはその問いへゆつくりと口を開いた。

「更識簪が使っていたのは、貴様の『打鉄』だな」

「ああ。そうだよ」

自らの相棒の待機形態である黒いチョーカーを撫で、楯無は何でもないように返す。

簪自身の要望を、「打鉄」が了承した。それがあれば楯無にとつては許可云々の後の事などどうでもよかった。始末書や反省文なんて幾らでも書いてやればいいのだ。

「簪の専用機、機体は完成しているのにコアが無いんだ。そのせいで装備の試運転も出来ないから、俺が学園から借りてる『打鉄』を貸した。試合を見る限り完成してる武装に問題はなさそうだ」

この学年別トーナメントまでの間に調整を終わらせ、搭載する事之間に合わせた荷電粒子砲も、問題なく稼働していた。

少しずつだが、簪の『打鉄式』への道は進んでいる。更識簪の進む道は彼の協力で途切れず、何時かは空へと繋がっていく。

その空の先で、楯無はずっと待っている。彼女達が本当の笑顔で、翼を広げて飛ぶ事を。

「……時折、貴様はその表情をする」

「何だそりゃ」

「普段からは考えられない程優しく、温かい笑みを浮かべる。教官も偶に、そんな表情をしていた」

千冬と同じだと告げられて、楯無は露骨に嫌そうな表情をした。

世界最強と同じだと言われても、強さに興味が無い楯無にとつては何の魅力も感じない話だ。

「……そして、教官がその表情をする時は、決まって織斑一夏の話をしていた」

「またその手の話か……って言っても、お前の話をちゃんと聞いた事はなかったな」

精々千冬がドイツ軍のISの教官として赴任し、ラウラの世話を焼いていた程度の認識だ。

試合まではまだ少し時間がある。パートナーの事を理解しておくのも、タッグを組んだ相手としては間違っではないだろう。

「……一夏の事が、羨ましかったのか？」

機嫌を悪くする一言だと思ったが、案外とラウラの反応は悪くなかった。

驚いたように目を見開き、言われた意味を咀嚼するように目を閉じ

る。

そうして自嘲的に小さく笑うと、自分の中にあつた気持ち肯定する。

「ああ、そうかもしれない。出来損ないで無価値だった私にとって、私に価値を与えてくれた教官は救いだった。その教官に無条件に気に掛けてもらえる織斑一夏という存在が、私は羨ましかったのだろう」ともすれば、敬愛する人間の経歴に汚点を残した憎しみよりも強く。

「言われてみれば何て事はない。私は何時でも教官の背中を追い掛けている。あの唯一無二の強さに焦がれ、何時か私を見てほしいと」「あれに執着されるのも結構冷や冷やするけどな。何時斬り捨てられるか分かったもんじやない」

「ふ——包村帯も、そう思っているのだろうか」
からかうようなラウラの声に、楯無は「かもな」と相槌を打つ。

まさか自分の正体に気付いてはいないだろうが、肝が冷える話題だった。

『間もなく、一年生Bブロック決勝戦を行います。ピットに待機している選手はISを展開。順番に発進してください』

丁度良いタイミングで、試合進行のアナウンスがピットに響いた。試合が始まる。恐らく、二人が漸くまともに戦うタッグ戦が。

「行くか」
「了解だ」

二人は自らの愛機を展開し、カタパルトに順番に乗る。

先に発進したラウラの背中を見ながら、楯無は小さく相棒へ語り掛けた。

「……飛ぼうぜ、相棒。これが俺達の本当の初陣だ」

『はい、マスター。飛びましょう。二人へ届くように、遠く、高く』
相棒の言葉に「当然だ」と答え、楯無はアリーナへと翼を広げた。

31. Bブロック決勝戦

アリーナへ飛び立った楯無を待っていたのは、先にカタパルトで出撃したラウラと対戦相手の鈴音とセシリアだった。

「あら、思えばきちんとその姿を見るのは初めてですが、随分と撃ち落とす甲斐がある翼ですわね」

「そーいや楯無とまともにするのは初めてね。ぼこされる準備はいい？」

楯無を視認した二人は不敵な笑みを浮かべて挑発をする。

中国とイギリスの代表候補生二人に挑発をされ、楯無は嫌そうに顔を顰めた。

「いやいや、お前らの目的はラウラへの雪辱だろ？ 俺の事は構わず、ゆっくりどうぞ」

「残念。私の目的は最初からあなたですわ。勝利は当然頂きますが、先ずはあなたへのリベンジと参ります」

「……ま、それはそれで仕方ない。セシリアの意地、見せてもらうぜ」セシリアの熱に中てられたのか、先程の顰め面から一転し満更でもないように口端を釣り上げた。

自らを目標に技術を研鑽し、新しい扉を開いた少女が居る。IS乗りとして悪い気はしなかった。

そんな火花を散らす二人とは別に、相手を燃やし尽くさんとする勢いで睨む少女が居た。

手に保持している“双天牙月”の切っ先をラウラへ向け、鈴音は吠える。

「この間は世話になったわね。借りは百倍で返すから、覚悟しなさい！」

「ふん、好きにしろ。貴様に勝たなければ織斑一夏と戦えないのなら、相手はしてやる」

「一夏一夏って、あんたねえ。そうやって目の前の相手に集中せずにいたら、足元掬われるわよ？」

「掬ってみせてから言う台詞だな、それは。先日が無様から鑑みるに、

期待出来そうにもないが」

互いに挑発を交わし、一触即発の状態。

その緊張感を保持するかのようになり、試合のアナウンスが流れる。

アナウンスに従い所定の位置に着いた楯無とラウラは、回線を使わずに静かに会話を交わす。

「鈴音を舐めて掛かるなよ。あいつはやるって言ったらやる。親友として保証する」

「相手の手強さを保証してどうする。……だがまあ、その忠告は聞いておこう。今の私は貴様のパートナーだからな。勝つ為に必要な警戒はしておいてやる」

「そうそう。友達の言う事は聞いておくもんだ」

緊張の欠片もない軽い調子で告げるその言葉に、ラウラは意外そうに目を丸くした。

「友達……？ 私と貴様が、か？」

問われ、楯無は自信無さげに頷いた。

「山田先生に言われた。……ま、もうお互い知らない仲じゃなし、間違っちゃいないと思うぜ」

「そうか……そうだな」

仇敵に瓜二つの楯無の姿を横目で見た後に、ラウラは小さく笑った。

掴み所無く相手を流しながらも、決してISに関しては嘘は吐かない。自らの存在を証明するにはそれだけで十分であるかのように、空を飛ぶ事だけに真摯であった。

背中を預ける友としては、不満はない。この男の実力は身を以て知っている。

「イギリスの新技に撃ち落とされるな、あれは中々に手強いだろう」

「俺の為に新技開発なんて光栄の限りだな。ま、無様を見せるつもりはない。二人が見てるからな」

楯無のハイパーセンサーには、二人の水色の少女がしっかりと映っていた。

更識刀奈と、更識簪。お互い遠く離れた観客席に座って、雪月楯無

を見つめている。

それだけで楯無のやる気は十分だ。この学園での自らの相棒との初舞台として、これ程整った状況も無い。

「……随分と仲良さそうじゃない」

互いに通じ合ったように口端を釣り上げる二人を見て、鈴音は青筋を立てながらセシリアを引かせていた。

中学生まで一夏や鈴音以外上辺だけの友人しかいなかった親友が、最近随分とまあ友人が増えたものだ。

しかも男性操縦者同士のシャルルはともかく、今度は自分と因縁のあるラウラとまで。

「双天牙月」を握る手に力が籠る。標的はラウラだった筈だが、ついうっかり楯無の方へ特攻しそうだった。

「はあ……鈴さんは意外と独占欲が強いんですね」

「何か言った？」

「いえ何も。そろそろ試合が始まりますわ、準備はよろしくて？」

両者ともに構えに入り、ハイパーセンサー上に試合開始までのカウントが表示される。

楯無は自らの主兵装である近接ブレード、「黑夜」と「雷切」の二刀を呼び出してそれぞれ右手と左手に握る。

この感覚は久し振りだ。左目のナノマシンが「黒雷」のハイパーセンサーと同期していき、自らの身体と機体が溶け合い、一つの翼になっていく。

カウントが零になった瞬間、四人は弾けるように散開する。

「狙いは——！」

「あんたよー！」

親友二人が敵同士でありながら呼吸を合わせ、スラスタを全開にして戦場を駆ける。

両チーム共に前衛は決まった。雪月楯無と凰鈴音。当然、両者共に接近戦を得意とするIS乗りだ。

——ただし、両者が激突する事は無い。お互いがお互いを当たり前の様に無視をして、敵チームの後衛を務めている相手へ向かって

一直線だった。

チーム戦のセオリーを無視した爆弾作戦。当然、観客席からは驚きの声が上がりますが、その中には納得している者も居た。

「この試合、先に後衛を仕留めた方が勝つよ」

更識簪の左隣に座っていたシャルロットⅡデユノアが、予言めいた事を呟いた。

その言葉に右隣に並んで座っていた織斑一夏と篠ノ之箒が視線を向ける。

「オルコットさんの偏向制御射撃と、ボーデヴィツヒさんの“A I C”。この二つは現状では攻略がかなり難しい。集団戦において、自在に曲がる射撃がどれだけ有効に働くかは想像するまでもないし、パートナーが居るとしても“A I C”で動きを止められる事は一対一の時より危険度は段違いだ」

「つまり、楯無と鈴に全てが掛かってるってわけか……」

「しかし、近付くには骨が折れるだろう。そしてその度合いは——
——」

「……セシリアの方が、上」

箒の言葉を引き継いだ簪の言葉の通り、ラウラのレールカノンの妨害を受けつつも直線距離で進む鈴とは対照的に、攻めあぐねる楯無の姿があった。

レーザーライフルを三発、セシリアが連射する。

冷静さを保った瞳でそれを確認した楯無は、直線移動で二発を避け、最後の一射はバレルロールで避けた。

大きく旋回行動を取りながら、セシリアと睨み合う。

（——全ての射撃が繋がっている）

楯無が抱いた率直な感想だった。

“打鉄”はおろか、現存するIS全てを凌駕する機動性を持つ“黒雷”であっても、バレルロールを使わなければ最後の一射は避けられなかった。

（回避する先に射撃を置かれた。一射目と二射目は進行方向に沿った程度の精度だが、最後の三射目はそれによって導き出された最適なポ

イントだった)

全てが本命ではなく、計算され尽くした射撃。

その技術が本命なのかそれとも別の副産物なのかは分からないが、嘗てのセシリアにはなかった技術だ。恐ろしい速度でセシリアⅡオ
ルコットは成長していた。

楯無の口角が思わず上がる。

「驚いたぜ。一月前とは別人だな」

「ありがとうございます。ですが、まだまだ本命はこれからですわ」

機体名と同じ名の遠隔兵器——「ブルーⅡティアーズ」が、四機切り離された。

銃口が下を向いたまま青い光を放ち、勿体ぶる事も無く放出される。

「来るか……!」

「さあ、踊ってください——私と「ブルーⅡティアーズ」が奏でる円舞曲を!」

放たれた四本のBT粒子はセシリアの意思に従い、自由自在に軌道を変える。

三本は楯無に向かい、最後の一本はラウラへ突き進む。

三つの青い光に絡めとられないように飛び回る楯無を確認して、鈴音はパートナーの仕事ぶりを誇るように口端を釣り上げる。

「こっちの相棒の方が後衛としては優秀みたいね!」

「距離を詰められれば捌られるしかないのだから、それぐらいは当然だろう」

「双天牙月」を連結させながら、ラウラの迎撃を掻い潜り自らの得意レンジである近距離まで接近する。

だが、ラウラは遠距離特化のセシリアとは違い、全距離に対応する事が可能だ。ここまで接近を許したのも、嘗て鈴音を近距離で圧倒した経験に基づいたに過ぎない。

即座に両腕のプラズマ手刀を展開。鈴音を迎え撃とうし——異常に気付いた。

「ま、前衛もこっちの方が上だけどね!」

——鈴音の両腕には連結された“双天牙月”がそれぞれ握られていた。

鈴音は速度を維持したまま駒の様に回転し、ラウラへ突撃する。

「二つが駄目なら増やせばいい、三つと言わず四つあげるわ！」

「ちい——！」

二倍に増えた連撃。その圧倒的な手数をラウラは捌く。遠心力に任せた攻撃のおかげで精度が甘いのが幸いした。

このまま耐えて反撃の機会を窺う。ラウラはボーデヴィツヒにはそれが可能なだけの技量がある。

——これがタッグ戦でなければ、だが。

「そこかしら？」

殆ど存在しない鈴音の攻撃の合間を縫うように、セシリアが操作するレーザーがラウラを掠めた。

先程放たれた青のレーザーによる、自在に曲がる援護射撃。

堪らずラウラは間合いを取り、鈴音の射程から離れようとする。

「させないってのー！」

左手に持っていた“双天牙月”をラウラに向かって投擲し、間合いを詰めながら“龍咆”をエネルギーをチャージする。

「学習しないな、それでは相手の時間を与えるだけ——！」

「釣りだつての。学習してるに決まってるでしょ」

弾かれた“双天牙月”を掴みながら、鈴音は“龍咆”のチャージを止めて近接攻撃を続ける。

再び“双天牙月”を投擲し、それと同時に突きを放つ。

即座に対応しようとプラズマ手刀を振るうラウラ。その一閃を、青い閃光が遮った。

鈴音の突きを防ぐ筈の手刀を弾かれ、青龍刀が腹部に直撃する。

「がっ……くっ！」

意外にもこの試合において初のダメージを受けたのはラウラはボーデヴィツヒだった。アリーナ中央のモニターには各人のシールドエネルギー残量が表示されており、ラウラのエネルギーがぐんと減った。

しかし被弾しながらも『双天牙』の片方を自らの後方へ弾き飛ばし、何とか追撃を捌いていく。

「ラウラー！」

「問題ない！ 貴様は撃ち落とされんように集中しろ！」

ラウラーの言葉通り、自在に曲がる三本のレーザーに囲まれる楯無は未だに回避し続けていた。

バック宙やバレルロールを組み合わせ、空を泳ぐように軌道を描く楯無の操縦技術に舌を巻きつつも、セシリアは一つの仮説を立てる。

「——やはり楯無さんは、集団戦が苦手……！」

個人では世界最強に匹敵する程の操縦技術を持つ楯無だが、それだけで全ての状況をどうにか出来る程ISバトルは甘くなかった。

楯無のみが狙われる一対多や単体を狙えばいい多対一はともかく、同数同士の戦闘ともなれば連携が非常に重要になってくるのは明白だ。

その点において前衛と後衛をはっきり分けているセシリアと鈴音のペアは、両前衛気味の楯無とラウラーのペアより有利と言える。

セシリアを近距離に押し込めれば立場は逆転するが、偏向制御射撃を使いこなす相手に向かって地道に歩を進めるのは得策とは言えなかった。

（遠距離装備は無し……と見るのが妥当ですわね）

『打鉄』の搭乗していた頃に使っていた遠距離武器を使ってくる素振りには欠片も見られない。

一番最初に近接ブレードを選択し、以降も装備を切り替える事も無い。

両肩部後方の非固定浮遊部位であるシールド『避雷針』以外は、『白式』と同様の近接武装のみなのだろう。

（それでも、あれが楯無さんの専用機。訓練機であれだけの動きをする人の専用機を軽視するわけには参りませんわね）

偏向制御射撃で楯無の移動先に回り込むように三本のレーザーを配置し、牽制を続ける。

「あなたの為に習得した偏向制御射撃が奏でる円舞曲……如何ですか

？」

「最高だぜ、セシリア……！　唯、俺だけと踊ってくれないのは不満だな。俺に夢中になってみないか？」

「私としても是非そうしたいのですが、これはタッグ戦ですわ。二人きりの円舞曲はまた後程、必ず」

互いに視線と共に情熱的な言葉を交わす。ISバトルに於いて、入学時から二人は撃ち抜き、撃ち抜かれる間柄にある。

『……ふーん』

観客席からこのやり取りを半目で眺めている姉妹の視線には、残念ながら楯無は気付かなかった。

セシリアの射撃を躲し続ける楯無と、鈴音の猛攻を捌き続けるラウラ。防戦一方の二人だが、遂に試合は動く。

「くっ！」

三本のレーザーの内、一本が『黒雷』の非固定浮遊部位であるシルドを掠めた。

射線で動きを封じ、本命を通す為の一撃が遂に機能する。

僅かにバランスを崩す楯無だが、即座にスラスターを吹かして横軸に回転しつつ体勢を立て直した。

だが、その一瞬の間を見逃すセシリアではない。彼女はイギリスから専用機を任される程の代表候補生である。

「待っていました……！」

ライフルを構え、狙いを付け、トリガーを引く。

自らが驚く程スムーズに行った動作で放たれたレーザーは、楯無へと突き進み——腹部に着弾した。

嘗ての決闘の時の様に受け流すのではなく、紛れもない直撃。

だが、アリーナの各人のエネルギーを示すモニターに異変は無い。

その答えは、不敵な声と共に齎された。

「……こっちな。今だ、ラウラー！」

合図を出す楯無の腹部には『避雷針』が抱えられていた。

着弾時のバランス制御の回転の際に抱え、手持ちの楯として使用したのだ。

(釣られた——!?)

たとえ複数のレーザーを組み合わせても、操作しているのは一人であり、視点もまた一つである。

故に回転している相手の細かい動きを完全に把握する事は不可能だった。

合図を受けたラウラは急激なバックブースト。鈴音との距離を強引に取り、ワイヤーブレードで牽制を重ね追撃を逃れた。

セシリアはライフルとビットを同時にする事は未だ出来ず、楯無を狙いライフルを使用した時点で偏向制御射撃での援護は途絶えている。

再びビットでの攻撃に転じようとするセシリアだが、それは叶わない。

「そろそろ俺だけを見てくれよ!」

回転していた際にスラストでエネルギーを圧縮していた楯無が、「黒夜」と「雷切」を連結させて一振りの大剣として瞬時加速でセシリアへ迫る。

「インターセプター!」

恥も外聞もなく、反射的に武装名を呼んでコールする。

手元に現れたショートブレードで咄嗟に楯無の大剣を受け止めるが、これで完全に動きは封じられた。

偏向制御射撃による変幻自在の援護はもうない。故にここからがラウラの反撃である。

「どうやら前衛も、こちらの方が優れているらしいな」

雄々しく翳された右手が、鈴音の動きを止める。

ドイツが誇る第三世代型IS「シユバルツェアIIレーゲン」。その代名詞たる「停止結界」——「AIC」。

一対一では絶対的な効果を発揮する網が、遂に鈴音を絡めとった。一人での脱出は不可能に近い。パートナーであるセシリアは楯無によって押さえられている。

「シユバルツェアIIレーゲン」のレールカノンの銃口に光が猛る。身動きが出来ない相手を射貫く事など造作もなく、万が一外れる事な

どありえない。

観客席からも諦観の念が感じられる程の絶体絶命の危機に――

―鈴音は、笑っていた。

「――そう？」

言葉と共に訪れた異変に、ラウラは目を剥いた。

「なっ――」

ハイパーセンサーが行う視界補助により確認した、自らの後方から遅い掛かる一つの武器。

“双天牙月”。先程投擲され、ラウラによって後方へ弾き飛ばされた一振り。

連結された“双天牙月”は無線の遠隔操作によりブーメランの様に所有者の手に戻ってくる性質がある。

その軌道上に敵機が居れば、当然その質量により攻撃手段にもなり得る。

「仕込みなんかとつくに終わってんのよ！」

「ちい……い」

咄嗟に躲すラウラだが、多大な集中力を要する“AIC”を維持する事は不可能だった。

自らを縛っていた力場が解除されたのを肌で感じた瞬間に、僅か一年足らずで中国の代表候補生にまで上り詰めた才女は戻ってきた獲物を無視して衝撃砲を展開する。

「爪が甘い……素人がッ！」

追撃に発射までにウエイトのある空間圧兵器を選択した鈴音を、ラウラは躊躇いなく罵った。

ここに來て勝ちの目を芽を捨てた。これを爪が甘いと言わず何と言うのか。

余裕の笑みでワイヤーブレードを射出しようとしたラウラだが、“黒雷”のハイパーセンサーと同期する左目を持つ雪月楯無には視えていた。

「ラウラ！ チャージ終わってるぞ！」

楯無の叫びと共に、ラウラの脳裏にはある瞬間が過る。

連結した「双天牙月」を両手に持った怒涛の攻めを展開し、セシリアの援護射撃が始まった瞬間。

あの時も鈴音は衝撃砲を展開し、フェイントとしてチャージを行っていたいなかったか。

「もう遅いわよー！」

予め溜められていたエネルギーにより通常時の半分以下の時間で放たれた不可視の弾丸。

攻撃を仕掛けようとした体勢にカウンターとして放たれたタイミング。

幾つもの悪条件が重なり、ラウラは回避する間も無く直撃する。

「ぐ、あ———!?!」

衝撃砲自体の威力は必殺ではない。安定した出力と連射性が持ち味の武装だ。

しかし直撃すれば体勢を崩すには十分であり、今の距離で体勢を崩すという事は決定的な隙を晒す事に繋がる。

もう我慢の必要はない。力強く鈴音は跳躍し、一飛びでラウラとの距離を詰める。

着地の勢いも加えた一刀。そこから連なる連撃は、龍の怒りの如き荒々しきでラウラのエネルギーを根こそぎ削りきる事だろう。

空中でセシリアを圧倒しつつ斬り結んでいた楯無はその未来を予測して———。

「———悪い、セシリア」

そう呟いて、セシリアの眼前から消え———鈴音の一撃を受け止めた。

「は………?」

間の抜けた声は鈴音のものだ。楯無の後方に居るラウラも驚愕の表情を隠せない。

何故。空中でセシリアを押しさえていた筈なのに。どうして自分の前に居る。

だが、これは現実だ。セシリアの眼前から鈴音の眼前まで、楯無の移動した軌跡を示すような黒い帯が引かれていた。

瞬間移動じみた出来事にまだ対応出来ない地上の二人を他所に、セシリアは冷静に今の一瞬を思い出した。

(今……一瞬ですが、『黒雷』のウィングスラスターが中央から二つに割れ、黒い何かがそこから展開されたような――)

「ラウラ、ワイヤー!」

呆気に取られている自らのパートナーへ、楯無は短く指示を出した。

現実に戻されたラウラは直ぐ様ワイヤーブレードで鈴音の動きを封じ、レールカノンの標準を絞る。

楯無はレールカノンの射線を確保するように鈴音の背後に回り、すれ違いざまに一閃。

そのままレールカノンの発砲と同時に背中を掬い上げるように斬り上げ、鈴音のシールドエネルギーを削りきった。

「う、そ……」

呆然の内に削りきられた鈴音からセシリアへ視線を移し、楯無は大剣を分離させながら宣誓する。

「さつきは離脱して悪かったな。次はお前だぜ、セシリア」

「いいえ。では是非とも、私と二人きりの円舞曲を踊っていただけますか?」

機体からビットを射出するセシリアからの願ってもない提案にうずうずした様子で相方の様子を窺うIS馬鹿へ、ラウラは「好きにしろ」と返事をした。

その返事に目を輝かせながら空に飛び立った馬鹿は、そのままの流れでセシリアの偏向制御射撃に突っ込み、躲しながら距離を詰めていく。

残されたのは中国とドイツの代表候補生。お互いにパートナーの軌道を眺め――中国代表候補生は無事にひっくり返りながら悔しかった。

「ああああ悔しい!! 何よあと一歩だったのに、楯無空気読みなさいよおおおおお!!」

地面に寝転がりながら子供の様に手足をばたつかせて暴れる鈴音

を、ラウラは一瞥する。

確かにあと一歩だった。セシリアⅡオルコットの援護を受けていたとは言え、ラウラから初撃を奪い、"AIC"を攻略した。

簡単な仕込みではなかった。予め衝撃砲をチャージしておき、"双天牙月"の軌道上にラウラを誘い込む必要もあった。

"……楯無の試合運びを、読んでいたのか"

ラウラの言葉に、鈴音は動きを止めた後に呆れたように答える。

"あつたり前でしょ。あんなのんびりしてたらタイミング計つてんのはばれだつての"

"……のんびりして避け続けられるような攻撃ではなかったように思うが"

"避け続けられないから急ぐんでしようが。ほら、四本に追つ掛けるようになるつたら露骨に急いでるじゃない"

鈴音が指差した空中で、楯無は"ブルーⅡティアーズ"の弾幕を掻い潜りながらセシリアへ直進していた。

その動きは明らかに先程とは違い、一歩間違えば直撃する紙一重の距離で向かっていく。

"楯無の近接技術ならセシリアは十秒持たないわよ。なのに態々大剣にしたのは受け止め易くして、捨て身の行動を取らせないようにしたつて所ね"

至近距離まで迫り着いた楯無は二刀でセシリアに斬り掛かる。

先ずは一刀で彼女の主兵装であるライフルを切断。もう一刀でセシリア自身に斬り掛かろうとした瞬間、自爆覚悟のミサイルを放つ。

しかし反射的に行われた楯無のサイドブーストによつて空振りに終わり、近距離での緊急回避札は全て失われた。

"……全て貴様の言つた通りだ。"AIC"を確実に決められる状況を奴が作り、私が片方を確実に仕留める。それが私達の作戦だった。見抜かれているとは思わなかったが"

"はん、私はいっつの親友よ。舐めないでよね"

追い詰められたセシリアを斬撃が襲う。

世界最強と剣戟を交わした腕前が容赦なくエネルギーを削り取り、

「ブルーIIティアーズ」を機能停止に追い込んだ。

勝敗を告げるアナウンスがアリーナに響き、ここにBブロック決勝戦は終わりを告げた。

「……勝ったのは我々だが、この試合の立役者は貴様だろう、凰鈴音」
楯無が最後に割って入らなければ、ラウラは鈴音にやられていた。
その事実を受け入れ、ラウラは鈴音へ手を差し伸べた。彼女は強さには真摯である。

鈴音は数秒事態を理解出来ていなかったが、恐る恐るラウラの手を取る。

足元を掬うという目的は果たした。何時か一対一でリベンジは果たすが、今日の所はここで矛を収めるべきだろう。

「鈴」って呼びなさいよ。フルネームの呼ぶのとか疲れるでしょ、ラウラ」

「そうか。では、これからはそう呼ぼう、鈴」

鈴を引っ張り起こすと、ラウラは空へ視線で上げた。

最後の一撃が勢いが付き過ぎた為に「ブルーIIティアーズ」のラスターを破壊してしまった楯無が、セシリアをお姫様抱っこで抱えていた。

お互いが今の試合の感想を言い合い、楽しそうに談笑している。

「今戦っていた相手とあんな風に談笑するとは……ISに関しては嘘は吐かない、か。不思議な男だ」

「いや……あいつは色々気を付けた方がいいと思うわ。特に口説きとあんまり変わらない発言とか」

ラウラの眩きに、観客席からのとある姉妹の楯無へ向けられた視線を感じ取った鈴音はげんなりと答える。

兎にも角にも、学年別トーナメント一年生の部、決勝戦のカードは決まった。

織斑一夏とシャルルIIデュノア。雪月楯無とラウラIIボーデヴィツヒ。

奇しくも男性操縦者が勢揃いするカードは、明日行われる事となった。

3.2. 決勝戦前夜

学年別トーナメントの各学年の各ブロックが終了し、残るは決勝戦のみとなった。

決勝戦は一年生から順に行われるが、今回の学年別トーナメントの一番の目玉試合はその一年生決勝で決まりだった。

世界に三人の男性操縦者が一堂に会し、残る一人はドイツの最新鋭のISを引つ提げた代表候補生。

その試合を明日に控えた雪月楯無は食事や入浴を済ませた後湯冷ましを兼ねて学生寮の外のベンチに座り、空間に投影されたモニターを一人眺めていた。

映し出されている内容は愛機のパラメーター。

便宜上は第三代機である「黒雷」は、とある装備の試験機として開発された機体である。

しかし、データは既に取り終わっており、本来であればその完成品を搭載する予定であった。それを拒み、機能を一機能のみに限定したままなのは「黒雷」自身の意思だ。

故にISとして見れば「白式」同様、未完成の欠陥品である事は変わりない。それに加え、本で行った初の学園での本格的な運用。メンテナンスを兼ねたパラメーターチェックは必須だった。

「……稼働率九十九%。相変わらず、残りの1%は埋まらないままか」
大体のパラメーターチェックを終え、楯無はモニターと共に瞳を閉じ、思考の海へ意識を沈める。

「黒雷」を束から受領した時から起きていた、稼働率の問題。

包村帯として「黒雷」の当時の姿である「黒鉄」に搭乗していた際には、稼働率は安定して百パーセントを記録し、単一仕様能力まで発現していた。

その愛機との好相性や、楯無自身の力量により彼は世界三位の実力者にまで上り詰めていた。

そして第二回モンドグロッソが終わり、「黒鉄」は「黒雷」として生まれ変わる。

その時から現在に至るまで、稼働試験や実戦を含めた全ての搭乗で稼働率は九十九%を超える事は出来なかった。

世代による機体スペックの拡張により、十全に扱えなくなったわけではない。搭載されている装備の性能も遺憾なく発揮し、次世代へ大きく貢献している。

「ま、考えても仕方ないよな」

現状で困っている事でもない。出ない答えを探す事を止め、そろそろ部屋に戻ろうとした時――。

「――だーれだ？」

背後から何者かにそつと手で視界を塞がれ、からかうように声を掛けられた。

しかし楯無にこんな風に接してくるのは一人しかおらず、声からして楯無が聞き間違える筈もなかった。

「かた……更識先輩、でしょ？」

右手で相手の手を掴みながら、楯無は振り返る。

案の定正体は刀奈であり、目隠ししていた関係上鼻と鼻が触れ合いそうな程至近距離で目が合った。

赤い双眸に引き込まれそうになりながら、楯無は相棒へ心の中で語り掛ける。

(分かってて教えなかったな)

(マスターにとって不都合な相手ではなかったのだ。寧ろ嬉しいのでは?)

確かにな、と楯無はちよろく納得する。

「どうしたの? ……お風呂上りみたいだけど」

「それは楯無君も一緒でしょう? シャンプーのいい匂いがするわ」
湯上りで上がっている刀奈の体温が楯無の肌に伝わる。

どうも気恥ずかしくなった楯無だが、刀奈の方は不満な様子だった。

何度かすすすと鼻を鳴らして匂いを嗅いだ後に、更に密着して唸る。

「うーん……でも、いつもの楯無君の匂いの方が好きね」

「……そう」

自分も普段の刀奈の匂いの方が好きである事は、口が裂けても言えなかった。

恥ずかしさから身を引いてベンチに座り直した楯無の隣へ、刀奈は腰を下ろす。

どうにも普段の笑顔とは少しだけ違うその笑顔に、違和感を覚える。

「楯無君こそ、簪ちゃんやシャルル君とは一緒じゃないの？」

「俺、常にその二人と一緒に居る認識なんだね……。まあ、間違いじゃないか」

何しろ幼馴染とルームメイトだ。一緒に居てもおかしくはない。

今日一緒ではない理由は単純だ。

「シャルは一夏と明日の作戦会議、簪は今日の試合の振り返りを篠ノ之と……。だって。一夏と篠ノ之は同室だから、準決勝の対戦カードが一部屋に集結するわけだけだ」

その場の空気が不安だが、実りのある時間にはなるだろう。

おかげで一人ぼっちになった楯無だったのだが、本人はそんな事気にもしていなかった。一人は慣れっこである。

それで、と楯無は切り返す。

「更識先輩はどうしてここに？」

「湯冷ましに散歩でもしようと思ったら、一人ベンチで真剣にモニターを見る楯無君を見つけたから。お姉さん、少しどきっとしちやったわ」

「凛々しい楯無君って貴重だから」と付け足して揶揄うように笑う刀奈を見て、楯無は昔を懐かしむように静かに微笑みを返す。

昔からそうだった。彼女——更識刀奈は、雪月楯無の孤独を埋めていた。

唯一の家族である楯愛を守る為に己を擦り減らし続けていた楯無には、抛り所は無かった。

幼い楯愛とは寄り添って支え合う事は出来なかった。クラスメイトの簪には弱さを見せず、対等でありたかった。

故に、年長者である刀奈に自然と抛り所を求め、刀奈も無意識にそれに応えている。

「Bブロック決勝戦、格好良かったわ。今までは男性操縦者と言えば織斑一夏君って感じだったけど、観客の生徒達も何人かは楯無君の事意識し始めたんじゃないかしら」

そんな抛り所からの言葉に、楯無は不満そうだった。

「……別に、いいよ。俺、名前も知らない人に意識されたって嬉しくないし。俺は二人が見てくれれば、それで十分だから」

楯無が飛んだのは更識刀奈と更識簪、たった二人の為だ。

その飛翔から不特定多数が何を感じ取ろうと、楯無の知った事ではない。

拗ねた様子でそっぽを向いた楯無を、刀奈は悪戯っぽく見つめ――

「あーもう、可愛いっ!」

急に楯無を抱きしめた。

完全な不意打ちにより体勢を崩した楯無は刀奈の方へ倒れ込み、胸元へ顔を埋める形となった。

その膨らみの柔らかさに顔を赤くして咄嗟に離れようとした楯無だが、刀奈はそれを許さない。

「ほらほら、お姉さんの柔らかい感触を堪能出来るのは今だけよ?」

サービスサービス!」

(堪能していいのか……)

(マスターが特定の誘惑に異常に弱いのをみると、相棒として安心します)

仕方ないのである。こんな風にサービスされたのならば、それを享受する以外の選択肢は存在しなかった。

あつさりと抵抗するのを止め、大人しく抱きしめられている楯無だが、抱きしめられる理由そのものはない。あとこのままだと窒息する。

何とか顔を上げて刀奈の方へ向いて、酸素を確保する。

「そもそも、何で俺サービスされてるの?」

「そりゃあ勿論、サービスされるような事を言ったからよ」

機嫌よさげに頭を撫でてくる刀奈を見つめながら、完全に弟扱いだな、と楯無は苦笑する。

異性として意識されているのかいないのか、判定は微妙な所である。

それはそれとして、サービスされるような事を言ったっけ、と疑問にも思っていた。楯無としては思った事を言ったただけだ。

「うんうん。嬉しい言葉も聞けたし、こうして楯無君成分も補充出来たし、明日の決勝はいい試合が出来そうだわ」

「それは良かった。俺も楽しみだな、更識先輩の試合」

刀奈の体温に蕩けそうになりながらも、何とか力を込めて拘束から抜け出す。あのまま行けば刀奈の匂いに包まれて寝落ちは確定だった。

それにそろそろ湯冷ましには長い時間だ。身体を冷やして明日の試合に影響があるのもいけない。

楯無自身もそこまで長居する予定が無かった為に上着を着てきてはいなかったの、刀奈に貸す事も出来なかった。

刀奈は視線を微かに寮の玄関の方へ向け、何でもないように告げる。

「さて、そろそろ戻ろうかしら」

「身体冷やしたらいけないしね。俺ももう少ししたら戻るから」

「そうね。それじゃあ、また明日。決勝戦、楽しみにしてるわ」

こりや気を抜けないな、と頷いて刀奈を見送って、楯無は伸びをした。

六月の泥濘の様な空気が肌を撫でる。心地がいいものではなかったが、不思議と嫌な気分ではなかった。

この夜が明ければ、また本当の翼で飛ぶ朝が来る。

夜明けが待ち遠しいと思ったのは、久しぶりだった。

——そして、そう思った矢先。

「楯無……っ」

伸びきった背後から声を掛けられて振り向いた先には、先程まで居

た刀奈の妹である簪が立っていた。

ヘッドギアも付けておらず、普段掛けている眼鏡型の携帯ディスプレイも身に付けてはいない。

その表情は何故ここに居るのかと問いたげで、湯上りなのか髪の毛は灰かに湿っていた。

そこまで観察して、楯無は刀奈が退散した理由を察した。

(簪の気配を察知して逃げたな。流石、更識家十七代目当主)

楯無は思わず苦笑いを浮かべてしまう。

少し向き合えばそのすれ違いは終わりを迎える筈なのに、その一歩を踏み出す事がこんなにも難しい。

「……………どうしたの?」

しかしそれは更識姉妹の問題で、楯無が自ら首を突っ込んでいい事ではない。

楯無の隣へ座った簪へ、誤魔化すように問い掛けた。

「いや、何でもない。反省会は終わったのか?」

「うん……………一夏君とシャルルからも話を聞けたから、収穫があつた」

「そうか……………一夏、君?」

今、聞き捨てならない言葉が聞こえたような。緊急事態発生である。

ぎぎぎぎ、と錆びたロボットの様なぎこちなさで簪の方を見る楯無。

その顔には冷や汗がたらたらと流れており、ISバトル時の逆境に高揚する性分は多分人違いである。

戦況を分析する冷静さなどどこかに置いてきてしまった幼馴染へ、簪はきよとんとした表情で肯定する。

「二人も作戦会議の前に振り返りをしたいって言ったから、一緒にしてただけど……………あつ」

問題がそこではない事に気付いたのか、簪が声を上げた。

急激に顔を赤くしながら、慌てた様子で楯無の服を掴んだ。

「ちが……………違うの。反省会の時に、一夏君が『こうして試合をしたんだから、もう名前で呼んでいいよな』って……………む、向こうも『簪さん』だ

から！ そんなんじや、全然ないから！」

必死に弁明をしているおかげでほとんど距離を詰めていつているが、夢中になっている当の本人は気付く事は無い。

なので殆ど密着状態になりつつある事に緊張しているのは、更識姉妹の事になると途端に思春期に突入する楯無だけである。

他者が焦っているのを見て冷静になっていくのはよくある事で、最早簪が自らの懐に居る状況の方が余程緊急事態だった。

このまま背中へ手を回したらどうなるのか。簪の熱と匂いに理性が麻痺しそうになるのを必死に堪え、楯無は何とか語り掛ける。

「……わ、分かった分かった。確かに一夏は天然誑しで、小学生の頃から何人もその被害にあつたのを見てきたけど、流石に簪は違うんだな？」

「そ、そう。一夏君は簪と鈴の事もあるし……そういう風に見た事、ないから」

誤解が解けて安堵したのか、簪は顔を赤らめたまま楯無を見つめる。

赤らめている理由が密かに変わっている事には、楯無は気付かない。密着されててそれどころではない。

頭の中で素数を数えながら自分を落ち着かせ、気になっていた事を尋ねる。

「……と言うか、篠ノ之とペアを組んだ時も思ったんだけど、よく一夏と仲良くなったな。その辺りは、もう区切りが付いたのか？」

織斑一夏とは「白式」と「打鉄式式」の開発を巡る倉持技研のいざこざがあり、篠ノ之簪は「ゴーレム」襲撃事件で楯無が大怪我を負う原因を作った人物である。

簪の件は楯無自身が自らの怪我に関しては別に気にしていない事もあつて分からなくもないが、自らの専用機の件はそう簡単に踏ん切りが付く事ではない筈だったが。

その問いに対し、簪はゆっくりと頷いて肯定した。

「……簪は、最初にペアを組もうって言われた時、ISのコーチをしてほしいとも頼まれた。皆が大変な時、自分が何もできないのは嫌だか

ら……って」

「……そっか。篠ノ之も見る目があるな。代表候補生の簪なら、コーチとして申し分ないし」

「夏君も……朝練を見た時も思ったけれど、彼なりに努力してるのを、感じたから。『打鉄式式』の件は……正直、私の筋違いな所もあつたし」

それでもやりきれない感情があつた筈だが、それも『打鉄式式』が完成に近付いてきたが故だろうか。

ともあれ、簪の人間関係の蟠りが無くなつたのは楯無にとつても喜ばしい事だ。

——まあ、それはそれとして。

「簪さんよ、そろそろ離れないか？」

抱き着かれて見つめられて、楯無の理性はそろそろ限界だった。

言われて、簪は漸く自分の状態を理解する。だが、顔を赤くしつつも彼女は豪胆であつた。

「……嫌」

離れる事を拒否して、寧ろ強く握り締める。

まさか拒否されるとは思っていなかった楯無は声にならない声を漏らす。

「……私、今日は頑張った。訓練機と訓練機の組み合わせで準決勝まで行った。……だから、その。……ご褒美、頂戴？」

上目遣いでそう言われると、そうしなければならぬだろう。

確かに簪は頑張った。頑張りは報われるべきだ。自分が褒美になれるのなら素晴らしい。

その手の言い訳を心の中で百回程繰り返した後に。

「……じゃあ、少しだけだぞ」

心を無にして、彼女の背中に手を回した。

33. 決勝戦

アリーナでは四人の専用機持ちがそれぞれのパートナーを隣に据え、相手のペアと対峙していた。

学年別トーナメント、決勝戦当日。全学年の決勝戦が行われる本日の第一試合は、今年IS学園に入学したばかりのルーキー達。しかし、アリーナは一年生最強のペアはどちらになるのかを見届けようとする生徒で満員になっていた。

試合開始の瞬間を今か今かと待っている会場の熱気を感じながら、観客席で同じように試合開始を待っている箒、簪、セシリア、鈴音の準決勝敗退組は固まって座っている。

「しっかし、決勝戦ともなると企業も国家も本気ねー」

鈴音はある方向を見て感心したように口を開く。

「それは……そう。寧ろ、この試合が目的で来てる来賓が大勢居る筈」
鈴音と同様に、観客席のある方向——来賓席の方を見て、簪は同意した。

簪の指摘は尤もだ。何しろこの世に三人しか居ない男性操縦者が一堂に会し、未だトライアル段階だと思われていたドイツの第三世代機を操る代表候補生まで加えた対戦カードだ。

一名の性別詐称が混じっているのだが、世間的にはこれ程まで珍しい試合もそうそうない。

当然、ありとあらゆる国家や企業の上役がデータを取りにやってきている。

各国の代表候補生には見覚えがある顔がずらりと並んでおり、それぞれの柵を思い出す代表候補生の中でもセシリアの反応が特が悪かった。

「セシリアはどうしたのだ？」

ぐったりとしたセシリアを心配した箒の言葉に、パートナーである鈴音が呆れ気味に答えた。

「セシリア、楯無に完成した偏向制御射撃の初披露を取っておきたかったが為に、本国に連絡を入れなかったらしいわ。それが昨日の試

合で明るみに出て、昨夜本国からこっそり絞られたってわけ」

「……まあ、偏向制御射撃を会得したのは事実ですのお咎めは少なくて済みましたが。問題はその後提出させられた『ブルーIIティーズ』の稼働レポートですわ……」

「……専用機持ちの代表候補生というのは、中々柵があるのだな」
がつくりと項垂れたセシリアを見て、箒は苦笑いを浮かべた。

しかし、それは後ろ盾を持つ者の義務でもある。

自分や幼馴染がIS学園に入学させられた経緯を考えれば、その程度の柵は受け入れなければならないのだろう。

アリーナで試合開始を待っている想い人にも、何時かそんな柵がやってくる時が来るのだろうか。

「それにしても、倉持技研は鼻高々なんじゃないの？」

アリーナで待機している四人を見た鈴音の言葉に、セシリアも同意する。

「そうですね。何しろ決勝カードの半分が倉持技研所属で、しかも男性操縦者なわけですから」

「だから……倉持技研も上役の他にもう一人連れてきてる」

箒が指差したのは、自分達が座っている客席の最前列。

そこには姉である更識楯無と、腰まである黒い髪が特徴的な少女が座っていた。

刀奈と話す際の横顔から覗く垂れ目気味の赤い瞳は、彼女達の記憶に新しい。

———と言うか、あの妹を一ヶ月足らずで忘れるには無理がある。

「……IS学園の制服着るとはいえ、当たり前前のように観客席に居るんだけど。ここのセキュリティどうなってんのよ」

「二応……織斑先生から許可は貰ったみたい……。お姉ちゃんが護衛に付く事が条件で……この試合だけは観客席で見れるって」

アリーナへの入場が始まる前、通信で興奮気味に伝えてきていた。

確かに来賓席よりは観客席の最前列の方が試合はよく見える。

……見えるのだが、だからと言って何故当たり前前のように制服を着て

観戦しているのか。

「楯無さんっ、兄さんですよ兄さん！　『黒雷』を纏った兄さんの姿を見れるなんて……主任に作業全部放り投げてきてよかったです！」
「楯愛ちゃん、分かったからもう少し静かにして？」

「……む」

まだ試合すら始まっていないのにテンションが最高潮に達していた楯愛を、楯無は冷静に宥める。

その様子が本当の姉妹の様に仲睦まじかったのを見て、簪の心のどこかがざわついていた。

あんな優しい気な表情を、自分の前で浮かべてくれたのは何時だったか。自らの劣等感が招いた事とは言え、どうにももやもやする。

そんな簪の内心は露知らず、恋する乙女筆頭である簪は咳払いを一つして話題を切り替える。

「ところで……トーナメント優勝ペアには、好きな男子と付き合う権利が与えられるそうだったが……」

『……！』

簪の言葉に、鈴音と簪の二人が戦慄した。

決勝の面子から殆ど無効になったその噂話を、まさかこのタイミングでぶち込んでこようとは。

元々は簪が一夏へ言った言葉が原因で、人から人へ伝わる度にあれよあれよと捻じ曲がっていっただけなのだが。

鈴音は何でもなさそうに、しかし明らかに乙女の顔をして、

「……私は、その。一夏が私を女の子として見てくれるきっかけになつたら、別にまだ付き合えなくても……」

「……鈴」

一夏と鈴音の間にあつた一連の出来事を知らない簪は、しかし同じ男を好きになつた彼女の心を理解していた。

幼少期は男子達から『男女』と揶揄されてきた簪にとって、好きな異性から女子として見られる事がどれだけ嬉しい事か。

照れを浮かべながらも鈴音は簪を見る。恋すると言えば、最近ブレーキが壊れてしまったこの少女を無視する事など出来ない。

「当然、簪は楯無でしょ？ キスでもする気だった？」

「キ、キス……っ!?! ……それは、その……少し、いいかも？」

冗談で言ってみたらこれである。顔を赤くしてその光景を頭の中に思い描くその様はまさにむっつりであった。

「……ふ、いいものだな。どうして同じ幼馴染同士なのにこうも違うのだ……？」

「べ、別に……楯無は、いつも、優しく……助けてくれるから。私が……あ、甘えちゃってるだけ」

「は……そういう所からしてもう違うのよ……」

照れる簪に対して遠い目をした筈と鈴音。織斑一夏に恋する少女達は皆この洗礼を受けるのかと、簪は視線を逸らした。ちなみに言ってしまえば、真面な対応をする相手以外には、楯無の態度の方が圧倒的に酷い。

視線を逸らした先に居たセシリアも似たような表情で呆れていた。

「……セシリアは、もしその権利を使えたら、どっちと付き合った？」
候補としては男性として通っているシャルロットも居た筈なのだが、正体を知る簪は無意識に排除してしまっていた。

代表候補生の中でも特にISの鍛錬に打ち込んでいるセシリアなので、てつきり両者ともお断りだと思っていた筈。

しかし尋ねられたセシリアは、何でもないように爆弾を投下した。

「楯無さんですわね。心と身体、射貫く箇所は多い方がいいですわ」

「!?!」

予想外の答えで無事爆撃された簪は声にはならない声を出す。おかしい、セシリアはそういった担当ではなかった筈なのだが。担当って何だ。

「楯無さんであれば、私はIS乗りとしてより高いレベルへと昇華出来る筈ですわ。それに、同じ『打鉄』を広める者同士、互いに支え合える関係である事も理想ですし」

「だ、駄目……その理由じゃ、駄目……だから」

本気で言っているのか冗談なのか分からない言い分を並べるセシリアへ、簪は必死に食らいつきながら照れを隠した小さな声で抗議を

している。

あくまで強制的に付き合える権利があればの話をしていたセシリアは簡単に引き下がり、簪は何とか胸を撫で下ろしていた。

「……観客席の一角だけカオス過ぎるだろ」

IS搭乗者はハイパーセンサーによって全方位を確認出来る。試合が始まってもないのにその機能を使って観客席の様子を窺っていた楯無は、半目になりながら声を漏らす。

しかし顔を赤くしていた簪は最高だった。何の話をしていたかは分からなかったが、とりあえず録画はしておいた。決勝が終わったら本人の隣で観賞しようと誓った。

あと何故か妹が観客席に居たが見なかった事にした。騒ぎまくっているが、試合をする側が静か過ぎるのを盛り上げてくれているのだと考えよう。

「あはは……」

お互いのパートナーの間に流れる重い空気に、シャルロットは苦笑いだった。

それに関しては楯無も同意で、一夏とラウラはお互い一心に睨み合いつけている。

「漸く貴様に辿り着いた。この時を待っていたぞ……貴様の全てを否定し、あの人に私の成長を見てもらう時を」

自分に対しては多少取っつき易くなってくれ、昨日の試合で鈴音とも仲良くなってくれたと思ったが、当初の目的を捨てさった訳ではないようだ。楯無は肩を竦めてラウラを見た。

転校初日の様な刺々しさを纏った彼女には、どこか危うさを感じられた。

「俺も待ってたぜ。あんたを倒す事だけを考えて、俺はこのトーナメントを勝ち上がってきた」

ラウラの眼光を受け止め、*“雪片式型”*の切っ先を向けて宣戦布告とする。

それから会話はない。両者共に一触即発の雰囲気を感じながら、唯試合が開始されるのを待つ。

直に観客席の声も静まっていき、会場は緊張と静寂に包まれた。

ハイパーセンサーとアリーナ上部に設置されているモニターへ、カウントダウンの表示が始まる。

「楯無」

——始まる数秒前。

パートナーの声を、楯無は前を見据えたまま静かに聞いた。

「私をこの舞台に立たせてくれて、礼を言う」

カウントが零になり、試合開始の火蓋が切られた。

アリーナ中にブザーが響き渡り、張り詰めた空気が弾けるように解き放たれる。

「シャルル！」

「一夏！」

互いの役割を果たす為にポジショニングを始めた楯無とラウラを無視して、シャルロットは一夏へと呼び出した近接ブレードを投げ渡した。

「一夏さんが……！」

「——二刀!?!」

息の合わせて疑問を口にするセシリアと鈴音を横目に、箒は真っ直ぐ試合から目を逸らさずに口を開いた。

「当然だ。一夏はトーナメントに向けた訓練の合間に、私と剣道場で二刀同士の打ち合いをしていた」

「私も……偶に、見た。一夏君、最後にはかなり二刀に慣れてたと思う」

右手に「雪片式型」、左手に「ブレットスライサー」を握り、スラストを噴いて突き進む。

迎撃態勢を取るラウラはレールカノンを構え、躊躇いなく発砲した。

回避行動を取りながら距離を詰めていく一夏とは別に、シャルロットは楯無へ両腕に展開したアサルトライフルとショットガンを発砲した。

放たれた弾丸を「避雷針」で防ぎつつ飛び上がる楯無。互いの相

手は決定し、それは両ペアが本来想定していた相手だった。

「成程。箒が一夏をぎりぎりまで抑えられてたのは、お互いの癖が分かってたからね」

「だが、結局は押されきってしまった。専用機同士なら……話は違っていたかもしれないが」

放たれる砲弾を次々と回避していく一夏を見て、幼馴染の成長を感じると共に、僅かな寂しさを抱える。

（射撃はセシリアの方が速度も精度も上だ！ 朝練の鬼ごっこを思えば、これぐらいなんて事はねえ！）

スラストターを噴かし速度を上げ、距離を詰める。今度はレールカノンの有効射程を抜けた途端に切り替えられた迎撃手段のワイヤーブレードとの戦いが始まった。

だが、苛立ちを感じさせるラウラとは対照的に、一夏の表情に焦りは見られない。

（六つの同時攻撃——そいつにも、こっちは慣れてんだよ！）

鈴音の「双天牙月」とセシリアの「ブルーIIティアーズ」。合わせて六本の包囲網。それが一夏の朝練のスタンダードだった。

故に一夏は恐れない。全方位からではなく直進方向から相對するだけの六手など、訓練以下の障害でしかない。

——叩き落とし、進む。それだけだ。

「おおおおおおおおお!!」

雄叫びと共に、男性操縦者が突き進む。

嵐の様な斬撃がワイヤーブレードを叩き落とし、一夏の進む道は切り拓かれていく。

「あいつ……」

上空を飛び回りながらシャルロットを牽制し続けている楯無は、ハイパーセンサーで地上にて行われている乱舞を確認していた。

一夏はワイヤーブレードの動きを完全に見切り、遂にはワイヤー部分を斬り捨てた。

薄くなつた弾幕を白い外殻を纏った騎士が抜ける。相對するは黒き双刃。

“白式”の唯一にして絶対の得意レンジであるクロスレンジ。その領域に両者は立っていた。

「おっと——まったく、冷静にえげつない事してくれるぜ」

地上で始まったクロスレンジとは対照的に、空ではミドルレンジが続く。

シャルロットは只管アサルトライフルとショットガンを回転させて弾幕を形成し続けている。

位置取るのはラウラの頭上。そこを中心として楯無を円を描くように動かし、楯無を一夏から遠ざけていた。

ショットガンの攻撃範囲が最大限有効になる距離を維持しつつ、楯無の回避先にアサルトライフルを置く。

面による制圧と、点による予測。その二つを組み合わせ、シャルロットは世代差によるハンデを埋めている。

距離は遠く、全て“避雷針”によって防がれて有効打とはならないが、それでも牽制としては十分だった。

「えげつないって、そんな楽しそうな顔で言われてもね……！」

楯無の口角上がりっぱなしの表情に釣られるように笑顔を浮かべながら、シャルロットは弾幕を形成し続ける。

リロードは拡張領域にて行われ、シャルロットの技能である高速切替によって武装切替の隙は存在しない。

（僕の役割は、とにかく楯無を一夏に近付けさせない事……！）
（シャルはこっちに縫い留めておいてやる。約束だからな）

空を舞う二人の思惑通り、地上の二人は剣舞を続ける。
プラズマ手刀が一夏の猛攻を受け止め、お返しとばかりに切り返す。

その剣戟は互角なように見えるが、一部の者は理解していた。
「ラウラ、焦ってるわ」

鈴音は直感で、この剣戟の行方を感じ取った。

受けるのはいい。切り返す事も出来ている。しかし、この剣戟は互角ではない。

「あらあら。多分限定的なんでしょうけど、一夏君もやるじゃない」

「え、とりあえず攻撃を躲し続けている兄さんが凄いつて事でいいんですよね？」

頭の悪い感想をぶつ放した妹は放っておいて、顎に指を添えて感心したように漏らす刀奈は、どうやら何かに気付いたようだった。

刀奈が気付いた要素は、ラウラに対しては苛立ちとして降り掛かる。

——撃たされている。

(この私が……!?)

唯勢いだけの剣戟にしか見えない。織斑千冬や包村帯の様な洗練された極地など微塵も感じ取れない。

何て事はない隙を突けば脆く瓦解していくのが運命の筈だった。

だというのに、隙を突けば対応される。隙を突いた隙を突かれる。

雪月楯無と斬り結んだ感覚とは似て非なる感覚。圧倒的な流れに呑まれるのではなく、小さな小さな流れから抜け出せないこの苛立ちが、ラウラの冷静さを奪っていく。

(……成程。それがお前がラウラに勝つ為に得た答えか)

空中から二人の様子を観察していた楯無は、敵パートナーであるシャルロットへ語り掛ける。

「随分と予習をしたみたいだな。あいつ、そんなに勉強好きだったか？」

「あは、ばれちゃった？」

今にも舌を出しておどけてしまいいそうな声を出しつつも、シャルロットは弾幕を緩めない。

これを突破されてしまえば、一夏の剣戟も瓦解してしまう。

「——徹底的な対策。言い換えればメタだな」

ラウラIIボーデヴィツヒの持ち味と訊かれれば、誰もが“AIC”と全距離対応が可能なバランスの取れた武装構成と答えるだろう。

だからこそ一夏はそこを突いた。汎用的な装備構成はそれ自体が弱点となり得る。嘗て対峙した楯無は搭乗機の問題により一点突破する事は叶わなかったが、寧ろ“白式”にはそれしかない。

得意レンジまでの突破の仕方は六月頭に楯無がやってみせた。

一夏の操縦技術ではそれを恒常的に再現する事は難しい。だが、一夏はあの戦闘を「白式」の稼働ログから徹底的に見直した。

ラウラの攻撃の癖。迎撃手段を切り替えるタイミング。フェイクと本命を織り交ぜる度合い。研究し尽くして、対策し尽くした。

そうして辿り着いた決戦の場。制さなければいけない自らの領域。そう簡単に討ち取らせてくれる程、ドイツの代表候補生は甘くない。そしてログから洗い出した楯無とラウラのハイレベルな剣戟を見て。一夏は嘗てこの光景を見ていた事に気付いた。

「千冬さんと包村帯。第二回モンドグロッソ準決勝での打ち合いに、よく似ていたらしい」

箒の言葉に、観客席のセシリアと鈴、簪は彼女の方へ視線を向ける。即ちそれは、篠ノ之流を交えた打ち合い。千冬がラウラを教導していたのなら、必ず太刀筋は似てくる。そう判断した一夏は、自らが教えを乞う事が出来る中で最も篠ノ之流に詳しい箒へ、互いに二刀での打ち合いの教えを乞うた。

その判断は正しく、ラウラとボーデヴィツヒというIS乗りの要素を一つ一つ分解し、そして対策していく事で、一夏は今この場においては彼女を凌駕する。

「お前に言いたい事があるんだよ、ボーデヴィツヒ……!」

ここからがスタートラインだ。

自らを否定すると宣戦布告してきた少女への、自らの無力を呪った少年の咆哮。

「お前が俺を千冬姉の弟だと認めないように! 俺もお前を千冬姉の教え子だと認めない!」

「何だ?! キ——さまあ!!」

一夏の言葉がラウラの琴線に触れた。

ラウラとボーデヴィツヒが一人の軍人として専用機を任される程まで鍛え上げた恩人との思い出を否定する事は、誰であろうと許さない。

怒りは太刀筋に乗る。その怒りを捌きつつ、一夏の勢いは止まらない。

「確かにお前は強い！　それが千冬姉が鍛えてくれた力なら、千冬姉を誇りに思うのは間違つてないんだろうな！」

遂に一太刀、剣戟を超えて「ブレットⅡスライサー」がラウラの左肩を捉える。

絶対防御によりエネルギーが大幅に減った事を気にする事も無く、ラウラの赤い右目は怒りの炎を燃え上がらせていた。

「黙れ……！　貴様如きが私と教官を語るな！」

ドイツで出来損ないだった自分と出会ったあの瞬間は。

あの人の指導で出来損ないから這い上がってきたあの日々は。

唯弟であるというだけで無条件で気に掛けてもらえるお前が、土足で踏み込んでいい領域じゃない。

羨望とは言い換えれば嫉妬である。妬む気持ちを自覚してしまつたラウラはどこまでも怒りに支配されていく。

怒りと共に鬼気迫るラウラの一閃を「雪片式型」で真正面から受け止め、一夏はラウラに負けじと力強い眼光で怒りをぶつける。

「お前はその力を見せつけるだけだ！　相手を傷付けるだけで、何かを守ろうともしないで！」

「それが、どうした！　力は唯力だ！　振るわねば意味がない！　価値も残せない！」

言葉を交わす意味などない。織斑一夏とラウラⅡボーデヴィツヒは交わらない。

武力で叩きのめすのみ。敬愛する恩師によって鍛え上げられた力ならば、素人一人屠る事など造作もない。

ラウラは鏢迫り合いを無理矢理に弾き、バックブーストで距離を取る。即座に「AIC」を起動。一夏を絡めとった。

念力に固められたように動かなくなつた一夏。それを見て、ラウラは勝利を確信し、鬨り殺す為に右手のプラズマ手刀を軽く振るう。

だが、一夏の表情は陰らない。唯真っ直ぐに勝利を見つめ、目の前の少女へ慟哭の様に訴える。

「そんな力の使い方、千冬姉が見せたのかよ！　お前が追っているあの人の背中、そんなものだったのか！」

「な……に——!?」

言葉はラウラに突き刺さる。

織斑一夏とラウラ、ボーデヴィツヒが見た織斑千冬の背中と同じでも、追う背中とは違っていた。

何も出来なかつた自分を引き上げてくれた存在への憧憬。強さへの渴望。中身が違う同じ事柄を持つ一夏とラウラは、きつと紙一重で、一歩間違えば逆の立場だった。

「俺が人生で最も惨めだった時はそうさ、俺自身の存在が千冬姉の栄光を奪い去った瞬間だ！ 力を求めた！ でなければ死にたいとさえ思った！ そんな時に俺はISに出会った!! だから誓ったんだよ、俺は千冬姉の様に、誰かを守れる力を!! 只管に!! 追い求めるってな!! ——シャルル！」

名を呼ばれると同時に、シャルロットは一つの武装を展開した。

だがシャルロットがそれを手にする事はない。重力に従って、そのまま落下を始めた。

高速機動で相対する楯無に気を取られた故のミスではない。

シャルロットは変わらずラウラの頭上を位置取っている。

故にシャルロットが展開した武装——何の変哲もない時限式手榴弾は、ラウラの頭上で爆発した。

「ぐ、う——!?」

爆風によるめいた事により、“AIC”を維持する事が困難になる。

——条件は整った。“AIC”に捉えられている間も、一夏は勝利への歩を進めていた。

拘束が解けた一夏はスラスタに溜めていたエネルギーによって瞬時加速を行い、開けられた距離を強引に詰める。

「ラウラー！」

「——させないよ！」

準決勝の様にフォローに入ろうとした楯無の眼前にシャルロットが迫る。

勢いのままに楯無をアリーナのバリアまで押し出し、そのまま押しさ

えた。

「おま、瞬時加速使えたのかよ……！」

「お、帯の前で見せるのは初めてだからね！」

何故か顔を赤くして肉薄するシャルロットを他所に、楯無は地上の二人の様子を見た。

「『零落白夜』、起動！」

一夏の魔剣が起動する。彼等の憧れと同じ、全てを一撃の下に切り伏せる文字通りの必殺。

「余所見は嫌だな、僕に夢中になってよ！」

同様に、シャルロットも自らの虎の子を抜く。

機体性能の差によって、この拘束は長くは続かない。ならばその間に最大火力を叩き込む。

シャルロットの左腕に装備されたシールドがスライドし、その下から現れるのはリボルバー機構を搭載したパイルバンカー。

——『灰色の鱗殻』。第二代最高クラスの威力を持つ、正しく切り札。

「——嘘」

腹部を狙って振るわれた一撃を、楯無は右膝を曲げてシャルロットの左腕の動きを阻害して防いだ。

そのままスラスタを全開にして強引に押し返し、無理に可動域を確保する。

「それでも——」

驚きながらシャルロットが告げた通り、もうフォローは間に合わない。

一夏の一闪はもうラウラの眼前にまで迫っている。

「——何故だ」

ラウラの眩きが空気に溶ける。

何故、私はここまで追い詰められている。何故、お前はここまで私へ喰らい付く。

軟弱者はお前だった筈だ。弟というだけで気に掛けてもらい、その立場に甘えているだけの存在だった筈だ。

追う背中と同じでも、追う覚悟が違う。ISを手に入れたからという生半可な気持ちで力を求めたお前とは、動機の重みが違う。

そう思っていた。だが現実は違った。

彼女が求めたのは唯の力。彼が求めたのは守る力。二人が織斑千冬の中に見て、感じ取ったものの違い。

その全てが今現実として表れる。嘗て敬愛する恩人も振るつていた蒼い光刃が、喉元に迫る。

否定される。私を出来そないから引き上げてくれた力が。この力を失ったら、私は何物でもなくなってしまうというのに。

——ああ。ならば、くれてやろう。

私が私でないのならば、それを止める権利も私にはないのだから。かちり、と。何かが起動した音がした。それが何の音なのか、何によつて抑え込んでいたものなのか、ラウラには分からない。

「うあああああああつ!!」

ラウラの絶叫と共に、彼女を中心に衝撃波が巻き起こり一夏を斬撃ごと吹き飛ばした。

「シユバルツェアIIレーゲン」が装甲と装甲の合間から紫電を撒き散らし、黒い泥を溢れさせながら機体全体を包み、もがき苦しむラウラを呑み込んでいく。

「ラウラー!」

最早意識まで呑み込まれ掛けた刹那、自らの名前を呼ぶ声が聞こえた。

視界の果てには、この学園に入ってから何かと関り、友人となった男。

お前なら、知っているのだろうか。私は何者で、何になりたかったのかを。

「た、てな……し——」

虚ろな瞳で楯無を見つめ、力なくそつと手を伸ばすが届かない。

やがて彼女の全ては泥に呑まれ、黒に染まった。

34. 黒い翼

今この場に居る全員が、現状が異常事態になりつつあるのを認識するのに時間はかからなかった。

「帯、あれはいつたい何が起きてるの!?!」

「さあな。だが、あれはあのシステムで間違いないだろ——胸糞悪い」

『“VTシステム”。正式名称は“ヴァルキリートレースシステム”であり、過去のモンドグロッソ部門優勝者の動きを再現します』

密着したままラウラの様子の変異を感じ取った二人の会話に、“黒雷”からのアシストが入る。

二人のみに聞こえるようなボリウムで会話をしている為、管制室やざわつき始めた観客席には聞こえていない。

伝えられた答えを聞いたシャルロットは驚きを隠せない。

「“VTシステム”!?! それって、各国で研究も使用も禁止されている筈じゃ……!?!」

「そうだ。あのシステムのデメリットは——」

会話を遮るように、アリーナに居るIS乗り達へ千冬より管制室からの通信が入る。

『聞こえるか、お前達。この試合は——』

「何で“シユヴァルツェア||レーゲン”に“VTシステム”が搭載されている!?!」

通信を遮り返すように叫ぶ楯無へ、千冬は努めて冷静に返す。

「理由は分からん。だが現実として搭載されてしまっている。ドイツには後で詳しく訊かねばならんがな」

小さく舌打ちして、楯無は再び地上で変形を続けている黒い泥の塊へ目を向ける。

変形が終わる。その姿は楯無が予想していた通り、嘗て楯無がモンドグロッソで相対し、数多のIS乗りの憧れとなっている存在——織斑千冬の愛機、“暮桜”を形作った。

「“暮桜”……!?!」

驚く一夏の声を他所に、楯無は千冬へ通信を送り返す。

「ラウラの救助は俺達がやる。教員達は避難誘導に集中してくれ。突入部隊の編成なんて待ってられるか」

『建前の直後に本音を加えるな。……だが、そうだな。確かにボーデヴィツヒへのダメージを考えると、悠長な事は言ってられん。何より、お前がやるのが一番早いだろう』

管制室のマイクが千冬の判断に近くで真耶が声を上げたのを拾ったが、そちらはそちらで何とかするだろう。

どうやら千冬の一言に真耶が折れたらしく、

『来賓、観客の皆さんは教員の指示に従って避難を開始してください！』

などといった避難勧告が始まった。

これで心置きなく始められる、と楯無がスラスタ―に火を入れた瞬間、地上でラウラと相対していた一夏が動く。

「うおおおおお!!」
本人の気概と同じく真っ直ぐに突き進み、水平に「雪片式型」を振るう。

「暮桜」を模った黒い泥はその右手に握った刀を振るい、それを受け止める。

一瞬のやり取りの間に見た、刀の細かな造形。その情報は一夏の中の何かを激しく刺激した。

奥歯を噛み締め、怒りのままに打ち合うが、打ち合いは何度も続かない。

黒い泥の一閃が、一夏の剣戟を超えて「白式」を吹き飛ばした。

「ぐあっ!」

「一夏！ 大丈夫——」

受け身を取る事も出来ず転がる一夏の傍へ、シャルロットが降下する。

そうして見た一夏の表情に、絶句した。

タッグパートナーとして共に訓練を重ねていたこの一ヶ月弱。そのどこにも存在していない、怒りと憎しみに満ちた鋭い目付き。

その目には「暮桜」しか映っていない。再び突撃しようとしたのを止められた事で、初めてシャルロットの存在に気付いた程だった。

「落ち着いて、一夏！　むやみに突っ込んだんじゃ駄目だよ！」

「離せシャルル！　見えたんだ、あんなの見慣れきってんだよ!!　今度こそ……！」

「——無理だな。あれだけ見たものを捌けないんじや、今のお前じゃ勝てない」

「暮桜」と相對するように二人に合流した楯無から冷たい言葉を浴びせられても、一夏の激昂が収まる事はない。

「お前だって分かってるだろ、楯無！　あれは「暮桜」で、あいつが握ってるのは「雪片」だよ！」

「ああ」

冷めた返答にも気付く事なく、一夏のボルテージは止まらない。

「あれは千冬姉の剣なんだよ！　他の誰にも渡しちゃいけない、千冬姉だけのものなんだ！　それをあんな訳の分からない力に振り回されてるボーデヴィツヒなんかにも！」

一夏の言っている事は楯無にも理解出来た。第二回モンドグロツソ準決勝の映像を何度も見ており、実際に対峙もしている。

見間違える筈もない。あの剣技は紛れもなく織斑千冬のものであり、完璧に再現されていた。

それを分かっているからこそ、楯無は振り返りながら再び冷たく言い放った。

「そうだ。あそこに居るのはラウラだ。たとえ振るわれているのは千冬さんの剣を模ったものだとしても、あそこに居るのは俺のパートナーだよ」

「帯——」

揺れた黒髪から覗く瞳に、シャルロットは息を呑む。

淡々と告げる言葉の温度とは裏腹に、楯無の右目には熱い何かが宿っていた。

その熱い何かに火を点けられるように、シャルロットの心の中の何かが火照る。今までの不思議な男の子、といった認識から脱して、

シャルロットが初めて自覚する感情に色付いていく。

だが、楯無と一夏の間にはそんな乙女な感想は存在しない。お前は下がってろ。一夏へそう告げるが如く、楯無は『暮桜』の方へ向き直る。

「千冬姉の剣で誰かを傷付けるなんて許さねえ……！ 皆を守る為にも、ボーデヴィツヒをぶっ飛ばす！」

しかし姉の矜持を傷付けられた一夏にはその視線を察する余裕も、受け入れる余裕もなかった。

シャルロットの拘束を振り払い、一夏は楯無の横へ並び立つ。それを横目に、楯無は小さく呟いた。

「守る……か」

それは楯無の領分ではない。彼に出来る事は守る事ではなく救う事。

何故なら、既に楯無は二人の少女の笑顔を守る事が出来なかったから。

守れなかったものを再び守る事など出来はしない。既に守るものはなくなってしまうているから。

守りたければラウラがシステムに呑まれる前にかかすべきだった。だから彼は、ラウラを救う事しか出来ない。

救う事しか出来ないのだから、守る事なんて出来る筈がない。

「なっ——ぐっ!？」

考えるより先に、楯無は一夏の首を掴んで後方へ放り投げていた。

突然の事に対応出来なかった一夏はそのままアリーナの壁へ激突する。

「何すんだよ、楯無!？」

慌てて駆け寄ってきたシャルロットに介抱されながらも、一夏は楯無の名を呼んだ。

しかし呼び掛けに応える事も無く、楯無は『黒夜』と『雷切』を連結させ、一振りの大剣とした。

自らを無視するような振舞いに憤る一夏だが、その想いを口にする事は叶わない。

『——落ち着いて』

突然、〃白式〃の回線へ個人間秘匿通信が割り込んできた。

一夏は慌てた様子で周囲を探る。出所がどこかは分からない。一体誰からの通信かなんて見当が付かない。

——いや、嘘だ。誰からかははつきりしている。きつと通信を送ってきたISは、嘗て姉の〃暮桜〃と激闘を繰り広げたIS——
——〃黒鉄〃。

そしてその操縦者である世界第三位である女性、包村帯。

『こんにちは、織斑一夏君。私の事は憶えているかしら、なんて』

レゾナンスで出会った際に話したただけだが、聞き間違えではないようだった。

この会場のどこかに、彼女が居る。確かに世界第三位である彼女ならば、秘密裏に来賓として来ても不思議ではない。

そんな彼女が何故今このタイミングで自分に通信を送ってきたのか。そう疑問に思った一夏へ、彼女は囁くように告げる。

『無駄話をしている暇はないの。今は唯——あなたが追ってはいけない背中を、見ている』

それきり通信は途絶え、その言葉に一夏ははっと前を見る。

——それは、守ると誓った織斑一夏とは違う、雪月楯無の静かな救済への始まりだった。

「おい、〃VTシステム〃。聞こえてるか」

静かな言葉への〃暮桜〃の反応はない。

楯無の視線に気付いたのか〃雪片〃を構えて迎撃の構えを取る以外の行動はせず、両者は向かい合ったままだった。

「誰かの憧れを機械で再現するシステム、か。何て不細工な代物だ。今、お前が誰を模しているのか分かってるのか」

ゆつくりと大剣を構えるが、身体に力を入れている様子はない。

機体のスラスターにエネルギーを送っているわけでもなく、唯目を細めて眼前の黒い憧れと対峙し続けていた。

——その瞳が想うのは、黒い憧れに吞まれてしまった一人の少女の事。

「お前が再現する境地は、ラウラと『シユヴァルツエアールレーゲン』が何れ辿り着く場所だ。その始まりを知っている友人からすれば、今のお前の醜さは看過出来ない」

決して深い仲ではなかった。

一ヶ月にも満たないような付き合い。出会いも印象も険悪であり、お互いの実力をぶつけ合う事で見えたほんの少しの内面を繋がり、ペアを組んで今まで過ごしてきた。

その中で垣間見た、一人の恩人の背中と強さを追い続ける、小さな黒い兎の姿。

「疾く消え失せろ。——それは、お前が見せていい夢じゃないんだよ」

その姿は報われるべきだと。そう思ったから。

細められた瞳に力が籠められ、それは敵意へと変わっていった。

一夏とシャルロットが彼の名前を呼ぼうとした時、そこに異変は現れた。

『黒雷』のメインスラスターを担う、左右一對の翼。それが中央から、まるで蛹が羽化するように二つに割れた。

現れたのはエネルギーで構成された黒い翼。実体の翼からエネルギーで出来た翼が放出されていく様子は、見方によれば『白式』の『雪片式型』に酷似していた。

観客の避難は既に始まっており、誰もがアリーナの様子に関しては気も漫ろだった。

その中で、代表候補生の数人と生徒会長の一人だけが『黒雷』の變化に気付いた。

「あれは、あの時の……！」

既に一度至近距離で見ていたセシリアは、自らが一瞬の内に捉えた記憶を蘇らせる。

もしあれが本当にBブロック決勝の時と同じ装備だとすれば、次に訪れるのは——。

セシリアが想像するよりも早く、それは現実となった。

一足では届かない距離に居た楯無が、『暮桜』に肉薄していた。

瞬間移動じみた速度をそのまま威力にした大剣の刺突を、「暮桜」の刀が受け止めた。

返す刀はない。あまりの威力に「暮桜」は後退り、押し返す事も出来ないでいた。

「嘘……だろ」

一夏の眩きが零れる。

見えなかった。ISのハイパーセンサーでも、その動きを完全に捉えきれない。

見えたのは残像の様にぶれる「黒雷」と、それが描いたであろう軌道を示す黒い帯だけ。

IS乗りが接近手段の切り札にしている瞬時加速を使った様子はない。つまり、今のは唯の通常機動。

それを意味するかの様に、「黒雷」の翼が大きく震えた。

「紛い物が——そろそろ行けるな、相棒」

苛ついた様子で左目で何かを確認した楯無が「暮桜」を蹴って距離を取り、自らの愛機に語り掛ける。

呼び掛けに応えるが如く、「黒雷」の全身が金色の光を一瞬だけ放った。

次の瞬間には、楯無の姿はそこにはない。あるのは何かの攻撃を受けてよろめく「暮桜」の姿だけだった。

「何が……どうなって!？」

「帯だ……!」

シャルロットの眩きを、数秒遅れで一夏は理解した。

「暮桜」の真隣に黒い帯が引かれている。擦れ違いざまに楯無が「暮桜」を斬り付けていたのだろう。先程以上にぶれた楯無の像が、ISのハイパーセンサーに何とか映っていた。

そしてその帯は彼の軌道を描き続け、「暮桜」の周りを何度も何度も囲っていく。

やがてそれは黒い檻と化し、「暮桜」を斬り刻んでいく。

現存するどのISよりも優れた機動性が織り成す戦法は、世界最強を再現したシステムとも渡り合っていた。

「だけど、流石は織斑先生を模した『VTシステム』。一筋縄では行かないわね」

刀奈の言葉通り、このまま楯無が圧倒する展開にはならなかった。僅かに、『暮桜』は黒い檻に対応し始めている。当然だ。織斑千冬の反応速度ならば、楯無の速度にも対処は出来る。

だが、楯無もそれは想定済みだ。彼の目的は『暮桜』を倒して皆を守る事ではなく、ラウラーボーデヴィツヒを救う事。

だから、嘗ての織斑千冬の影などに勝つ必要なんてない。

唯相手を斬り捨てる為だけの剣など、楯無は磨いてなどこなかったのだから。

「いい加減に目を覚ませ、ラウラー」

黒い帯が『暮桜』と衝突した。

勢いのままに『暮桜』と共にアリーナの壁へ流星の様に激突し、漸く『暮桜』を押さえた状態の楯無の姿が確認出来た。

装備している大剣は既に量子変換されている。争う気なんてない。

『暮桜』と相對する楯無の瞳は、その奥に吞まれてしまった一人の少女の事を見ていた。

「つまらないシステムだな。太刀筋だけ真似て、上辺だけでも程がある。織斑千冬を再現するには容量不足だ。これが本当に世界最強だったなら、俺は今頃地面を這い蹲ってるぜ」

もし相手が本物の織斑千冬だったなら、獲物を持っていない時間など存在しない。たとえラピッドスイッチでも遅すぎる。

『暮桜』は楯無の拘束を振り解こうと力を籠めるが、黒い翼の出力任せに押さえつけられ藻掻く事しか出来ない。

今お前の出番はない。そこで黙っている。

「お前が憧れた最強はこんなものか。お前はそれで満足なのか！ ラウラーボーデヴィツヒが追い付きたいと思っっている背中は、こんな出来損ないじゃないって、俺は知っているぞ!!」

真っ直ぐとラウラの心に語り掛ける楯無。

ISに関しては誰よりも真摯で実直な彼は、短い付き合いの中で見た彼女の憧れを裏切れない。

「辿り着くのはお前とお前の I S だろ、こんなシステムに任せていいのか！ お前の憧れは、願いは、誰かに任せられる程簡単なものじゃなかっただろ!!」

発破を掛けるように叩き付けられた言葉が、《暮桜》の動きが止まる。

——いや。動きを止めたのは、泥に吞まれた一人の少女。

それを感じ取った楯無は、拘束している腕の力を抜いて一人分の距離を取った。

そしてあろう事か—— I S を解除した。

「帯!」

「楯無! 何やってんだ、逃げろ!」

そつと地面を足を付け、内側から《暮桜》を押さえ付けている少女と向き合う。

アリーナの二人からの言葉に答える事はない。

唯そつと手を差し伸べて、友人として明日の約束をするように。

「またやり直そうぜ——世界最強の背中に向けて飛ぶ手伝いくらいは、きつとしてやれるからさ」

その言葉が、完全に《暮桜》の動きを止めた。

《暮桜》を押さええたのはラウラ||ボーデヴィツヒだけではない。

これは、きつと——。

『ありがとうございます。妹よ』

静かに語り掛けた《黒雷》が答えだった。

《暮桜》の身体を横る泥が静かに融解していく。そして——
そつと、眠りから覚めて部屋のドアを開けるように。

崩れていく《暮桜》の内側から小さな腕が伸びてきた。その勢いのまま、眼帯が取れた銀髪の少女が力なく放り出されていく。

覚束ない力加減で楯無の手を掴んだラウラを、楯無はそのまま優しく抱き止める。

楯無の腕の中でゆっくりと目を開けたラウラは、その両の目で臍気に楯無を見た。

「……長い夢を、見ていた」

「悪い夢だ。そんなのさっさと忘れて、お前の夢を追い掛けよう」

優しい気な楯無の言葉は届き、ラウラは穏やかに笑う。

ISスーツ姿のラウラを背負いながら、楯無は管制室へ通信を入れる。

来賓と観客の避難誘導は既に終了している。これから教員達がアリーナへ突入してくるだろうが、安全確保兼時間稼ぎは既に果たされている。あとはどうにでもすればいい。

事態の収束を確認した一夏とシャルロットがこちらに駆け寄ってくる。一夏はどこか落ち着かなさそうに周囲を確認していたが、誰を探しているかなんて楯無の知った事ではなかった。

シャルロットもシャルロットでどこか落ち着かない様子で楯無を見ていた。その表情は仄かに朱に染まっており、熱でもあるのかと楯無は勘繰った。

漸く落ち着きを見せ始めたアリーナは、やがて事後処理へと移っていく。

「VTシステム」。……一応、記憶には留めておきますか」

IS学園のどこかで眩かれ、空気に溶けていった一言には、誰も気付かないまま。

35. 翼の秘密

「色々、大変だったねえ……」

定食のサラダを一口食べて、シャルがしみじみとそう言った。

「暮桜」擬きを沈黙させた俺達はそのまま教師達の保護を受け、学寮に帰宅——と言うわけには勿論行かず、今回の件についての事情聴取が待っていた。『VTシステム』のダメージがあるラウラは医務室にて、それ以外の俺と一夏、シャルはそれぞれの教員が個別の部屋に案内して事情聴取を行った。

因みに俺の相手は千冬さんだった。ここまで来ると逆にやり易くすら感じた。実際お互いに遠慮なしに進めたおかげで、三人の中じゃ一番早く終わった。

だがしかし、それで解放してくれないのが千冬さん。身内という事で未だ学園内に残っていた楯愛の元に連れていかれ、倉持技研に大人しく戻るように説得をする羽目に。

護衛として着いていたらしい刀奈も、生徒会長として来賓達への対応に追われていなくなってしまっていた。故にあの自由な妹をどうにか出来るのは俺だけというわけだった。

夏休みになったら一緒にデートをする事やら、ビデオ通話の連絡を頻繁に入れる事やら、色々な約束を交わしてどうにかご機嫌を取り、漸く帰る事を了承してくれた。俺よりよっぽど交渉事が上手な妹だった。

そうして解放された頃には既に夜になっており、食堂で夕食を取っている生徒は俺達の他に数人しかいなかった。

「まさかトーナメント中止だなんてな。折角決勝戦まで行ったのに、決着を付けられなかったのは残念だ」

「何言ってるんだ、優勝はお前達だろ」

ラーメンのスープを飲み干して残念そうに言う一夏へそう答えると、一夏は目を剥いた。

シャルも似たようなリアクションをしているのだが、こっちはこっちで何だか違う驚きを抱えているような。

「あの時教員は試合は中止だとは言ってなかった。つまり、まだ試合は続いてたって事だ。先にISを解除したのは俺とラウラ。結果だけ見れば試合放棄だろ」

別に俺は他の女生徒が優勝しなければ誰が優勝しようと構わなかった。

ラウラとペアを組んだ条件を満たす為にこのトーナメントを勝ち上がっていただけで、言ってしまうならこの決勝戦が始まった段階で俺の目的は果たされていたのだ。

勝ちが欲しかったのならくれてやる。二人はラウラに勝つ事だけを見据えて、その為の努力を積んできたのだから。

まあ、当然ながら一夏は納得いつていないようだった。俺の屁理屈を聞いた後、悩ましそうに頭を抱えている。

シャルはシャルで自らの頬に両手を当ててどこかにトリップしていた。こいつ、やっぱり戦闘の時に頭でも打ったんじゃないだろうか。

「ボーデヴィツヒはあの『零落白夜』で沈められた。その後の楯無の攻略もシャルルと詰めてたんだ。あとはそれがどこまで通用するかの世界だったのに……!」

「それを俺の目の前で言うのか……。俺、ラウラが墜ちたらさっさと降参してたぞ。決勝のカードが俺達四人になった時点で、俺の目的は達成してるし」

「何でだよ、楯無なら俺とシャルルでも一筋縄じゃないだろ。寧ろ勝ち筋の方が少ない……悔しいけど」

今度はぶすーとした表情で拗ね始めた一夏。相方は変わらずトリップしたままだ。

勝ちに貪欲なのはいい。何かに執着し、その為に努力して諦めないその姿勢は素晴らしいと思うし、それが一夏の真っ直ぐさを最も活かせる分野なのは分かっている。

唯、もう終わった事をここまで引き摺られると後々が怖かった。

「ま、対戦相手が認めてるんだから、今回はお前達の勝ちって事にしとけ」

結果に關しては納得してもらおうしかない。俺は豚の生姜焼きの最後の一切れを口に放り込む。

しっかりと咀嚼して味を楽しんでいると、食堂に山田先生がやってきた。一夏の事情聴取担当だった筈だ。

誰かを探しているように周囲を見渡していたが、どうやら俺達に用があつたらしい。俺達を見つけると、三人で囲んでいるテーブルの傍までやってきた。

「三人とも、ここに居ましたか。事情聴取お疲れさまでした」

なんて言っている先生が一番疲れているだろうに、俺達を氣遣つてくれる。

俺としては公式に事情聴取してくれるだけ気が楽だった。世界最強との非公式タイムマン事情聴取を入学一ヶ月にやらされるのは心臓に悪過ぎた。

山田先生の表情は楽し気だ。とっておきの事柄を秘密にしている子供の様にも見える。何か朗報でもあつたのだろうか。

「今日は何と！ 男子の大浴場解禁のお知らせです！」

つまり、こういう事らしい。

本当は大浴場の解禁は来月からだったらしいが、ボイラーの点検は既に終了しており、俺達の労う為に今日から特別に使わせてくれるそうだ。

確かに銭湯レベルの大きな浴場で風呂に入れるのは魅力的だ。現に一夏は大はしゃぎしている。

まあ、俺としても嬉しいのだが。

「一番風呂は譲る。実はこの後、千冬さんに呼び出されてるんだ」

「千冬姉に？ 取り調べは終わったんだろ？」

「取り調べはな。多分、お説教だと思うぜ。生徒の身で勝手な事したからな」

夕食が乗っていたプレートを持ち上げて、席から立ち上がる。

多分お説教ではないだろうけれど、こう言っておかないと一夏は多分嫉妬する。ハイパーシスコンだもん、こいつ。

盛大なブーメランが首を搔つ切った気がしなくもないが、痛くも痒

くもない。妹は可愛くて大切。これは世界共通のルールだった。

「そうか……シヤルルは？」

「僕も、今日は疲れちゃったから。軽くシャワーで済ますよ。大浴場は今度からのお楽しみだね」

「お、じゃあ約束だ！」

永遠に來ない今度の約束をして、二人も席から立ち上がった。



一夏とシヤルと別れ、俺は第三アリーナの管制室へ来ていた。セシリアとの決闘をした後に千冬さんに呼び出された場所だ。

当然そこには世界最強が待っている。こんな時間には当然他の人間は居ない。二人だけの甘くない時間の始まりだ。と言うか果し合いと言われたらその方が納得出来る。

「来たか」

「呼ばれましたから。事情聴取はもう終わりましたよね」

「表向きはな」

短く返された言葉に、やはりなと納得した。そして同時に嫌な顔を隠す事もしなかった。

「今から一時間前の話だ。ドイツの地図にも載っていない山奥に設立された研究所が、何者かに襲撃されたらしい」

「らしいって、随分と不確定な情報を気にするんですね」

そうは言ってみるが、公表されていないだけで事実なのだろう。

IS 学園の情報網に流れてきた裏の情報。ともすれば機密事項と言えるそれを俺に話したという事は、俺に関する何かなのは間違いない。

そして、実際にそれは合っていた。IS コアが形成しているネットワークから、『ドイツの研究所が襲撃を受けた』と、ドイツの他の研究所にあったISのコアから流された情報を相棒が受信していた。

恐らくドイツの闇の部分は今頃てんやわんやだろう。

「犯人捜しながら、多分想像通りだと思いますよ。研究所レベルの防

衛機能とプロテクト、物理と情報をこの短時間で単独突破出来るのかなか世界中探したって一人しかいないだろ」

俺の推測に、千冬さんは顔に手を当て「やはりあいつか……」と呟いていた。

「別に今回はいいんじゃないですか？ 世間的に見れば、いい事の部類に入りますよ」

だって、地図に載っていない研究所で研究しているものなんか絶対に真面じゃない。

——そう。たとえば“VTシステム”の様な、条約に違反するような代物とか。

言うなれば、兎の尾を踏んでしまったのだ。彼女の親友を模した紛い物を軽々しく創り出してしまった。結果としては恐らく世界の為であつても、彼女にとつてのドイツの罪状はそれだけだ。

起きてしまった事は仕方がない。弟よりかは切り替えが利くのか、千冬さんは溜息一つで遺恨を断ち切った。

……いや、違うか。千冬さんにとつての本題はこれじゃなかったのだろう。

咳払いで無理矢理に会話を切り替えると、普段の鋭い目つきで俺を射貫く。

「さて、世間話はこれで終わりだ。お前も疲れているだろう。質問は簡潔に済ませよう」

「今の世間話かよ……。まあ、それは助かりますね。些か、今日は色々あり過ぎた」

俺の首元のチョーカーを見ながら、千冬さんは短く問う。

「そのIS——第何世代だ？」

予想は出来ていた。たとえ観客の目は多数誤魔化せても、ずっとアリーナの様子を監視していた千冬さんの目は誤魔化せない。

流星は世界最強。あの翼を見ただけで、何か引つ掛かったようだ。隠す事は不可能だ。織斑千冬に詰め寄られて平然としているのは、

どこかの兎くらいなものだろう。

俺はお道化るように両手を広げ、世界最強の観察眼を賞賛する。

「初めて第四世代型ISの性能を目の当たりにした感想はどうだ？
世界最強」

「やはり……か。東製のISと聞いた時点で、真面目な性能をしているとは思っていなかったが」

「そう。東姉が開発した、攻撃、防御、機動、その全てに対応した特殊装備、『展開装甲』。それを搭載したISは、各国が目下開発中の第三世代の次のステージ、第四世代へ分類される。ま、『黒雷』の『展開装甲』は未完成な上に機動能力だけに機能を限定してるけどな。俺達には必要ないし」

『展開装甲』を形成しているエネルギーが不安定なせいで、移動するたびに『展開装甲』が剥がれ落ちる。それが俺が移動した痕跡である黒い帯の正体だ。

完成系の『展開装甲』は東姉が新たに開発している機体へ搭載される事だろう。

その機体が誰に渡される事になるかは……まあ、大方予想は付いてるけれど。

「その姿が映らない程の驚異的な機動性。ギアを上げた後は私でも目で追うのがやっとだった」

「あれをハイパーセンサー無しで追えてる時点で人間辞めてるぜ。……あれはギアじゃない。上位のIS乗りなら誰でもやってる、瞬時加速だよ」

俺の言葉に、千冬さんは怪訝な表情を浮かべる。

「瞬時加速だと？ あれの理屈を理解してないお前ではないだろう」

「そう。瞬時加速は放出したエネルギーをスラスターから取り込み、それを圧縮して放出する事で一気に加速する技術だ。一般的に連続使用は出来ないし、直線移動しか出来ない。無理に曲がろうとすれば、たとえISに乗っていても骨折等の負傷をする事だってある」

但し、と俺は一問置いて。

「放出用のスラスター、そして取り込む用のスラスター。その二つが独立して動き、無限に繰り返す事が出来たら？」

「無理だな。それが出来たとして、スラスターに送る分のエネルギーが持つ筈が——まさか」

「ご推察の通り。そう言わんばかりに口角を上げた。

「俺と『黒雷』の単一仕様能力。嘗て相對した千冬さんなら、知らない筈はないよな」

「……ああ。包帯の乙女が得意としていた高機動戦。それを支えたのが、スラスターのエネルギーを外部から取り込むと同時に、高機動に耐えうるバリアを形成する単一仕様能力。その名も——」

「『雷速黒閃』。『黒雷』の名前の由来だ。まあ、俺達は一度も第二形態移行していない。これを本来であれば第二形態から発現する単一仕様能力として捉えるかどうかは、好きにしてくれ」

「『展開装甲』をスラスターとし、本来のスラスターをエネルギー吸収口として使用する事で、放出と吸収を同時に行う機構を形成する。第一世代の『黒鉄』の時点では機体構成上不可能だった機構だったが、相棒が新たな姿に生まれ変わった事で可能となった。

俺の左目のナノマシンをハイパーセンサーとリンクさせて、IS同士の戦闘によってフィールドに放出されていたエネルギーを見る事が出来る。それが一定以上あるのなら、吸収したエネルギーを放出する事により、再び吸収する事が可能になる無限機構の完成だ。

「何？ 第二形態移行をしていない、だと？ 『黒鉄』時代もか」
「そうだ。相棒曰く、俺と相棒の間にはそんなもの必要ない、だそうだが。俺も同意見だけだな」

俺自身も相棒にこれ以上の力を求めてもいないし、相棒こそ俺にこれ以上を齎す理由もない。

俺にとって相棒は、彼女を救う翼なのだ。相棒もそうである事を望んでくれている。

話はこれで終わりだろう。そう視線で問うと、千冬さんは何も言わなかった。

そのまま踵を返しても止められない。ならばこのまま帰らせてもらおう。

——いや、そういえば一つだけこちらにも用件があった。

「……ラウラの容体、診てやったのか？」

振り返らずに問うと、「これから行く」と返事があつた。

……まあ、ラウラの捌け口になってくれと缶コーヒー一本で買収してきたぐらいだ。

嘗ての教え子が自らに憧れ、研鑽を重ね、その末に嘗ての自分を模つてしまった。その事実に対して、千冬さんも思う所は少なからずあるのだろう。

「説教は今度代わりに俺が受けてやる。……少しは褒めてやれよ。世界最強の背中を追つて軍の部隊長にまで昇りつめた、頑張り屋で寂しがりな兔をさ」

きつと、お前に褒められる事が、ラウラにとっての一番の救いだろうから。

返事も聞かず、俺はその場を後にする。

36. 密かな告白

「ふーっ……」

一日の疲れを吐き出すような、深い溜息が自然と漏れた。千冬さんとの内緒の事情聴取が終えた俺は、少し遅れたが大浴場にやってきていた。

身体を洗ってから湯船に浸かれば、丁度良い温度のお湯がじんわりと俺の身体を温める。

思えば、こうして湯船に浸かるのも何か月ぶりだろうか。IS学園に入学してからは部屋のシャワーだけだったし。

まあ、部屋のシャワーからいきなり大浴場というのも些か行き過ぎな気もするが。

来るのが遅れたからか、やはり一夏は既に上がってしまった。これだけ広いのなら、寧ろ複数人に入る方が丁度よかっただろう。

『マスター。溜息を吐いています。何か悩みでもあるのですか?』
「いや、これは何と言うか、世俗からの解放を表現してる感じだ。人間は大きな湯船に浸かるとこうなってしまうんだよ」

『成程。私も肉体があれば、実感出来るでしょうか』

「お前に肉体があつたら、俺は女の子と一緒に風呂に入る事になるんだが」

『何か問題が?』

「いや、お前がいいならいいんだけど」

相棒との会話の中で、思い出したのは夢の中の少女だった。

背中まである水色の髪と、髪と同じ色の瞳。黒いワンピースを纏い、水面に佇み、俺を空に誘った少女。

何となくあの少女が俺の夢の中だけの存在じゃない気がして、その理由を考えながらぼーっとしていると、大浴場の扉がノックされる。

「帯……居る?」

大きな声でこちらの所在を問うてくる声。湯気によってシルエツトさえ朧気だが、声の主はシャルだろう。

声の響きが何となく似ている。更に言えば、俺の事を『帯』と呼ぶ

のはシャルしか居ない。

「居るぞ。何か用か」

こちらも大きな声で所在を返すと、シャルは「そ、そっか！」と上擦った声で返してくる。

何か緊急の用でもあるのだろうか。千冬さんが伝え忘れた事があつて俺を捜しているとか。それならそれでゆっくりと湯に浸かった後に行つてやろう。

そう思つてシャルの反応を待つていたのだが、それきり言葉はない。何やら脱衣所の方でもぞもぞと何かをしているようだった。

「黒雷」は俺の首元に居るし、脱衣所には大したものも置いてない。「ゴレム」のコアも以前束姉がお遊びで作つた、番号を間違えると電流が流れる箱に仕舞つて俺の荷物の中に隠してある。

何よりこちらには相棒が監視の目を光らせてくれているのだ。妙な動きをすれば直ぐに知らせてくれる。

その相棒が何も言わないのであれば安心だろう、と気を抜いていると、突如大浴場のドアが開かれた。

「お、オジャマシマース……」

現れたのは当然と言うか何と言うか、緊張のし過ぎでイントネーションが意味不明な事になっているシャルだった。

そのあんまりな光景に、俺は一瞬頭が真っ白になつて——直ぐに心の声が出た。

「痴女か？」

シャルはまるでこれから自分も風呂に入るかのように、何も着ていなかった。

いや、何も着ていないという表現は語弊があつた。一応タオルで前は隠している。前は。

ターンでもされたら色々丸見えになつてしまうその格好が、シャルが近付いて来る度に湯気の霧の中から鮮明に浮かび上がってくる。

「は、入るねっ！ 大丈夫、身体は部屋のシャワーでちゃんと洗つたら！」

俺が言いたいのはそのいう事ではなかつた。そもそも、身体を洗つ

たのなら風呂に入り直す必要はないだろう。

遂に近敵してしまったシャルが、その白く長い足を伸ばして浴槽に侵入してきた。

そして態々俺の右隣に腰を下ろしてきた。距離は近い。身体はがちがちに強ばっているくせに、触れた肩は柔らかかった。

「……あ、ご、ごめん！ タオルはマナー違反だよね！」

「今のお前のマナー違反がそれだけに収まるか……？」

どう止めていいかも分からず、自分でも「違う、そうじゃない」と言いたくなるような事を言ってしまう。

上手い言葉が見つからないばかりに、シャルはタオルを取ってしまった。痴女の誕生である。

だが、シャルもシャルで恥ずかしくないわけではないわけではないようだ。逆上せてしまったように顔まで真っ赤になっている。

「あ、あんまり見ないで……帯のえっち」

自分からやってきたくせにあんまりな言い草だった。

「……左にしてくれ。そっちなら見えないから、幾分かはましだろ」

「う、うん……移動するね」

視界の隅からシャルの金髪が揺れ、左側のお湯が揺れる。

ちやぶ、と音を立てて作り出された波紋が肌にぶつかる。シャルはそれを押しつぶすように寄りかかってきた。

距離が近い。それも不自然に。

「……それで、何か用か」

「ちよつと……二人きりで話したい事があつたから」

この異常事態にも慣れてしまった頃、にわかに問えば神妙な声色で返ってくる。

二人きりなら寮の自室でも問題なかった筈だが、確かに簪や一夏の急な来客も否定出来ない。

何よりここには監視カメラも盗聴器も絶対に設置されていない。されてたら大問題である。

本当に二人きりで居たいなら、この強硬手段もまあ……いや理解は出来るが納得は出来ない。

「まあ、今日は色々あったからな。話したい事ぐらいいあるか」

「うん、あるんだ……帯にだけはちゃんと聞いてほしい事が」

シャルは塞がれた俺の視界を越え、身を乗り出して俺の視界に飛び込んできた。

気を張った瞳が俺を捉える。俺の事を知りたいと言ったこいつは、今日までの日常の中で本当にやりたい事を見つけてられたのだろうか。「さつき、私達は事情聴取を受けてたよね。その時私は、轡木さんから取り調べを受けたんだ」

「轡木って、学園長の旦那の用務員だろ？」

「うん。けれど、本来の姿はIS学園の実質的な運営者。その人からの取り調べは、今回の件とは違う内容だった」

「お前の正体について……か？」

俺の問いに、シャルは頷いた。

「正確には、私の危険性について。IS学園にとって私はデユノア社のスパイのまま。帯や一夏、男性操縦者のデータと、その乗機である“黒雷”や“白式”の機体データを盗みに来た存在なのは変わらない」

「本来であれば速攻で排除すべき存在だ。それが一ヶ月も見逃されていたのに、どうしてまたこのタイミングで？」

「……誰かが監視をして、私がスパイ行為を働いていないって事を示してたからでしょ？」

「……こっちにだって学園に恩を売る必要があった。タイミングが合っただけだ」

「それでも、私がこれまで学園生活を送っていたのは帯のおかげだよ」だから、ありがとう。そう言っただけの俺の肩に頭を預けたシャル。

畏まり過ぎたその言葉に、何だか違和感を覚える。

「これからお前はどうかなる」

「どうなるか、気になってくれるんだ」

揶揄うような、嬉しがるような声。

「見てろって言ったのはお前だろ」

「そうだね……安心して。私はどこにも行かないから。私はIS学園」

から取引を持ち掛けられたんだ。スパイ行為の即刻停止、そして私の在学中のIS学園の暗部への参加。それを条件に、今回のデュノア社の容疑を不問にし、私の身柄を保障する……って」

「それをお前は受け入れたのか」

シャルは頷いて、俺の事をちらりと見上げた。

その体温が上がったのは、きつとのぼせたからじゃない。

「それをさつき父に報告してた。父は『好きにしろ』ってさ。好きにするも何も、IS学園にスパイがばれている以上、選択肢なんてないんだけどね」

「お前がIS学園に入れたのは、デュノア社だけじゃなくフランス政府も一枚噛んでるんだろ。国際問題を回避出来るなら、お前一人の人身御供は安いもんか」

相変わらずの大人の汚さに嫌な気持ちにはなるが、それが完全にシャルの不利益になるかは別問題だ。

きつとこういう時のシャルは強かだ。何故かそんな予感があった。「勿論、このままIS学園の生徒ではいられるよ。それも条件の一つ。……本当は、デュノア社だって身柄の保障だってどうでもいいんだ」
つい今しがたまで人に寄りかかっていたのに、ばしゃり！ と勢いよくシャルは立ち上がる。

無論、お湯で隠れていた部分も色々と露になる。左側にいてくれて本当によかった。大体、こんな状況でこんな事話してるなんて場違いが過ぎる。

そんな俺の思考に一石を投じるような——聞いた事のない、シャルの声。

「私が……帯の——好きな人の傍に居たいだけなんだ」

声が震えていた。けれど決意の籠った声だった。

それを無碍にする事はきつと、告白された俺自身にも許されない事だ。

言ってしまったって緊張の糸が切れたのか、文字通り糸が切れた人形のようにシャルはふにやりとへたり込んだ。

「それがお前のやりたい事……か」

なるべく見ないように支えようと、気恥ずかしそうに頷かれる。

「ボーデヴィツヒさんが『VTシステム』に吞まれた時……帯、怒ってたよね」

「……ああ」

「決勝は一夏は一夏の、ボーデヴィツヒさんはボーデヴィツヒさんの譲れないものをぶつけ合う一戦だった。私達はその手伝いをしていただけだったけれど……この一ヶ月、私は一夏の、帯はボーデヴィツヒさんの譲れないものを傍で感じていたと思う」

確かに、それは事実だった。

見えてきたのは最近の事だ。強さへの渴望。飽くなき弱さの否定。それら全てが千冬さんへの憧れからで、自らを救ってくれた相手に認めてもらいたいという願いから。

それを俺は、ラウラの転入早々から刃を交えて感じ取っていた。

「だから、帯は怒ったんだよね。『VTシステム』がボーデヴィツヒさんの譲れないものを踏み躪ったから」

その通りだ。俺はあの瞬間、確かに怒っていたのだろう。

救われるべきだと思った。あの小さな背中では必死に世界最強を目指す黒い兎は、あんな所で立ち止まっているべきではないと。

「お母さんが死んでからずっと、状況に流されるだけの私だった。誰かの為に何かをしよう、なんて考える余裕もなかった」

それは仕方のない事だ。肉親を亡くして、他者の為に何かをしようと平然と思える方がどうかしている。

守るのは自分の心でいい。その手段に状況を流される事を選んだとしても、誰が責められるだろう。

だが、それでは何も残せない。それを知ったシャルは、自分で何かを残す道を掴み取った。

「けれど、他人の譲れないものの為に怒れる帯を見て、私の心が熱くなっちゃったんだ。ずっと火照って止まらない。この人と一緒に居たいって、思って……好きに、なっちゃった」

「……そうか」

選んだのはシャルで、掴んだのもシャルだ。その選択の価値は、尊

いものだ。

シャルの気持ちを受け取って、俺はゆっくりと頷いた。

そんな俺を見て、シャルは意外そうに目を丸くした。

「……笑わないんだね」

「人に気持ちを伝えるのは、勇気が要る事だろ。笑ったりなんかしない……お前がやりたい事を笑ったりするやつは、俺が潰す」

「物騒だよ……」

可笑しそうに笑って、シャルは身体の色を抜いた。

まるで懐いたペットの様だと、場違いな事を思う。楯愛も甘える時はこんな感じだった。

暫くそうしていたのだが、急に電源が入ったようにシャルははっとした。忙しい奴だ。

「あ、べ、別にね！ 付き合ってほしいとかじゃないんだ！ 帯は忙しいだろうし、それ以上に、その……簪や楯無さんが、居るよね？」

「いや……確かに、居るけど。色々積み重なり過ぎて、そう簡単な話でもないしな……」

と言うか、色々必死過ぎて考える余裕がなかった。

簪はとても魅力的な女の子だし、向けられている感情が特別である事も分かっている。俺だって特別な感情を向けているつもりだ。

だが、それは刀奈にだって同じ事。その感情の意味だって、俺自身はつきりしていない。

変わっていないのだ、子供の頃から。俺は未だに、たった一種類の『好き』しか持ってない。それを育む期間を、俺はISに費やしてきたから。

「だからね、帯が嫌じゃなかったら……その、傍に居させて？」

その願いは誰に否定されようが、シャル自身が叶えてしまうのだから。

態々訊くまでもないのに、律義と言うかあざといと言うか。

「……お前が居たいなら、そうすればいい。唯、どうなっても知らないぞ」

「うん……帯ならそう言ってくれと思うってた。やりたい事を見つけ

た私を、帯は否定しないって」

する筈がない。俺はきつと今初めて、シャルルⅡデユノアではなく、シャルロットⅡデユノアと出会ったのだ。

俺の傍に居たいと言った少女を、俺は無碍にする事は出来ない。

「私の協力が必要だったら、何でも言つて。傍に居るから」

はにかみながら告げるシャルロットⅡデユノアへ、雪月楯無は領きを返せたように思う。



翌日。

IS委員会から派遣されていた『らしい』男性操縦者のボディガード、シャルルⅡデユノアは籍を消し。

フランスの代表候補生——シャルロットⅡデユノアが、IS学園へ入学した。

37. 臨海学校に向けて

“シユバルツエアールレーゲン”の暴走事件から一週間。
「隙を晒したなっ！」

重なり合う剣戟の、ほんの一瞬の間の取り直しを突いた攻撃だった。

ラウラールボーデヴィツヒの咆哮と重なるように、“シユヴァルツエアールレーゲン”の大経口レールカノンが唸りを上げる。

砲弾は寸分の狙いのブレもなく、ターゲットである織斑一夏に直撃した。

「うおおおおおっ!」

直撃を許した一夏は紙屑の様に十メートル以上吹き飛ばされ、体勢を整える事も叶わず着地後も転がっていく。

派手に転がっていった後、二人の手合わせを見守っていた鈴音によつて、サツカーボールを止めるように足裏で勢いを殺される。

「わ、悪い、鈴……」

横たわったまま見上げ謝る幼馴染へ、中国の才女は呆れを隠さずに返す。

「あんな至近距離から長距離砲食らうなんて、決勝戦の時のキレはどこ行ったのよ」

「いや、今日のラウラは何か動きが違うと言うか、まるで別人……」

「——当然だ」

鈴音に手を貸してもらいながら立ち上がる一夏へ、ラウラは愛機の武装のパラメーターを一つ一つ念入りにチェックしながら告げた。

学年別トーナメントから四日後に健康状態チェックをパスしたラウラが学園に復帰した。

ラウラの休学中に、千冬によつてクラスメイトには十分な説明がされ、彼女はドイツの一部のIS研究者の被害者という認識になっていた。

その甲斐あつてか、周りから距離を置いていたラウラだったが、復学後にはクラスメイトに囲まれ多大な心配を受け、今ではすっかりク

ラスに馴染んでいた。本人は未だに困惑する時もあるが。

そんなこんなで、一夏や鈴音からも専用気持ちとして放課後にアリーナでの戦闘訓練に誘われる程の仲となっていた。

特に一夏からは共に同じ背中を追う者として、鎬を削り合う関係となっていた。両者の間の確執が完全に消えたとはまだ言い難いが、一夏もラウラの技量は認める所があり、ラウラも一夏の心持ちを見習う所があった。

本来であればセシリアと、訓練機の都合が合えば筈もこのメンバーに加わっていたのだが、彼女達は生憎と予定が入っていたので今日は休みである。

「決勝戦の時の私とは心構えが違う。私が追う教官の強さは、自らの実力を過信しているようでは到底辿り着けるものではない。たとえ相手が誰であろうと、慢心の欠片もなく全力で相手をする……一夏、お前にそう教えられた」

「いや、俺そんな事言った覚えないんだけど……」

そして言った相手に対してのこのフルボッコであった。

あの一試合だけの付け焼き刃とは言え、一度は圧倒したのだ。自分とラウラには埋め難い実力の差があるのを思い知らされるのは心に来るものがある。

「それに……自分を捨てているようでは、奴が言った教官の背中にも届かない」

今までとは違う複雑な気持ちを籠めて向けられたラウラの視線の先へ、鈴音と一夏も意識を向けた。

視線の先に居るのは、女子生徒として改めて転入してきたシャルロットⅡデユノアと刃を交える、愛機『黒雷』を纏った雪月楯無。

「っ——流石、帯のクロスレンジは鉄壁だね！」

「クロスレンジしかないんだから、当たり前だろ」
シャルロットの近接武装、『ブレットⅡスライサー』による斬撃を、二刀の防御でいなし続ける楯無。

反撃をしようという意思は見られない。どうやらそういった訓練のようだ。

一閃を受け流し、シャルロットの体勢を崩して仕切り直した楯無は、右手に持った「黒夜」を肩に担ぎながら苦笑いを浮かべた。

「だけど、シャルも射撃型ですって顔しながら結構苛烈な近距離択を取るよな。これで崩された先にパイルバンカーが待ってると思うと恐ろしいぜ」

「強い方が帯の好みでしょ!?! それに、その方が都合がいいからね。帯と一緒に居る事にとっても、僕のこれからにとっても!」

シャルロットのやる気に満ちた返事に、「はいはい、そーですね」と苦笑いを深める。

IS学園暗部への参加。学園での不測の事態に対応するには、当然戦闘能力も求められる。

中距離戦を主に行っているシャルロットであっても、クロスレンジを磨く事は悪い選択肢ではなかった。

「あの二人、付き合ってるのかしらね」

鈴音は今度は自分の番かと「双天牙月」を振り回しながら言った。

「シャルロットが転入し直してきてから、ずっとあんな感じだもんな」「訓練に精が出ていいではないか」

「いや、それだけじゃなくて。学校生活の殆ど一緒に居るじゃんか」

「……言われてみれば、シャルロットは楯無にべったりだな」

ラウラも鈴音の挑発を受けるようにプラズマ手刀を展開しつつ、これまでの二人を想起する。

既に別室になっているが、それでもおはようからおやすみまで、と言えるぐらい一緒であった。ラウラと言う通り、シャルロットが楯無の後ろを着いて回っているのが実状だが。

「だが、楯無は簪とも親しいと記憶しているが」

「あと、生徒会長ともよく訓練してるよな。確か楯無と名前一緒なんだよ」

「楯無本人はどう見てもそっち寄りなんだけどね。こりゃ休日明けの臨海学校、一混乱あるかもね」

そのまま準備完了とばかりに打ち合い始めてしまった二人を他所に、一夏は「あつ」と間抜けな声をあげた。

今の鈴音の言葉で思い出した。休日明けの臨海学校。

慌てて立ち上がった一夏は、「じゃあ、もう一回やるか」と構えを取り始めた楯無へ大声で呼び掛ける。

「楯無、付き合ってくれ！」

——この瞬間。

アリーナの空気が完全に死に、荒れに荒れた後に一夏は『妖怪主語足らず』の仇名を頂戴した。



翌日、俺と一夏はモノレールのレゾナンス駅に降り立っていた。

「いやあ、鈴に言われなかったら臨海学校の買い出しの存在を忘れるところだったぜ」

昨日公衆の面前で俺に告白してきた一夏が、うっかりうっかりと頭を搔きながら能天気には笑っていた。

ショップピングモールである『レゾナンス』にやってきたのは、一夏の言っている通りの用事だ。

明後日に迫った臨海学校。それに向けての買い出し。海で遊ぶ時間もあろうだし、水着などにも必要になるだろう。

「珍しいな、一夏はそういう所しつかりしていると思ってた」

「ちよっと考える事があってさ。悪いな、付き合ってもらって。頼れるの楯無しか居なくて。用事とかなかったか？」

それは一夏にとっては、何て事のない気遣いだったのだろう。

だがしかし、それは俺にとって今一番思い出さくない地雷だった。

「無かったよ。……ああ、無かったから、本当は簪の買い物に付き合おうと思ってたんだ。そしたら、『シャルロットと行くから楯無は絶対着いてきちや駄目』って、さ……はは、ははは」

何の感情もない。その言葉に込められていたのは唯只管の拒絶だった。

俺の乾いた笑いが空気を震わせ、一夏へ俺の絶望を伝える。

多分一度も見せた事のない幼馴染の感情に、流石の一夏もドン引いていた。

「わ、悪い……」

「別にもういい……まあ、野郎の買い物に女子を誘っても仕方ないしな。こんな俺でよければ好きにしてくれ……」

「そう言ってもらえると助かる。ちなみに楯無は何か買うのか？」

一夏の問いに、俺は首を横に振った。「準備がいいなー」なんて感心されたが、実際の所はそうではない。

三日前、朝起きると俺の部屋の前にポストンバッグが置いてあった。置かれていたバッグは俺の家にあったもので、一応相棒にスキヤンさせても危険物は入っていなかった。

なので部屋の中で確認した所、中身は夏用の私服と水着だった。それは確かに俺が去年まで使っていたものだったし、新たに買い足されていたものもあった。

誰が送ってきたかは知らないが、候補は一人しか居ない……のだが。あの人が俺の事を気に掛ける理由はもうない。何かしらの目的があると見るのが妥当かもしれないが、その内分かるだろう。

そんなわけで、俺の準備は万端だ。なのでレゾナンスに到着した今からは、一夏の買い物付き添いぐらいしかやる事が無い。

「それにしても楯無、やっぱりお前の私服って男っぽくないよな」

「ほっとけ。一夏みたいにながちりしてないんだよ。本当の女よりかは男っぽいけどな」

包村帯として活動していたせいも、何となく束姉に買ってもらった私服や自分で選んだ服もユニセックスの物が多かった。

シャツとパンツもボデイラインが出ないゆったりめのサイズ。喉仏はそもそも相棒の待機形態で隠れている。更に上からロングカーデイガンを羽織っているの、包村帯の変装無しでも初対面ならばつと見では男だと分らない、かもしれない。

ちなみに一夏も私服である。シャツにズボンとシンプルなものだが、一夏自身の素材が凄いので絵になっていた。ちなみに最初は制服で来ようとしてやがったのは内緒だ。自分の存在の重要性を少しは

考えてほしい。

そしてやってきたのは男物の服屋。今は店内の敷地三分の一程を着着コーナーに割く程の気合の入れっぷりで、俺達を歓迎していた。

「よし、それじゃあ水着を着ていくから、感想頼むぜ！」

「そんないい顔で言われても困る。男色カッパルだと思われるから勘弁してくれ」

俺のクレームも全く無視して、一夏は幾つかの水着を持って更衣室に突撃していった。店員が取り付く島もない電光石火である。

店員が俺の方をちらちらと見ていたが、女性的な笑みを浮かべて「こんにちは」と相棒に答えてもらえば、彼女だと思われたのかすくすごと引き下がられた。複雑である。

それと同時に、着替え終わった一夏の水着ファッションショーが開催された。

詳しい事は割愛するが、こればかりは俺じゃなくて篠ノ之辺りを連れてきた方がよかつたんじゃないかと思う。

こうしてばつちり今年の水着をゲットした一夏。IS学園の女生徒の需要が満たされた瞬間である。

「次はどうするんだ。服か？」

「いいや。実はこの間日用品とか買い溜めしたんだ。服も家から持ってきたのがあるから。臨海学校の準備はこれで大丈夫だと思う」

「……つまり俺は、あの誰も待っていない寮の部屋にもう帰らないといけないのか？」

「トラウマになり過ぎだろ。……実は、臨海学校の買い出しつてのは建前でさ。本当は別に付き合っしてほしい事があるんだ」

一夏が照れくさそうに頬を掻きながらそんな事を言う。

こいつがこんな風に照れを見せるなんて珍しい。一体どんな用事だ。

「七月七日。七夕なんだけど……実は、箒の誕生日なんだ」

「篠ノ之の……ああ、成程」

束姉の所に居た時の俺の記憶が、一つの疑問を解消した。

嘗て、束姉のラボにあったカレンダーに、大きく赤丸が描かれてい

た。

確か日付は七月七日。束姉に何か用事でもあるのかと問えば、『世界で一番大切な日』と返ってきた事を憶えている。

その時の束姉の表情はとても優しくて——何となく、その表情を向けてられる相手が羨ましいなんて、そんな事を思ってしまった。

「それで、俺に何をしろと」

「プレゼントのアドバイスをしてほしいんだ。俺、こういうセンスまるでなくてさ」

「どうやら、先程一夏が言っていたちよつと考える事とはこの事らしい。」

何と言うか、こうして一夏が女性の事で悩むとは意外だった。

「……まあ、分かった。アドバイスくらいならいいぞ」

どうせ篠ノ之なら一夏から貰えば何でも喜ぶのは分かっている。正直アドバイスも何もない。

それに一夏自身で、ある程度の目星は付けているらしい。それなら尚更楽な仕事だ。

一夏の案内のままに、俺達は店を移動する。当然レゾナンスの階層的には女性物を多く取り扱うフロアだ。以前刀奈と来た辺りか。

「確か……ここだ」

到着した店は、女性用のファッション小物を取り扱う店だった。

遠目からでもシュシュやヘアゴム、ネックレスやイヤリングなどのアクセサリー等の品揃えが確認出来る。

いざ入室しようとする一夏だが、中々歩が進まない。後ろにくっついてる俺もつかえていた。

「どうした、早く行こうぜ」

「いや、それは分かっているんだけど……入り辛い」

まあ、気持ちは分からなくはない。明らかにここは女性用の店。野郎二人が入店しようとするのは些か以上に奇怪な光景だろう。

事実、店員が何だ何だとこちらを見ている。現状俺達は唯の不審者だった。

「……仕方ねえな」

こうして誰かの為にうんうん悩んだりする幼馴染を見るのも貴重だ。

買い物に付き合うって決めた以上、協力してやるか。

くしくしと手櫛で髪を整えて、出来るだけ真っ直ぐ降ろす。IS学園に入ってから髪がしつかりとドライヤーで乾かして櫛で梳かしてくれるおかげで、随分と髪質が良くなってしまった。

相棒がテキストモニターを投影したのを確認して、店員へ近付いていく。

『すみません、少しあの人とお店の中を見てもいいですか?』

投影モニターに映される文字を読んだ店員は、俺が言葉を発さない事を不思議に思ったのかこちらを見た。

それに対して俺は困ったような笑みを浮かべる。すると、何となく事情を察してくれたのか「ごゆっくりどうぞ」と言っただけで店の奥へ引込んでいった。

振り向いて一夏へ、俺は『大丈夫だって』と文字に起こしながら手招きをする。

恐る恐る俺の元へやってきた一夏は、『一体どういう事か』と言いたげだった。

「いいって言うんだから早くしよせ」

「そりゃ、そうだけど……」

一夏にしか聞こえない小声で急かすと、状況を理解してないままプレゼント候補を物色していく。

俺としても状況を理解しない方が助かる。幼馴染にこういう事が出来ると知られるのは気まずい。

「これはどうだ?」

一夏が見せてきたプレゼント第一候補はピンク色の大きな鳥の羽型のネックレスだった。

『篠ノ之ってこういうのが好きなのか?』

「意外かと思うだろうけど、結構女の子っぽいのが好きなんだ。本人は隠してるみたいだから、話には出さないけどさ」

意外も何も、俺は篠ノ之の事を殆ど知らない。

日常的な会話する事は殆どないクラスメイトだ。寧ろタッグマッチのパートナーを務めた縁もあって、簪の方がよっぽど話しているだろう。

『まあ、色やデザインはもう少し地味な物の方が無難だと思うぞ。アクセサリーってのは悪くないんじゃないか』

「そ、そうか。シルバー系とかいいかな？」

『最終的にはお前のセンスに任せるけど、困ったらそれにしようぜ』
後は指輪とか買わなければ多分大丈夫だろう。

それからプレゼント選びは続く。人形やらブレスレットやらの嗜好品を多く選ぶのは、家庭的な一夏自身の価値観ではなく、あくまで篠ノ之へのプレゼントとしての観点を持っているからだろう。

それだけ一夏は本気だった。本気と書いてガチだった。

そんな本気なプレゼント選びも、そろそろ佳境に入っていく。

「後は……これかな」

そう言つて取つたのは、白に赤のラインが入ったりボンだった。

『いいんじゃないか』

素直にそう思った。篠ノ之は普段からリボンで髪を結っている。

身に着ける物は相手からの好感度ありきな所もあるが、篠ノ之ならそれも問題ないだろう。

俺の表情からこれが当たりだと思ったのか、将又最初からこれに決めていたのか。

「これにする」

神妙な面持ちで言つてレジに行く一夏の後を追ひ、会計の様子を伺つた。

「プレゼント用でお願いします」

「畏まりました」

支払いを済ませると、店員は慣れた手つきで梱包をしてくれた。

包装しながらちらりと、俺と一夏を微笑ましそうに見ている。

「今日のデートでの、隣の彼女さんへのプレゼントですか？」

「え？」

一夏の素の驚きの声の聞きながら、俺は声に出さず苦笑いを浮かべる。

まあ、そう見えるよな。出来れば勘違いしたままで居てほしかったが、言われてしまえば仕方ない。

『いいえ。違いますよ』

「そうなんですか。失礼致しました」

店員が慌てて謝ってくるが、『慣れてますから』と宥める。

呆けた一夏が梱包されたプレゼントを受け取ったのを確認して、一夏を連れて退店した。

レゾナンスでの目的は果たした。さっさとIS学園に帰った方がいいだろう。

モノレールの駅まで向かい始めたのだが、俺の隣を歩く一夏の穴が開く程の視線が痛い。

「……何だよ」

流石に我慢が出来なくなつたので、一夏をじろりと睨む。

「あ、わ、悪い。……その、ここで今の楯無を見ると、ある人を思い出してさ」

「ある人？」

分かっている答えを惚けながら問う俺は随分と滑稽だ。周りに知人が居なくて助かった。

一夏は言っているのか悪いのか悩んでいたが、話す気になつたようだ。

「他言無用だぞ」と念を押したうえで、俺にしか聞こえない程小さな声で言ってくる。

「俺、この間の休みにここで包村帯さんにあつたんだ」

「へえ。それはまた有名人だな」

一夏の話を疑う事はしなかった。何しろ俺自身の話だ。

別にあの時の事を口止めた憶えもない。言い触らされる事は構わなかったが、一夏自身がそういうリスクを考えてくれて助かった。

「それに、あの人はこの間のタッグマッチトーナメントの決勝にも来

てみたいなんだ」

「……ありえない話じゃないな」

俺の肯定に一夏も頷く。

包村帯は世間的には篠ノ之束の庇護を受けた人間となっている。事実世界大会にもその推薦枠という反則技で出場した。

それだけコネクションがあれば、秘密裏にどこかの国家に所属し、IS学園の来賓として来ていてもおかしくないと考えたのだろう。

「ラウラが暴走したあの時、熱くなった俺を楯無が吹き飛ばしただろ。その時、俺に通信を入れて宥めてくれたんだ」

「そうだったのか。それから？」

「いや、それきり。包村さんのIS——『黒鉄』からの通信だと思っただけけど、『白式』のログにも相手のコアの履歴は残ってなかった。まあ、当たり前だよな。束さんと同じぐらい、世界各国が探してのような人だし」

「そうだな」

一夏の納得に適当に相槌を打つと、モノレールの駅のホームに辿り着いた。もう直IS学園行きのモノレールがやってくる。

手で髪を乱しながら、俺はぼんやりと相棒が一夏に伝えた事を考えていた。

守るという行為から最も遠い存在。織斑一夏が追ってはいけない背中。

俺と『黒雷』の翼は、一人の少女が本当の名前で笑えるように救う為の翼。

守らなければならぬものなんて、俺には一つも残ってない。だからその為の力だつて必要ない。

——だから、もし。俺が守る為の力を欲したとして。何が理由になるかなんて分からない筈なのに。

俺の隣で笑ってくれる一人の少女の笑顔が、頭から離れなかった。

38. 臨海学校後の約束

一夏との買い物を終え、俺は寮に帰宅した。

部屋で一人、着替えもせず以前使っていた手前側のベッドに身体を放り出す。

このベッドを譲ったシャルはもう別の部屋に移っている。確かルームメイトはラウラだった筈だ。

あの二人は何だかんだで仲が良くなったみたいだ。鈴音とラウラも仲がいいみたいだが、それと同じぐらいには友好的に見える。

力を抜いてだらけきった頭で、今日のこれからを考える。

もう午後もそれなりに過ぎ、夕方に差し掛かっているのだが、まだ夕食には時間がある。

このままだらだと過ごすのいいだろうか。それとも、送られてきた荷物の再確認でもした方がいいだろうか。もうこの休日が終われば臨海学校だ。明日も一応あるとは言え、準備を進めるに越した事はない。

そうして身体を動かさず頭だけでうんうんと唸っていると、部屋の扉がちやりと開く。

「ただいま……」

聞こえてきたのは簪の声だった。

部屋に入ってくるにつれ見える姿は制服姿で、両手は紙袋で塞がっていた。

「お帰り」

「うん……何してるの?」

ベッド上で溶けている俺の姿を見て、簪は可愛らしく首を傾げた。

「疲れただけ」と答えると、「そっか」と微笑んで荷物を自分の領域に片付けていく。

「戻ってくるの……早いね。私達より後に出たのに」

「男同士の買い物なんて目的の物買ったら即終わりだよ。俺は買う物なかったし尚更かな」

更に言えば、一夏は買ったプレゼントを篠ノ之にはばれないように自

分の臨海学校の荷物に仕舞う必要がある。

一夏の話では篠ノ之は剣道部の方へ行つたようで、俺達が帰宅した時間は剣道部の終了時間の三十分程前。プレゼントを隠すにはある程度の余裕を持った時間だった。

「簪は臨海学校の準備終わったのか？」

「買い出しが必要な物は、一応。レゾナンスは色々あって便利だね」

その結果がさっきの紙袋というわけだ。男とは違い、女子は色々と要り様なのだろう。

ぼーっと横たわつたまま、荷物を片付ける簪を眺める。

——シャルとの同室が終わつた後、簪は再びのルームメイトになつた。

寮の部屋の割り当ての問題は既に問題はなくなっているだろう。俺は一人部屋でいい筈なのだが、態々簪がルームメイトとして戻つてきた理由は、やはり監視と護衛の為だろう。

俺は世界で二人の男性操縦者だ。そして企業所属であっても、世界で五百機もないISを専用機として所持している。それも不完全とは言え、第四世代相当である『展開装甲』を搭載している最新鋭機。

世間が俺を狙う理由は幾らでもある。そのうえ、俺自身色々と怪しいところが満載だ。護衛と監視が必要と判断されるのは妥当かもしれない。

IS学園の暗部に所属するシャルがその役目から外れたのは、簪が相手なら俺が警戒しないとでも学園側が判断したからだろうか。

……まあ、実際その通りなんだけど。千冬さんからは『まあ、元教え子が世話になった礼だ』と言われたのでそれだけではなさそうだし。

「……どうしたの？」

眺め過ぎたのか、不思議そうにこちらを見る簪と目が合った。

「いや、女子は制服のままレゾナンスに行けていいなって思ってたさ」
咄嗟に適当な事で誤魔化す。

簪に考えていた事をそのまま告げる必要はない。態々不安になる事を伝えて簪の表情を曇らせたくなつてなかつた。

俺の言葉に疑問を持たないでくれたのか、簪は「そっか」と納得しながら俺のベッドの脇に座る。

「IS学園の生徒がよく買い物に来るから、制服で行けば割引してくれるお店が色々あるの……。楯無達は、色々と気を遣わなきゃいけないから大変だね……」

「ああ。色々と気を遣って疲れたよ」

尤も、疲れた理由は女のふりをしたり、一夏が包村帯の事を話したりした事への精神的疲労なのだが。

体力的には唯歩き回っただけなので全く問題はない。普段ISに乗って戦闘軌道を描く方がよっぽど疲れる。

こうしてだらけているのは……何だろう、相棒が一夏へ言った言葉がまるで魚の骨みたいに喉に引っ掛かって、俺の意識の片隅にあり続けるからだ。

頭の片隅から離れてくれないのがどこか気持ち悪くて、せめて身体を楽にしたい。そんな理由からだ、多分。

だから心配されるような事じゃないのに、簪はむっ、と深く考える。暫くそれを続け、何か閃いたようにはっとして、そのまま顔を赤くする。

一生見ていたい百面相だが、やがて意を決したようにこちらを見て、ベッドに腰掛ける自らの膝——と言うよりは太腿を軽く叩く。

「あ、あのっ！」

「お、おう」

「ど、どうぞ……」

一体何をどうぞなのか。そう問う事は簡単だが、問えば簪の口から更に何かを言わせる事になる。

もう既に簪の顔は羞恥で真っ赤だ。これ以上の刺激を与えるのは些か酷と言うものだろう。

俺にだって簪が言いたいのか察しは付いている。外した時の被害がとんでもないが、多分他の可能性はないだろう。

こうなればやけだ。何でこんな一瞬で二人揃ってやけになってんだよ。

「じゃあ……お邪魔します」

「ご、ごゆつくり」

やけくそのまま、俺は上体を起こしてゆつくりと簪の傍で再び横たわる。

スピードは本当にスローモーションの如くゆつくりだ。もし間違っていた場合、簪が回避出来るようにである。

だが、簪はそこから微動だにせずに、寧ろそつと両手を俺の顔に添えて受け入れ態勢まで取っていた。

……いいのか？ いいんじゃないか。いや駄目だろ。でも顔掴まれててもう動けないぞ。じゃあ仕方ないな。両者合意だしセーフ。

一秒にも満たない高速思考で自らを納得させ、簪の膝枕へ導かれる。

「……あ、しんだわこれ」

多分IS学園に入ってから一番気の抜けた声を出した気がする。

以前シャルの事を生徒会室で刀奈に報告した際に、刀奈に密着された事があるが、これはそれに匹敵する脳味噌のとろけ具合だ。

しかも刀奈の爽やかな匂いとは違い、簪の仄かに甘い匂いはひたすらに俺の気を緩くさせる。

そして直接肌で感じる簪のストッキングの感触と、徐々に熱くなつていく簪の体温。

「え、と。大丈夫……？」

「あ、あ……」

情報量が凄過ぎて言語機能に回す脳のリソースがない。

ISバトルをしている時の方がよっぽど情報処理能力に余裕があった。

「……どうして？」

それでもこれだけは訊いておかなければならないと思い、何とか言葉にした。

お互い変な所で暴走するのが常だが、いつもの簪はここまで積極的ではなかった筈だ。

簪は普段髪を乾かしてくれる時の様に、俺の髪を撫でながら言っ

くる。

「楯無……疲れてるみたいだったから。こうしたら、少しは疲れが取れるかな……って」

どうやらこの膝枕は簪の気遣いだったらしい。

何だか心配されているようで申し訳ない。だが、簪の優しさは何時だって嬉しかった。

そしてそれを受け入れてしまえば、結果は分かりきっていた。

「まだ、っご飯まで時間あるから……私の膝でよければ、眠って？」

その言葉の返事をする余裕もない。急速に瞼が落ちて、そのまま意識まで持っていかれる。

ISの搭乗者保護機能による意識の強制遮断も、こんな感じなのだろうか。

そんな事を考えながら、俺は夕食までの間、簪の優しさに甘える事に決めた。

「今日は、一緒に買い物出来なくて、ごめん……。臨海学校から帰ったら……一緒に観たい映画があるから」

「……ああ、観に行こう」

「うん……約束」

嬉しそうに微笑む簪の声に誘われて、俺は安堵の海に落ちていった。



翌日の十一時。第二アリーナにて。

「はああああ！」

「しっ——！」

刀奈の“蒼流旋”による一撃を、楯無は“黑夜”と“雷切”を連結させた大剣で防ぐ。

叩きつけられた衝撃を相殺はしない。流れに逆らう事無く受け流して、刀奈の体勢を崩す事を試みる。

「おっと、そうはさせないわ！」

だが、刀奈の反応は速かった。即座に槍を救い上げるように跳ね上げ、そのまま量子変換し質量を消す。

代わりに蛇腹剣——「ラスティールネイル」を展開。連結の固定を鞘替わりとした右手の「黒夜」による楯無の居合切りを、お返しとばかりに受け流す。

返す刃で反撃を加えようとするが、楯無は受け流された勢いのまま跳躍し、蛇腹剣のレンジから離脱。

お互いの獲物のレンジ外に出た事で、攻防は仕切り直しとなった。空中で攻勢を取る事無く振り向いた楯無へ、刀奈は構えを解いて姿勢を崩す。

「今日はアリーナの時間も多くとれたし、少し休憩しましょうか」
「そうだね」

二人はISを解除して合流し、アリーナの壁に寄り掛かりながら座り込む。

ふう、と一息吐いた楯無に、刀奈は感心したように言った。

「調子いいみたいね。やっぱり専用機だと違う？」

「それもあるけど。調子がいいのはよく眠れたからだと思うよ」

「あら。簪ちゃんが同室に戻ったから、毎日興奮して眠れぬ日々を過ごしていると思ってたけど」

「寧ろそんな奴と妹が同室でいいの……？」

「膝枕してくれるぐらいなら健全でいいんじゃない？」

刀奈がさらっと告げた言葉に、楯無は乾いた笑いを漏らす。

それはつい昨日、しかも密室状態での出来事だ。楯無と簪しか知らない筈の事を、何故刀奈が知っているのか。

「お姉さん、簪ちゃんの事なら顔を見ただけで大体分かるから」

「え、何それこわ……」

「楯無君が言えた事じゃないわよ？」

子供の頃の話ではあるが、刀奈ですら気付かなかった簪の体調不良を見抜いた男が言えた事ではなかった。

お互いがお互いを言えた事ではない事実気付いた二人は、別の話をする事にした。

「明日の今頃は海辺の旅館に居るのか……」

「そうね。私も去年行つたけれど、いい所よ。海も綺麗で、ご飯も美味しかったし。でも、今年は大変よねえ」

楯無を見ながら悪戯っぽく笑う刀奈に、楯無は「だろうね」と言わんとする事を察する。

「俺と一夏っていう男子が居るからね。学園側も向こうも、対応が難しいんじゃない?」

「特に一夏の方は大変だろうな」と楯無は苦笑いする。

シャルルがシャルロットとして学園に編入され直した事で、この一ヶ月の間シャルル・デュノアに流れていた層が再び一夏派へ流れていた。

寧ろ学年別トーナメント決勝で見せたラウラとの剣戟により、新たな層が増えたとの噂もある。心浮足立つ臨海学校ともなれば、何らかの騒ぎがあるのは容易に想像出来た。

「あら、楯無君の方だって人気があるんじゃない? 二年生の間でも偶に話題に上がったたりしてるわよ?」

「ふーん」

「うわっ興味なさそう」

呆れたように言いながら、刀奈は楯無の頭を可愛がるように撫でた。

「可愛い事言ってくれちゃって」

似たような会話は決勝戦前夜に交わしていた。彼が興味のない理由も分かっている。

環境が変わった程度では価値観を変えない幼馴染に、刀奈は姉の様な感情を抱いていた。

楯無は大人しく撫でまわされている。撫でられる理由はさっぱり分かっていなかったが、刀奈に撫でられる事は嫌いではなかった。

「それじゃあ、臨海学校の間、簪ちゃんの事よろしく頼むわね」

「ん、何かあるの?」

不思議そうに首を捻る楯無に、刀奈は意外そうな声を上げる。

「あ、まだ知らなかったのね。簪ちゃんの『打鉄式』の武装テスト、

臨海学校で行うのよ」

「そうなんだ。二日目に専用機持ちの新パッケージテストをするって言うってたから、その時かな」

楯無が学園から借り受けた『打鉄』の改造機は、学年別トーナメントが終わった現在も簪が所持していた。

楯無の護衛としての戦力保持の名目で、学園から正式に借り受ける事になった。

正式な専用機ではない為、非常時でも許可が無ければ展開は出来ない。言うなれば貸し出し申請の必要が無い訓練機だった。

だが、臨海学校の間は『打鉄式』の代わりに武装テストに使用出来るようだ。

「その件で楯愛ちゃんも武装テストの時、現地に合流するみたい。言わなくても分かっているだろうけれど……楯愛ちゃんのコントロールも、よろしくね」

「そこは大丈夫じゃない？」

武装テストを終わらせれば楯無と一緒に居る時間が増える。そんな思考に帰結するのは目に見えていた。誰に言われるまでもなく、仕事は真面目に最高速でやるだろう。寧ろその速度に簪が着いていけるか心配な程だった。

「……折角の臨海学校、楽しんできてね」

さらり、と。今までで一番ゆっくりと楯無の髪を撫でる。

本来であれば、楯無はIS学園に来るべき人間ではなかった。

織斑一夏が起動した事により、女性のみが起動出来るという前提が覆された兵器、IS。織斑一夏と同様の性質を持つ人間が居るか捜す為の全国一斉調査により発覚した、楯無のIS適正。

篠ノ之束と出会い、一夏より以前に男性でありながらISを動かしていたという経歴はありながらも、世間に知らなければ普通に生きられていた事に変わりはない。事実、楯無は中学を卒業するまで一般人であり続けた。

楯無が更識姉妹の前から姿を消し、ISを求めた理由を刀奈は知らない。だが、楯無の生活がISを動かせる事が理由で一変してしまっ

た事は事実だ。同時に、楯無の妹である楯愛の生活も。

そして無理矢理入学する事になったIS学園でも、無人機の襲撃や“VTシステム”の暴走により平和な生活を送る事は叶わない。

だから、せめて校外行事ぐらいは楽しんできてほしい。それが刀奈の偽らざる本音だった。

「それで色々な思い出を、帰ってきたらお姉さんに聞かせて？」

そんな刀奈の想いを知る由もなく、楯無は何気なく頷いた。

39. 旅館へ

どこかの時間。どこかの海上。兔印の移動式ラボ。

日本のある旅館へ高速で移動するラボの中、ラボの主は投影された仮想キーボードを叩き続ける。

「もう直ぐ会えるからね」

世界中から指名手配をされている天災の言の葉は目前に鎮座する赤い鎧に投げ掛けられた。

愛する妹に願われ、用意された紅い椿の華。白に並び立つに相応しい機能と色を持った、彼女の為だけのIS。

モニターに表示される数値を眺めながら、これから向かう場所に居る旧知の仲を想う。

「元氣かなあ。箒ちゃん、ちーちゃん、いっくん……それに」

彼女にしては珍しく、ほんの一瞬だけ躊躇して。

「——なーちゃん」

名を呼び、再びキーボードへ指を滑らせた。



「海だ！」

「海だ!？」

「海だああああ!!？」

空の彼方に踊る影に続きそうなクラスメイトの絶叫が、臨海学校の宿泊先である旅館に向かうバス中に響き渡る。

クラスメイト達の言う通り、車窓の向こう側には太陽を反射して輝く一面の青が広がっている。

隣の席のシヤルも海を見ながら、うつとりとした表情を浮かべている。

「ほら、見てよ帯。綺麗だね」

「そんなにいいもんかねえ……」

海ならIS学園からでも見える。俺にとっては授業中に眺める海が一番綺麗に思えた。

外の様子から目を背けるように反対側を向くと、通路を挟んだ向かい側に座っている千冬さんと目が合った。

慌てて目を逸らすのが、それが不審に映ったらしい。千冬さんが揶揄うように問うてくる。

「どうした雪月、海は嫌いか？」

「別に嫌いではないんですけどね。唯、昔飛行訓練中に機体制御を失敗して太平洋に沈没した苦い思い出がありました」

ISを起動してから数ヶ月という設定の筈の人間が言うにはおかし過ぎる発言も、千冬さんの前では隠すような事もない。

千冬さんの隣に座っている山田先生が首を傾げていたが、真実に気付く事はないだろう。

唯、それに反応したのは千冬さんではなく、俺の後ろの席のラウラだった。

「教官と斬り結ぶ程の貴様にも、そんな時期があつたのだな」

「最初は誰だつて初心者だからな」

後部座席からにゅつと顔を出してきたラウラに、視線だけ向けて返す。

最近——学年別トーナメントが終わってから、ラウラは俺の正体に気付いているような発言をする。

隠しているわけではないから別に構わないのだが、あれだけ嫌つていた包村帯に対して食って掛かってこないのは正直意外だった。

まあ、俺の正体を知りながら変わらず関わってくれるのはありがたい。IS学園の暗部に所属するシャルもそうだが、軍人であるラウラに素性を知られているのはいざという時便利だろう。

「帯、もう初心者つて取り繕う気はないんだね……」

シャルの苦笑いは尤もだが、俺のせいだけではない。クラスメイトは最近は初心者ぶつても誰も信じてはくれなくなつてしまった。

いくら何でも学年別トーナメント決勝まで進んだ人間を初心者とは言えないのだろう。経歴を疑われないだけありがたい。

経歴は疑われていない。専用機を持つ理由として企業にも属している。なので俺は一応はIS学園の一般生徒な筈……なのだが。

「こうしてバスの最前列に配置され、席の左をIS学園暗部、右を世界最強、真後ろをドイツ軍特殊部隊長で固められているのは作弄的なものを感じる」

普通の人間が一人も居なかった。オセロだったら俺も特別な人間になつてしまう。

後部座席で篠ノ之やセシリアと楽しくトランプしている一夏と比べると、大分待遇に違いがあるような。

「贅沢な悩みだ。教官……織斑先生の隣など、泣いて喜ぶ者も居るだろうに」

「今直ぐ代わつてやるから連れてきてくれ。需要と供給を一致させろ」

「それは出来ない相談だ。教官から、楯無をその席から移動させるなと命を受けているからな」

ラウラの爆弾発言に「ちよつと待て」と千冬さんを睨むが、鼻で笑われてしまった。

問題児扱いされている事に異論はないのだが、些か厳し過ぎるだろう。

「ISの実技はちゃんとやってるし、山田先生に授業で当てられてもちゃんと答えてますよね」

「お前はそれ以外が酷過ぎる。山田先生に指される比率が高いのは何故か考えてみる」

「正答率が高いからでは？」

「雪月君がよくお外を見てるからです……」

千冬さんの隣からひよっこり控えめに顔を出した山田先生が、残酷な現実を教えてくれた。

隣のシャルに助けを求めても、「帯、ちゃんと授業は受けようね」と人差し指で鼻を押して注意された。お母さんかお前は。と思つたけど、俺母親の記憶なかつたわ。

まあ千冬さんとはともかくとして、山田先生に問題児だと思われるのは少しショックなので、これからはちゃんと授業を聞こうと思う。控えめに、やんわりと、けれど切実をお願いされるのは素直に心が痛

かった。

「今度から俺が授業中海を見てたら、個人間秘匿通信で注意してくれ」「あはは……。でも、授業中でも帯に話し掛けられるのは楽しみかな」好意全開で微笑んでくるシャル。楽しそうに何よりだった。

あれから色々吹っ切れた感があるが、それだけ抱えているものが大きかったって事だろう。

「……僕は嬉しいよ？ 帯が隣の席に居てくれて」

「まあ、俺も大して話さないクラスメイトが隣に居るよりは居心地がいい」

「本当？ よかったあ」

余りにも純粹に喜んでくるシャルの笑顔が眩しくて、思わず千冬さんの方へ目を逸らす。

……千冬さんと目が合った。これ自体はさつきもやったが、さつきよりも遥かに意地の悪い笑みを浮かべてやがる。

「どうした楯無。流石のお前も、好意は無碍に出来んようだな」名前と呼んでくる時点で、もう揶揄う気しかないのは丸分かりだった。

「ほっとけ。どっかの世界最強の敵意よりは百倍ましだよ」

「本当!?!」

「助けてくれラウラ……」

「私に助けを求めるとは、相当追い詰められてるな貴様」

「青春ですねえ……」

シャルも告白以来大体こんな感じだった。

千冬さんの言う通り、俺は好意を無碍にするのは苦手らしい。自分にこんな一面があるとは思わなかった。

まあ、そもそも俺に好意を向けてくれる相手が殆ど居なかった。

唯、好意を向けてくれる人達の中で簪の事を強く意識した。

分かってる。俺の決意さえ簡単に歪めてしまうくらい、更識簪という少女の好意は俺にとって大切なものだ。

「……そうか。暫く一緒の部屋じゃないんだよな」

「帯？ どうかした？」

「いや、何でもねえ」

一度は別部屋になったんだ。三日ぐらい何て事はない。寧ろIS学園に戻った後、思い出話をする楽しみが増えたじゃないか。

そんな風に自分を納得させている内に、バスが止まった。どうやら旅館に到着したらしい。

目的地の旅館に到着すると、生徒達は千冬さんの先導に従い宿の入り口に向かう。

「ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の余計な仕事を増やさないように注意しろ」

千冬さんの注意に、全員が『よろしくお願いします！』と大きな声で挨拶をした。恐らく本当に大騒ぎはしないだろう。訓練されたものである。

入り口で俺達を待っていた三十代前半ぐらいの女将さんは、柔らかな笑顔で俺達の挨拶を受け入れてくれる。

「こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですねえ。……あら、こちらのお二方が？」

女将さんが俺と一夏に向けた視線に、千冬さんが『視線をしろ』と目で告げてくる。

「織斑一夏です、よろしくお願いします」

「雪月楯無です。お世話になります」

ペこり、と二人揃って頭を下げる。

頭上から「当旅館の女将をしております、清洲景子と申します。こちらこそよろしくお願いたします」と声を掛けていただいて、頭を上げると、にこにここと俺達を見ている清洲さんが。

「二人ともお利口そうな子ですねえ。織斑先生？」

「見た目だけです。中身は問題児で参つてますよ」

あんまりな言われようだが、先程バスの中で散々山田先生に諭されたので否定はしない。

一夏の方は納得いかなそうに千冬さんの方を見ていたが、何か言う問題児を体现するだけなので黙っている。やっぱりお利口だと思っうんですよ。

「それでは皆さん、お部屋の方へどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっておりますので、そちらをご利用くださいな。他に分からない事があれば、従業員の方へどうぞ何なりと訊いてくださいまし」

中からぞろぞろと出てきた多数の従業員によって、部屋割ごとに決められたグループが一つずつ先導されていく。

中には簪の姿も見えた。俺に気付いた簪がこちらに小さく手を振って、それに気付いたクラスメイトであろう女子に揶揄われて顔を赤くしていた。

まあ、何と言うか。簪もクラスに馴染んでいるようでよかった。俺に言われるのも簪は遺憾だと思うが。

女子全員が居なくなつて、残されたのは俺と一夏の男二人。

「ねーねー、おりむー、なっしー」

と思つたら、一人の女子が残つていた。

俺の事をボールに入るモンスターみたいな仇名で呼ぶのは、布仏本音。通称のほほんさん。

更識家としての簪の従者でもあるらしく、簪と近い俺に対してはちよくちよく話し掛けてくる。

一応刀奈の真意は知つていたとはいえ、それでも刀奈に自らの近況が無作為に伝わっていくのは流石に嫌らしい簪の意向により、大した話はしていないのだが。

布仏の方も自分が警戒されているのを分かっているらしく、そこまですくは関わってこない。なのでこれだけふわふわな雰囲気を感じていても、俺は未だに苗字呼びだった。

「二人の部屋ってどこー？ しおりの部屋割には書いてなかったよー？」

「本当だ。どこか知ってるか、楯無？」

「何で今気付くんだお前……。知らないけど予想は付いてる。ほら、そこに世界最強のルームメイトが居るぞ」

視線で先を促すと、そこには腕を組んでこちらに歩いてくる千冬先生。

「お前達の部屋はこつちだ、着いてこい」

「あ、もしかして……」

「珍しく察しがいいな、織斑。横の悪友の入れ知恵か？」

「話を通りやすくしたただけなのに酷い言われようだぜ。まあ、そういう事だ布仏。一夏目的の連中には忠告しておいてくれよ」

「うん、分かったー。遺書持参だねー」

違うけどもういいや。うちのクラスの生徒達ならそれで意味は通じるだろう。

千冬さんに連行された部屋は、予想通り教員室。つまり、千冬さんと同室って事だ。

まあ女子避けとしてはこれ以上ない人選だろう。放っておいたなら臨海学校の間一夏に安息の場所は無いし、千冬さんと一夏は家族なので、同室でも倫理上の問題はない。

「スペース割はお前達の好きにしろ。女子共が騒がしくなければ何でも構わん」

「あはは、寮だと皆平気なんだけど、臨海学校だとテンション上がったちゃうもんな」

本当に珍しく一夏が千冬さんと同室の意味を察している。何だ、遂に一夏も春に目覚めたのだろうか。

窓際から見える絶景のビーチに、既に心が浮ついてでもいるのかもしれない。

「……ああ、それと楯無」

千冬さんが俺を名前で呼んだ。

それは今は教師としてではなく、友人の姉として俺に話している証だ。

「何ですか？」

「もし私や一夏と同室で眠れそうになれば、隣に元々お前達用に用意していた空き部屋がある。そちらに移っても構わない」

「何だ、随分と好待遇だな」

不眠症だったのは施設に居た頃の話だ。それも一人か楯愛と一緒になら普通に眠れる程度には改善している。

IS学園に入学した当初も、寮のルームメイトが簪だったおかげで睡眠に問題はなかった。

まあ、デュノア社のスパイだったシャルが転入してきた時は眠りが浅かったのは確かだが。おかげで昼寝と寝落ちが結構多かった気がする。

——と言うか、何故千冬さんがもう殆ど支障をきたしていない俺の睡眠障害を知っている？

俺の睡眠障害を知っているのは、施設の人を除けば更識姉妹と楯愛、そして束姉ぐらいだ。

更識姉妹や楯愛が千冬さんに言うとは思えない。俺はその該当者の前では遠慮なしに眠れる。施設の人とはそもそももう殆ど縁がない。残るは束姉なのだが……。

「……まあいいか。じゃありがたい。俺も千冬さんと同室って情報は出回ってるだろうしな」

「そうか。二人とも、今日は夕方まで一日自由時間だ。荷物を置いたら、海にでも行ってこい」

「よっし、同じ部屋じゃないのは残念だけど、それまでは一緒に遊びつくそうぜ、楯無！」

「周りがそれを許したらな」

そして多分許されない。許されるのだったら俺達は教員と同室になったりなんかしないのだ。

「私は他の先生達との打ち合わせがある……が、そうだな。それが終われば、ひと泳ぎぐらいはするでしょう。偶には身体を動かさんとかな」

「動かさなくても十分強いだろ……」

世界最強なら運動不足ぐらいで丁度いいだろ、と思いつつ、俺は荷物を置く為に隣の部屋に退散した。